でに遺跡の存在が知られていたようだが、外部からの指摘により始めて市教育委員会は、遺跡の内容 を明確にするための調査を倉敷考古館に依頼したのであった。しかし、すでにその段階ではB・E建 物の部分は、地下掘り下げ作業を終り、建物のコンクリートがかなりの所までうたれていたので、そ の部分については、何ら調査を行うことが出来なかった。現在、B校舎の東部となっている部分から 東はずれにかけて、その時点で近い将来増築予定となっていた部分のみの発掘調査(第Ⅰ地点)、校 地内に約10ケ所の試掘小ピットを掘ることで、遺跡の性格と一応の範囲確認を行ったのである。この 調査は1966年5月28日から6月19日までの間行なわれた(第一次調査)。その調査の 概要について は、すでに1966年11月の倉敷考古館研究集報第2号に報じ、別刷を倉敷市教育委員会発行の倉敷市広 江・浜遺跡調査概報として刊行している。その中で、運動場をのぞく校地全体で、校舎の建っていな い未掘削部分は遺跡が保存されており、さらに校地北側に続く、連続した扇状地形部分と校地西側で 標高3mの等高線くらいまでの範囲にも遺跡が続いていることを明記し、せめてそれらの範囲が長く 保存されることを願っておいたのであった。ところが、その後、市教育委員会で文化財関係の担当者 が次々と替わる中で、三福小の増築工事が相次ぎ、市教委の名で遺跡概報を出し、遺跡として周知して いることでありながら、同じ教育委員会の手で、遺跡への対応が何ら行なわれないまゝで、建物Aの 体育館が、校地を北に拡張して遺跡部分に新築され、さらにC校舎がB校舎とE管理棟の間に増築さ れたのであった。折角行った第一次調査の成果を文化財保護の面で、何ら生かすことが出来なかった 点で、遺跡保護をも重要な仕事とする市教育委員会は、大いにその怠慢を認識し、反省しなければなら ないであろう。また我々、関係者として部外者であるため、こうした個々工事にまで監視が届かず、 きわめて不本意な結果となっていることを残念に思うのである。そうした中で1978年には、再び、三 福小は児童増加のため、校舎増築の計画をせまられるということになったが、今回は、遺跡の存在を 認識し、どの部分に増築するかをまず検討すること」なった。遺跡への影響を最低限度にするために 平屋造りであるEの管理棟上に増築する方法など諸種の対策が試案として検討されたが、学校の運営 上、C校舎とE管理棟の間に、従来の校舎と平行して建てるほかないことに落着してしまい、止むな く、増築校舎用地のための掘り方部分(D)(第Ⅱ地点)を記録するための調査となったのである。 そのため、倉敷市教育委員会では、調査委員会を発足させ、小野一臣、藤田憲司、間壁忠彦、間壁葭 子が 調査担当者 となって、1978年7月20日から9月11日までの間、発掘調査した(第二次調査)。そ の際、B校舎の西南端中庭の小部分が給食設備増築(第Ⅲ地点)、校地西北端部分に公害測定装置の 施設(第Ⅳ地点)が予定されていたので、あわせて両地点を小試掘し、遺跡の範囲と性格を明らかに することに努めると共に、第Ⅲ、Ⅳ地点では施設部分の地下設備を遺跡包含層よりも上部に作るため の資料に供したのである。

以上のような経過を経た広江・浜遺跡の調査であるが、遺跡に対する対応の不十分さは今回の調査中、最上層に盛土として未調査部分の遺物を多数包含する撹乱土層が厚く堆積していたことでも明らかであった。この中からは岡山県下初出土の細形銅戈などという重要な遺物の発見もあり、時代が固定出来ない遺物と化してしまった。これら土層中の多数の遺物・遺構の学問的損失に関係者一同、大変残念な思いをしたことを併記しておきたい。

なお、第一次調査は10数年以前のことであるが、概報にとゞまっており、今回の調査範囲は、同一

遺跡中で互いに関係するものであり、共に報告することでより遺跡の性格を明らかにし得ると考え、今回共に報告を行なうものである。第一次調査地点のB校舎東部分をI地点、第二次調査のD校舎予定地をII地点、B校舎西南中庭の給食設備拡張部をII地点、校地西北の公害関係施設予定地をIV地点として、以下に、その調査結果を報告する。そのうちで、第一次調査については、1966年の概報で記した点との重複をなるべくさけたいが、遺跡の性格を明らかにする上で止むなく、再度記述するものもある。また、若干の遺物についての理解が概報と異なるものは今回訂正したものである。

調査経過の終りに本報告書の刊行によって、広江・浜遺跡の長期にわたるきわめて注目すべき多様な性格が、広く理解されることをのぞむと共に、校地内で建造物が地下深くまで達していない部分については、まだ広く、遺跡の保存された部分が残存し、校地外の西と北にも遺跡が延びていることを改めて明記し、今後の遺跡保存について正しい対応を強くのぞむものである。

なお、以下に第一次、第二次の調査参加者及び関係者を記して、深く感謝の意を表するものであるが、当遺跡の残存地区の保存要望については、これら調査者・関係者全員の総意であると信ずるものである。

第一次調查参加者 · 関係者

発掘担当者 間壁忠彦、間壁葭子

参加者 藤沢晋 (当時岡山大学)、岡山 大学 教育学部 社会科 研究室 学生、近藤 義郎 (岡山大学)、山本博利・中村義市ら岡山大学 法文学部 考古学研究室学生、小野一臣 (当時玉島高校) ほか地歴部生徒、上田良平 (当時天城高校) ほか生徒、青木素夫、池葉須藤樹、出石収、近藤昌一郎、角田茂、杉山次郎、竹田 (現平井) 勝、永安洋、西岡憲一

郎、平田英文、真野義一、安原豊。

第二次調查者参加者 • 関係者

担当者 間壁忠彦、間壁葭子、小野一臣、藤田憲司

参加者 近藤益二、古谷野寿郎、杉山次郎、高田明人、永安洋、濃本隆彦、平田英文、その他 労務は南備園芸株式会社により、三宅幸治、宮原三夫ら7~8名が終始、携わった。

関係者 市教育委員会文化課の秋岡久之、谷田正幸、磯山豪二、武田俊宏、熊本義光、安藤治 人が事務局としてあたり、武田俊宏は常時現場で調査に従事し、三福小の関係職員も 協力した。三島一夫、大山輝、大森昭郎、物部省三、宗沢節雄は調査委員会委員とし て協力し、監事、会計には安藤賢、松本崇、井沢豊らがあたった。

三、発掘後の資料整理

発掘調査後の第一次調査、第二次調査とも、倉敷考古館において整理を検討を続けた。第一次の資料は概略の整理を1966年夏から秋にかけて、間壁忠彦、間壁葭子が行い、先に記した通り概略を報告した。第二次調査後は、1978年秋以来1979年春まで、藤田憲司、間壁忠彦、間壁葭子が集中的に整理にあたり、第一次調査資料も加えて再検討した。この際、一部を小野一臣が援助し、近藤益二も整理に参加した。

Ⅲ章遺跡の調査と遺構

- 一、第 I 地点 (第一次調査) (図版第一の(2)・三~五、図 5~17)
- 1) 発掘区の位置(図版第一の(2)、図5・6)

第一次調査に着手した際、すでに学校建築は最終の段階となっていて、校舎は仕上げ段階に入っていた。敷地全体はほぶ水平に地ならしされ、山寄りでは1m以上削平された部分もあり、山から離れた処では若干の盛り土がされていた。第一次調査の対象となった第I地点も、上面がかなり削られていたが、調査時点では、最終的な校庭整地面よりは、まだ若干高い状況であった。すでにB校舎の大部分が出来上がり、地下の掘り取りも終っていたので、その東端の将来増築予定部分に限り調査したことは、既に記した通りである。

第 I 地点とした処は、本来は畑で、山に近い部分ほど高くなっており、標高 4 m の等高線が、この地点の西よりを通る高さであったが、調査時にはすでに若干の削平が行なわれていた。従って、断面図にあらわれた地表高は、本来の旧畑地面より低くなっている。

2)遺跡の状況(図版第三~五、図7)

第 I 地点の堆積状況は、全体として海浜の砂堆に背後の山丘からの土砂が流出したものであり、最上部の約40cmは山土混じり砂層、続いて褐色有機砂質土層が50~70cm、その下部には、灰黄色砂層が40cmばかり見られ、その下部から湧水が始まる黄色砂層となる。山寄りの5、6、7区では、下層には山側からの転石を含む山土の堆積が見られ、灰黄色砂層以下の砂層は見られない。また、南側山際のLトレンチには北に下る花崗岩の岩盤が下部にあり、灰黄色砂層はこゝでも山寄りには見られなかったのであった。また、I区でも、3、4層の下部は山土の堆積で、灰黄色砂層は見られなかった。

上部の山土混じり砂層を1層、有機砂質土層を2、3、4層、灰黄色砂層を5、6、7、8層として発掘したが、1、2層は中世遺物を主体にしており、2層と3層では中世・平安、3層、4層で古墳時代後期、5、6、7、8層で縄文後期の遺物がそれぞれ主に包含された状況であった。3、4層の有機砂質土層には濃淡が交互に見られる部分もあり、5、6、7区を山側へ寄るほど、この層は薄くなり、山寄りで消滅する。5、6、7、8層の灰黄色砂層では、部分的に下部で、有機質を含んだ砂層が認められることがあり、縄文後期の遺物は、その部分に比較的多く含まれ、この層の上部では遺物の含まれない砂層となる場合が多かった。

中世、平安、古墳後期、縄文後期は大略において層位的に区分されたが、三区分の層位をさらに細

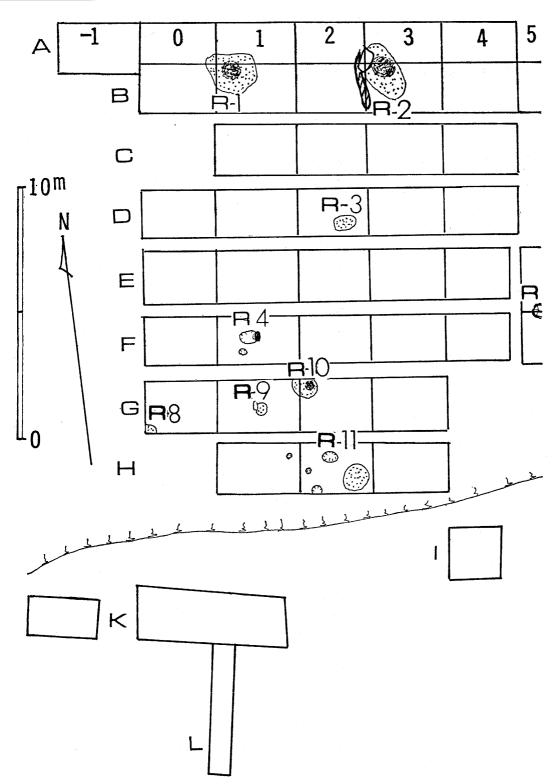


図6の(A). 第 I 地点の発掘区画と遺構の位置

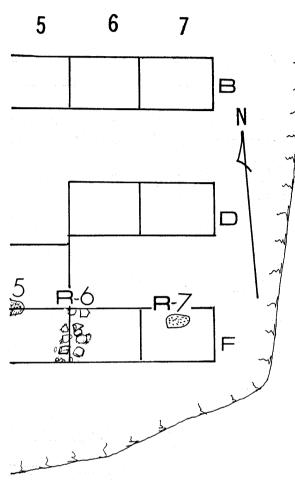


図6の(B). 第 I 地点の発掘区画と遺構の配置

分できる状況は見られず、調査区別の地点によって僅かに、細部の差を認め得ることがあった程度である。

なお、遺跡状況を示す断面は、東西は A・Bトレンチの境界と、F・Gの境界で 北向き、Hトレンチの南西を北向きで示し た。なお、南北はLからKトレンチの東側 で示した。その他、A~Hにわたる区間で は、ほゞ同じ状況を示すため、3区・4区 寛の断面一つで代表した。

遺物の出土状況は、有機分の多い褐色砂質土層に多いが、全体として、3~4層に含まれる製塩土器、土師器は小片で、磨滅したものが多く、製塩土器は本来保存度の悪い性質の土器ではあるが、特に第I地点のものは第II地点出土のものに対して、磨滅度が激しいものが多く思われたのは、3~4層間で、かなり土地が整地されたり、移動された状況があったものと思われる。純粋に製塩土器の層位がほとんど見られないのも、そのためかも知れない。しかし、3層上部から上の奈良・平安、中世の時期のものでは、こうした磨滅が見られなかった。この点、後述する第II地点とは、様相

3) 土器出土状況(図8)

を異にしている。

各区の遺物出土量の状況は、ほぶ似たもので、特に集中部分とか、特別な意味を思わす状況が見られなかったので、発掘地点の中央近くで最も平均的な遺物包含状況を示したD列で、土器出土量の概数を図8に示した。たxD・5区は未発掘のため、E・5区を代りに示した。出土の小土器片も、また接合する土器片も無作為に1片と数えた数値のため、土師質と陶質・須恵質等のように硬・軟や質の異なる土器の量を20で示したぶけの数値の比較のみで、20を論ずることは出来ないが、ほぶ包含される傾向を見ることは出来る。

これで見ると、中世の遺物は、どちらかというと山寄りに多く、古墳時代のものは、海浜寄りに多くなっている。また古墳時代遺物の場合も、この遺跡での遺物の主体が製塩土器でもあることを考えると「師楽式」として示した製塩土器に対して、同時期の須恵器の多さが目に付くのである。この状況は古墳時代にもこの第 I 地点では、製塩址より生活址の存在したことをうかいわすものなのである。

なお、僅かではあるが、奈良・平安期、特に、ほとんどが平安期と思われる遺物が、中世遺物の下層に見られることから、古代後半期にもこゝに生活址のあったことが知られるのである。

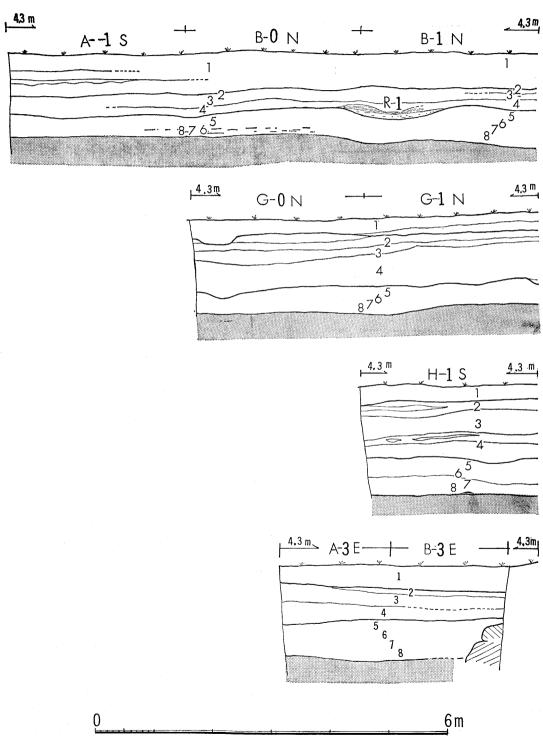


図7の(A). 第 I 地点断面 (上から A-1 南壁~BO・1 北壁、GO・1 北壁、H1南壁、A・B 3 東壁)

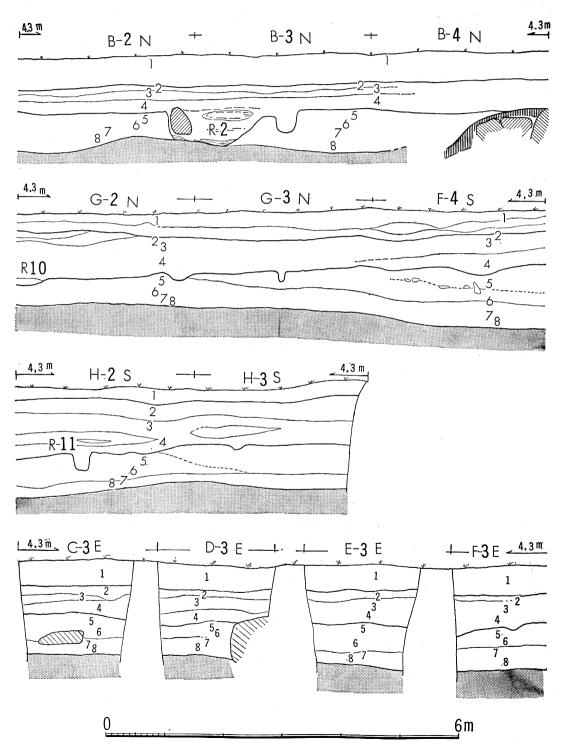


図7の(B). 第 I 地点断面 (上からB2~4 北壁、G 2・3 北壁~F 4 南壁、H 2・3 南壁、C 3~F 3 東壁)

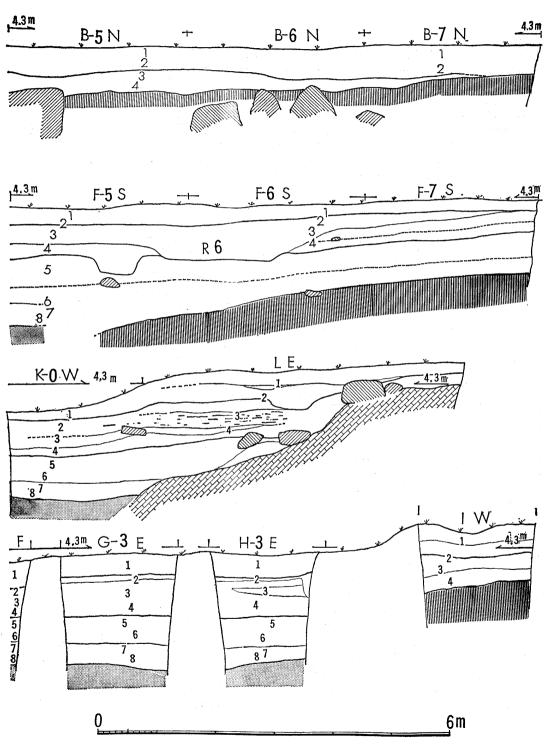


図7の(C). 第 I 地点断面 (上から B 5~7 北壁、 F 5~7 南壁、 K O 西壁~ L 東壁、 G・ H 3 東壁~ I 西壁)

4) 遺構(図9~17)

1、2層と5層以外に属する遺構は認めることが出来なかったが、3層、4層中には柱穴を思わせる落ち込みが5層以下に掘り込まれた状況でごく僅か存在した。しかし、住居、その他にまとめ得る状況ではなかった。そのほか、3、4層中に焼土、灰、炭などを含んだ落ち込み状の遺構などが点々と検出された。これらは砂分の多い層位中であるため、後に変形されたり、荒れてしまうことが多く、保存状況は悪かったが、以下に個々の遺構についてR-1・R-2・R-3……の順で略記する。

イ) R-1遺構(図9)

B・1区北西隅に中心があり、A・O、A・1、B・O区に拡がったこの遺構は、径170cm ばかりの不整形な円形で、深さ15cm程の窪みを作っ

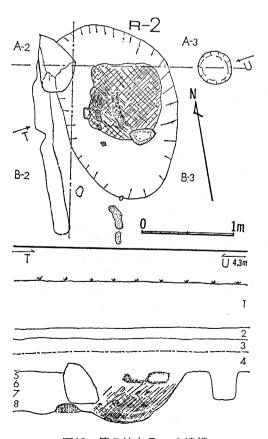


図10. 第 I 地点 R - 2 遺構

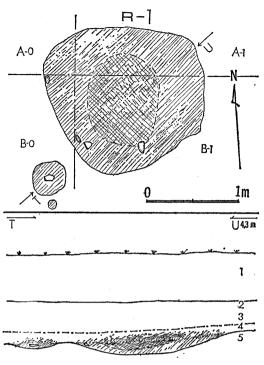


図9. 第 I 地点R-1 遺構

ている。また、これのすぐ西に接して径40cmばかりの、これも不整形な深さ10cm足らずの皿状凹部があり両者共中に灰・炭、僅かに焼土などがつまっていて、簡単な炉を思わすものである。特に大形の方の中心部は、濃い黒色を呈し、炭灰が多かった。

この遺構の上部は1層が厚く表面近くは現代の焼物類もあったが、2層は有機分のかなり多い褐色土層で主体は中世の土師器椀や鍋片や瓦質土器類であった。3~4層は、褐色の有機分が多い砂質土層がほか似た状況で続いているが、特に下層で黒色が強くなり、その下層にR-1の遺構が存在した。これ等3~4層の間には、僅かに中世らしい土師器片は見られたが、主体は、6世紀後半から7世紀初の須恵器片と、製塩土器片で、全量からみて須恵器片が多い。また、中には、平安期の、黒色土器(内黒)とか緑釉の小片も存在し、焼土や鉄滓も見られた。

以上の状況からみて遺構は、特に2~4層を区別できないながらも、4層の状況に最も近く、古墳時代後期の遺物を主体に出土したことから、その頃に

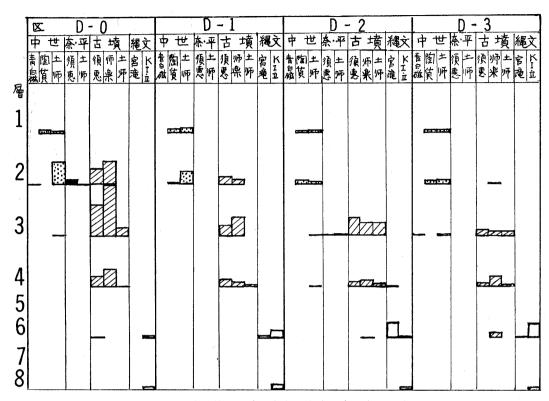


図8の(A). 第 I 地点D列土器出土量(0区~3区)

属するものに思われたが、平安期のものだと云うことを否定 してしまう根拠は無い。

この 凹部の直下は 灰黄色砂層で、一部褐色の 有機砂を含む縄文時代の層が続いていた。

ロ) R-2遺構(図10)

B・3区の北西部に中心があり、A・2、B・2、A・3区に一部拡がるこの遺構は、200×150cmばかりの 楕円形の凹部に、灰・炭・焼土がつまっている。この地点では2層は中世の遺物を主体にし、3層は中世土師器椀などをかなり含みながらも、6~7世紀代頃の須恵器とか、土師器片、また平安期の内黒土器なども含有していた。4層はむしろ、3層と区別のない状況であるが、製塩土器、6世紀後半頃の須恵器を主体に出土し、部分的には縄文土器片も混在した。

R-2遺構はこの $3\sim4$ 層とも云うべき層の下部にあり、 焼土・灰・炭などの深さは 4 層よりなお、 $40\sim50$ cm も深くに 及んだものである。この炉とも云うべき部分の 西側に中20 cm 前後、厚さは $5\sim10$ cm で 山土風の土が、底面より20 cm ばかり

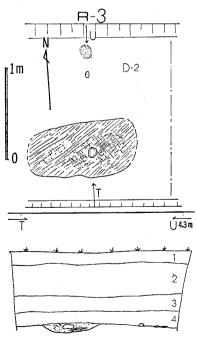


図11. 第 I 地点R-3 遺構

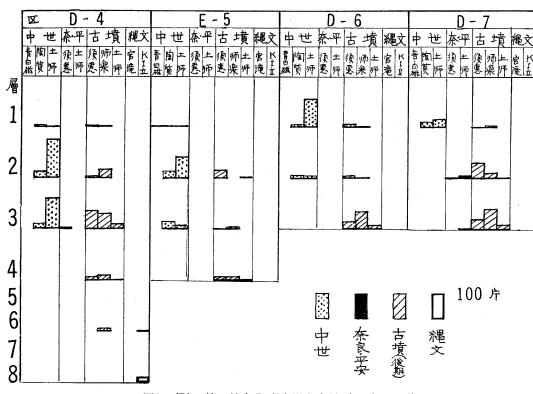


図8の(B) 第 I 地点 D 列土器出土量 (4区~7区)

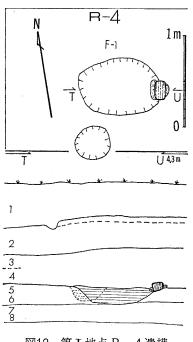


図12. 第 I 地点 R-4 遺構

高い位置に、170~180cmに及んで見られた。この土は火を受けては無く、また、凹部の一部に長さ60cm、巾40cm、厚さも50cmからの大きな石が見られたが、これも特に火を受けたとも思われず、転石であるか、意図的な置石であるかは判明しなかった。現状ではこの遺構が掘りこまれた層は4層のように思われ、古墳時代後半に伴うもののように思われたが、周辺のどの区でも4層の中に、なお、奈良一平安頃と思われる遺物もあり、古墳時代の遺構とのみ断定は出来ない。たゞ焼土、焼石など、あまり後に撹乱された状況には思えない。

また、この遺構に東接して、A・3区からA・4区にかけては、かなり大形の石数個があり、その周辺も、焼けた状況で、石も火にかゝったものも存在した。また柱穴らしいものも見られたが、有機的な関係は不明であった。

ハ) R-3遺構(図11)

D・2区3層は、中世の椀を混じ、平安時代の黒色土器、いわゆる内黒の椀片とか、同じく平安期の須恵器皿などと、後期 古墳期の須恵器、製塩土器、鉄滓などを包含する層である。こ

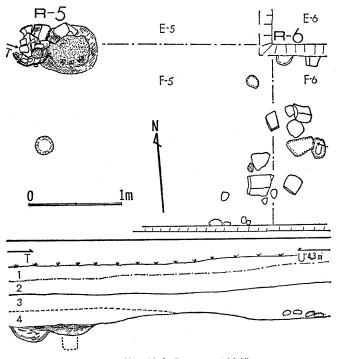


図13. 第 I 地点 R - 5 · 6 遺構

の最下層に、長110cm 、短60cmばかりの楕円形で、深さ10cmばかりの凹部に炭・灰が多量に存在し、近くには焼土片などがあった。灰・炭の層の中に小石が一個存在したが、これは火を受けたようには思われない石であり、偶然の転石の可能性がある。

これは火を焚いた址ではあるが、 炉址と云う程のものでも無いのであ ろう。 この 遺構も、周 辺から 上部 に包含された遺物から見て古墳時代 後期のものであるが、平安期頃以降 に撹乱を受けた状況と思われる。

ニ) R-4遺構(図12)

F・1区の1、2層は中世の土師器 椀とか鍋、亀山焼の甕片、備前焼、中国産青磁片とかなり中世の遺

物も多く、1~2層の間にはやゝ有機分の多い層なども拡がっていた。3、4層は、褐色の有機分の 多い砂質土層ではあるが、特に4層では、7世紀初頭頃の須恵器片が多く、高坏、坏など復原可能な ものも出土したのである。土師器の煮沸用器の把手や製塩土器の小片が共に含まれていた。

この4層の下面に90×60cmばかりの楕円形の窪みがあり、この縁辺には焼土塊と共に黄色の山土風な土塊があった。凹部の中は灰を多量に混じた土層で、須恵器片なども含まれていた。

この遺構を覆った3~4層が、ほゞ6世紀代の遺物に限られ、落込み中より発見のものが、6世紀でも前半にのぼるものとか製塩土器でも無文のものを含んでいたことから、この遺構は、6世紀でも前半の可能性が多い。またこの遺構では、焼土とともに、山土塊が出土した。

なお、この凹部の掘り込まれた5~6層はほぶ無遺物の灰黄 色砂層で、その下の7~8層は、有機分で、やゝ褐色を呈した 砂層で縄文土器を出土している。

ホ) R-5、R-6遺構(図13)

E・5区とF・5~6にかけて存在したこの遺構はR-5が 焼土塊と埋置された須恵器大甕胴部からなり、R-6は配石状 の遺構である。

山寄りにある、F・5~6区の下層には、山土の流出とか、 転石なども見られる。R-5は、この地点で3層とする黒褐色 の有機砂質土層が、やゝ黒褐色が薄くなりながらもなお他の区 の3層と同様に、中世の遺物と、古墳時代後期遺物が、相半ば

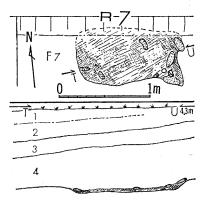


図14. 第 I 地点 R - 7 遺構

して存在していた。層の最下面に掘り込まれた形で存在した径40cmばかり、古墳時代と思われる須恵器 胴部(内面同心円・外面・平行叩)下半の丸底部分が20cmくらい埋め込まれていた。この須恵器の上端は、すべてがほゞ一定の高さで上半部を失っていたが、最初から上半を欠いたものか、或いは後に何等かの理由で欠損したかは明らかではない。

この甕のすぐ東に接して、径60cmばかりの灰と炭などの堆積があり、その中に深さ15cm位の径40cmばかりほぶ円形の焼土塊があり、これの焼土塊や灰・炭の一部は、須恵器の上にも覆っていた。しかし、焼土上面は、須恵器の上端とほぶ揃った高さにあり、あたかも上半が、整地か何かで失われたような状況に見られる。現状で見れば、須恵器より後に焼土塊が出来たように見られるが、上面がもし削り去られたものなら、その際、須恵器の上に周辺の焼土面が拡がることも考えられ、むしろ、こ

の大甕と、炉状の焼土部分は有機的な関係があったように思われる。 た

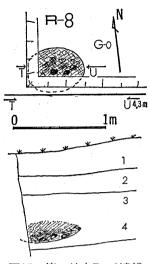


図15. 第 I 地点R-8遺構

∴、下に半欠の土器を埋めてその中を炉にした状況ではない。焼土の縁辺には、かなり大きな石一個が置かれていた。また周辺のや、離れた処からは、柱穴なども発見されたが、まとまった遺構としてはとらえられなかった。

R-6の配石部分は、3層の有機分の多い黒褐色土が、ここでは、石の下面まで続いており、この 点 R-5の上部と多少異なっている。石自体は20㎝前後の野石が散在するだけで、特定の遺構として はまとまらないものであった。中に焼土の小塊とか図で石に点線を入れたものは外面が火を受けて、 ぼろぼろになったもので、こうしたものを含み、周辺の濃い有機分の多い土層と共に、R-5と同様何か、火に関わるもので あったかも 知れないが、本来の状況をそのまま示したものでなく、古代後半か中世の時期にこの部分がやゝ低くそこに 有機土と共に 堆積したものゝ可能性がある。 R-5と

R-6の遺構は、遺跡の状況からみる限り特に区別し得るものではないが、積極的に同一時期とか、或いは同一遺構の部分だとする証明もない。R-5が古墳時代後期と思われる須恵器を伴うことで、こちらの時期はおそらく、この浜で最も盛んに製塩が行われていたころの生活に関係した炉址と思われるが、R-6の方は本来何であったかも不明である。また少なくとも、R-5の遺構の方は、中世の時期に上部が整地されたように思われる。

へ) R-7遺構(図14)

F・7区になると最も山寄りで、地形が高くなり、1~2層は薄くなり両者の区別はますます困難になる。むしろ、6区以西の区で

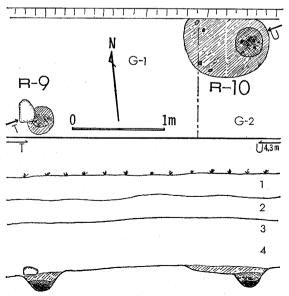


図16. 第 I 地点 R - 9 • 10遺構

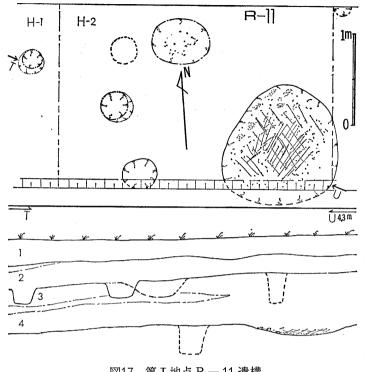


図17. 第 I 地点 R — 11 遺構

る層となる褐色で有機分の多い 砂質土層が、ここでは2層目に 当たるような状況でもある。

1~2層は、中世の椀・土 鍋・鉢などを含み、3層は他の 区と同様、僅かに中世の椀片な どを含みながら、主体は6世紀 後半の須恵器や製塩土器片だ が、中に、7世紀後半から8世 紀初頭の須恵器も僅かながらり 全する。4層は有機分がかなり 少なくなった砂質土層で、遺物 も大変少なく、磨滅した僅かな 6世紀代の須恵器と製塩土器片 を含む。

この4層の下面に、長さ120 cmばかりで、短辺はやゝ不明瞭 部分があるが、60cmくらいの楕

円形で、深さは10cm程度に、灰と炭と焼土塊がつまっていた。周辺全体が焼けた様な明瞭な炉址ではないが、一種の炉であったとは思われる。これも、他の地点の灰・炭の集った炉状のものと同様に思われるが、かなり一定した広さを持った跡ではあるが周辺には、特に製塩関係の土器は見られなかった。

この遺構は山寄りの他よりは高所にあることから、少なくとも6~7世紀代の住居に関係ある、火を焚いたあとの可能性が考えられる。

ト) R-8遺構(図15)

 $G \cdot O$ 区の南西隅で $3 \sim 4$ 層中に、径70cmばかりで厚さ20cm強に、レンズ状とも言うべき状況で、灰・炭・焼土の多量に含有される部分があった。C > O周辺からは、焼土塊や鉄滓の出土もかなり認められた。

この地点では、2 層までは、中世の土師器とか中国産青磁などの出土を見たが、3~4 層は、多少の中世遺物を含みながらも、製塩土器がかなり多く、その製塩土器を上廻る6世紀末頃の須恵器片を伴い、また土師器片も製塩土器とほぶ同量近く存在していた。例えば、G・O区で、3~4 層出土の土器片の概数を示すと、須恵器約200片、土師器100片、製塩土器約150片、と言うような状況であった。

この遺構は、古墳時代後期のものと思われるが、むしろ住居に付属した遺構と見られる鉄滓が点々 と見られたことも注目される。

チ) R-9遺構(図16)

G・1区のほど中央にあるこの小遺構は、特に遺構と言う程のものではないが、4層の下部に、径

30cm足らずの小さい凹みの中に、炭の塊のようなものがあり、その廻りは焼けており、平石などが存在するだけである。R-9遺構上部では、4層であるが、なお中世の土師椀などが、6世紀代遺物に多少混じている点、R-8の場合とや、異なる。

リ) R-10遺構(図16)

G・2 区の北西寄りで、径90cmばかりに焼土や灰が、拡がっており、その中の一部分で径30cmばかりが、深さ20cm位深くなり焼土や炭・灰などがつまっていた。

これも、3~4層の下部に見られたが、少なくとも3~4層には、平安期や、中世の土器が僅かながら混在しており、他に包含される製塩土器は磨滅した破片が多く、須恵器片も小片である。このあたりでは古墳時代後半期の遺構の上部が撹乱されているようにも思え、或いはGトレンチ内の小遺構は、山寄り側ほど上部が多少削られた後期古墳時代の炉状遺構の残りかも知れない。

ヌ) R-11遺構(図17)

Hの1区から2区・3区にわたって、柱穴とか、焼土などを含む有機土の多い凹部が数ケ所広がっていた。しかし、これ等は、同一平面上でなく、明らかに2層から掘り込まれたものと3~4層下部のものがある。平面図で上層のものは破線で示した。

H区では表面を除けば、1・2層とも、中世の遺物が主体であったが、特に、2区の中央北寄りの、径50㎝ばかりの落込み中からは、中世土師質の三足器、椀の外、陶質土器、中国産白磁など、中世のものばかり発見された。柱穴を含め、2層のものは中世の何等かの遺構部分であろう。

この区では、3層にも奈良時代須恵器とか平安期の内黒の椀とか、青磁椀片なども混じており、中世と奈良-平安期のものに、古墳時代後期のものもかなりあり、各期のものが混在している。3~4層の区別は、はっきりしない部分が多い。

4層下部の、焼土などを含む凹所では、6世紀後半の須恵器片、製塩土器片がほとんどであり、C の部分は、古墳時代後期の遺構であろう。いずれにしても両時期とも特定の遺構として十分なまとま りは判明しなかったのである。

二、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ**地点(第二次調査**)(図版第二・六~十六、図18~30)

1) 第Ⅱ地点発掘区の位置

2) 第Ⅱ地点遺跡の状況(図版第二・六~十一の(1)・十六、図18・20)

第Ⅲ地点は、1966年の最初の工事の際、建設工事に伴う重機械の使用や、仮設工事で、上層部は、いちじるしく撹乱された部分がかなり広く、X、Y、Z列とも、とりわけ東部の1区から、3区ないし4区までは、現地表から70~80㎝位まで撹乱が達していたところもあった。これは、かって整地に

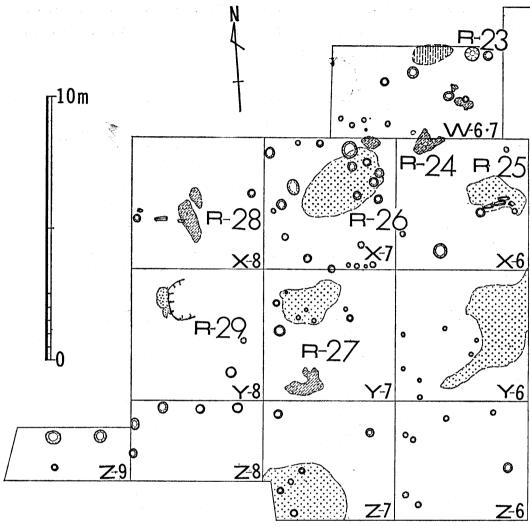


図18の(A). 第II地点の発掘区画と遺構の位置図

際して、山ぎわ部分では、土砂や岩石が重機類によってかなり深くまで撹乱されたり、掘り取られた 後に再び埋め土をしたためであった。その為、第Ⅱ地点上層部の埋土の一部では未調査の校地の他所 から掘り取られた多くの遺物を含む有機土あるいは有機砂が再堆積されたとみられる部分もかなり存 在した。

かつて、校地造成前には、第 Π 地点のほど中央部を南北に 3.5m の等高線が走っていた。現在校地内は、標高は 3.6m \sim 3.8m 程度に整地されているから、西半部では削平よりも埋め土が行われたのである。しかし、西半部でも旧表土上の荒され方は激しく、旧状を示す部分は、僅めて少なかった。時には Y \circ 1 8 区東北部から 1 \circ 1 8 区の東南部にかけてみられたような瓦礫やコンクリート塊の捨て場としての大穴が穿れている場合などもあり、第1 1 地点では東半部に限らず、西半でも、第1 1 層はまず撹乱されたものとみてよいだろう。

遺跡の状況を示すため、次の部分の断面を記す。

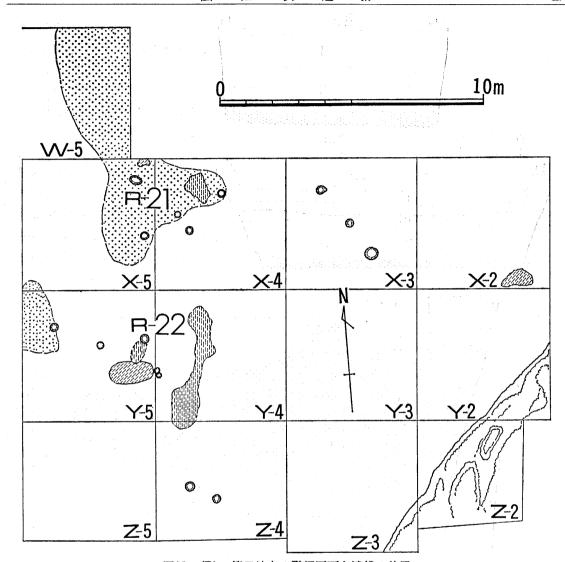


図18の(B). 第II地点の発掘区画と遺構の位置

図20には、 $X \cdot 1$ 区~ $X \cdot 8$ 区北壁、また $Z \cdot 1$ 区は未掘のため $Y \cdot 1$ 区南壁から $Z \cdot 2 \sim Z \cdot 9$ 区にかけての北壁の一連を東西断面図とし、南北断面図としては、 $Z \cdot 3$ 区東壁、 $X \cdot 5$ 区を中心とした西壁、 $X \cdot 6$ 区~ $W \cdot 6$ 区西壁を示した。かなりシンプルな層序であり、これだけの断面で、ほ x 遺跡の全容を示している。また断面中 1 層は先に記したように埋土が主体をなすが、旧耕土が削平をまぬがれて残っている層位には、埋め土と区別して $1 \cdot 1$ とした。 旧耕作土部分には、 畑の時代の溝や果樹の ための掘り穴が みられた部分もあり、 $2 \cdot 6$ 東寄りには校地造成時まで 使用されて いたと見られる周辺をしっくいで 固めた肥壷な ども残存していた。 山寄りの部分では、「埋め土中に、1966年当時の工事で掘り出された当遺跡の包含層を形成していた土砂が埋まった部分もあり、主に、 古墳時代後期の製塩土器、 須恵器などを含んでいたが、特に等 11 地点の本来の遺跡中では大変少ない 奈良~平安にかけての遺物がむしろこの 1 層中では緑釉片なども含んで、小片ながらかなり点在していたのである。このことから、これ等の土が第 1 地点の西に接した未調査地区 11 校舎付近から運ばれ

∏ ∈ ていた可能性が最も強いと考えられ た。そうした埋め土中に、2・3区 では銅戈の小断片も含まれていた。 2層としたのは、土まじりの褐色 有機砂層で厚い所では80cmに達する が、山寄りの部分では、この層が掘 りとられてしまった部分が多かった 4m 4m ことは先にも記した。2層が厚く残 V s っている地区では、上半部は、古墳 後期の土器片の磨滅したものをわず かに含むのみであり、2層の下半を 中心にして、古墳後期の包含層がみ られた。2層の下部は概して炭・灰 図19. 第**Ⅲ**• IV地点断面 R-21 $2m_{\rm m}$ U4m 1 2

図21. 第Ⅱ地点 R - 21 遺構

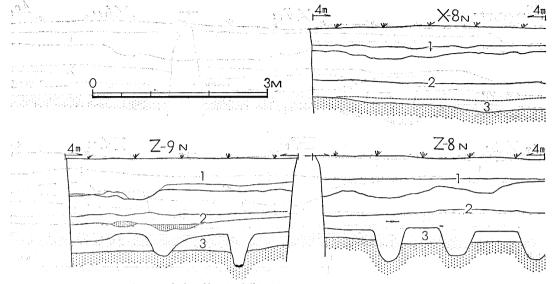


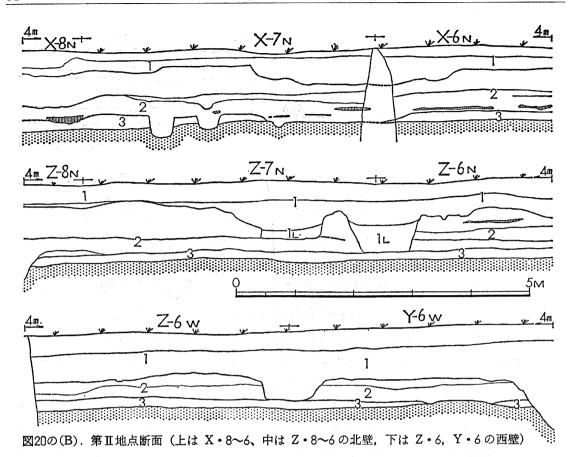
図20の(A). 第II地点断面(上は X・8, 下はZ・9, Z・8 の北壁)

などの有機分を含む黒味をおびた褐色の包含層となり、製塩土器・須恵器・土師器を多く包含し、土 錘・鉄器なども出土した。 $Z \cdot 6 \sim 9$ 、 $Y \cdot 5 \sim 8$ 、 $X \cdot 4 \sim 8$ 、 $W \cdot 5 \sim 7$ では、土器溜り的な層 を形成し、そのうち、 $Z \cdot 7$ 区の南半では2層の上部に黒味の強い包含層があった。

土器溜り的な部分の製塩土器の量は、後に記すようにかなりの量をみせ、ごく近くに製塩の作業場の存在を考えさせる。また、土器溜り的層位の上部あるいは下部に、時にレンズ状あるいはブロック状の山土の堆積がみられることがあり、それらは自然な堆積層ではなく、炉、住居あるいは製塩土器の製作用に砂地の遺跡へ運びこまれたものと考えられる状況であった。

この2層中には、 $X \cdot 5$ 、 $X \cdot 6$ 、 $W \cdot 6 \sim 7$ 、 $X \cdot 8$ の各区で焼土あるいは焼砂がみられ、炉の残欠と考えられるが、それらについては、別に図示して後に略記する。また、4 区以西では、2 層から下方にむけて掘り込まれた柱穴らしい穴がかなりの数認められたが、砂層中のことであるので2 層の掘り上げ後にようやく確認できるものであり、柱穴かと思われる穴と関連する床面を把握することは出来なかった。さらに柱穴の並び方で建物としてまとめることの出来るものも判明しなかった。たい、これらの柱穴とみられる穴状遺構が、古墳後期の生活や生産にかかわる遺構の存在を知らせるものであることは、柱穴内の遺物から見ても間違いないものであった。柱穴状その他の遺構の分布状況は図18に記し、一部の遺構については、別記する。なお、柱穴状遺構の穴を埋めた砂中に下凹みのレンズ状になった山土的な粘土分がみられた例があって、砂中に埋めた柱の付近を山土でかためたか、あるいは、山土を入れた床面が存在したことをうかいわせた。

2層の古墳後期の包含層の下方は、濃淡はあるが、やはり有機分を持つ暗褐色を呈した砂層(3層)となり、縄文晩期の遺物を含む10~20㎝の厚さの3層中には古墳時代後期の遺物も混在することが多く、これは縄文晩期の層の上にほとんど堆積土砂のない状況で、砂上に古墳後期の生活が重なったことによるとみられる。 X・5~X・6区へかけては、3層が黒味の強い砂層となってゆるい落ち込み状になる部分があったが、この部分では、古墳後期の遺物は混入してなかった。しかし、その他の部



分では縄文晩期の遺物がかなり多く、濃い有機砂層となった部分でも、古墳後期の遺物が混在したのである。また、わずかながら弥生時代の土器もこの3層中にみられ、縄文後期の土器片もごく少量混入していた。

山ぎわの $X \cdot 1$ 、 $Y \cdot 2$ 、 $Z \cdot 2$ 、 $Z \cdot 3$ 区では、東の山側から延びた花崗岩の岩盤が西に傾斜してあらわれ、この岩盤上には、3層に当たる砂層が直接堆積していたのである。この岩盤近くの $Y \cdot 2$ 区 3層中からは大形のサヌカイト塊が出土し、 $Z \cdot 3$ 、 $Y \cdot 2$ 、 $X \cdot 1$ にはサヌカイトのチップや石鏃、スクレーパーが、かなり集中的に存在し、この部分が石器製作に関係したことを推測させた。

3層の下方は、遺物を含まない黄色砂層となり、50~60cmの堆積がみられる。その下部は青色砂層となって湧水が始まる。

3) 第Ⅲ地点遺跡の状況 (図19)

第Ⅲ地点はB校舎の西端よりに南へ張り出した給食作業場の東側で、その部分に給食用設備の拡張 工事が行なわれる予定のある部分について、小範囲の調査を行ったものである。この地点のすぐ東側 にはすでに給水用設備のための地下施設が包含層を掘り取って作られていた。

南北 9 m、東西1.5mの調査区中には排水用の土管の埋設などもあり、北半部は現地表下約1.3mの 黄色砂層上面まで撹乱されてしまっており、南半部では黄色砂層上に約60cmの厚さの有機質を含んだ

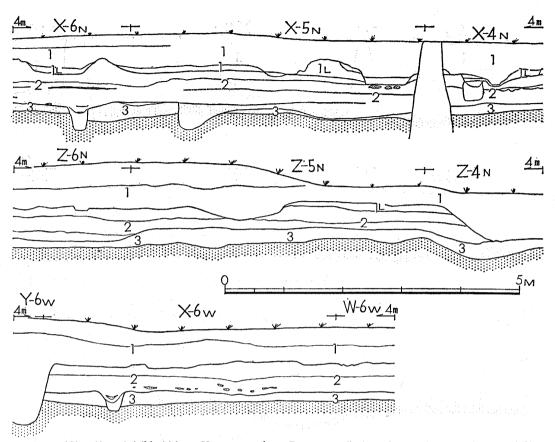


図20の(C). 第II地点断面(上は X・6~4、中は Z・6~4の北壁, 下は Y・X・Wの6区の西壁)

砂層がみられ、この層には古墳時代後期の製塩土器片・須恵器・土師器を包含していた。これは第II地点の2層に相当するもので、上半は淡い灰褐色砂層で、遺物は少く、下半では、黒味をおびた褐色砂層となり、遺物がや>多かった。東半部にみられた包含層も西半部では建物の工事ですでに掘りとられていた。この地点では、古墳後期の包含層の下が、ただちに黄色砂層となり第II地点の3層あるいは第I地点の5 \sim 8層に当る縄文期の包含層は存在しなかった。第II地点の2 層にあたる包含層の残っていた南半部東面の断面は図19に示した。この結果にもとずいて給食作業場拡大にあたっては包含層に達しない程度の地下工事で行うこととなった。

4) 第Ⅳ地点遺跡の状況 (図版第十一の(2)、図19)

校地の西北端で、B校舎西端近くの北側の一角に、倉敷市の公害観測設備を新築する予定があったため調査を行った地点である。東西2m、南北5.5mの範囲について発掘を行った。

現地表下20cmは校地造成の際の埋め土で、その下に約40cmの厚さで、旧畑地の耕土を含む表層の砂質土があり、さらにその下方が、40cm~50cmにわたってやゝ黒味を帯び、灰や炭を含んだ有機砂層である。この層は、上半部が淡く、下半部が濃い黒褐色砂層となり、古墳後期の製塩土器・須恵器・土師器を含み、下半部は土器溜り的ともいえる多量の土器片を出土した。土器の破片もこの部分で大形の破片が多かった。この層の中ほどで、調査区西端の南壁に山土の焼土がみられたが、面としての広

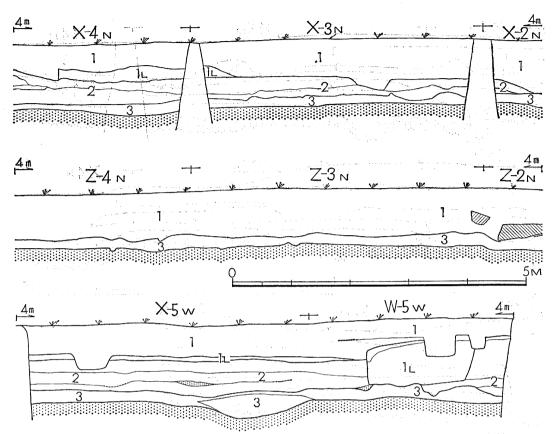


図20の(D). 第Ⅱ地点断面(上は X・4~2、中は 4~2の北壁, 下は X・Wの5の西壁)

がりを持つほどのものではないように思われた。遺構であるとしても、古墳後期の遺物の堆積中に、 すでにかなりの撹乱を受けたものであろう。

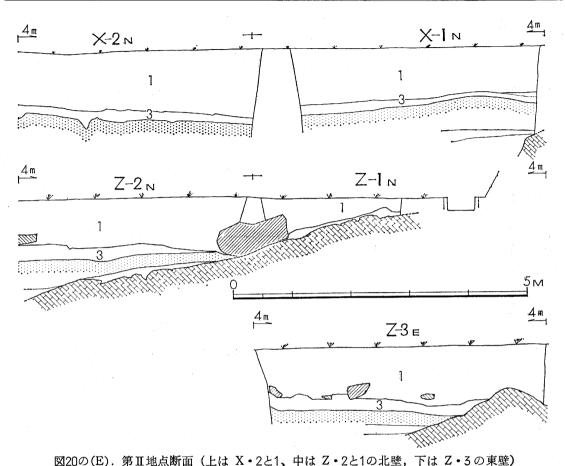
製塩土器の包含層の下部は黄色砂層となり、遺物を含まないから、この地点にも、縄文期の包含層は存在しないと考えられる。第IV地点の断面図は図19に示した。

第Ⅳ地点は、本遺跡として、西端に近い部分であるが、こゝまでは少なくとも古墳後期の良好な包含層が延びていることを確認したのであり、発掘区の埋めもどし後、この部分に地下を一切掘らないで、公害測定の設備を建てることになった。

5) 土器の出土状況 (図22)

概略の状況は、すでに説明した通りであるが、より具体的に、遺物、主として土器の各区、各層内での出土状況を、破片総数の概数で示したのが表1である。「師楽」は、製塩土器の意味であり、「奈・平」は奈良・平安時代の土器である。

1層は、繰返し記述したように、多くが埋土であり、旧表土部分は大変少ないためこの遺物は、ほとんどが、移動した第1地点付近のものと見られるが、破損、磨滅も激しいので、埋土中のものが完全に採集されたものではない。むしろ、1層の遺物は、表面採集資料的なものに過ぎないが、こゝで特に示したのは、2層以下に、全くと言ってよい程、中世の遺物を包含しないことに対し、1層の土



が本来存在したあたり、恐らく第 I 地点周辺の未調査部分には、かなり中世の遺跡が広く拡がってい

か本来存在しためたり、だらく第1地点局辺の不調査部分には、かなり中世の遺跡が広く仏かっていたことを示すためで、第11地点との関係はほとんど無い。

各列の、1・2区に、2層に当たるものが無いのは、既述した通り、最初の工事で、露岩部を削り取り削平する為に、特にこの部分は深く2層に当たる処まで失われたためであった。 Z・1区に遺物の無いのは、岩磐のみで土層が存在しなかったので発掘区からはずしたためである。 Y・2区に2層としたものも、これ等の地点では、埋土と、2層撹乱土の区別が大変困難なために、2層として発掘はしているが、実際には1層と同性質である。2~3層で僅かながら弥生式土器の出土したものは、奈良・平安時代欄に特記して記した。

W列は、5区と、6-7区を合併した部分のみ発掘を行ったが、7区にあたる部分は西半を掘っていないので、6-7区遺物は便宜上、W・6区部分へ合せて記している。

Y・8区の2層に、V類5200の数値が併記されているのは、この地点に、後述する製塩土器V類に属する一括資料のピットが存在したので、他の製塩土器と区別して、特に併記した。たゞ破片数量のみを言うのであれば、両者が加えられた数値となる。

9区は2列で細いトレンチ状に掘っただけであるため2列にのみ存在し、面積も狭い。

第Ⅱ地点の区は5×5 mが原則であったが 第Ⅲ地点は、1.5×9 mで、しかも 遺物出土面積はその

	列 777							v						
区		W · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·						X 						
	層	中世	奈 • 平	須恵	師 楽	上師	縄文	中世	奈 • 平	須恵	師 楽	土師	縄文	
	埋土									130	250	50		
1	2													
	3												30	
2	埋土							20		130	80	25	3	
	2													
	3												60	
	埋土							90		130	20		2	
3	2							10	10	110	200		5	
	3										10		45	
	埋土							20		170	150	30		
4	2	1						15	5	630	1950	75	100	
	3	(W列は5区と6・7合併区のみ発掘)							(弥) 1	5	50		80	
	埋土				-					60	50	5		
5	2			490	6430	160	6	15		1020	10170	280	40	
	3		(弥) 4	130	1550	75	385		(弥) 2	5	45		1550	
	埋土	-	2	10	5	5	1			44	10	10		
6	2			370	1600	45	13			850	5450	370	95	
	3		(弥) 5	100	620	30	970		(弥) 2	3	20		290	
	埋土							20		40	10	20		
7	2									620	5050	230	45	
	3									5	75		65	
	埋土			-1										
8	2									600	2350	180	5	
	3									120	1450	70	550	
第	埋土			90	25		第			50	50	5		
第Ⅲ地点	2	,		25	970	25	第N地点			400	2750	70	-	
点	3				·		点						-	

表1の(A). 第II・III・IV地点区別土器片出土表

	列		/		Y			Z							
区	(層)		奈 • 平	古墳		€ ⊞t	山 奈		古墳			€ ⊞			
		中世		須恵	師 楽	上師	縄文	中世	苹	須恵	師 楽	土師	縄文		
1	埋土			75	80		10								
	2											-			
	3						15								
	埋土			315	190	25	30	5		20	10	5			
2	2			70	90	10	55								
	3		(弥) 2				200				20		200		
	埋土	20		50	20	10		5		105	60	30	15		
3	2	5	5	80	160	5	10								
	3			50	40	10	50			15	35		90		
	埋土	5		140	50	10					-				
4	2			65	140	5	35				10	5	45		
	3			25	65	10	40		(弥) 3		35		290		
	埋土	5		140	130	10	2	5		80	80	10			
5	2		(弥) 2	405	2880	140	85		:	135	1400	25	30		
	3			10	60	5	120			15	40		270		
	埋土			20	20			20	1	10	105	50	2		
6	2	20		1530	8550	415	15		5	260	700	40	5		
	3		(弥) 3	80	1050	25	120			15	20		300		
	埋土			20	10	5				90	100	5	-		
7	2	20	(弥) 2	850	5030	190	100		(弥) 2	380	1000	40	125		
	3		(弥) 5	40	720	25	560		:	125	630	40	310		
	埋土	40		120	100	40		5		25	5	5			
8	2			1270	V類5200 4850	295	35			510	110	35	10		
	3		(弥) 2	25	300	5	340		(弥) 7	250	290	5	1430		
9	埋土									20	20	10			
	2								20	250	730	50	5		
	3								(弥)	60	450	50	15		

表1の(B). 第II・III・IV地点区別土器片出土表

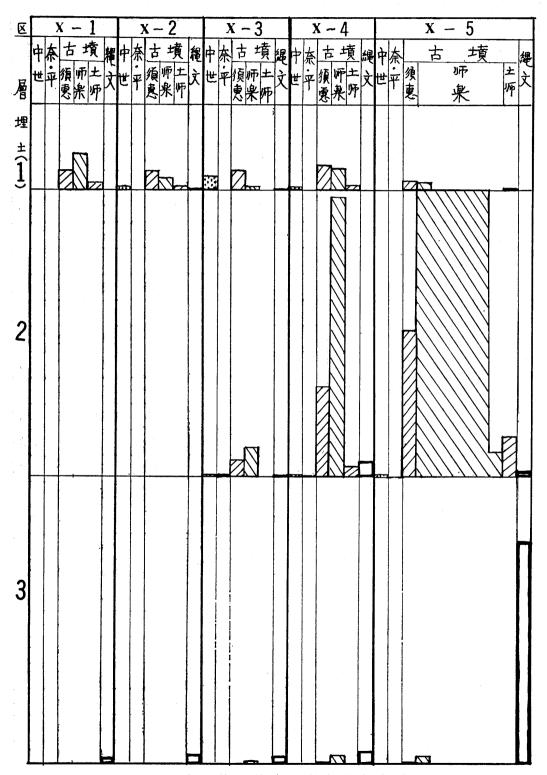


図22の(A). 第 II 地 点 X 列 土 器 出 土 量

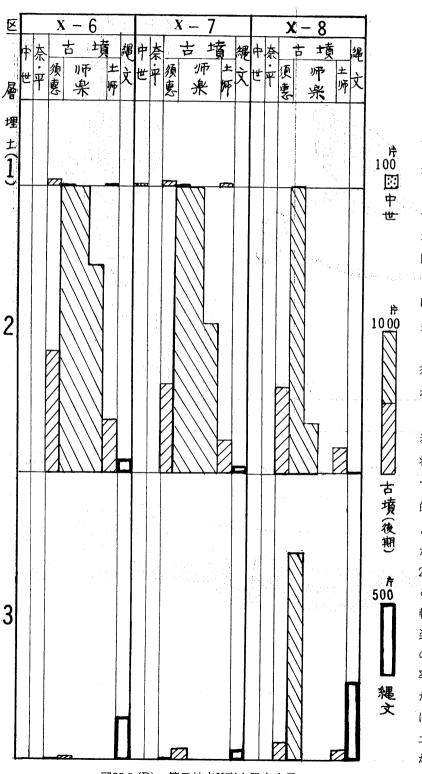
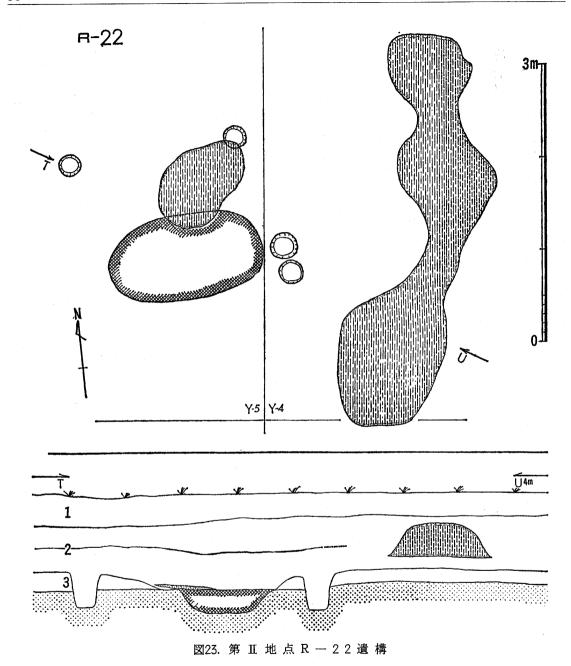


図22の(B). 第Ⅱ地点X列土器出土量

半分である。第IV地点 も2×5.5mであり、 これ等地点の遺跡出土 量を、II地点の他の区 と、直接の比較は出出 ない。第IV地点などの ない。第IV地点などの半 分以下であるが、土器 出土量が多く、この割 合で見ると、II地点の 最も土器出土量の 区に匹敵する。

第Ⅱ地点では、古墳 時代後期の製塩土器の 多さが遺跡の性格を示 しているが、同時代の 須恵器の多さも注目さ れる。

なお、第Ⅰ地点で代 表的なD列の遺物出土 状況を図8に示したの で、第Ⅱ地点でも視覚 的な図として、I地点 との比較を容易にする ため、X列を同様に図 22として示した。たい この場合、I地点に比 較すると極端に、「師 楽」が多くなっていた ので、破片数を示す比 率を一定に出来なかっ た。また、第Ⅱ地点で は、古墳時代の中での 土器種別をそれぞれ量 が多いため斜線方向を 変えて示した点も、第



I地点と異っている。

6) 第Ⅱ地点の遺構 (図版第八の(2)・(3)・九~十一の(1)・十二・十三の(1)、図21・23~29)

第Ⅱ地点で認められた遺構も、第Ⅰ地点と同様に、遺構の一単位を全体として推定させるものは知られなかったが、以下に焼土面、山土または粘土塊などがあった地点について個々に記しておこう。なお、第Ⅱ地点の記述を加える遺構はR-21からR-29まで記号を記して、第Ⅰ地点のものと区別することにする。

イ) R -- 21 遺構 (図版 第八の (2)・十二、図21)

X・4区とX・5区にわたる北 半部分に見られたすべての遺構に 関わるというわけではない。この あたりからW・5区にかけて、2 層とした土まじり有機砂層の比較 的上部に、製塩土器、須恵器、土 師器などを多量に包含した土器溜 り的な層が広がっていた。灰分や 木炭片も含まれ、黒味を帯びた褐 色の砂層である。 X・5 区北東端 で、この層中に焼土のブロック状 になったものが散乱した状況が見 られた。炉状遺構の断片が土器溜 り中に入ったのであろう。2層に あたる層は断面図で見るよりも更 に上層にも本来は存在したと思わ れるが、整地の際に削られたもの であろう。

X・4区の北西端近くで、土器 溜り的な砂層よりも下部に1m× 0.7m 程度の広がりを持って粘質 の強い山土のブロックが存在した。これは、古墳後期の遺物を含む砂層(2層)下部にあたり、山から運んできた山土を積み重ねておいた状況と見られる。同様の状況はY・4区でも見られた。山土を運んで積み重ねたのが何の目的

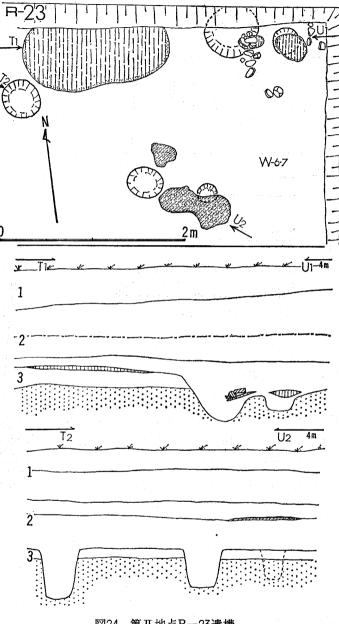
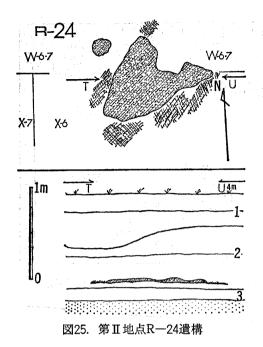


図24. 第Ⅱ地点R-23遺構

であったかは確定的ではないが、推測可能な用途をあげるとすれば、製塩土器製作用の粘土、炉の床面を作る粘土、或いは全面が砂で出来た地表に住居または作業場を作った際の床面に入れる粘質の山土などが考えられる。

 $X \cdot 5$ 区側で、下部の3層中に埋まるような状況で、半欠の製塩土器が出土した処と、 $X \cdot 4 \sim 5$ 区の周辺の柱穴と思われる穴状遺構をもあわせ図示した。

これらの遺構は、同一遺構としてのまとまりは見られないが、時期的にも古墳時代後期であり、製



Y・5区側には、東西1.8m、南北0.8mの楕円形プランの掘り込みがあって、掘り込み中には灰・木炭・焼土小片がつまっていた。その北部には穴を一部おゝう様に薄い山土の層が見られた。この遺構は 3層中に始まり、3層にあたる砂層から下部の黄色砂層にまで掘り込まれていた。

この図でも、柱穴と見られるものをあわせ図示したが、他の遺構との関係を推定することは困難である。

ハ) R-25遺構(図版第十、図26)

X・6区の東寄りに見られた2層中の製塩土器片を主とする土器溜り的な部分の南端近くには、長さ30cm前後ばかりの花崗岩数個が列状に置かれたかに見えた。しかし、何らかの遺構と埋解するには特定な状況は何も無く、土器片などを廃棄した場所に別に使用されていた石塊を放置したものであろう。石の表面には焼けた痕は見られなかった。図には周辺の柱穴状遺構をあわせ記したが、この付近の柱穴もまとまりを持って、一定の構造を推定することは困難であった。

塩作業に関係した遺構の部分をそれぞれに示している と見てよいであろう。

ロ) R-22遺構 (図版第八の(3)、図23)

Y・4区からY・5区にかけての遺構をR-22として図示した。Y・4区の西半には、山土塊が長さ4.5 mにわたって南北に帯状に見られた。これもX・4区の例と同様に2層中にあって、現在では帯状に見えるが、平面形で見ると二ケ所がせまく、くびれた様な状況を示し、くびれた部分は、山土塊上面も低くなっているから、もともとは、三つのブロックに置かれた山土が連続して帯状になったものであろう。

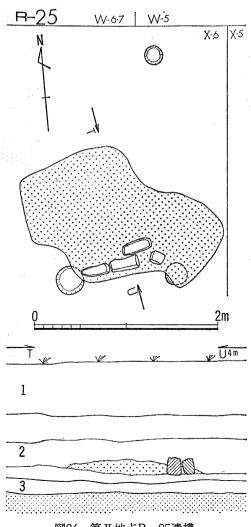
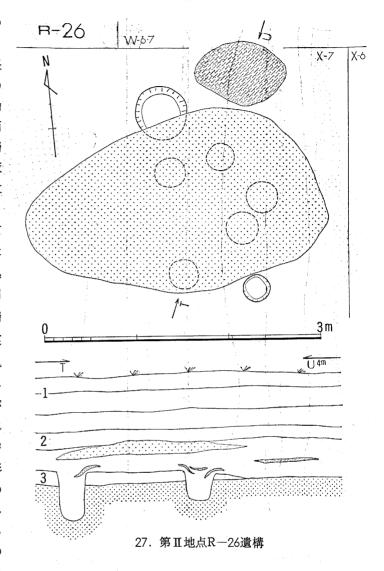


図26. 第Ⅱ地点R-25遺構

二) R─23遺構(図版第九の(1)・(2)、図24)

W・6-7区の東半部で、長 さ東西80cm、巾南北40cm程度の 焼土面が検出され、その北西約 30cmにも、径30cmほどの焼土面 があった。この焼土面は、2層 の中ほどに厚さ2cmばかりに板 状の焼土となったものが、原位 置のまゝ残存したものであり、 山土が赤く、かなり硬く焼けて いる。砂の上に、山土を敷いた 部分が、かなり長期間に強い熱 を受けたものであろう。その周 辺の砂や、板状焼土の下の砂層 は赤味を帯びて、熱を受けた痕 跡をみせた。いま、二分して見 える板状焼土面は、本来連続し ていたと思われるものの一部が 残 存している 形状と 考えられ る。従って、もともとは、1m 四方をこえる程度の焼土面を形 成していたと見られる。焼土の 周辺には、焼土面に直接関係し たと思われる配石などは認めら れなかったが、古墳時代後期の かなり大きな炉跡であったこと は確かである。



焼土面の西北で、 $W \cdot 6 - 7$ 区北壁にかゝる部分に厚さ2cm~3cmの山土が見られた。長さ1.7m ばかりの楕円形をなし、焼土面よりもやゝ深い2層中に存在した。周辺には、2層から始まり3層を貫いて黄色砂層まで達した柱穴状の穴があるが、柱穴と山土層との関係は確かめることが出来なかった。なお、柱穴の一部は、先の焼土面でおゝわれたものがあるため、少なくとも、焼土面よりも古いものが存在する。しかし、柱穴状遺構は全て、2層中から始まり、柱穴中には古墳時代後期の遺物を持つものが多く、これ等が古墳時代後期製塩の時期に近いことを示している。

柱穴状の遺構のうち、 $W \cdot 6-7$ 区北東端の北壁ぞいに並んだ二個には、その縁辺と穴上に小石が 見られ、穴上には、粘質の強い山土が、レンズ状に穴へ落ち込むように存在した。これらは、砂層中 に立てられ、不安定な柱を固定するための小石や山土が柱穴上や周辺に残ったものと考えられた。

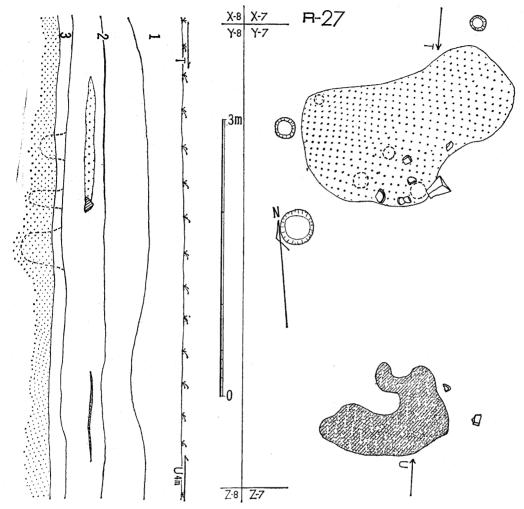


図28. 第 Ⅱ 地 点 R - 2 7 遺 構

他の柱穴でも穴上にレンズ状の山土が検出された例がある。

ホ) R-24遺構 (図版第九の(3)、図25)

 $X \cdot 6$ 区の北西端から、 $W \cdot 6 - 7$ 区へかけても、R - 23で示したと同様な山土と焼土が、第2層の下半に厚さ2~3cmの面をとゞめていた。これは不整形な形の東西1.2cm、 南北1 mの面と、径40 cmの円形に近い焼土面にわかれているが、この場合も、本来は焼土面がつながっていたものと考えられる。焼土面の周辺には、灰と木炭小片を含んだ薄い面が拡がり、焼土面に関係した燃焼にもかゝわった痕跡であろう。この焼土面も、R - 23と同じく砂上に山土を敷いて炉面としたもので、かなり長期にわたって火を受け、良く焼けて硬化した焼土板となっていた。もとの炉面は、残存部よりもさらに広かったと思われる。 焼土面の周辺には、これと関係したとみられる配石などは 認められなかった。

へ) R-26遺構(図27)

X・7区の北東部に、東西1m、南北0.7mの不正楕円形の焼土片が堆積した薄い層がみられた。

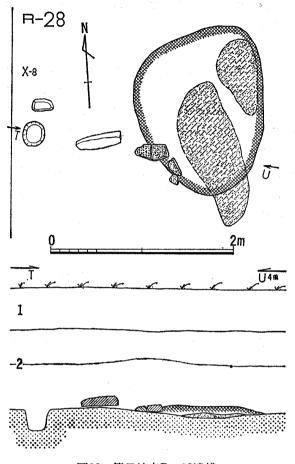


図29. 第Ⅱ地点R-28遺構

だものが検出されており、先にも記したように、柱の固定のために用いた山土の残存であろう。

ト) R-27遺構 (図版第十三の(1)、図28)

Y・7区の南西端近くに東西1.4m、南北1mの不整形な範囲に薄く焼土が広がっていた。R-23、R-24のような硬く焼けた板状焼土ではないが、現位置に残った焼土面とみられるものであり、東側縁辺に小石も存在した。2層下半部にあるこの焼土面とほぶ同じレベルで、北方Y・7区の北寄りには、東西2.5m、南北1.5mの楕円形に近い土器溜り的なひろがりが、厚さ10cm~15cmにみられ、製塩土器・須恵器・土師器などの土器片のほか南よりには小石も含まれていた。何らかの遺構に伴った小石が、土器片と共に放棄されたものと思われる。この処でも、やはり灰や、小木炭片も含まれている。

これは第2層の下半部にレンズ状に2㎝程度 見られたもので、灰や木炭小片もまじり、遺 跡の破砕物の堆積部分とみられる。この付近 では、3層にあたる砂層がみられず、2層下 部が黄色砂層上に直接のる形になっている。

焼土片堆積部分の南に、東西3m、南北2mほどの範囲に土器溜り的な堆積層が、2層の中位にみられ、厚い所で20cmばかりを計る。これは北側の焼土片の堆積面より上層にある。製塩土器を主体とし、須恵器、土師器をも多く含むことは、他の2層中の土器溜り的堆積層と同様である。この土器溜り的層と同様である。この土器溜りの下部に柱穴遺構とみられる穴が2層下部に始まり、3層を抜いて黄色砂層まで掘り込まれていたが、この穴は、あきらかに土器溜り的層位でおゝわれていた。また、柱穴状の穴に粘質の強い山土がレンズ状を呈して落ち込ん

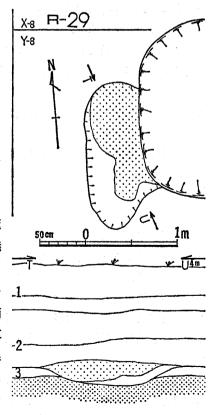


図30. 第Ⅱ地点R-29遺構

周辺の柱穴状の穴は、やはり2層に始まり3層を貫いて下方の黄色砂層まで達しているが、その多くは、上記の土器溜り的な層によってお>われた形になっていた。

チ) R-28遺構 (図版第九の(4)、図29)

X・8区の中央西寄りには、南北2m、東西1.5m ばかりの不正円形に近い木炭片、灰に焼土片を含んだ層がひろがり、その南西端に火を受けて焼けた小石が若干存在した。その西にや 1 離れて 2 個の石がみられた。このあたりでは、3層にあたる暗褐色砂層が明瞭に認められず、2 層の下端にある木炭片・灰・焼土片の層は黄色砂層の上に直接ひろがっており、その下部は不正長楕円形に 2 個所にわたって赤く焼けた砂層が認められた。それはこの場所が、かなり長期に高熱を受ける炉であったことを示すものと 思われる。 炉の形状自身は、 明らかでないが、 かなりの広がりを持ったものであったことは、 焼砂のひろがりやそれを お 1 う木炭片・灰・ 焼土片を含む 層のひろがりから推測でき、炉の周辺には、 若干の石も配され、 その石も火を受ける 構造であったとみられる。 この区の主に下層から 多くみれた 無文大形の丸底 製塩土器 (I 類としたもの) は、 この焼砂面と関係するものであるうか。

この区にも柱穴状遺構がみられ、2層中から黄色砂層まで達した穴状遺構であることは他の区の場合と同様である。

リ) R-29遺構(図版第十一の(1)、図30)

Y・8区の西北よりに、2層中から3層に掘り込まれ一部黄色砂層まで達したゆるいU字底の穴状を示す部分があり、穴状遺構は、薄手のや1小形丸底の製塩土器(V類と称した)の土器溜りとなっていた。この穴状遺構は、なお東方へも延びていたとみられるが、すぐ東には、校舎造成時の瓦礫、コンクリート塊を投棄したゴミ穴となっていて、穴状遺構の東辺が掘りとられてしまっていた。この穴状遺構の残存部は南北1.5m、東西60cm、厚さ20cm~25cmであり、この中に含まれた製塩土器片は細片となったものを除いて5,000片以上に達し、すべて同類の製塩土器片であった。僅か数片混在した須恵器坏の身片なども、この製塩土器片溜りの上部で認められたものでこれは他の時期のものが混入した可能性がある。

本遺構跡の調査区で純粋に製塩土器ばかりの土器溜りといえるものは、この処で確認されただけであり、他の地点での土器溜り的な堆積は須恵器、土師器片をかなり含み砂、土もかなり含まれたものであった。

以上が、第II地点の主な遺構群であるが、繰返し記したように、これ等は、単一のまとまりを持った遺構としてこそとらえられなかったが、そのほとんどが古墳時代後期の製塩作業に伴う遺構と考えられるもので、この点第I地点の遺構とは、やゝ性質が異っているとも云えよう。しかし多くの柱穴が、すべて製塩作業に必要な小屋等の柱とする根拠もなく、生活の場と重った場合も考えられるのである。製塩土器に伴出した多くの須恵器・土師器もこれを物語るものであろう。いずれにしても製塩に関ったと思われる炉址周辺の製塩土器溜りが、直接、その炉址に関係があるか否かも判定出来ない状況であった。このためR-29に示されたような特定の製塩土器片のみの土器溜りが、条件が良くて一括残ったものか、或いはこの遺跡では、他の製塩土器と明瞭な違いを示した一群の土器で、この土器の使用のされ方が、他の製塩土器と異なるものであったのか、この点も遺跡の中では判定出来ないものであった。

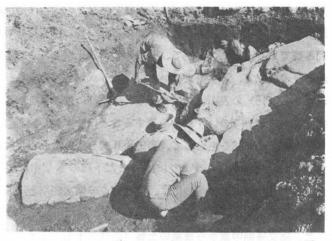
なお、炉址に関しても一定のまとまりは見られなかった。例えばR-23とR-24遺構の焼土面などは互いに近接していたが、レベルに差があり、同一遺構の破壊されたものとは認定出来なかったのである。

また、柱穴らしい穴状遺構の数は第Ⅱ地点で、かなりな数が認められたが、それらに、まとまりを認めて、一定の上部構造のあり方を推定するのが困難であることは、すでに記した通りであった。しかし、例えばX・3とか、Z・8区の北壁下で見られる様に、3個の穴状遺構が一列に並ぶ様に存在したものなどもあり、これ等は、互いに関係あるかとも思われるものであった。

遺構的なものム全でが、古墳後期に属すると考えられ、かなりの遺物の出土をみた縄文晩期の層では、大形のサヌカイト塊や、小剥片の散布が多かった山ぞいの地点とか、 $X \cdot 5$ 、 $X \cdot 6$ 区の黒色包含砂層以外には、とりたてム遺構を示すものは存在しなかったのであった。なお、第IV地点でも土器包含層中の一部で焼土が検出されたが、これも第II地点の焼土と土器溜り的包含層の関係と類似したものであった。

第Ⅱ地点発掘風景

Z・2区は埋土直下で岩盤が露出。この周辺には縄文土器、サヌカイト石片など多かった。



。Z・5区で埋土の下から現われた 肥壷。十数年前学校敷地となるま で使用されていたと思われる。周 辺をタタキで固めている。



Ⅳ章 繩文・弥生時代の遺物

一、縄文後期前半の土器 (図版第十七の(1)、図31)

本遺跡で採集または発掘された縄文土器は、後期の前半に始まる。それ以前に属する遺物は、現在まで知られていない。

後期前半の土器は、縄文後期の後半の遺物を包含した第I地点には1片もみられず、第一次調査の 折、校舎のうち管理棟とした建物Eに伴う工事と、その南部で運動場との境界付近の水路工事などの 地下掘削地で表採されたものである。その他に、第二次調査で、第Ⅱ地点の晩期縄文土器を含んだ第 3層の暗褐色砂層中にわずかに混在して検出されたのである。従って、後期前半に属する遺物の出土 する本拠は建物Eの管理棟から南で、運動場北端までの山裾にあると思われ、第Ⅲ地点 3層中のもの は、その流出遺物が混入していたのであろう。図31に示した土器の出土区または採集地点は図の下に 記した。

(1・9・11) は、沈線による曲線文、(2~8)は磨消縄文、(10)はヘナタリによる疑縄文を磨消した文様をもつ深鉢形土器片である。(14)は表面にわずかに条痕を残した深鉢片。(16)は、凹み底である。以上は、全て、一般に中津式土器とみられるものである。そのほか(13)は、口縁突起部分の破片で、形状や文様から福田KIII式かと考えられる。(12)の磨消縄文片も福田KIIIかと思われる。(15)の表面に条痕を持ち、口縁端に刻み目を加えたものは、中津式か福田KIIII式の無文土器であろうが、そのいずれかを決することはむずかしい。

これら、中津式を主として、福田KⅢ式を含めた土器片は、当遺跡の現在知り得る初源の時期を示すのであり、建物Eの南よりには、まだ下層の砂層中に包含層が残存しているものと思われる。また、この地域内採集のものには、第Ⅲ地点の縄文晩期と同類のものも採集されていることは、すでに先の概報でも記したところである。

二、縄文後期中葉から後葉の土器 (図版第十七の(2)・十八・十九、図32~45)

第Ⅰ地点の調査区で、下部の有機砂層中に含まれた縄文土器は、HトレンチからAトレンチまでの 4区より西で検出された。それらの地点では、遺跡の南端で採集された後期前半の土器は一片も含まれず、また、第Ⅱ地点で検出された晩期の遺物も含まない。

第1地点の縄文遺物を包含した砂層は発掘区によって、若干厚さを異にするが、30cm~40cmの間であり、その間を発掘時には人為的に3~4層の分層に区分したが、層位的に、遺物を分け得る状況はほとんどみられなかった。また、発掘区によっても、地点別に若干の差異はみられても明瞭に時期区分出来る状況だともいえなかった。たゞ縄文の包含層の上に堆積した古墳時代の層とは、ほゞ区分が可能であった。

そのため、縄文土器は、従来の知見によって形式分類するほかなく、以下三類に分けて記述を行う。その際、参考となる当地方の基本的資料はすでに形式名として数多く使用されているにもかゝわらず、原資料が未発表のまゝであるものがあまりにも多く、詳細な内容の不明なまゝに形式名が先行している状況である。そこで、こゝに用いる分類が当を得たものかどうかは、将来の検討にゆだねなければならないだろう。

三つの類の土器について、図示したものは、各々の図の下に出土区を記すようにした。第II地点の 3 層の縄文晩期の層に混入していた若干の土器や、E 建物(管理棟)の南部分採集土器も、第 I 地点の土器の分類にあわせて記述したのは、量的に少量であるので、その方が便利に思えたからである。 上記のことをまず記して、以下、A、B、Cの三類の土器について記して行こう。

1) A類土器 (図版第十七の(2)・十八の(1)・図32~35)

茶褐色ないし黒褐色を呈し、やム砂粒を含む当地方の後期縄文土器に通有な色調と胎土を持ち、口縁端部を拡張または肥厚させて、口縁部にいわゆる縁帯文を作ることの多い土器群である。

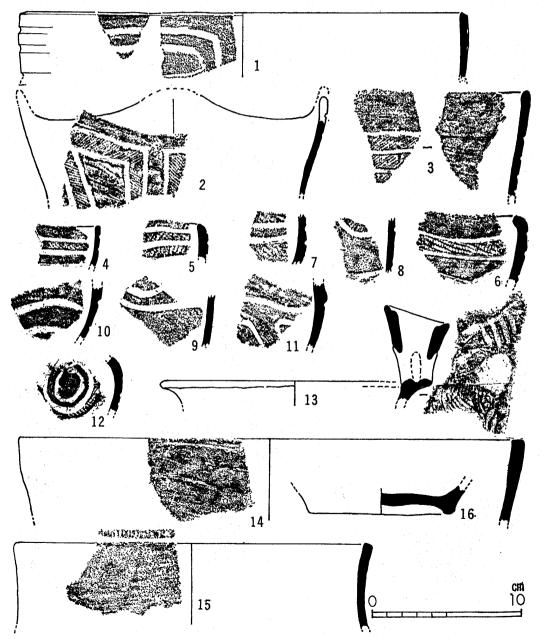


図31. 縄文後期前半の土器 (X8=1、建物Eの南=2~5・10~16、Z3=6、Z6=7、Y3=8、X6=9)



図32. 縄文後期中・後葉A類土器(1)(A2=14、C2=7、C3=13、C4=12、D1=1・3、D2=17、D4=15・21・25、E1=11、E3=5・10、E5=21~24、F2=2、F3=18、F5=19、H2=9、H3=6・8、Z5=20、E建物南=26)



図33. 縄文後期中・後葉A類土器(2)(A1=36、A2=46、B1=41、AB4=39、C2=38、C4=28、D1=47・49、D3=27・29、D4=48、E1=44、E3=27・32・42、E4=40、E5=50、F2=43、F3=10、F4=34、G2=37、H1=33、H2=45、H3=8・35、E建物南=51、Y4=3)

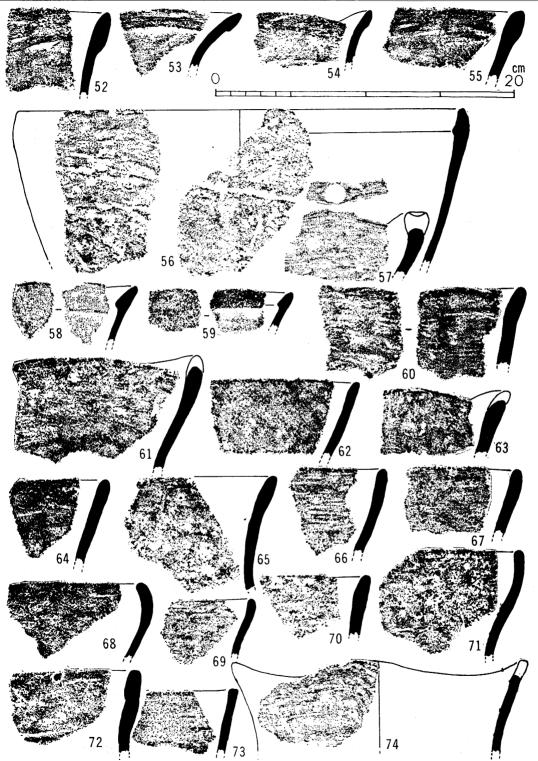


図34. 縄文後期中・後葉A類土器(3) (B1=73、C1=66、C3=64、C4=62、D2=54・59・63・68・69、D3=70、E4=60、E5=61・71・74、F2=57、F3=72、G2=58、G3=52・53、H1=56、H3=65、K1=74)

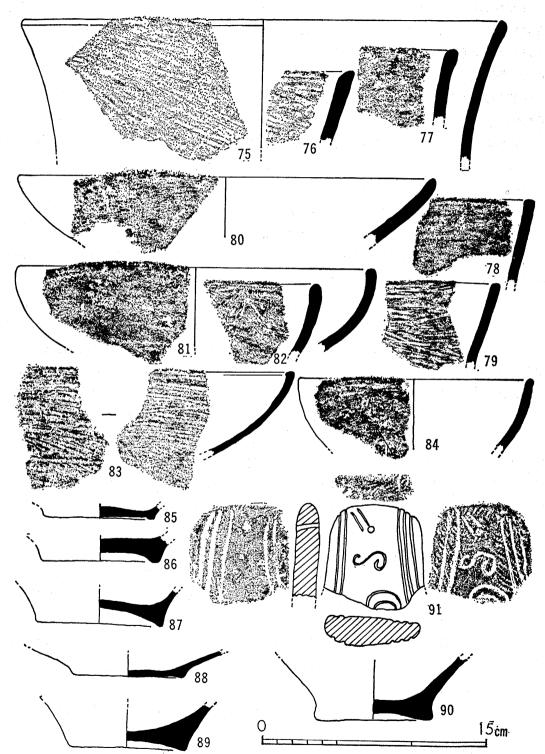


図35. 縄文後期中・後葉A類土器(4)(C1=83・89、D1=78・85、D4=79・86、E1=84・88、E3=75・90・91、E4=82・90、F1=81・87、F3=76・77)

口縁端内面を肥厚させ、肥厚部に斜行する沈線文を施すもの($1\sim3\cdot5\cdot34$)平行沈線文をめぐらすもの ($4\cdot34$)、縄文を付したもの (9)、口縁と平行に凹部を作り、その一部に縦の突帯状部分を作ったもの (6) などがある。口縁を波状に作ったもの ($3\cdot5\cdot6$) もあり、外反する口縁外面に細い多条の沈線を加えたもの ($1\cdot3\cdot5$) もある。

外方に開いた口縁上面を拡張した($7 \cdot 8 \cdot 10 \cdot 11$)は、拡張部に沈線をめぐらし、(10)では刻み目を加えている。

口縁外面に肥厚部を作るものには、平行沈線を加えて、波状口縁にし(13・14)、縄文を付し(15~18)、また、刻み目をつけたり(26)する。(26)は胴上部に沈線をめぐらし、その下に垂下条線をえがく。

上記の口縁を肥厚または拡大した縁帯文的形状の土器は、外反した口縁の下部では胴部がふくらむ 形の鉢形土器となると考えられ、(21~25)などの条線文は、その胴部文様であろう。

(19・20) は口縁部を内傾ぎみに上方へ拡張したものである。(19) は拡張部の上下に突帯状部分を作って波状の突起部で縦に突帯部をつなぎ、突帯にそって沈線を加えている。

(8~10・28~33) は、磨消縄文または、沈線文の口縁部をもつもの。波状口縁に作るもの(8・28・29・31・33) は、波状突起部内面にも文様が見られ、小円孔をあけるものが多い。(30) は外反した口縁部に2孔があけられている。これらは頸部に無文帯をめぐらした下に磨消縄文帯を横位にめぐらすや」ふくらみを持った鉢形をなすものが多いと考えられ、(38~40) などの磨消縄文胴部がそれにあたるであろう。(41) は胴部に巾広い突帯状部分をめぐらして縄文を付している。(42) は、口縁下に斜めに刻み目を付した突帯と沈線がめぐり、(43) は口縁内面に沈線を加える。

(27) は、口縁と胴部破片がそれぞれ一片であるが、共に砂粒が少なく、濃い褐色のいわゆるチョコレート色を呈していて、同一個体と考えられる。口縁破片は、上面を拡張して沈線をめぐらし、胴部に移行した肩部にあらい櫛状工具によるかと思われるゆるい波状文をえがく。胴部破片は、にぶい沈線と櫛状工具によるかと見られる多条の細い沈線文による文様が加えられている。小断片二片による推定ではあるが、その形状と文様から注口土器と考えた。

無文土器にも、口縁内面を 肥厚させたもの (12・56~59)、 口縁外面を肥厚させたもの (44~55) がある。これらは、ヘナタリによる条痕も見られるが、へらみがきしたものが多い。器形は外反する 口縁の下方が丸みをもってふくらむ胴部となる鉢形のものが多いと思われるが、 (12・56) などのように胴部にふくらみを持たないものもある。 (54) は波状口縁に作っている。

(57・60~79) は、口縁端をわずかにふくらませぎみに作った深い鉢形の無文土器で、頸部がや」 すぼまる形態のものが多い。表面はヘナタリによる条痕の見られるものがかなりあり、波状口縁となることが判明するもの(61・63・71)も知られる。

(80~84) は浅鉢形の土器で、口縁部をふくらませぎみに作り、表面にはヘナタリ条痕をとゞめるのが一般である。(85~90) は上記A類土器の底部と考えられ、凹み底になるものが多い。

(91) は、一面に縄文と沈線文、他面に沈線文をえがく土版状の破片で、端近くに一孔をあけている。縄文の付された面にはS字文的な沈線文も施されている。先の概報では、この断片を土器の突起

とし、福田KⅡ式であろうかとしたが、この破片が出土した第Ⅰ地点には福田KⅡ式は皆無であり、 S字状文も福田KⅢ式よりも新しい段階を示すと思われる。また、波状口縁の突起部とみるよりも小 孔のあけ方などから 土版的なもの \ 断片とみた 方が良いと考えられるので、 こ \ に 訂正するもので ある。

上記の縄文後期後葉A類土器としたものは当地方で彦崎KI式とされている土器群に最も近いとみてよいと考えられる。

2) B類土器 (図版第十八(2)·(3)、図36~39)

A類土器とほぶ同様な色調と胎土を持つ土器群であるが、全体としてB類とした土器はA類のものよりも、器壁が薄い点が指摘できる。

(1~5)は、外反する口縁端外面に縄文をめぐらしその下をヘナタリによる条痕またはへらみがきした無文部とし、胴張りをもった頸部以下にも縄文を施した鉢形土器である。 (6・19) などはその胴部であろう。 (1)は、口縁の上面から見ると形は隅丸の方形を示すが、全体としては円形にみえ、底部は丸底である。

 $(7\sim13\cdot20)$ は、内湾した口縁外面に、横位の沈線による磨消縄文を加えたものである。横位の沈線文だけのもの($7\sim10$)と弧状文様、菱形曲線文をまじえたもの($12\cdot13$)がある。(14)も同様な破片であろう。($15\sim18\cdot25$)の磨消縄文破片は、これらの胴部か、($1\sim5$)のようなもの 1 胴部と思われる。

(21) は、口縁を内傾ぎみに上方へ拡張し、平行沈線を加えた浅鉢形土器の口縁部で、突起部の上から円い凹みをうけている。

(22~24) は、口縁内面に一条の沈線をめぐらしたへらみがきまたはヘナタリ条痕の深鉢形土器口縁部である。

(26~35) はヘナタリによる凝縄文に沈線を加えて磨消した土器。いずれも文様は、口縁または胴部に横位にめぐらされている。(26) は内傾ぎみに口縁を上方にたてた浅鉢形土器であり、(31・32) は胴部に稜をもつ器形である。(33) はキャリパー状に近い深鉢で砂粒の少ない黄褐色を呈し他の土器と胎土と色調で区別できる。

(34~39) は細い沈線文をめぐらした土器で、(34) は小形品、(39) は横線の下に弧状文をえがく。(38) は(33) と同様な色調と 胎土を持った 口縁部と注口部破片で、同一個体で注口土器となる。口縁には小突起をもち、沈線の間に斜傾した刻みを付した文様が横位にめぐる。注口部のつけ根外縁にも同様な刻み目をつけている。縄文と刻み目文の差はあるが、京都・一乗寺KIの注口土器(註1) に類似するものと考えられる。

(40~52) は、ヘナタリによる条痕のつけられた深鉢形土器で、口縁端を丸味をもたせながら尖らせぎみに作るものが多い。口縁を外反ぎみにしたもの、内湾ぎみにしたもの、内傾ぎみに上方へたち上がらせたものなどがある。波状口縁になったもの(36・48・51)もある。(53~56)は、ヘナタリ条痕またはへらみがきの浅鉢形土器で、(54・55)は、口縁内面に沈線をめぐらす。

(57~64) は、この群の底部と思われる、凹底のものが多いが、平底のもの(58)、丸底ぎみのも

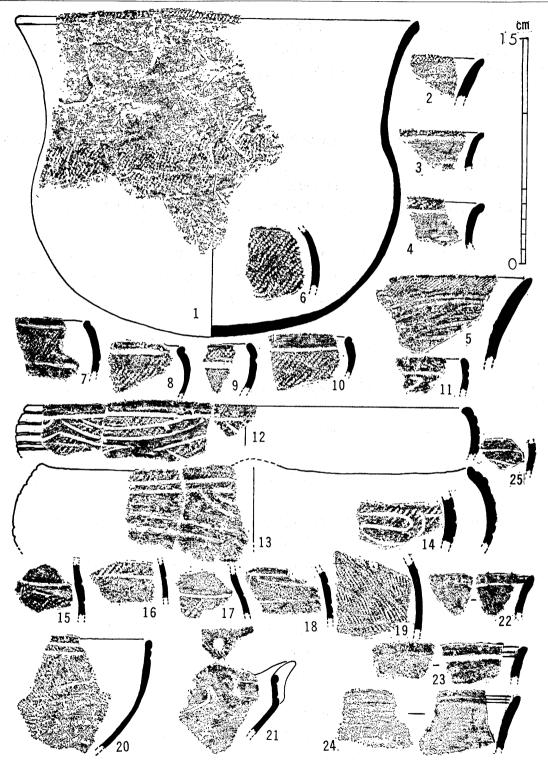


図36. 縄文後期中・後葉B 類土器(1)(A 2=1、B 2=3・14、C 3=16、C 4=12・15、D 0=11、D1=10、D2=4、D4=2・19、E2=7・20、E3=22・23、E4=25、F0=5、F1=21・24、H2=18、K0=8・9・13)

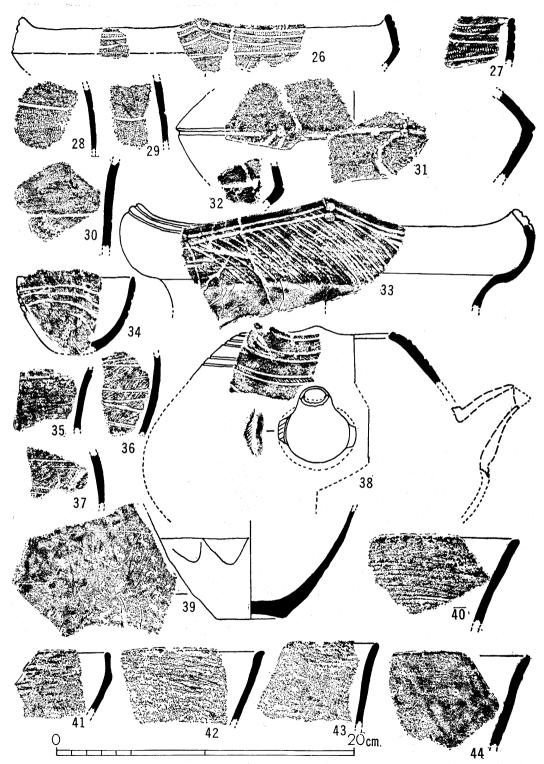


図37. 縄文後期中・後葉B類土器 (2) (A1=27、A2=33・43、A3=32、B0=41・42、C4=31、E1=34、E2=37・39・40、E3=26・35・36、E4=28~30、E5=44、F3=26、F4=38)

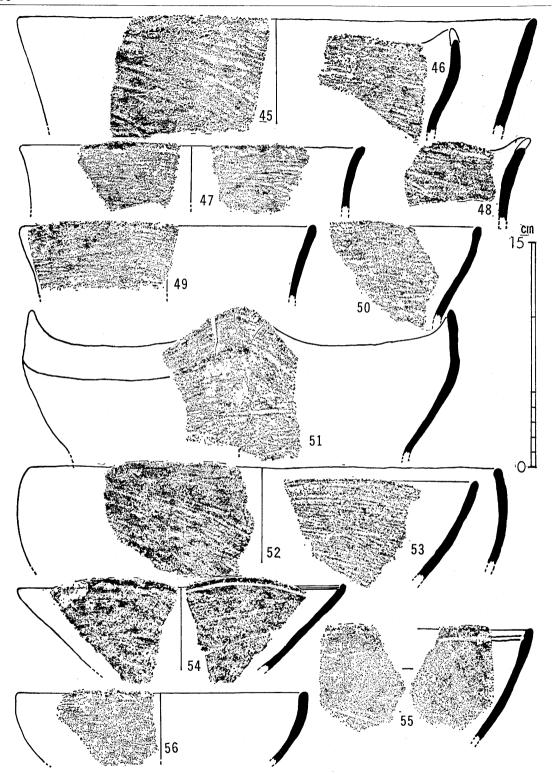
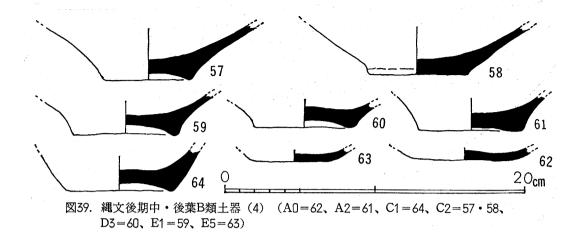


図38. 縄文後期中・後葉B類土器 (3) (A1=52、A2=49・51・55・56、B2=45、E0=47、E2=50・53・54、E5=48、H1=46)



のもある。

これらB類とした土器の内容は、当地方で竹原式あるいは、彦崎のKⅢ式とされているものに近い ものと考えられる。

3) C類土器 (図版第十九、図40~45)

上方に屈曲させた口縁外面に、にぶい沈線を2~5条めぐらした土器を基調とした土器群である。 浅鉢形のものと深鉢形のものがあり、深鉢形のものには、二段に屈曲したもの(52)もある。また、 沈線文が上・下二段にわかれるものもみられる。

横位沈線文の集約部としてヘナタリを扇状に回転させて押圧した文様 (1・4・56) や、小さな円い押圧文1個 (56) あるいは数個 (37) 施すもの、張付粘土の上を押圧したもの (35) がある。沈線文のないものでも、同様な押圧を加えること (15) がある。沈線の間の凸部に斜めの刻みを付けた例 (17~26) も知られる。口縁内面にも細い沈線を加えたもの (17・20・21・28・34~42) があり、その上部にも刻み目を入れること (28・31・34・36) がある。 (34) は浅い皿形の土器。

注口部破片(69~71)がみられ、(69)は注口部つけ根の外縁に円形の刺突文をめぐらし、下部に刻み目文を付す。(72A)は、口縁外面ににぶい沈線を3条めぐらせた小形のもので、注口土器の口縁部であろう。

口縁外面に、文様を持たない主にヘナタリ条痕または、へらみがきの土器(27・29~33・43~51・72B~80・82~85)もこの群に伴う。深鉢形の器形をなすものが多く、口縁上面を平坦に作ったものが目につく。外面に沈線を 持たないそれらの土器も、口縁内面に一本の 沈線をめぐらすもの(27・29~33・43~51・80・82~84)が多く、その上部に刻みを付したもの(27・29~33・82~84)もかなり数えられる。(85)は口縁上面に押圧文がみられる。

(86~97) は、C類の底部と考えられ、凹み底のものが多い。(91) は 底部外縁に 刻み目をめぐらす。

上記のC類土器は、いわゆる宮滝式併行形式と考えてよかろう。

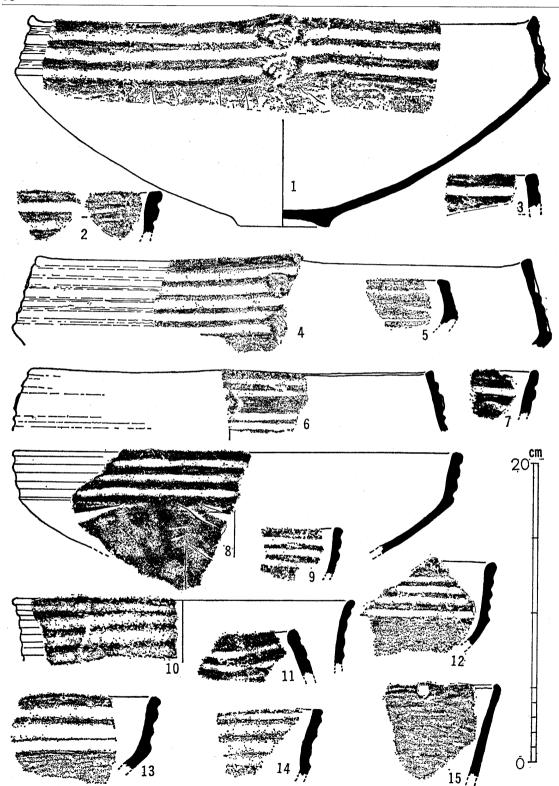


図40. 縄文後期中・後葉C類土器(1)AB4=10・14・15、D1=3、D2=8・11、E1=2・4・13、E2=1・5・6、E3=12、X2=7)

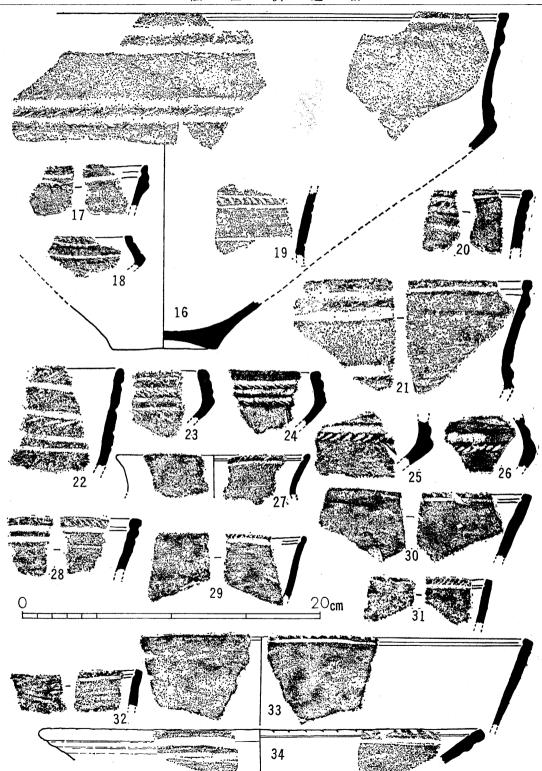


図41. 縄文後期中・後葉C類土器 (2) (A2=31、A3=33、AB4=19・22・27、B3=24、D0=17・18、D2=21・32、E1=16・28、F1=20・23・26、F2=34、G1=30)

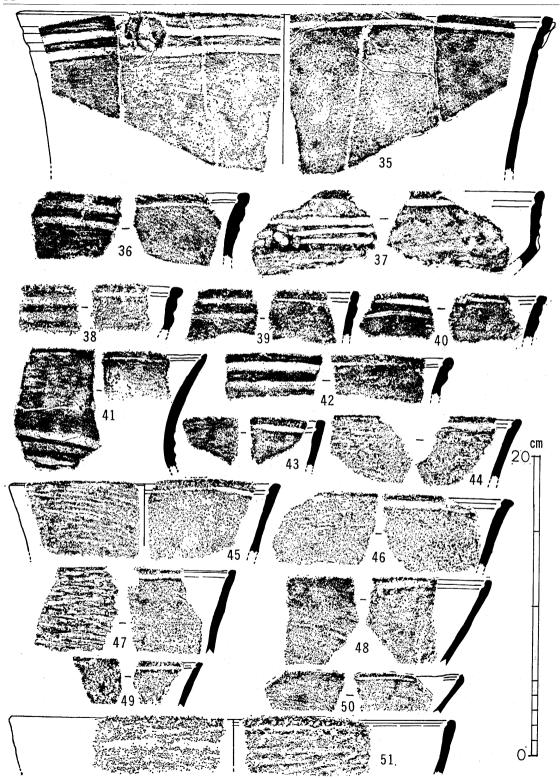


図42. 縄文後期中・後期C類土器(3)(AB4=40・46・48、B3=39、C6=37、D0=44・51、D2=45、E1=47・50、F0=41、F1=35、F4=49、G1=42、G3=38)

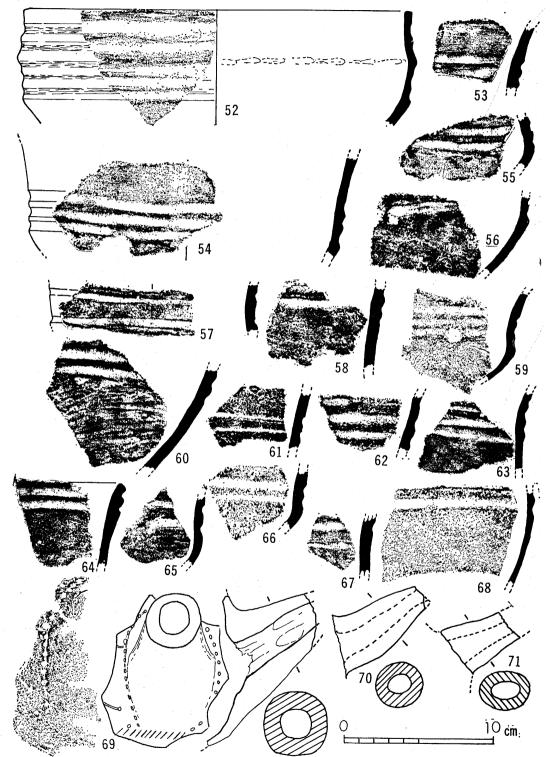


図43. 縄文後期中・後葉C類土器(4)(A2=70・71、B2=69、C2=64、C3=54・66、D2=55・58、E0=57、E1=52、F0=61、F1=53・56・60・62、Z2=66、Z3=67、W5=65)

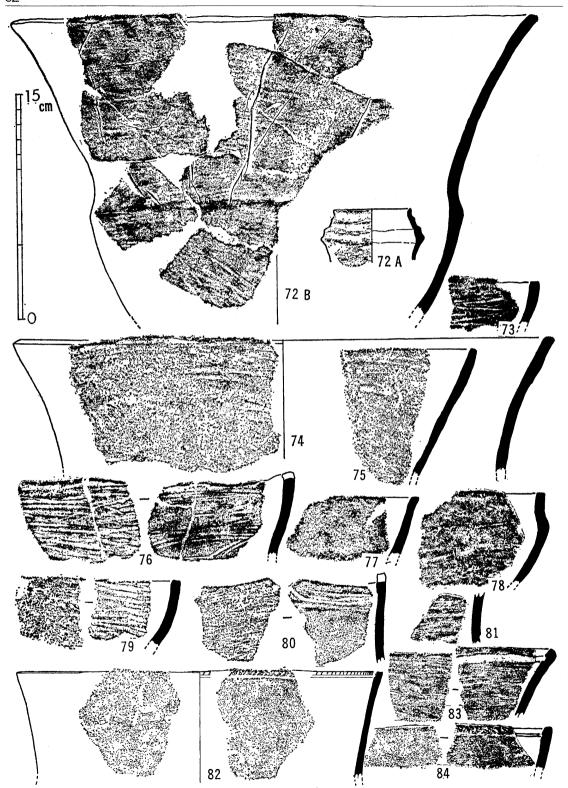


図44. 縄文後期中・後葉C類土器(5)(AB4=74~77・79、C2=81、E0=78、E1=72A、 X2=72B・73、Y2=83、Z2=82、Y5=84、Z6=80)

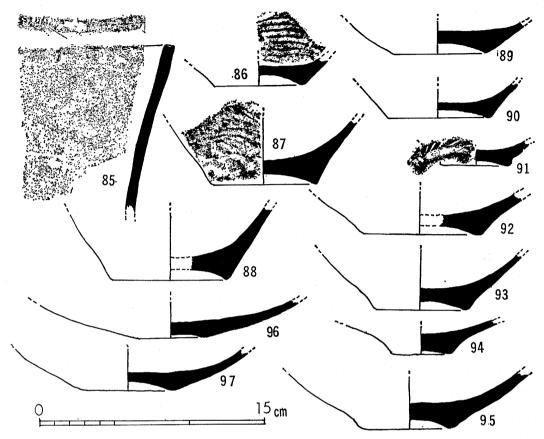


図45. 縄文後期中・後葉C類土器(6)(A2=88、AB4=96、C2=89、D0=90・95、D2=91・92、E2=58・93、E3=93・94、F1=86・87、Z2=97)

4) 小結

上記のように $A\sim C$ 類に分った縄文後期の中葉から後葉にかけての土器群は、遺跡の状況から分類することが不能な状況であったため、単に形式分類によったものである。そこで、A類とB類、B類とC類の区分については、従来、彦崎KIあるいは津雲A、竹原式あるいは彦崎KII、福田KIIあるいは馬取式とそれぞれに考えられてきた土器群の知見によったことは先に記した通りである。

A類(彦崎KI)とB類(竹原式あるいは彦崎KII)の間では、前者の方が器壁が厚く後者は器壁が薄いとか、口縁端を前者は肥厚させるものが多く、後者は丸味を持ちながら口縁端をとがらせぎみに薄く作るなどの特徴を示す。そのほか、A類では、圧倒的に縄文の撚りはRであるのに対し、B類ではLのものが多くなる点が注目されよう。また、磨消縄文の文様構成も、A類にくらべ、B類は直線的横位文様化が進み、用いられる沈線も細い。また、B類には、疑似縄文がみられることもA類との相異点である。

C類は、一般に宮滝式併行形式とされる土器群であり、縄文手法を失っている点で、B類と区別され、口縁の形状は、口縁端上面に平坦面を作るものが多い点でも識別可能である。器壁もC類はB類より、や1厚く作られることが多い。

A類は、津雲A的なものが少なく、彦崎KI的であるとしてもよい内容を示し、それに愛媛県平城 貝塚や山口県岩田遺跡でみられる九州の鐘が崎式的な要素を含む。近畿地方で類縁の土器群をあてる とすれば、かなり地方的に差異があるが一応京都府桑飼下式(註1)をあてることができよう。

B類は、彦崎KⅡないし、竹原式と類似し、近畿地方の細分形式では、京都一乗寺KⅠと元住吉山 Ⅰ式の内容をあわせ持つことになるが、中部瀬戸内では、現状でこのB類を細分するだけの根拠は見 当らない。

C類は、近畿地方の形式にあてると、元住吉山Ⅱ的な要素を持ちながら、宮滝式の内容に近似する。 これは、当地方で福田KⅢ式とされたものにも合致し、馬取式の内容でもある。 このC類もまた、当地方では現在の資料で細分を考えるまでには至っていないと言わねばならない。

従って、本遺跡の縄文後期中葉から後葉に至るA、B、Cの三類が、それぞれに現状で識別可能な 形式区分であるとしておくほかないと考える。

三、晩期の土器 (図版第二十~二十六の(1)、図46~82)

第II地点で出土した縄文土器は、その大部分が晩期に属するもので、後期のものは、東寄り山裾部で宮滝式 併行期の土器が少量発見された他は、 $X \cdot 4$ 、 $X \cdot 8$ などで中津式以後の土器片がわずか $1 \sim 2$ 点ずつ検出された程度である。それら後期の土器については、少量であるので第I 地点の土器とあわせ記述した。

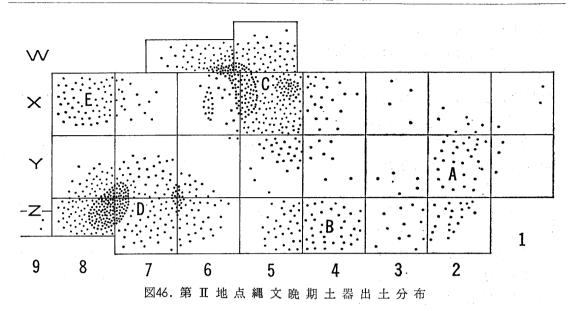
第Ⅱ地点の縄文期の遺物を含む層は、概して、有機分を含んだ暗褐色砂層(第3層)で、その砂層を層位的に細分することは、まず不可能であったことは、先に記した通りである。晩期の土器の出土 総量は、小破片まで含めておよそ10,000片を数えるが、底部の個体で数えると170を越え、口縁部の個体で推定すると、約450個体を越すものと目される。

図46に示したようにこれ等の土器は各グリッドによって出土状況に粗密があり、この状態を参考にして、小地点別によって差異が認められる可能性もあるので、東から $A\sim E$ の5群の小地点に分けて記していきたい。晩期資料出土の範囲は、第II地点の中で、 $X \cdot 5$ 、6区を中心に、 $X \cdot 4$ 、 $Y \cdot 4$ 、5、 $W \cdot 5 \sim 7$ にわたるC群、Y 及び $Z \cdot 6 \sim 8$ にわたるD群とした地点に多く検出されたが、全体としてはほど全域にわたっている。東端は、第II地点の $X \cdot 1$ から $Z \cdot 2$ に連なる山裾の岩盤上の堆積に始まり、北および西端はなお発掘区外に若干延びると推定され、南側の広がりはE 建物から運動場の境界あたりまで続いていると考えられる状況であるが、E 建物とその南付近採集の資料は先の概報に一部を図示しているので、本報告では、第II地点発掘の資料に限る。

ここに図示した資料は、出来る限り口縁部や底部は図示するようにつとめたが、各形態の土器を出土総量に対応させて等率に示すことが出来たわけではない。例えば、突帯や沈線などを有する土器や胴部文様のあるものあるいは、精製土器などは、極力図示するようにつとめたのに対し、条痕、削り痕だけの粗製土器は、小片のものを省略した場合もある。従って、条痕または削り痕だけが見られる土器片は、図示したものより比率が更に多い。

記述の都合上、第II地点の晩期土器全体を通して、器種、技法的な特徴を、まずおくまかに分類しておこう。

総じて暗褐色を呈するのであるが、その器形は、主に粗製の深い鉢形土器と、精製の浅い鉢形土器



とに2大分される。そのうち、縄文晩期の深鉢形土器の中には、口縁外反部の屈曲の形態や、口縁部と胴部の器面調整の差異などから、甕形土器と呼ばれるものがしばしばある。甕形土器という用語に対し、特に反対するわけではなく、むしろ積極的に甕形土器と呼ぶべき器種の出現の意味を評価したいと考えるが、小片となったものが多い本遺跡の資料を明確な基準をもって甕と深鉢とに二分することは、必ずしも容易でない面があり、また、一定の方針を定めて二分したとしても縄文晩期の甕と深鉢の用語が、一定の基準によらず、むしろ様々に用いられている現状の中では、かえって混乱を強めることにもなりかねないと考えて、本稿では、とり敢えず、従来の縄文土器分類の習慣に従って、深鉢形土器と総称して記述していくことにしたい。

深鉢形土器は基本的に三つの器形に分かれる。

- a) 口縁外面に突帯を有するもの
- b) 突帯をもたない口縁部がゆるく外反したり、強く屈曲して外反するもの
- c) 突帯を持たない口縁部がや \ 外ぶくらみになって深鉢を形成するもの

器面調整については、底部から口縁まで連続して観察出来るものは、ほとんどないが、口縁部付近の外側は、横方向の二枚貝条痕、あるいは削り痕が施され、胴部下半では、基本的に削り痕が縦方向にみられる。底部付近では、横方向に削り痕がみられる場合があり、削り痕以外にも条痕が施される事がしばしばある。この点と、胴部破片の観察から胴下半も、条痕調整のものもあったと考えられる。また、底部付近には削り痕、条痕以外に、数は多くないが、押圧痕やナデ調整を加えている例も・見られる。この他、深鉢 c) では、しばしば、土器製作時の継ぎ目を残し器面がざらざらした感じながら、軽いナデ調整を加えたものも見られる。深鉢の器内面には、基本的にナデたものが多いが条痕の残る場合もある。

口縁径に比べて器高の低い鉢は大体5つのタイプに分けられる。

- a) 口縁の上方張部が短く、その直下で屈曲し、器高に比べて、屈曲部以下が比較的深いもの。
- b) 屈曲部から上が、やム深く、強く外反した口縁をなすもの。
- c) 屈曲部以下の胴部がふくらんで半球形をなすもの。

- d) ボール状の器形をなすもの。
- e) 屈曲部をもたず、皿状になるものなどである。
- b) ~ e) は内外面共によく研磨されているが、底部付近では、外面に削り痕が残る場合が少なからずあり、とくに、b) では、屈曲部以下の外面に削り痕が認められる例がほとんどである。c)、d) のタイプのものは均質な胎土が用いられ、e) は、赤褐色を呈するものが多い。

以上の分類に従って、各群の土器の記述を進めることにするが、器形調整法とも例外に属するもの については、個別に記すことにする。

1) A群の土器 (図47~49)

第Ⅱ地点の東寄り、山裾部に近いところで出土したもので、 $X \cdot 1 \sim 3$ 、 $Y \cdot 1 \sim 3$ 、 $Z \cdot 2 \cdot 2 \cdot 3$ の各区出土のものを一括した。C群やD群にあった濃い有機砂層中にや\まとまって土器片がみられるような状態ではなかったが、 $X \cdot 1$ から $Z \cdot 2$ に続く岩盤直上の砂層と、その西北に近接した $Y \cdot 2$ 、 $Z \cdot 2$ で、出土点数がや\多い。 $X \cdot 3$ 出土のものは、C群 $X \cdot 4$ 出土と関連させるべき性質のものかも知れないが、資料数も少ないので、とりあえずA群に含めた。

X・1、Z・2等では、第Ⅲ地点としてはや♪多くの後期の土器片が検出されており、それらは、 ほとんどが、いわゆる宮滝式に属した。また、岩盤縁辺出土の資料は、後に岩盤上を山側から水が流 出したためか磨滅が著しく、手拓できないものもあった。

本群の資料は、他群と比較すると、総量は多くないが、精製、粗製各種の土器が出土している。

- イ)深鉢形土器(図47の(1~12)、図48の(14~16・18・19)、図49の(1~3))
- 底部を除いて、器形判別の出来る資料のうちの半数近くを占めている。
- a) (図47の(1~8)、図48の(14~16)) は口縁外面をめぐる突帯上と口縁端面に刻み目があるものが普通で、この刻みには、半載竹管状工具、あるいは、ヘラ状の工具の先で鋭く刻んだもの(図47の(4~6)、図48の(15)) と、これを斜めに押し引きするように刻んだもの(図47の(1~3))、ゆるやかなU字形の凹凸を作ったもの(図47の(8)) があり、口縁端面の刻みとは、工具が異なるわけではないと思われるが、その用い方は、必ずしも一致してはいない。口縁端面に刻みを持たないのは本群では、わずか1例である(図48の(16))。口縁内側に沈線を持つものは2例あって、そのうち図47の(8)は、外反部に3本1単位の沈線を縦に施している。同図(10・11)はこれと同一個体と思われる。この縦もしくは斜めに引いた沈線文様のあるものと、口縁の下方で屈曲する部分に爪形を横列に並べるもの(図47の(9・11)、図48の(18))は、全て口縁外面に突帯を有する深鉢形土器の可能性が強いが、突帯を有する土器の中には、外反部外面が無文のもの、屈曲部に爪形を持たない例もある。口縁部付近の外面の調整は、条痕のものが多いが、ナデ、もしくは研磨のもの(図47の(5・7)、図48の(16))もあり、屈曲部から下は削りになることが確かなものもある。

b)、c) の器形の深鉢は、本群中の深鉢の口縁部をみる限りでは、数少ないが、口唇に刻み目を施したものと、面を取ったようにナデたもの、ナデてや \ 丸く作ったもの等が見受けられる。図49の(3)は、補修孔と思われる穿孔がある。

外面の器面調整は、口縁部では横走する条痕を施すものが多いが、削り痕のもの(図48の(I9))もある。

図48の(II)、図49の(4)は、共に深鉢形を成すと思われ、内面に研磨を加えた、半精製的な土器である。口縁内側に沈線を加えたり、削出して段を作ったりしている。

ロ) 鉢形土器 (図48の (18~20)、図48の (1・2)、図49の (5~19))

精製もしくは半精製の浅い鉢形の器形になるもので、a)、b)、d)の三つの器形がある。a)のうちには、短く立ち上がる口縁外面に、2本の沈線を加えるもの(図47の(18~20))と、口縁がうすく、やゝ立ち上がって外面に宮滝式にみられるような凹線に似た横線を加えるもの(図48の(2)、図49の(7~9))がある。前者は内外研磨が顕著で、胎土も比較的均質である。後者は、Z・2の岩盤近くに多く見受けられた。図48の(2)は、その横線の途中に、円形の刺突を加えて集約的効果を示している。

鉢形土器 b) (図48の(1)、図49の(5)) には、屈曲部に1つもしくは2つ1対のコブが付けられ、細砂を含む均質な胎土が用いられている。こうした事例は、他群の資料中には見受けられなかった。いずれも内面は、丁寧に研磨され、屈曲部から下の外面は、削り痕が認められる。

- 鉢 c) (図47の(13)、図48の(10)) は復元径が正確ではないが、や1外膨らみの器外面に、数条の横描沈線が加えられ、途中に三角形の刳り込みを上下から加えて集約部を作っている。乳白色を呈し、内外共に丁寧に研磨されている。
 - ハ) その他の土器 (図47の (14~17)、図48の (0・22)、図49の (11))

精製もしくは、半精製の土器で、胴以下の器形が不明な断片が多い。

図47の(14)は、やゝ外反気味の器表面に数本のヘラ状工具による太めの横描き沈線をめぐらしている。B群の浅鉢、D群深鉢に類例があるが、いずれの器形になるか判じ難い。やゝ外反気味になっている点は、D群のもの(図73の(15))に似ている。

図47の(16)は研磨された器表に、半截竹管工具による2本沈線が横走し、口縁内面に削り出した 段を作っている。(17)は器面が荒れているが、外側に2条、内側に1条の横描沈線が施されている もので、巻貝尾部で加えられている可能性もある。宮滝式と考えるべきかも知れない。

図48の(①)は、外反する口縁部がやム外ぶくらみで、器壁がやム厚めになっている。内外共、丁寧にナデらられている。屈曲部以下の器形は不明である。同図(22)は、波状口縁になるらしく、外面に太めの2本沈線を横描している。この沈線の工具も、図47の(17)のそれに似ている。内面をナデ、外面は研磨したように平滑になっている。

図49の(11)は、壷形の器形になるらしく、均質な胎土をもち、器面が荒れているが、内面は平滑で、黒色を呈する。

ニ) 底部 (図48の (3~13・20・21)、図49の (12~16))

底部の個体数は20を越える。凹み底から平底まで、形態には変化が多いが、底部の形状調整から器形の変化あるいは、精製、粗製の差異にそれぞれどう対応するものかを明らかにはなし得ない。たい凹みの著しい図48の(9)、図49の(12)などは深鉢形に、図48の(11・13)は、 浅い鉢形の底部と考えられる。

器面調整も、外面に条痕を施したもの(図48の(3・10・20・21))と、削り痕のもの(図48の(4 \sim 8・12)、図49の(12 \sim 16))、押圧ないしナデのもの(図48の(9))、等があり内面もナデによるも

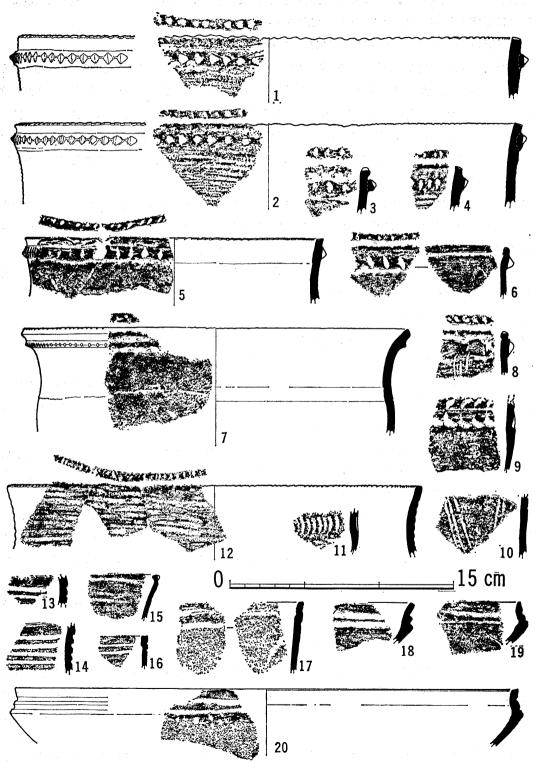


図47. 縄 文 晩 期 A 群 土 器 (全てY2出土)

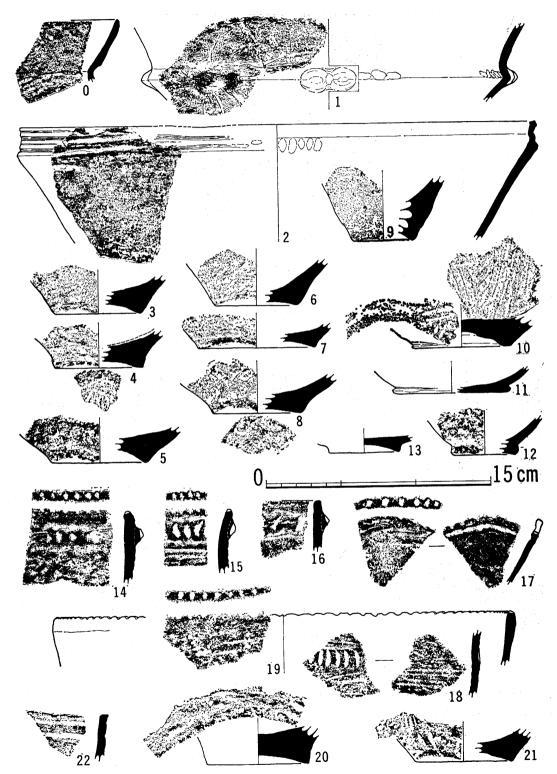


図48. 縄文晩期A群土器 (X1=22、Y2=0~12、X3=13~21)

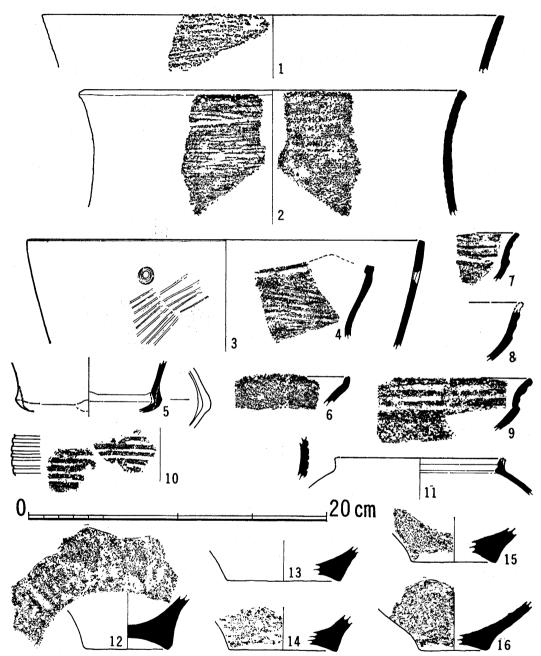


図49. 縄文晩期A群土器(3)(Z2=3・4・8~11・16、Z3=1・2・5~7・12~15)

の (図48の (21)、図49の (12))、 研磨したようなもの (図48の (3 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 12))、 条痕を施したもの (図48の (10)) 等がある。

2) B群の土器 (図50·51)

第 II 地点の 中央部南側の I ・ 4 と I ・ 5 区の 境界付近に中心を持って 検出された一群で、 後述する I ・ D 群ほどの量ではなかったが、 700点 前後の 土器片が それほど広くない 範囲から 出土した。

 $C \cdot D$ 群との間には縄文土器片がほとんど出ない地点がある程度の範囲で認められたが、A群の $Z \cdot 3$ と必ずしも明瞭には区別できなかった。またその一方では本群土器片でC群中の $X \cdot 5$ 出土の半精製深鉢(図59の(1))、 $W \cdot 5 \sim 6$ 、 $X \cdot 6$ 出土の浅鉢(図62の(1))とそれぞれ同一個体と確認できたものがあるので、かなり離れた地点まで、同一個体の破片が散布したことも認める必要がある。

イ)深鉢形土器(図50、51の(1~8))

器形の判別が可能な資料のうちの過半数を数える。

a) (図50の(1~14)) は突帯及び口縁上面に刻み目をもつのが普通で、口縁上面に刻み目のないものは 1 例である。(図50の(11・12・14))のように波状口縁になるものもある。 突帯の刻みは、半截竹管状の工具ないしヘラ状工具で鋭く刻んだもの、これを斜めに押したもの、などがあり、半截竹管状工具の先端で刻んだものには図50の(2・5・8)があるが、口縁上面の刻み目と一致していない場合が多い。口縁内側に沈線をもつものは 5 例、沈線ではないが、それに似せた横線をもつもの2 例(図50の(1・3))がある。 口縁付近の器面調整は外面に横位の条痕、 内面はナデるものが多く、 (5) の外面は削り痕、 (12) はナデ、 (10) の内面は 条痕、 (1) はナデもしくは研磨、 (11) は研磨している。

 $(15 \cdot 17 \sim 22)$ は、突帯のある深鉢の胴部分と思われ、半截竹管による沈線を加えるもの (15) もある。

- (16) は、外反した口縁部外面に縦列の爪形文が施されている。第Ⅱ地点で検出された資料中で、 この種のものは本例のみである。
- b) 及び c) の深鉢は、資料数は少ない。 口縁近くでは、 内外共に条痕を施すものがあるが、 内面は、 軽くナデたま > のものも多い。 c) に属するものは、 口縁上端に刻み目を持つものが多いが、刻み目のないものもあり、小片では b) と c) の分類が不可能なものがある。 c) では、しばしば、成形の際の継ぎ目を残して、その上を軽くナデたり、削り痕をわずかにとどめたりする。

図51の(7・8)は、小型の深鉢で、口縁端と内面を丁寧にナデた半精製土器。口縁外面をわずかに肥厚させたような(8)のタイプは、他群にも少量ずつある。

この他、図51の(11・14)も、深鉢形になると思われる突帯の土器である。口縁上面にも突帯上にも刻み目をもたず、口縁内側に $1 \sim 2$ 条の沈線をもつ。内外面を研磨した半精製的な土器で、(11)の突帯は、上下からナデて粘土を盛り上げたようになっている。

図51の(10)は器外面下半に削り痕があるもの」、全体に平滑な調整で、集約部をもつ横描沈線を施している。小形の土器と思われるが、器形の全体はよく判らない。D群に類例がある。

ロ)鉢形土器(図51の(9・13・15~21))

内面に丁寧な研磨を加えた精製の浅い鉢形土器で個体数は少ないが器形の変化は多い。

- (19) は、口縁外面に、やゝにぶい凹線的な沈線が3条めぐる。
- c) に属する(17・20・21)には、(20)のように内外の条痕が著しいもの、(21)のように外面に削り痕が残っているものもある。
- (9) は外ぶくらみの器胴をもち、研磨の著しい茶褐色の土器で内面の調整は荒い、外面に沈線をもつ。(15) は、内面に浅い条痕、外面に削り痕が認められ、2段の屈曲をもつ。深鉢の器形になる

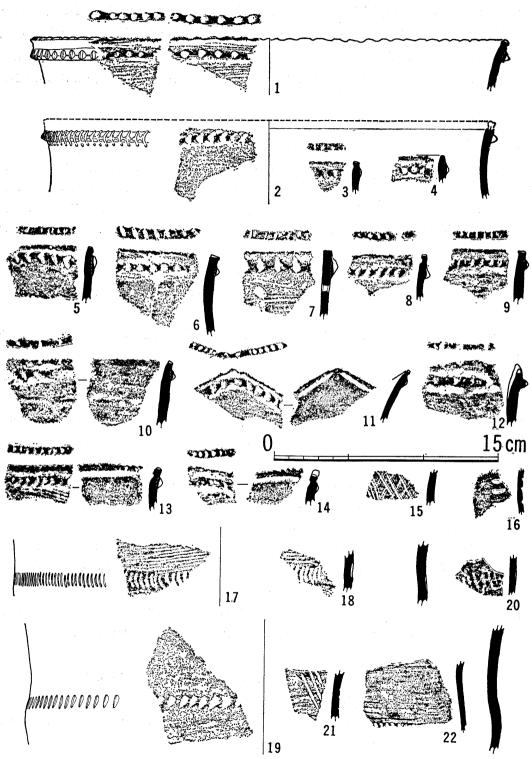


図50. 縄文晩期B群土器(1)(Z 4=4・9・10・12~15・17・19、 Z 5=1~3・5~8・11・16・18・20~22)

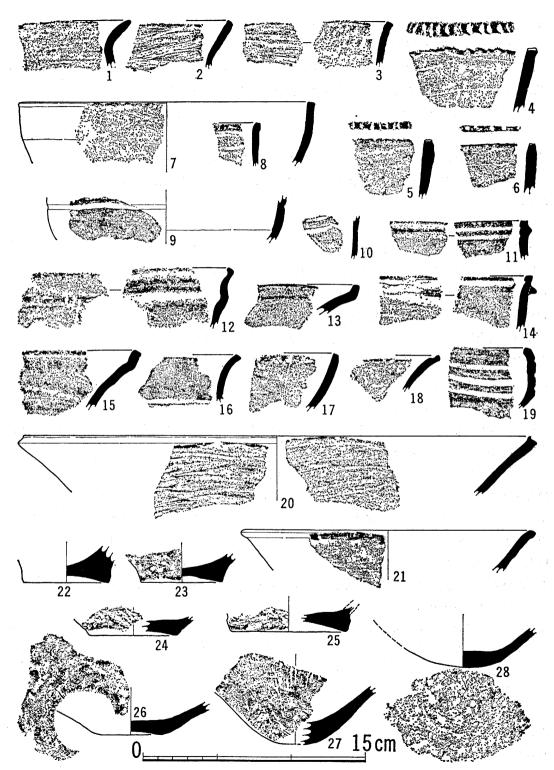


図51. 縄文晩期B群の土器(2)(Z 4=1・4・9~11・13~15・18・20・22・23・26、 Z5=2・3・5~8・12・16・17・19・21・24・25・27・28)

可能性もある。

ハ) その他の土器 (図51の (12))

口唇部を内側に小さくつまみ上げた土器で内外面にナデが加えられている。内面には浅い条痕をわずかに残している。胴上部で屈曲して段を作る深鉢か、浅鉢かをきめがたい。

ニ)底部(図51の(22~28))

8個体分が出土している。凹み底と丸底の2種があるが、底径が小さく、凹みの著しいタイプや、 平底のものは、なかった。外面の器面調整は削り痕が主であるが、条痕のもの(24)、押圧痕のもの (26) もある。内側はナデたものや押圧痕を残すものが多く、研磨したようなもの(23・26) もみられる。

3) C群の土器 (図52~65)

第II地点中央北寄りにまとまって出土したもので、D群と並んで、第II地点の中で、出土量は最も多い。W・5~7、X・4~6、Y・4~5出土資料を一括した。本群内では、X・5とX・6境からW・5とW・6境にかけて、有機質を含んだ黒色砂層がゆるやかな凹部となった落ち込み状部分が認められ、X・6中央部にも同様な落ち込みが小範囲ながらあり、それらの部分に土器片が比較的まとまって出土した。本群は、この2ケ所の黒色砂層の落ち込みを中心としたものであるが、この中にあった土器片と同一個体が、X・4、Y・4などにあり、Y・6の東北角から出土したもの>中にも認められた。また、前述したように、B群中の土器片にも、少量同一個体が確認されている。

イ)深鉢形土器(図52~59の(1~11))

本群土器で器形の 判別できる点数の中の約3分の2を占める。a)、b)、c) の3つの器種があり、量的には b)、c) が多い。

a) は、基本的に口縁部が外反し、突帯及び口縁上端部に刻み目をもつ。 凹帯に刻み目をもたせないものは 2 例(図52の(11)、53の(14))、口縁上端に刻み目を持たないものは 1 例(図54の(12))である。 これらの刻み目は、半截竹管状のものないしは、ヘラ状の工具で施され、鋭く刺突したもの、工具を斜めにして、菱形もしくは爪形様に刻んだもの、長く押し引きをしたものなどがある。口縁上端部の刺突の向きが途中で変わるものもある(図53の(1))。 あきらかに半截竹管状の工具で刺突しているものは、図52の(12)、図53の(7・9・11・16・17・22)、図54の(1)などがある。図53の(13)は、口縁上部外面に刻みを加え、図52の(16)は口縁上面に細い棒状の工具による刺突が加えられたもので、やゝ特殊な刻みの事例である。【口縁内側に沈線をもったり、図52の(3)、図53の(1・9)のような沈線状の横線をもつものは9例ある。口縁外反部に、縦や斜めの2~3本描の沈線文様を施すものや、外反部下端の屈曲部に横列の刺突を加えるものもある。この刺突も、半截竹状管の工具による爪形のもの(図52の(7)、図53の(1・2・20・21))や、これを斜めに刺突して、2 列の刺突文にしたもの(図53の(22)、図54の(13・14))、巾 6 ma程の細い面をもった板状工具による刺突(図53の(18・19))や、巾 2 ma程の平たい板状工具の先端で刺突したもの(図52の(5))もある。

器面調整は、内側は丁寧なナデが基本的で口縁端近くに押圧痕を残している場合もある。外側は、 条痕または削り痕のあきらかなものが、ほゞ同じ割合で、合計60%を越え、研磨したり、丁寧なナデ

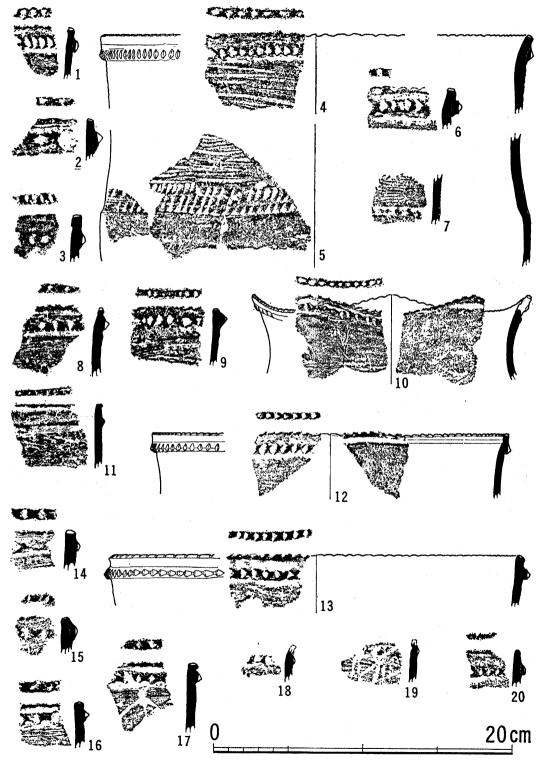


図52. 縄文晩期C群土器(1)(X4=1~5・8~11、Y4=6・7、Y5=12~20)

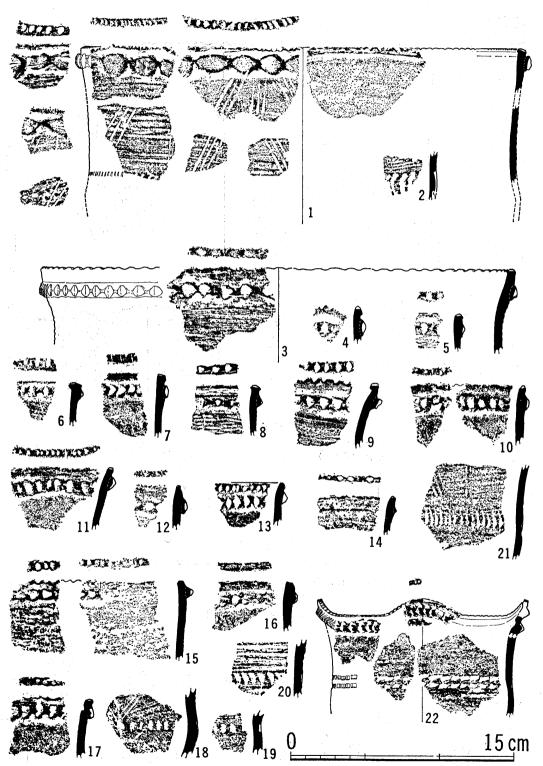


図53. 縄文晩期C群土器(2)(全てX5出土、たゞし1の一部はY5出土)

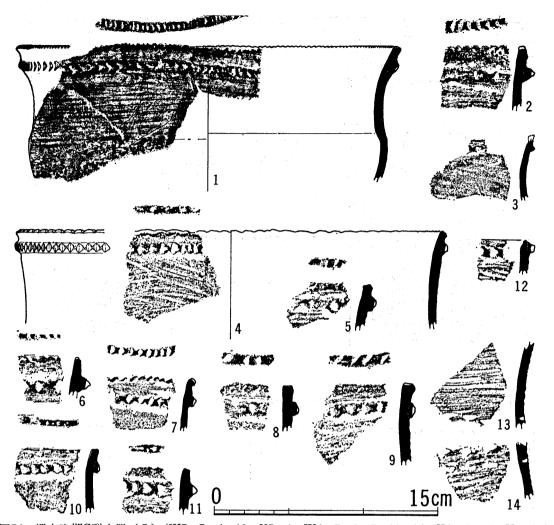


図54. 縄文晩期C群土器(3)(W5=3・4・12、X5=1、W6-7=2・5・11・14、X6=6~10、Y6=13)

を加えて、器面を平滑にしたことの明らかなものが20%近くある。

b) 類には、口縁外反部の立ち上がりが短く、胴部から口縁への移行部の屈曲が著しいもの(図55の(1~4))と、この屈曲がゆるやかなものがあり、後者のうちには、c)の器形(図57の(33~35)、図58の(1~4))と区別のつかない場合がある(図57の(7~32))。図55の(14)のように、内傾する口縁部をもつ深鉢もある。b)類の器外面調整は、条痕が加えられているものが多く、c)類には、削り痕や、土器の継ぎ目が残る程度に軽くナデたまゝのような調整痕が多く見受けられる傾向がある。この条痕の中には図56の(17~19)のように目の細かい条痕もある。

口縁上端は b)、c) 共にナデが加えられて、平坦な面をもつことが多く、こゝに刻み目を 施すものもかなりある。この刻み目の加え方にも、a) 類の突帯文を持つ深鉢の場合とと同様な変化がある。図57の(9・18)のような刻み目は、少ない。

波状口縁になるものや突起のつくもの(図55の(5~7・10))もあるが、b)類の深鉢になるもの

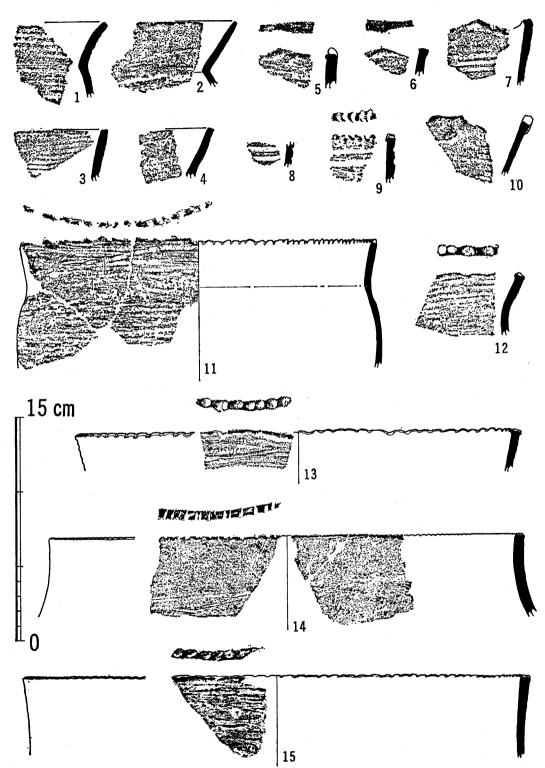


図55. 縄文晩期C群土器 (4) (W5=3・13、Y5=8・9、W6—7=1・2・10・12・15、 X6=4~7・11・14)

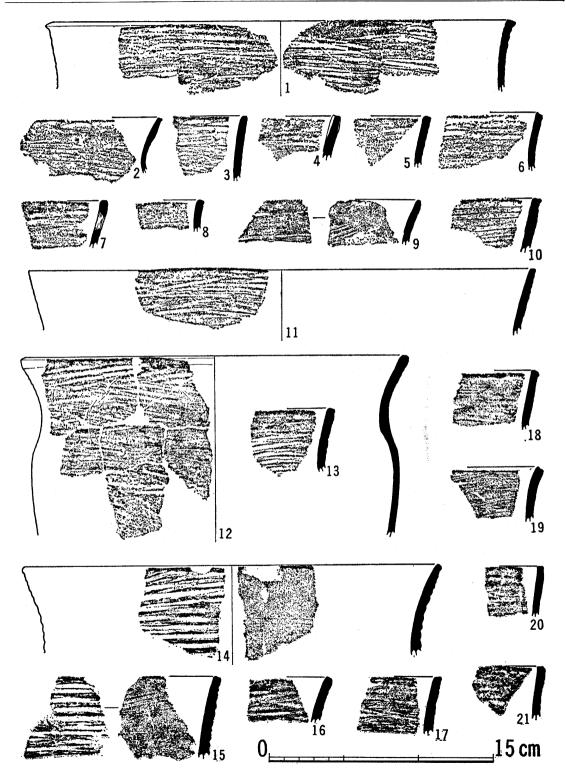


図56. 縄文晩期C群土器 (5) (X4=1、W5=3・4、Y5=2、W6-7=5・6・9~20、X6=7・8・21)



図57. 縄文晩期C群土器 (6) (X4=34、W5=2・19・27、X5=1・13~15・17・18・21・22・25・26・33、Y5=12・30、W6-7=3・6・10・11・16・28・29・35、X6=4・5・7~9・20・23・24・31・32)

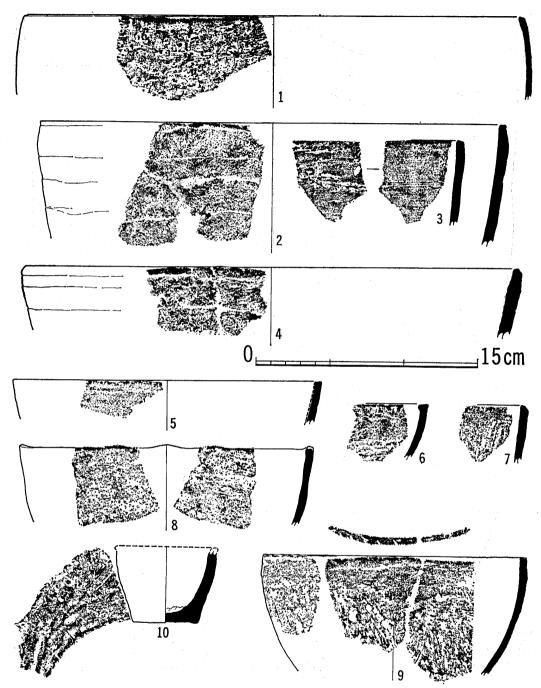


図58. 縄文晩期C群土器 (7) (Y4=8、X5=2・4・6・9、W6-7=3・5・10、X6=1・7)

が多いと思われる。口縁上面に爪形の刻み目をもち、横描きの沈線文をもつ図55の(9)や沈線文ある同図(8)も深鉢であろう。これら深鉢の口縁器外面は条痕が著しい。

図58の(5~10)は、小型の深鉢形をなす。小さい突起のある波状口縁になるもの(8)や、口縁

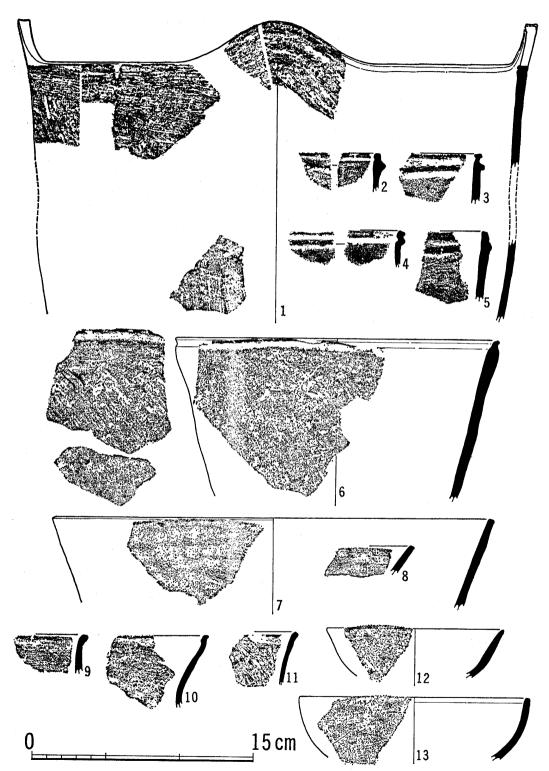
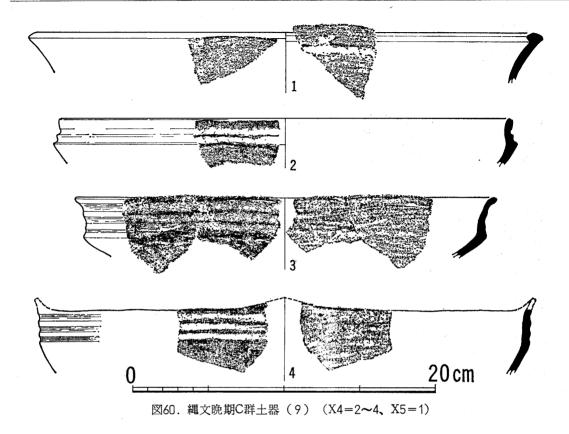


図59. 縄文晩期C群の土器 (8) (X4=2、W5=3、X5=1・4・5、W6-7=6~8・10~13、X6=9、1はZ5、6はX6からも一部出土)



上面の一部にのみ、 $^{\circ}$ 大工具の先で刻みを加えたもの($^{\circ}$)がある。($^{\circ}$ 7・ $^{\circ}$ 9)共に口縁上部と内外にナデを施し、外面下方には削り痕が縦方向に残されている。この他、図59の($^{\circ}$ 1)は、半円形の突起部をもつ波状口縁の深鉢形をなす。器外面には削り痕を残し、内面はや $^{\circ}$ 2 粗く研磨された半精製の土器である。口縁上部は二層に粘土を積み重ね、上面を丁寧にナデている。胴部の削りは縦向方に加えられている。この土器片の一部は、B群の $^{\circ}$ 2・ $^{\circ}$ 5 で出土している。図59の($^{\circ}$ 2~ $^{\circ}$ 5)は、刻み目のない突帯をもち、研磨が加えられた、半精製の土器と考えられる。($^{\circ}$ 4)には口縁内面に沈線が施されている。

同図(6)は、口縁端を内外からつまんで横ナデを加え、凹線をつくりだしており、均質な胎土をもつ深鉢である。内面は丁寧なナデを加え、外面は、ヘラ磨きのような痕跡がかすかに残っている。 (7)は、内外共に丁寧な研磨が見られ、半精製的な深鉢形の土器であろう。(9~11)は、小形の深鉢もしくは鉢形の土器で、(9)のように端部をやゝ肥厚させたものや、ナデによって口縁端内側にふくらむクセをもたせている。(10・11)共外面は削り痕が残っている。

- 口) 鉢形土器(図60~62)
- a) ~ e) まで5種の器形にわかれ、それぞれに若干の変化をもつ。
- a) には図60の($2\sim4$)のように口縁外面に、 沈線ないし、 凹線をもつものがあり、($2\cdot3$)は、A群の鉢 a) にあったものと似ており、 凹線風 の沈線が 横位に 3条めぐり、 内面には 条痕を残

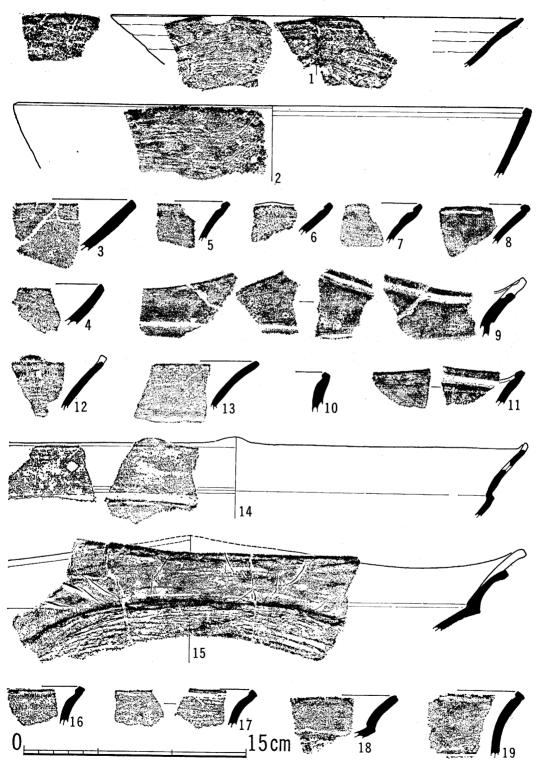


図61. 縄文晩期C群土器 (10) W5=3、X5=2・7~11・15・17~19、Y5=6・16、W6-7=1・4・12・14、X6=5・13、1はZ4・X6、9はW5からも一部出土)

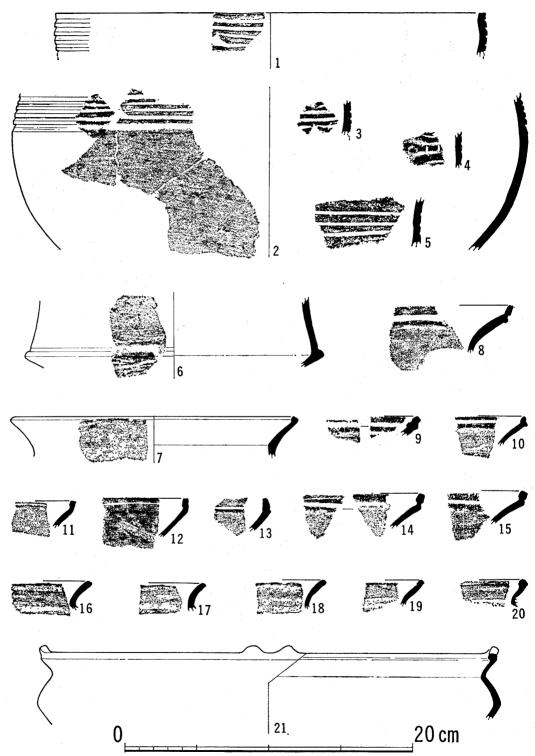


図62. 縄文晩期C群土器 (11) X4=2・4・12、Y4=16~18、W5=8・10、X5=5・15、 Y5=6・9・13・14・19、W6—7=1・7・20、X6=3・11・21)

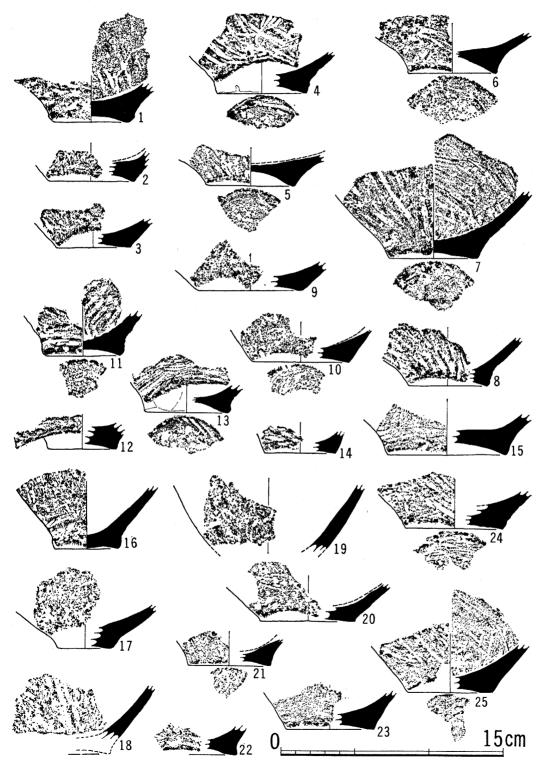


図63. 縄文晩期C群土器(12)(X4=16、W5=3~5・9・20・21、X5=1・2・17・19、Y5=11・12、W6—7=8・10・14・15・24、X6=6・7・13・18・22・23・25)

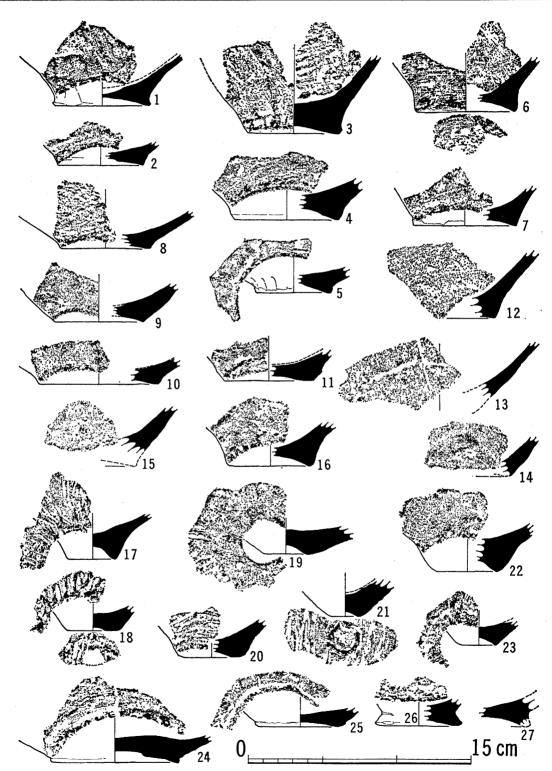


図64. 縄文晩期C群土器 (13) (X4=17、W5=18、X5=5・9・14・22・23、Y5=6・19・25、W6-7=1~4・8・10・11・20・24・26、X6=7・12・13・15・16・21・27)

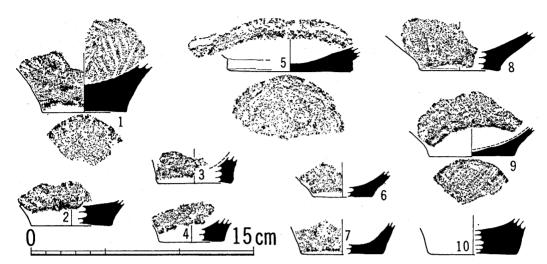


図65. 縄文晩期C群土器(14) (X4=7・10、W5=2、X5=3・6、W6-7=4・5・8、X6=1・9)

す。(4)は波状口縁になる。

図62の(11~13)も a)類の器形になると思われ、均質な胎土をもつ。丁寧に研磨され、細い沈線が口縁外面に施されている。

b) は、図61(5~19)のタイプが一般的で、 屈曲部から上は丁寧に研磨され、 屈曲部以下の外面は削り痕が残っている。 全体に黒ずんでおり、 口縁部の器壁は 厚手のものと、 薄手のものがある。 しばしば口縁内側に削ったような沈線をもち、 波状口縁になるものや突起をもつもの(9・11・15、12・14)がある。 (14) には補修孔と思われる小孔が穿孔されている。

口縁内側の端部を丸く作った図60の(1)は、本遺跡では類例の少ない鉢で、黒褐色を呈し、内外の研磨が著しい。

- c) に属する図62の(16~21)は、小片が多く、口縁端内側を肥厚させるもの($20 \cdot 21$)、突起をもつもの(21)がある。(16~18)は同一個体かも知れない。均質な胎土が用いられ、黄褐色を呈する。
- d)、図62の(1~3)、ボール状になる器形の口縁部に数条の横位沈線が施され、途中に、三角形の刳り込みを入れて集約部を作っている。細砂を含む、粘質の胎土が用いられ、乳白色ないし灰白色を呈する。内外の研磨が著しい。(1)は小片のため、復元口径は正確でなく、(2・3)と同一個体となるかも知れない。
- (4)は、弧を描く沈線間の凸部に爪形の刺突が加わっている。D群図75の(13)と同巧のもので、本遺跡での検出例はこの2点だけである。
- e)、(図61の(1~4))のうち(1)は、B群Z・4に同一個体があった。内外共土器の継ぎ目が残る程度に削りがみられる。(2)は、外面に浅い条痕を残し、口縁部内側にヘラ状工具で1本の横描 沈線をめぐらす。内面は粗く研磨されている。

この他、図62の(6)は、屈曲部からや $^{\circ}$ 内傾して高く立ち上がる小形の器形のもの、同図(8 $^{\circ}$ 10・14・15)のように、口縁部で短く屈曲して、その内外に $^{\circ}$ 1 $^{\circ}$ 2 本の横線を加えるものがある。 $^{\circ}$ れらは $^{\circ}$ a)、 $^{\circ}$ b) いずれの器種に なるかよく判らない。 (7 $^{\circ}$ 10・14・15) は、いずれも 均質な胎土

で、丁寧に研磨されている。

ハ) その他の土器(図59の(12・13)、図62の(5))

上記の他、図59の(12・13)のように小さい椀形になって、研磨された土器がある。灰白色ないし 灰黄色を呈し、均質な胎土が用いられている。

図62の(5)は外反する平滑な外面に3本の沈線をヘラ状工具で横描きしている。内面はナデ調整され、D群の図73の(11・14)と、胎土、調整がよく似ている。全体の器形は明らかでない。

二)底部(図63~65)

60個体を越える。凹み底のものが多く、底径が小さく凹みの著しいもの、底部の貼り付けが外方に ふんばっているもの(図64の(26・27))など種々あるが、これで全体の器形を想定できるものは少 ない。平底もわずかながらみられる。

器外面の調整は、削り痕のものが全体の約45%、条痕のものが35%、ナデあるいは、押圧痕を残す ものが15%程度の割合で認められる。削り痕、条痕の方向も底まで縦方向のもの、底の縁辺で横方向 になっているもの両者がある。また底面にも条痕や削り痕を加えているものもかなりある。

器内面の調整は、主にナデや押圧が用いられているが、条痕や削り痕のあるものが20%弱、研磨されているもの(図63の($8 \cdot 12$)、図64の($4 \cdot 8$)、図65の(8)など)が10%弱である。器形との関係で見れば、著るしい凹み底ものには、外面に条痕を施し、内面はナデられている例が多い。

4) D群の土器(図66~79)

第Ⅱ地点の西南部からまとまって出土した1群で、 $Y \cdot 6 \sim 8$ 、 $Z \cdot 6 \sim 8$ にわたる。C群と並んで、第Ⅲ地点では最も出土量が多い。B群、C群との間には、ほとんど縄文期遺物の出ない地点があって、両群とはかなりはっきり区別できた。北側のE群との間には、製塩土器を多量に含む第2層の包含層が、黄色砂層直上に堆積していて、これも明瞭に区別できたが、本来、両群が分かれていたものか、続いていたものかは判らない。

本群では、 $Y \cdot 7 \cdot 2Y \cdot 8 \cdot 8 \cdot 0$ 境から、 $Z \cdot 7$ 、 $Z \cdot 8 \cdot 0$ 境に かっる部分と、 $Y \cdot 6 \cdot Y \cdot 7$ 、 $Z \cdot 6 \cdot Z \cdot 7$ 境の部分の 2 ケ所に暗褐色の濃い包含層が認められ、とくに前者の包含層に大量の遺物が集中していた。

イ)深鉢形土器(図66~73)

器形のわかるもののうちの 3 分の 2 を越える量を占めている。a)、b)、c)、 3 種の器形が認められた。 2 のうち a) は、図示したもの (図66)がほとんど全てで、土器の全量からすると少ない。口縁上端と突帯に、刻み目を施すものばかりで、半截竹管状の工具ないし、ヘラ状の工具を様々に用いて施されているが、板状工具等で長く押し引きした 2 に で のように口縁端外面に刻むのも、特異例である。口縁内側に沈線をもつもの 2 に、波状口縁になるものもある。器の外面は条痕を施すものが多く、研磨されているものも少量ある。屈曲部に爪形文を施すものもあり、爪形の代わりに刻み目突帯のあるものが 1 点のみある(21)。(9)の口縁外反部の沈線文様は斜めに少なくとも 4 本引かれている。

b) の深鉢(図67~図70の(1~20)) の中には、外反する屈曲部が強いもの(図67、図68の(1~9)) が、他群に比較して多く、この中には、 波状口縁になるもの、 口縁端面に刻み目をもつものが

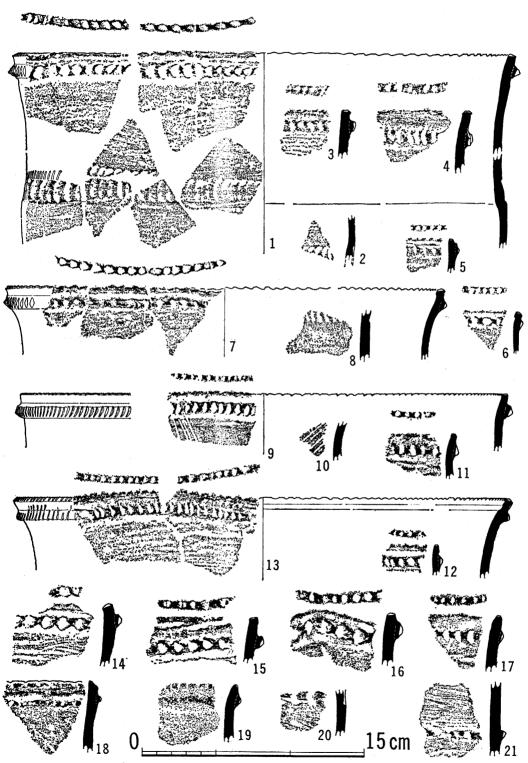


図66. 縄文晩期D群土器(1)(Y6=2・13、Z6=6・9・11・12・15~17、Y7=5・8・14、Z7=1・3・4・10・18・19、Y8=7、Z8=20・21、1 はZ8・Y8からも一部出土)

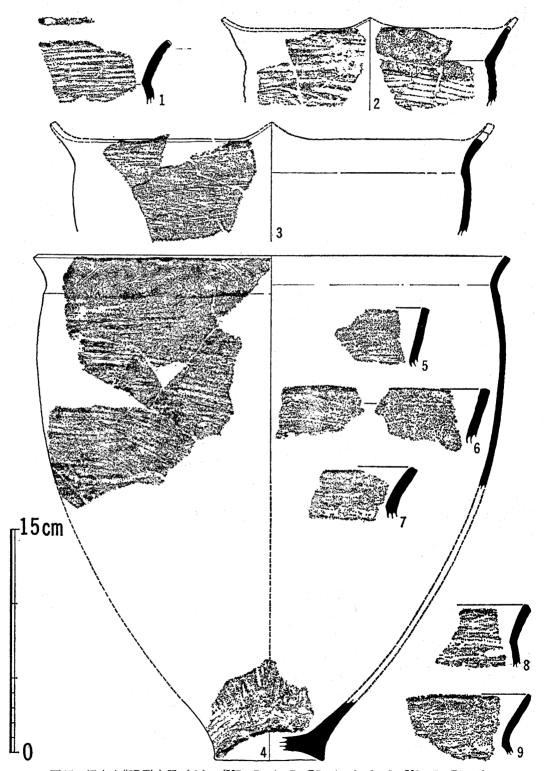


図67. 縄文晩期D群土器(2)(Y7=3·6·7、Z7=1·4·8·9、Y8=5、Z8=2)

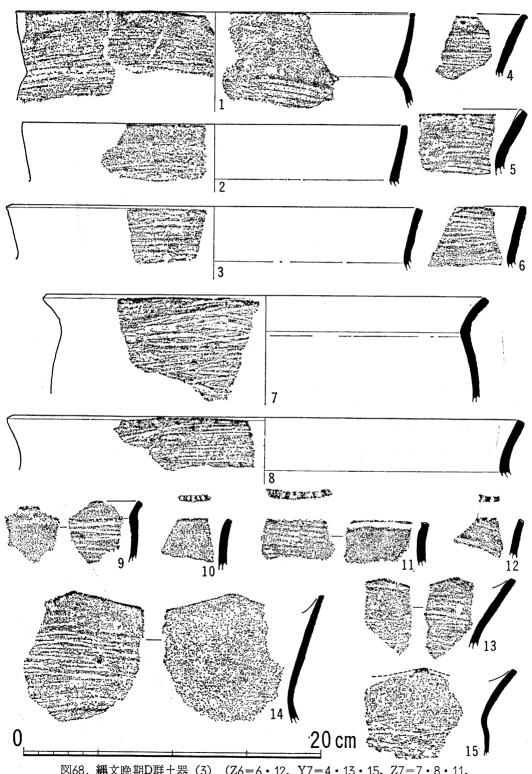


図68. 縄文晩期D群土器 (3) (Z6=6・12、Y7=4・13・15、Z7=7・8・11、 Y8=3・5・9、Z8=1・2・10・14)

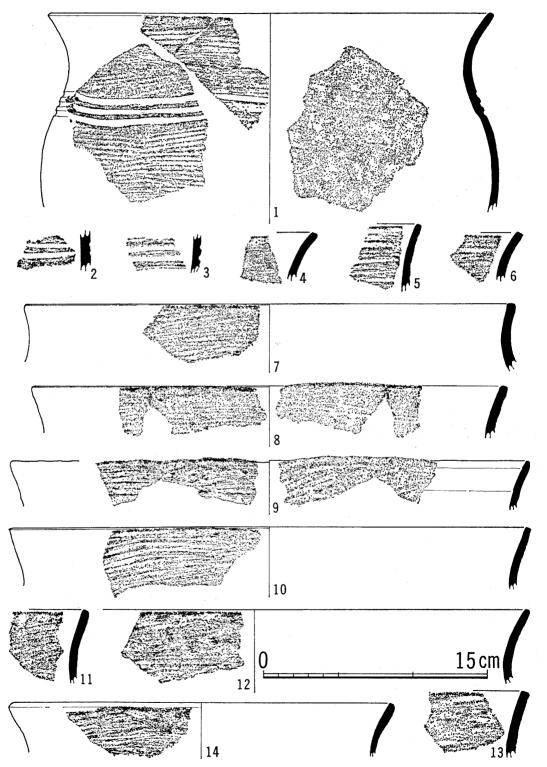


図69. 縄文晩期D群土器 (4) (Z7=7~14、Z8=1~6)

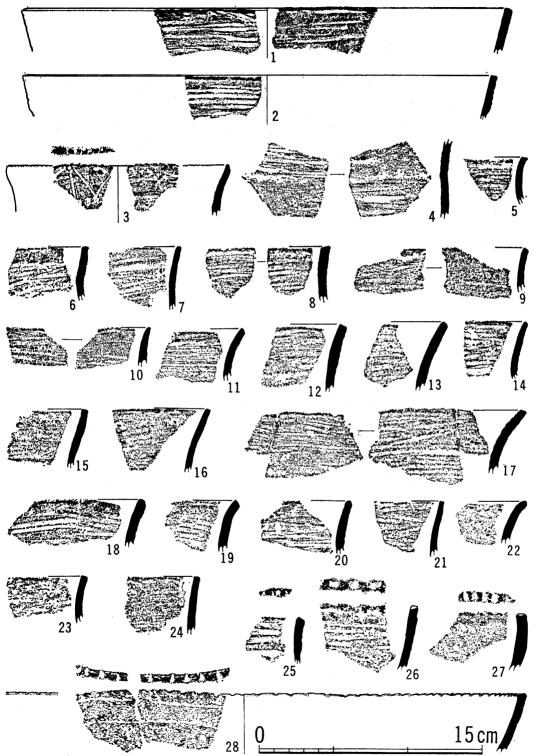


図70. 縄文晩期D群土器(5)(Y6=26、Z6=1、Y7=2・18~20・22・25、Z7=13~17・28、 Y8=5・9~12・21・27、Z8=3・4・6~8・23・24)

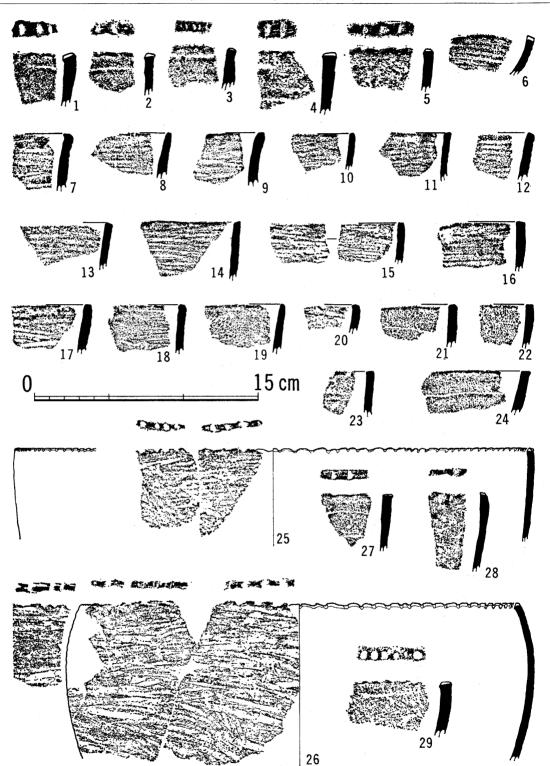


図71. 縄文晩期D群土器(6)(Y6=4・5・17、Z6=18・28、Y7=15・16・25・26・29、 Z7=12・23・24、Y8=2・3・13・14・27、Z8=1・6~11・19~22)

PRUKKATIAN 5 8 17

図72. 縄文晩期D群土器(7)(Y6=19、Z6=2・11、Y7=3・4・13~16、 Z7=1・6・8・12、Y8=5・7・9・10・17、Z8=18・20)

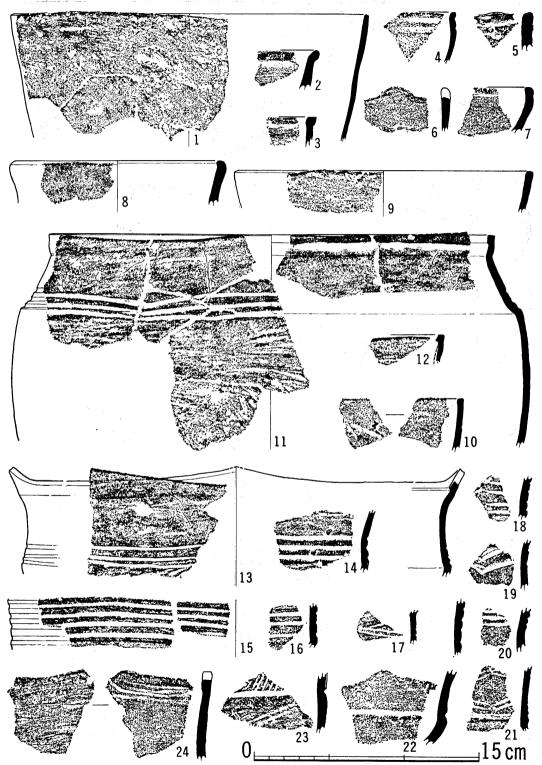


図73. 縄文晩期D群土器(8)(Y6=18、Z6=2・7・9・10・12~16・22・24、 Y7=4・11・17・19、Z7=5・6・8・21・23、Y8=1・3、Z8=20)

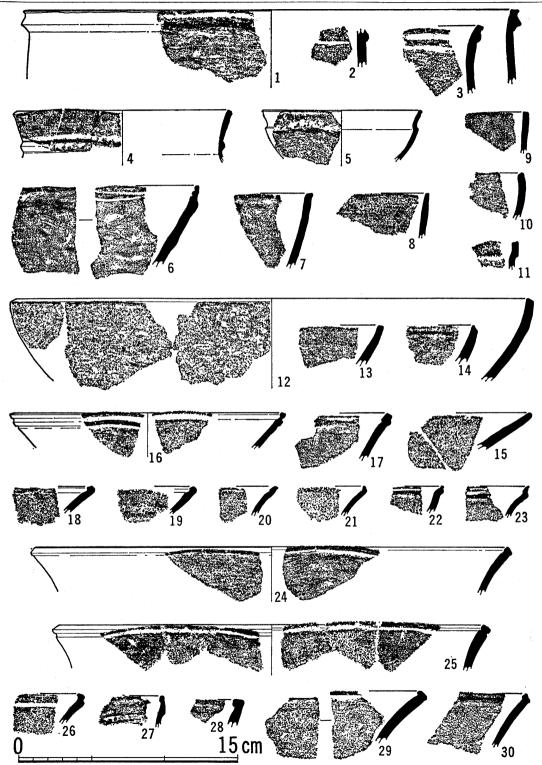


図74. 縄文晩期D群土器(9)(Y6=3・19、Z6=1・7・11・23・29、Y7=10・17・28・30、Z7=5・8・9・15・18・24・25・27、Y8=6・20・21、Z8=2・4・12~14・16・22・26、4はY8、25はZ8からも一部出土)

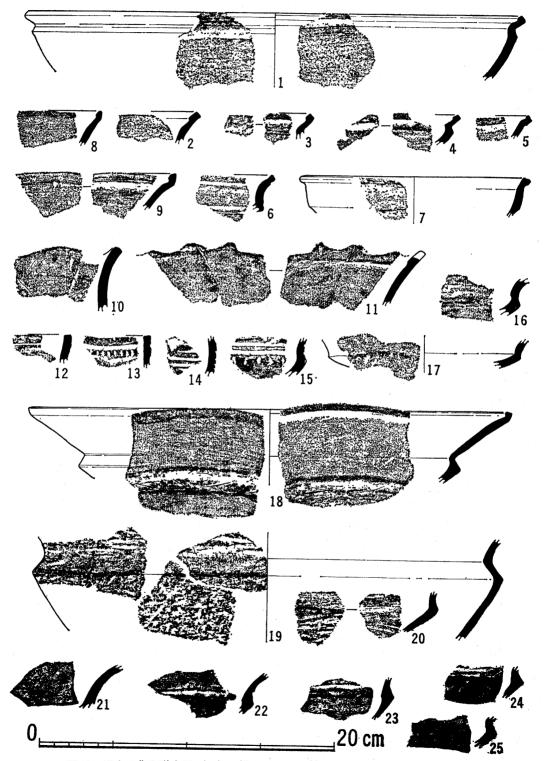


図75. 縄文晩期D群土器 (10) (Z6=5・13、Y6=1・9、Y7=8・19・22・23、 Z7=2~4・10~12・16、Y8=14・17・18・21・24、Z8=6・7・15・20・25)

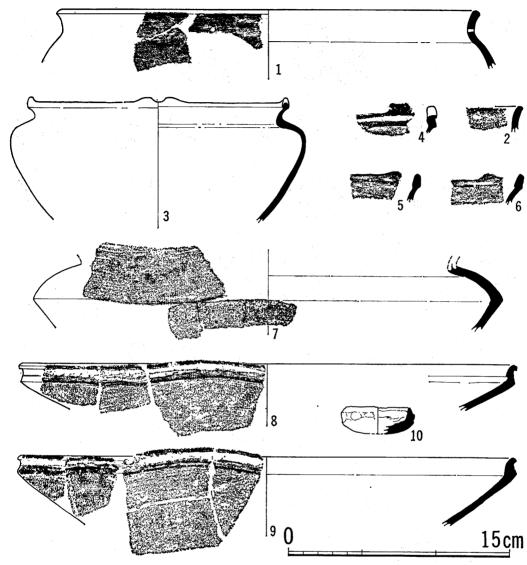


図76. 縄文晩期D群土器 (11) (Z6=4、Z7=1・3・6・7・9、Y7=5、Y8=10、Z8=2・8)

ある。図69の(7)のように口縁部が内傾する深鉢もある。器外面は条痕、内面はナデ調整のものが一般的で、口縁部と胴部外面で調整の違いはあまりないのが一般的である。図67の(4)では屈曲部から上の口縁部が丁寧にナデられており、屈曲部以下の条痕とは際立った調整手法の差異が見られるが、器内面の調整は口縁部も胴部もあまり差がない。たゞ口縁部近くの方をより丁寧にナデている。図67の(2)や図68の(1)などは、器外面でこそ、調整の差はないが、内面は、口縁部をナデ、屈曲部以下に条痕を施している。

図69の(1~3)は同一個体と思われ、外反する口縁から大きく彎曲して胴部に移る部分に横描きの3本沈線をもつ。(1)は、この横線の途中で、沈線が上にはね上がるように集約部を作る。これと相似した文様を持つものに、図73の(11~24)がある。いずれも半精製的な深鉢形をなすもので、

(11~16) は屈曲部から上を条痕調整の後平滑にして、その下よりに、ヘラ状工具で横描沈線を加えている。(11・14) は 同一個体で、 波状口縁になるらしく、 3 本沈線を一ケ所で近寄せたり (11)、 沈線の下に円形の刺突を加えて (14) 集約部を作り、口縁内側を削り出して、肥厚させている。 2 の他、(17~19・21) は、平滑にした器面に、集約部をもつ横描沈線が加えられている。(20) は小さな器形になり、研磨された外面に施された沈線は、他の沈線とはやゝ違って、溝の肩がまるい。(22) は、器面が荒れていて、調整手法は、はっきりしないが、ナデもしくは、軽い削り痕が加えられ、 届曲部に横描沈線が一条施されている。(23) は横沈線の上に斜めの多条化した沈線を加える。(24) は、外面に細い条痕を残した波状口縁になる部分で、口縁内側を、やゝ肥厚させ、その下端に浅い沈線を施している。 2 の沈線は、波状口縁の頂部の脇で、口縁端に向けて、ハネ上がっている。 あるいは、宮竜式の可能性もある。(20) と図69の(1~3)を除いて、他のものは、本群中の東の黒色砂層とその近くに多く見られた。

この他、図70の(3)は小形の深鉢で、外面に粗い研磨、内面に削り痕をもつ。口端刻みがあり、口縁外面に縦、斜めの一本沈線がある文様帯の下端に、刺突が加えられている。

深鉢 c) になるものには、口縁部の小片だけでは、b) の器形になるものか、c) になるものかはっきりしないものがかなりある。確実に深鉢 c) になるものゝ中では、器内面をナデ、外面に土器の継ぎ目を残したり削り痕を残すものが多いが、図71の(25・26)のように条痕のあるものがある。図72の(10)も、細い条痕が加えられている。口端に刻み目を加えるものもかなりあって、その刻み方も他群のものと同様な変化がある。図71の(27)は、先端が L字状になった工具で鋭く刺突し、波状口縁も見られる。図72の(17~20)は小形の深鉢で、削り痕や条痕が見られる。

また、図73の(1~10)も、小形の深鉢で、削り痕やナデ調整が外面に見られ、半精製的な土器である。(10)は、粗い調整の器外面に沈線文らしい痕跡が認められるが、削りの痕跡かも知れない。

- ロ)鉢形土器 (図74の (6~30)、図75の (1~9・11~25)、図76の (1~6・8・9))精製の浅鉢形の土器で、a) ~ e) の5種がある。
- a)には、図76の(8・9)と図75の(1~4)の2通りのタイプがある。前者は、内外共、丁寧に研磨され、口縁部外面はナデが加えられている。胎土は均質な感じ。後者は、口縁部が短く、かつ強く外反して、口縁内側を肥厚させる。口縁端付近は面を取るようにナデられ、内外共研磨されている。また、図74の(6)も、このタイプに類別できる。口縁内側に2条の細い横描沈線を加えた数少ない資料である。
- b) 図75の(8・9・15~25) がこのタイプに属し、(11) や、図74の(24~30) も、似た器形になると思われる。器内外面の研磨が著しく、屈曲部以下の外面も、研磨されているものが多い。口縁内側を肥厚させたもの(図75の(8・9・11・18)) もかなりある。図74の(24~26) は口縁内外に沈線あるいは 凹線を加えて、口縁端部をふくらませている。図75の(15) は、屈曲部に刺突が加わり、その上方に、構描き沈線が少なくとも2条施されている唯一の資料である。
- c) 図76の(1~6)は、均質な胎土をもち、黄褐色ないし、赤褐色に発色している。 内外の研磨が著しく、突起をもつ(3~6)。 (1) には頚部に小さな穿孔がある。

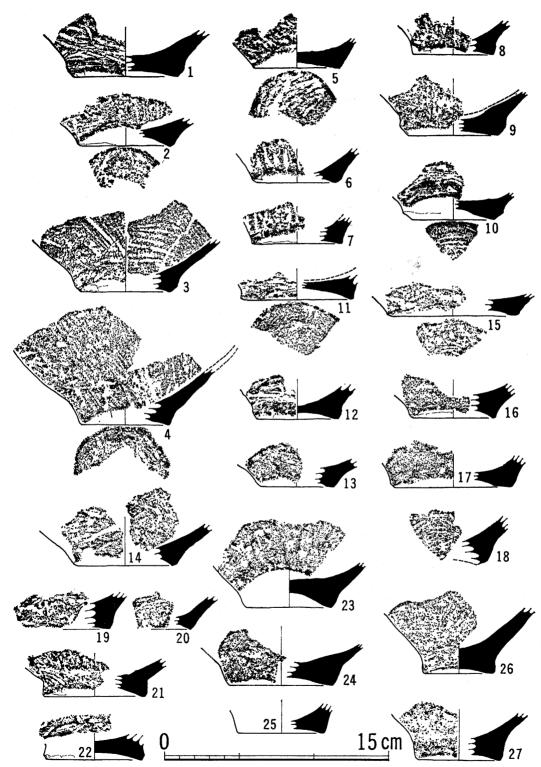


図77. 縄文晩期D群土器(12)(Y6=9・26、Z6=12~14・20・23・24、Y7=3・4・27、Z7=2・7・8・10・19・22、Y8=5・15~18・21・25、Z8=1・6・11)

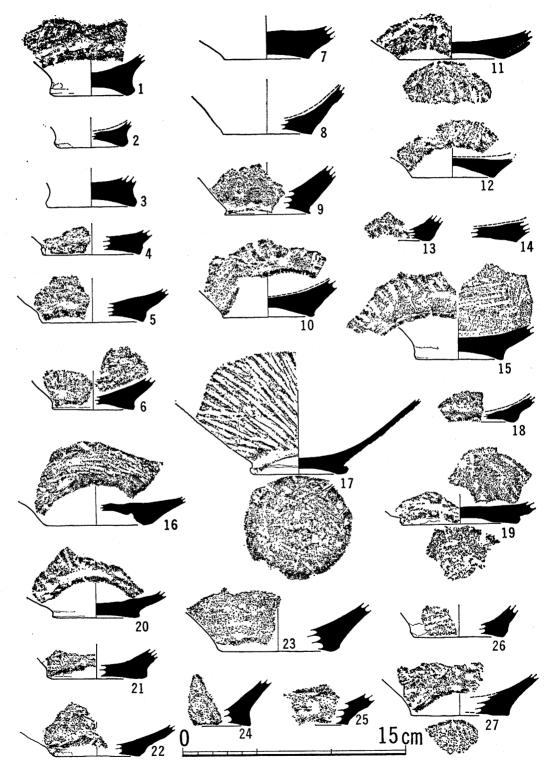


図78. 縄文晩期D群土器 (13) (Y6=2・3・7・8・12・17、Z6=10・24・25、Y7=6・19、Z7=5・16・20・22、Y8=1・4・9・14・18・23・26・27、Z8=11・13・15・21)

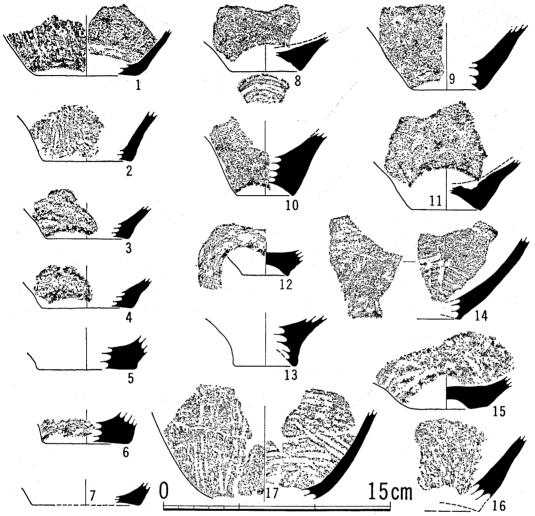


図79. 縄文晩期D群土器 (14) (Y6=2・6、Z6=11、Y7=3・5・13・14・17、Z7=1・4・10・16、Y8=7・15、Z8=8・9・12)

- d) 出土点数は極めて少ない。図75の(14)は、数条の横描き沈線の途中に、三角形の刳り込みを 穿って集約部を作ったもので、A~C群にあった、ボール状の器形をなすと思われる。
- (13) は、沈線の間に爪形の刺突を加えた口縁部片で、同巧の破片が、C群でも1点あった(図62の(4))。(12)は、器形がはっきりしないが、精製土器の一種と思われる。研磨された口縁外面に、半截竹管状の工具によったと思われる、少なくとも2条の細い横描沈線が加えられている。
- e) のタイプもかなりある。(図74の(12~22))。(12~15)は、内外に粗い研磨が見られ、端面をナデただけのもので、粗い砂粒を含んでいる。(16~22)は、比較的均質な胎土が用いられており、口縁部内外に沈線を加えたり、突帯状のものを作ったもの(16~20)と、端部をつまみ上げて、クセをもたせているもの(21・22)がある。
 - ハ) その他の土器 (図74の(1~5・7~10)、図75の(10)、図76の(7・10))

上記の他に、図74の(1~3)は、丁寧な削りや研磨が加えられて、刻み目のない突帯をもっている。半精製の土器で、深鉢形になるものであろう。図74の(7~10)は比較的均質な胎土をもち、研磨された土器片で、深鉢になるものか、浅い鉢になるものか不明である。(4)は、口縁部がゆるく外反し、屈曲部に刻み目のない突帯をめぐらす。内外共平滑に仕上げられ、均質な胎土をもつ黒色の土器である。器の全形はわからない。(5)は、椀形の器形で、口縁はナデ、胴部に研磨が見られる。

図75の(10)は波状口縁をなし、研磨が加えられた黒色の土器である。深鉢になるものか、浅鉢になるものか判らない。

図76の(7)は、胴部が張って、急に屈折する。丁寧に研磨された黒色の土器で、本遺跡では類例のない器形である。もう少し頸部がすばまるかも知れない。同(10)は、小形の土器で押圧痕が著しい。

二)底部(図77~79)

少なくとも70個体以上が出土している。凹み底のもの、底径が小さく凹みの著しいもの(図79の(8~14)、凹み底で、高台のように貼り付け部がふんばったり、突出しているもの(図78の(1~3・16~19))、平底のもの(図79の(1~7))、丸底のもの(図79の(17))などがある。底部の形で器形を判別できるものは、多くはないが、図78の(11・16・17・19)などは浅い鉢形、底径の小さい著しい凹み底のものは、深鉢形になるであろう。器面の調整は、外面は、調整痕の判別できるうちの半数が条痕で、削り痕のものが、約30%、残りは、押圧痕やナデを加えたものである。内面は、主にナデや押圧が行なわれており、条痕、削り痕のものは、全体の4分の1に満たない。内面がとくに丁寧にナデられたり、研磨されているものは少量(図78の(17)、図79の(4)など)である。底径が小さく凹み底の著しいものには押圧ないしナデによるものがみられ、この点C群の同形のものと若干異っている。

5) E群の土器 (図80~82)

第Ⅱ地点の西北角 $X \cdot 7$ 、 $X \cdot 8$ に点在していた一群で、ほとんどが $X \cdot 8$ から出土している。C 群との間は $X \cdot 6 \sim 7$ にかけて、縄文土器のほとんど出土しない部分があり、D群との間には、製塩土器の土器溜りが第3層の深部にまで達していて、晩期の土器片が出ない所があったので、一応区別した。出土資料の総量は多くない。

イ)深鉢形土器(図80~81の(1~16・18・19))

個体判別ないし器形判別のできる破片のうちの3分の2近くを占める。他群のそれと同じく3種のタイプがあり、深鉢 a) は、量的に極めて少なく、図示したもの(図80の(1~4))が全てである。口縁上面と突帯の刻み目は、半截竹管状の工具を使って、刺突ないし、刻みを加え、口縁内に沈線文をもつもの(2・4)がある。器内面はナデ調整、外面は条痕が加えられており、(3)は外面が研磨されたように平滑である。(1)の条痕調整は、土器の継ぎ目が残る程度に、軽く施されている。

深鉢 b)、c)には、口縁部だけでは区別出来ないものがある。b) のうちには、鋭く屈曲して、外 反するもの(図80の(9・10))と、ゆるやかに外反するものとの両者がある。口縁近くでは、横方

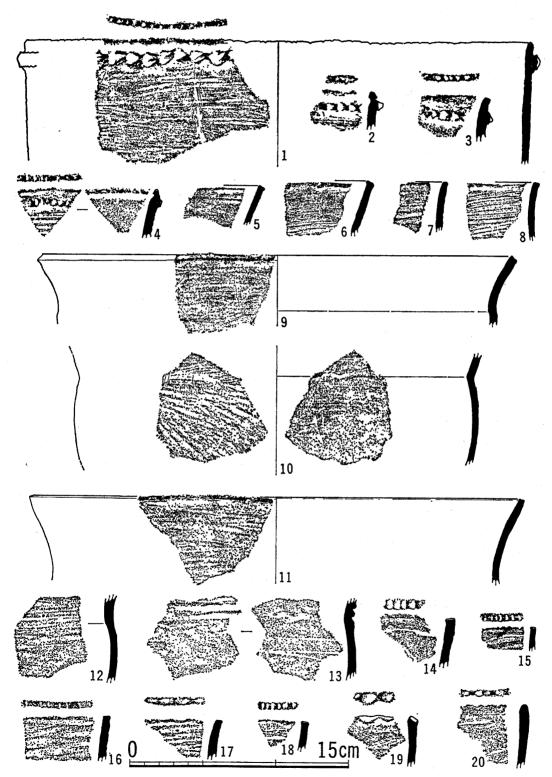


図80. 縄文晩期E群土器(1)(X7=3・8・17~20、X8=1・2・4~7・9~16)

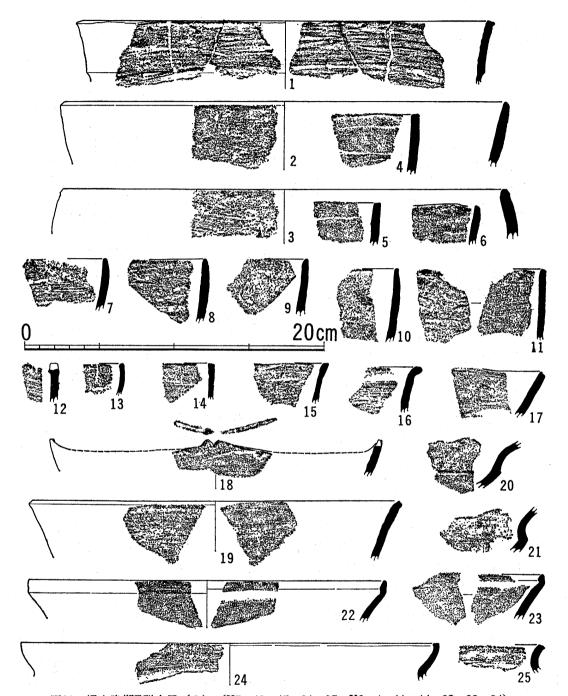


図81. 縄文晩期E群土器 (2) (X7=12・13・21・25、X8=1~11・14~20・22~24)

向に条痕を施したものが多く、削り痕や土器の継ぎ目を残したまゝの口縁部で、確実に b) の器形になるものは、ほとんどないようである。口端部に刻み目をもつものもかなりあるが、 それらは b)、c)、いずれの器種になるかは、判らないものが多い。確実に c) の深鉢となるものは、口縁外面に削

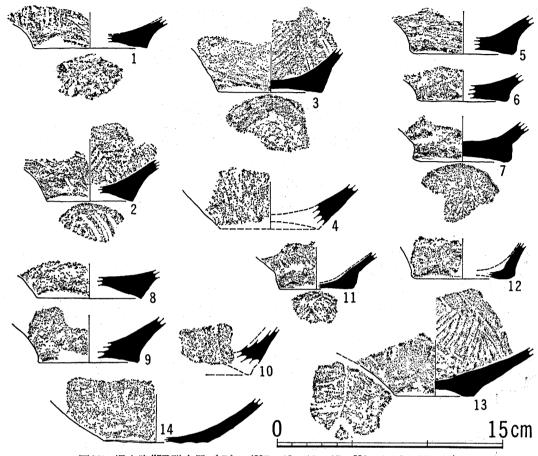


図82. 縄文晩期E群土器(3)(X7=10・12・13、X8=1~9・11・14)

り痕を加えるものが多いが、これには、条痕のもの(図81の(7))もある。

図80の(13)は、器胴がゆるやかに屈曲する深鉢 b)の胴部片である。屈曲部のすぐ上に、少なくとも2条のヘラ状工具による沈線を加えており、残存片の左端で、この沈線が途切れたようになっているが、下側の沈線はかすかにつながっている。 沈線文から下は、削り痕が見られ、器内面は、全面、横方向に軽くナデられている。

同図の(14) は、口縁端に刻みをもち、土器の継ぎ目を残した器面調整の粗い土器であるが、残存 片の下端に、押し引きした細い弧文がわずかに残っている。この種の粗製土器にも、文様が施される 例であろう。

その他に、[図81の(13~16・19)のように、小形の深鉢になると考えられるものもある。同図の(12)は、口縁端に突起が認められる。比較的均質な胎土をもち、半精製の深鉢になるものと考えられる。

同図(18)も比較的均質な胎土が用いられ、刻みをもつ突起部がある。小形の深鉢 c) の器形になるようである。器面は内外共、丁寧にナデられている。

ロ)鉢形土器(図81の(20~25))

出土点数は少なく、b)、c) の器種が みられる b) は内外の研磨が 著しく、(20・21) の屈曲部から下も、研磨されている。(22・23) は均質な胎土。

c) (24・25) も胴部が張る鉢形土器になるものと思われ、器外面には、丁寧なナデの痕が残されている。

ハ)底部(図82)

15点出土している。凹み底のもの、平底のもの、丸底風のもの(14)があり、他群で見られた、底径が小さく、凹みの著しいものはない。器外面の調整は、削り痕のものが多く、条痕(2・11・13)のもの、押圧痕だけのもの(3・6)が少量ある。この削りは、条痕を施すのに用いた工具と同じ二枚貝が使われた可能性が強い。底面も、削りを加えている例が多く、条痕が施される場合もある(2)。内面の調整は、主にナデ・押圧が用いられているようであるが、条痕を施すもの(1~3・13)や、削り放しのまゝのもの(6・9)などもある。(14)は、丸底風で、残存部の外全面に粗い削りが加えられ、内面は、研磨が加えられている。(3)はD群のY・8でも同一の個体が出土している。

6) 小 結

第Ⅲ地点で出土した晩期の土器は、前述したように小片を含めると10,000点を越えており、その大半は粗製無文の土器である。地点により5群に分けて記述してきたが、遺物の状況の所でも記したように、この5群の間で、層位的な差異を認めることは出来なかった。そこで各区の出土状態を勘案して、便宜的に分類したにすぎない。

そのうち、A群では突帯文を有する深鉢の類が10数点出土しているが、ほとんど $Y \cdot 2$ の北寄りから $X \cdot 3$ で検出されている。逆に $Z \cdot 2$ から $Y \cdot 1$ の岩盤縁辺では、宮滝式に似た沈線を横位に施した鉢の類が検出されている。これは、D群などの一般的な沈線文とは、明らかに施文工具が違っており、C群 $X \cdot 4$ 出土の鉢に施されたものとは共通している。

B群資料には、縦列に爪形刺突文を配した土器片が含まれてはいるが、小片であり、これは本遺跡の検出資料中唯一の例であった。深鉢 a) 類が、この群は比較的多く含まれ、この中には口縁端に刻み目のないものは1例にすぎなかった。また、突帯にも刻み目をもたない半精製的な土器も伴出した。本群中には、C群の北寄りで出土する深鉢や、浅い鉢と同一個体が含まれており、第Ⅱ地点の中を5群に分類したが、それらは或る程度混ざり合ったことも認めておかねばならないことになろう。

本群は出土量がかなりあるので、各器種の占める比率を示しておくと、深鉢 a)類は、全器種の個体数の約20%を占め、b)、c)類は、50%弱を占めている。深鉢類の器外面上半分の調整は、条痕、削り痕のものが圧倒的に多く、条痕は50%強、削り痕は c)類を中心に20%強を占めている。

この他、本群では、深鉢 a) 類のうち口縁内側に沈線をもつものが7例、口縁端と突帯に共に刻み目をもたない土器が少量ある。A群東南部にあった横線文と同巧の施文をもつ鉢が、X・4から、口縁端内側を肥厚させた鉢がX・5の黒色砂落ち込み中から出土している。

D群も、C群と並んで出土資料が多く、2ヶ所で出土した土器も基本的な違いはないが、本群出土 土器の1つの特徴であるヘラ状工具による横沈線文の土器片が、その中では西半の包含層付近に比べ 東半の包含層付近に多く含まれていた。

全体的にみれば、D群では深鉢 a) 類が他群に比べて少なく、7%に満たない。これはC群の約3分の1であり、土器片の出土総量が本群の5分の1しかないA・B群での深鉢 a) の全量とほぶ同じである。

粗製の深鉢 b)、c) の量は多く、全体の60%弱を占めている。深鉢 b) のうち、口縁の外反部が強く屈曲するものも、他群に比較するとかなり多く認められた。この b)、c) の中では、口縁外面に条痕調整を施すものが60%弱あり、あとは削り痕とナデのものが、それぞれ25%、15%ある。

E群では、深鉢 a) 類は極めて少なく、精製の浅い鉢形土器も多くはない。ほとんど全て粗製無文の深鉢 b)、c) 類で占められている。胴部にヘラ状工具による横描沈線文の土器が含まれている。

以上のようにA~Eの各群での差異は時期的な振幅を示す可能性のある幾つかの特徴とも見られるものを含む。 このうち、有文のものでもっとも 普遍的に認められたのは、 突帯文をもつ深鉢形土器で、個体判別の可能な数量のうち、20%を越えている。それらは各群で検出されたが、どちらかと言えば、第II地点東半のA~C群に多く、その中でも、A群のY・2~X・3、C群X・5~4、Y・4、B群の全域で、検出される頻度が高かった。外面に条痕、ないし削り痕を残し、口縁端と突帯及び、胴屈曲部に刻みをもつものが主流である。

次に、量的には少なかったが、集約部をもつ横描沈線文の土器が、各群から検出されている。この 沈線文には、明らかにヘラ状工具によって施文されたものと、宮滝式にみられるような、ゆるく凹ん だ沈線と近似する横線文とがあり、前者は、D群東寄りの濃い暗褐色有機砂層、後者は、C群X・4、 A群南東の岩盤縁辺で、比較的多く検出されている。

また、本遺跡では唯一の小片であったが、縦列に爪形の刺突を加えた土器片がB群 Z • 5 から出土している。

これらの有文の土器は、少なくとも、突帯文土器と、横描沈線文という従来新古の2相を示すと考えられてきたものが含まれていることになる。それらがA~Eの各群に含まれる比率にはかなりの変化があり、各群による時間的な推移を考える必要があるかも知れない。しかし、各群出土土器の主体をなす粗製無文の土器、主として深鉢については、せいぜい器種の変化をうかがえる程度で、各群共に近似した内容を示し、主要な差異は見つけ出せないものであった。

突帯文の土器を除く有文の土器、すなわち一般的に古相の晩期土器の特徴とされている土器群については、その量は全体からみれば僅少であるといわなければならない。そうして、突帯文の土器については、口縁上面に刻み目、口縁内面に沈線を持つ比率が多く、外反した口縁外面に縦位に傾斜した線がき文と口縁下方に、横位の刺突文をめぐらすものが知られ、二段に突帯をめぐらす例が、ほとんど知られない特徴を示す。また口縁外面に縦位の爪形文をつける事例もきわめて少ないことは、くり返し記した通りである。

一般に深鉢形の器形のものでは、横位沈線文→縦位刺突文→突帯文という推移の図式が考えられている、この地方の晩期の土器について、それぞれに各器種の組合せが十分わかるほどの報告例があまりにも少ないため、本遺跡の出土土器群については、とりあえず上記のように出土土器の全体像を明示して将来検討するための資料として報じることにといめたいと思う。

たゞ、横描沈線文を持つ、少量の一群の全てが、間違いなく他の多くの土器と共伴したとは断言できず、あるいは、同一層位中にわずかにあった後期の土器と同様に混入したものも含む可能性があることを指摘しておく必要があり、突帯文深鉢については、本遺跡出土土器の状況よりも新しい段階が当地方では一括資料としての報告こそほとんどないが、存在した可能性程度を認め得る資料は知られているとしなければなるまい。 そうした上にたって考えれば、各群の間に若干の推移があるとしても、全体として横描沈線文→縦位刺突文を中心とする段階に続く一群の土器であり、それは、無文深鉢を多量に伴うものであり、さらに伴出の精製または半精製の鉢形土器もあわせて明示できたことのみを記しておこう。

四、石器 (図版第二十六の(2)~二十八の(1)、図83~91)

1) 第 I 地点出土石器 (図83・84)

図83・84は第 I 地点出土の石器で、すべてサヌカイト製である。図83の(3・13)の 2 点以外は、すべて縄文時代後期中葉から 後葉に あたる彦崎K I 式・彦崎K II 式 (竹原式)・宮滝式の土器と伴出したものである。(3・13)は共に、上層の古墳時代遺物中に混入していたが、下層の後期縄文時代層のものに属すると見て差支えなく、他の石器類と区別する必要は認められない。

伴出土器類は、地点により、多少形式別の粗密が認められるが、石器の上でまでの区分は困難なため、一括して取り扱っている。

定形化した、石鏃・石匙以外は、すべて、剥片に加工を施した、不定形のスクレーパーと考えられる。しかし、その中では、大・小差、加工の精粗差が、かなり見られるのである。

図83の(1~7)は、ほょ同じような大きさを示す剥片ながら、(2)は、特にぶ厚い石片が使用されている点とか、図で下部に示した刃部の加工から、石斧的な用途のものゝ断片とも思われ勝だが、図上で上部に示したほょ直角となった部分の縁辺にも顕著な加工痕を残すことは、石斧の断片でなくこの形で使用された石器と思われ、他の剥片縁辺を加工使用した石器と、用途が特に異なるものと見る必要はあるまい。他は、全体としてほょ一定した厚さの剥片に加工されたもので、互いに似た用途に使用されたものであろう。(8)はやゝ薄手であり、(9~11)はやゝ小形で、加工もやゝラフである。

図84の(12・13)は、三角形に近い形の横長の石匙である。(14)も石匙形を示すが、上部つまみ状部分の抉りに全く加工が認められず、剥片の形に従ったものしようである。片面には全面自然面を残すが、刃部加工は丁寧である。(15)も或いは石匙形品の断片であったかも知れない。(16)は、横長の剥片縁辺全面に加工が施され、つまみ状部分が突出こそしないが、石匙的なものと極めて似た形と加工を持つもので、石槍状のものと考える必要はないだろう。(17・19)も加工の丁寧なほょ石匙大のスクレーパーである。

(18・20) はやム小形で、縦・横比率のほゞ等しい剥片に、かなり丁寧な加工が加えられており、

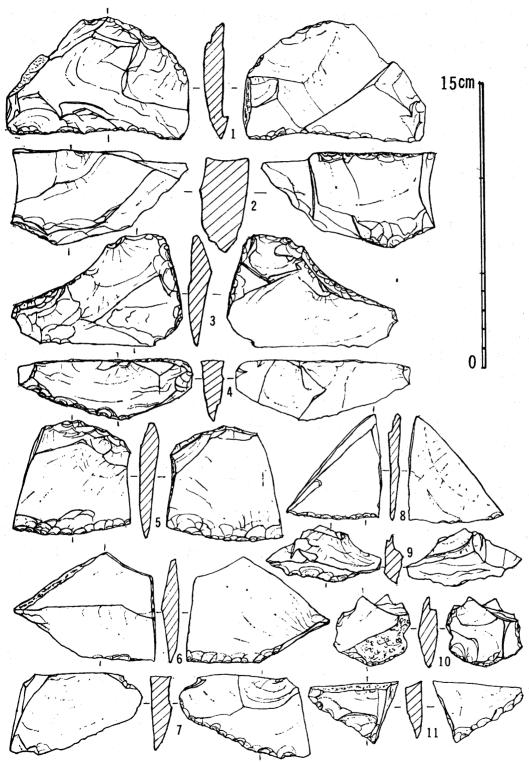


図83. 第 I 地点の石器(1)(A3=10、AB3=7、AB4=4、B5=6、E5=1・8、F1=9、F2=3、G2=5、K1=2)

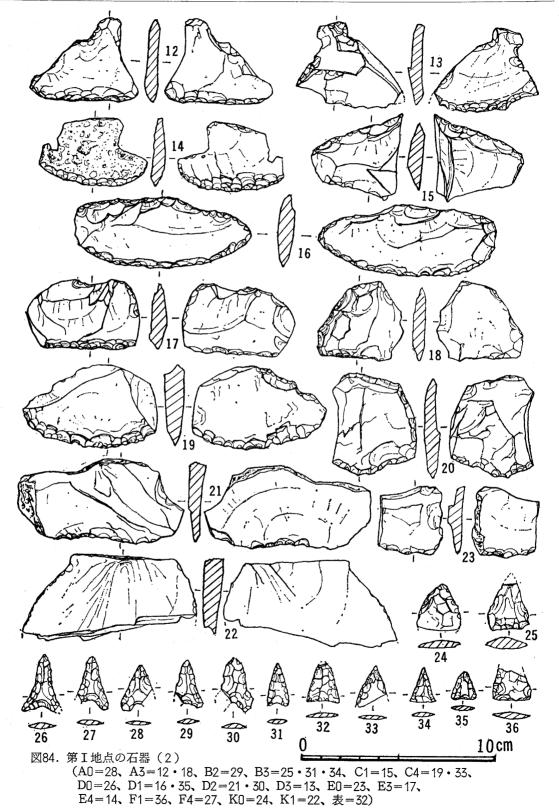


図83の(10)などと共に全形が小形で丸形を示す刃部を持っている点はや 1 長手の刃部を持つ他のスクレーパーと多少機能上で変化があるものかも知れないが、これ以上、推測を進められる状況ではない。

(21~23) は 加工面がや \少く、特に(22) は 薄い剥片縁辺部を そのま \ 使用した ものと思われる。 こうした使用痕のある剥片は、他にも多少認められるものであった。

図84の(24~36)の石鏃は、大・小の差は若干あり、凹基と平基のものがある。そのほかに若干の石錘などがあるが、数が少いので、第II地点のものと共に記す。

2) 第Ⅱ地点出土石器(図85~91)

図85~89までは、すべて第II地点出土の石器であり、ことに示すものはすべて サヌカイト製である。この地点の 縄文土器は、ほど晩期後葉に属するが、地点により若干の差異を示している点もあり、土器の記述を地点別に グループわけをして行った 関係上、石器もほど、A群(X1、X2、X3、Y1、Y2、Y3、Z2、Z3区)、B群(Z4、Z5)、C群(W5、W6~7、X4 、X5、X6、Y4、Y5)、D群(Y6、Y7、Y8、Z6、Z7、Z8、Z9)、E群(X7、X8)の区分に従い、A・B群、C群、D・E群に分けて記述する。しかし石器の上では互の間に区分出来る特性は特には認められない状態である。

図85は 石鏃 のみで あるが、(1~8・10~29) までが、A・B群、(30~48) が C群、(49~69) までがD・E群である。

A・B群の周辺では、全体として、サヌカイトの小石片が目につき、特に、Y・2区では大形のサヌカイト原材も存在し、小剥片も多かった。この地点は山丘側の岩場に接しており、あるいは、石器製作が行なわれた地点である可能性もあるが、砂層中のことであるため、特別の遺構を検出することはできなかった。

石鏃には基部に抉りを持ったものが若干あり、他は大・小とか作りの精粗はあるがほゞ三角形状のものである。 たゞ(18・36・56・61)など、 各地点にわたり、 五角形を示すものが 小量出土している。 これ等の石鏃のみでは、 第I地点出土のものとの差異はまず認め 難いが、 この第II地点では、 や Δ 五角鏃が多くなる傾向が見られるとも云える。

図86~89は、第Ⅲ地点の石鏃以外の石器をほぐ記載したが、主体は剥片を利用した主にスクレーパーと云えるものである。

図86はA・B群に属する石器である。(7)はや1厚手の石片を利用した石器で、刃部加工などからみて或いは石斧状のもの1半欠であるかも知れないが、他の類例が少く、確定し難い。(11・16)は、石匙形を示すものの半欠かとも思われるが、特に(11)は、つまみ部分の加工が、特には行われていない様子である。横長の剥片を利用した(1)などつまみを作り出してないが、丁寧な加工が加えられ、石匙を思わすようなものである。(4)などは、や1凹部を持つ刃部の利用と、図で上部にあたる部分の直角に近い縁辺に加工が見られることから、や1他のスクレーパーとは用途を異にしているかも知れない。(10)はや1小形で、楕円形の全縁辺に加工が見られることも、他の石器と多少異なる処である。(13)は、或いは石槍状のもの1断片であるかも知れないが、縁辺の加工が、表裏

で、それぞれに片面からのみ行われている状況が知られる。その他、全体として、丁寧な加工部を持つものが多い。

図87・88は、C群の石器である(17)は片面に自然面を残すぶ厚い楕円形の石片の縁辺に、かなり丁寧な加工を加えた石器であるが、これの用途が、石斧的なものか、掻器的なものであるかは明かでない。また(18)もかなりぶ厚い石片で片面に自然面を残し、その側の縁辺は丁寧に加工されているが、他面は、大きな剥離面そのままであり、全体として破損を思わす形なので、(17)のような形の石器が破損したものかも知れない。(19~23)も、や1大形の剥片を使用するが、厚さも他のスクレーパーとほぶ似た形である。(23)など加工は丁寧である。

図88の(30)は形としては石匙形であるが、これも、つまみ部分の加工が、特別と云うほどでない。(39)は巾が狭く、細い尖頭器状のものゝ部分であるかも知れない点と、(40)の、小形の尖頭器的作りのものゝ他は、大小の剥片を使用したスクレーパーである。こゝでも(33~38)のものは、部分的に欠損しながらも、小形のグループとして大形のものとはやゝ異った用途の考えられるものであろう。

図89はD・E群に属する。との中でも(47)・(48)と云うようなやゝ厚手の石片を使用したものもあるが、この両者は共に形や加工状況から、スクレーパー的なものであろう。(60)が、明らかに、ドリル状の形態を示すほか、こゝの石器も、ほゞ大形と小形に区分出来る状況で、(41~43)に見るようなやゝ小形で似た大きさの石器が認られる。(59)なども小形で円形を示す丁寧に加工された石器と云える。

以上、第II地点のサヌカイト製の石器を見る限りでは、(a)やり大形のぶ厚い石器があっても明瞭に石斧的用途とは云えないものが多い。(b)剥片利用のスクレーパー状のものが、石器のほとんどを占めている。それ等は、ほぶ大・小形に分類出来、小形品の中には、周辺加工の丁寧なものが多い。(c)定形化した石匙形のものは大変少く、つまみ状突起を有するものも、むしろ偶然の結果を思わすものがある。

以上のような傾向は石鏃も含め第I地点石器ともほとんど異るところが無いように思われるが、強いて云えば、第II地点の方では、石匙形品が益々少くなり、一方では、小形で楕円形を示し加工の丁寧なスクレーパー状石器が増す傾向が見られるのである。

図90は、 $I \cdot II$ 地点を問わず特殊な石器を集めた。図90の($1 \sim 4$)の4点はすべて第II地点出土であり外形は他のスクレーパーと異らないものに見られるが、石材を異にしている。

(1・2)は夫々Z・3区3層、W・3区2層出土。外面が白色の強い灰色で、新しい剥離面でやや青色を強くする。石質は、ち密で均質な硬質で、外観は、灰色のチャートを思わすものであるが、流紋岩系の石材と考えられる。鋭利で硬質な剥片の縁部の状況やむしろ縦長く剥離しやすい材質など、サヌカイトなどに劣らぬ石材と思われる。現在までこの石材の利用は、倉敷市西部・旧玉島地区の縄文貝塚・特に中津貝塚などで、僅かながら知られており、これと同質と思われる石は中津貝塚から南下したあたりで倉敷市沙美海岸の東方の台地上で流紋岩中に露頭がみられ、倉敷の西部域一帯の流紋岩類の中には時としてみられるものである。石器石材を持たぬ岡山県南部では、石器材料として優れた石と思われるが、実際に石器としての使用例はあまり知られてないため、石器として本格的に利用

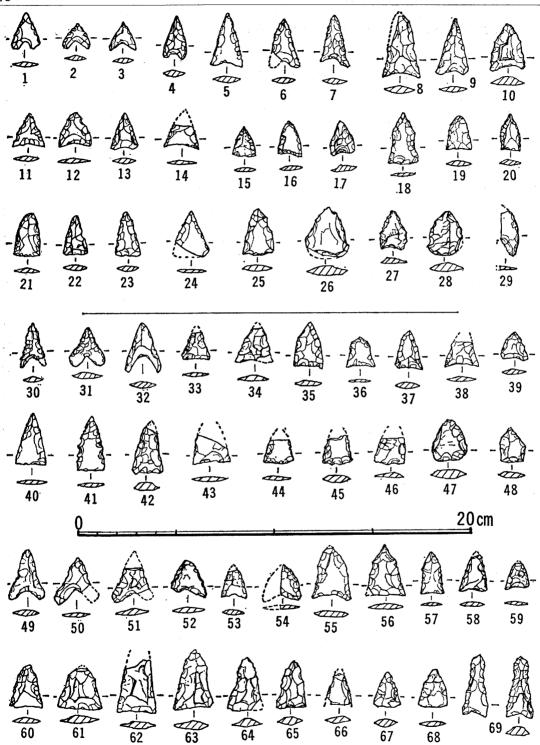


図85. 第Ⅱ地点の石器(1)(1~29=A・B群、30~48=C群、49~69=D・E群)(X1=1・17、X2=2、Y2=3~6・8・10・11・13~15・22・25・26、Z2=7・12・19・23・29、Y3=27、Y4=40、Z4=16、W5=30・41・44、X5=31~35・47・48、Y5=36~38・42・43・45・46、Z5=20・21・24・28、X6=39、Y6=52・55、Z6=54・64・66・68、X7=69、Y7=56・61・62・65、Z7=50・53、X8=9・59、Y8=51・67、Z8=49・57・58・63、Z9=60)

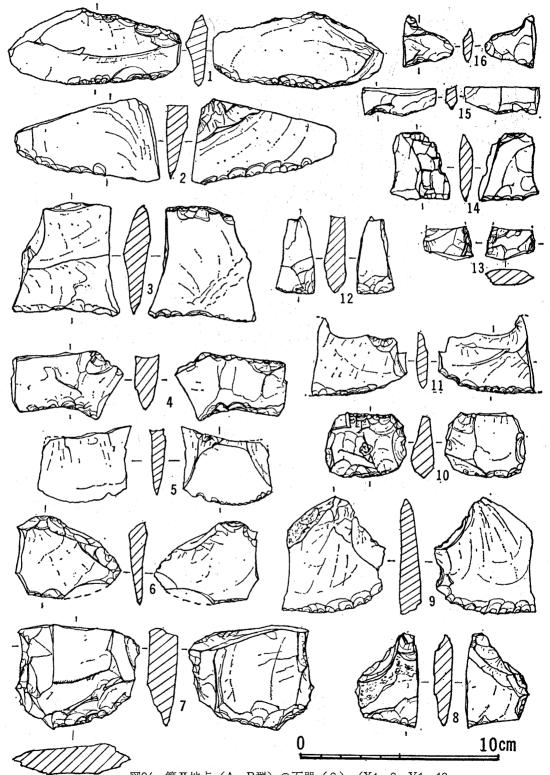


図86. 第II地点(A・B群)の石器(2)(X1=2、Y1=12、 Y2=3~6・8・13・15、Z2=9・16、Z3=1、Z4=14、Z5=7・10・11)

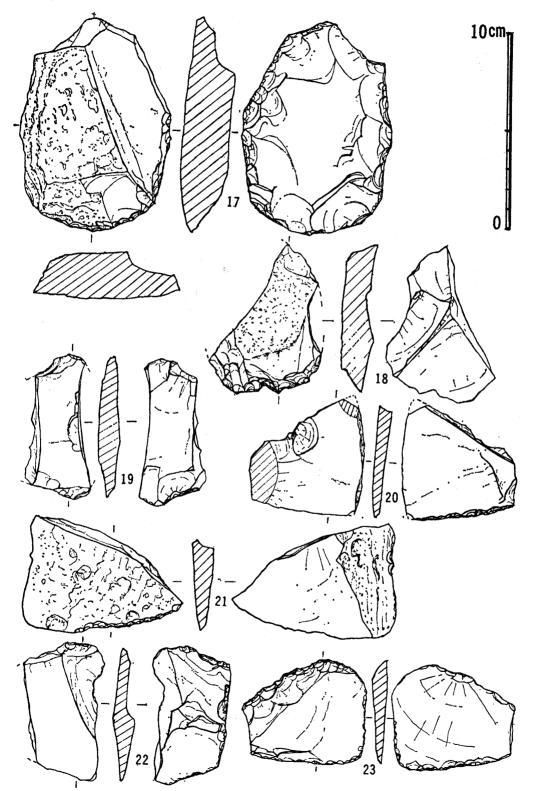


図87. 第II 地点(C群)の石器(3)(X4=22、Y4=21、X5=18、Y5=17・20、Z5=23、W6-7=19)

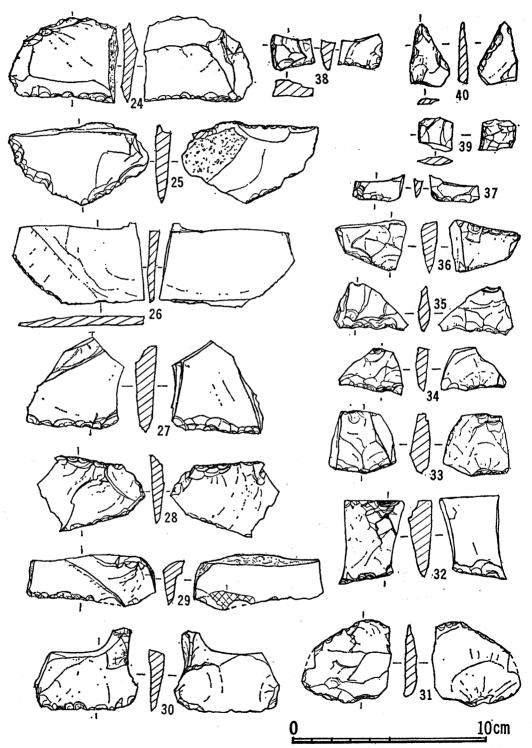


図88. 第II地点 (C群) の石器 (4) (X4=40、Y4=24・28・33・35・37・39、W5=25・31・32、X5=30・34・36・38、W6-7=26・27、X6=29)

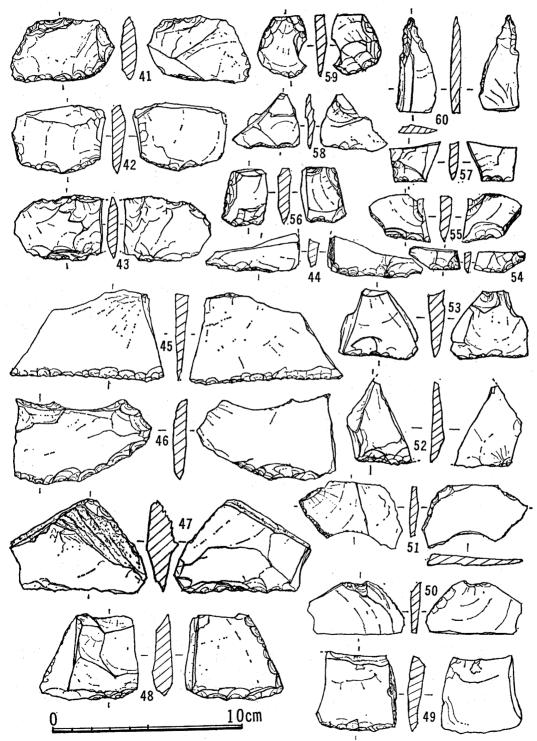


図89. 第II地点 (D・E群) の石器 (5) (Y6=47・48、Z6=43~45・56・57、Y7=46・58・60、Z7=50・54・55、X8=41・42・52、Y8=49・51、Z8=53・59)

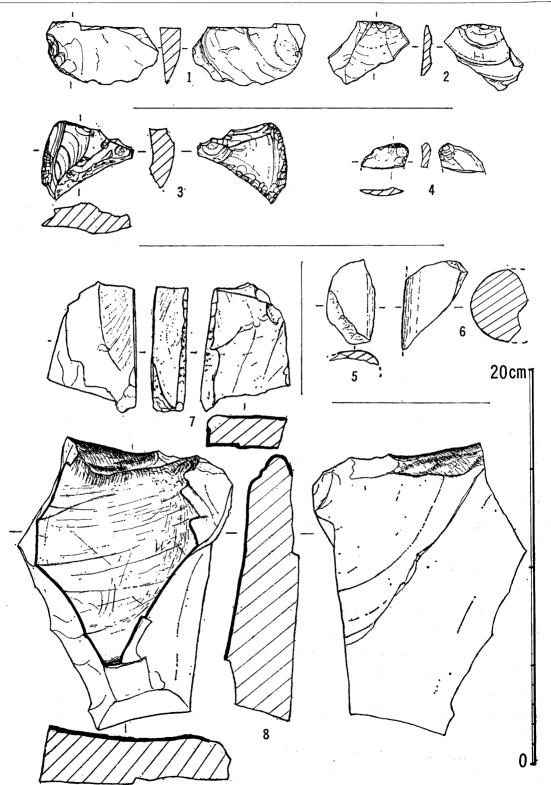


図90. 第1・II点地の石器(F2=5・7、F3=6、Y2=4、Z2=3、Z3=1・8、W5=2)

できる良質な原石は少ないのかも知れない。この石器も剥片を部分だけ加工して使用しているやり方は、他の剥片石器と本質的には同じものである。

- (4)は、X・2区出土で同じ黒曜石ながら、灰白色で、やゝ薄い黒色を帯びるが、薄い剥片部は、半透明を呈している。当地方では、この種の黒曜石は、瀬戸内西部にある姫島産と考えられている。先の黒曜石と全く異る外見のこの黒曜石の発見例は、I・II地点を通じて、この剥片石器一点であった。他のスクレーパーに比較すれば、最も小形でむしろ石鏃に近い大きさであるが、やゝ縦長に割られた剥片の縁辺に、使用による刃こばれ的な痕跡が明瞭で、本来はいま少し大きな剥片をスクレーパーとして、使用していたものの断片かと思われる。

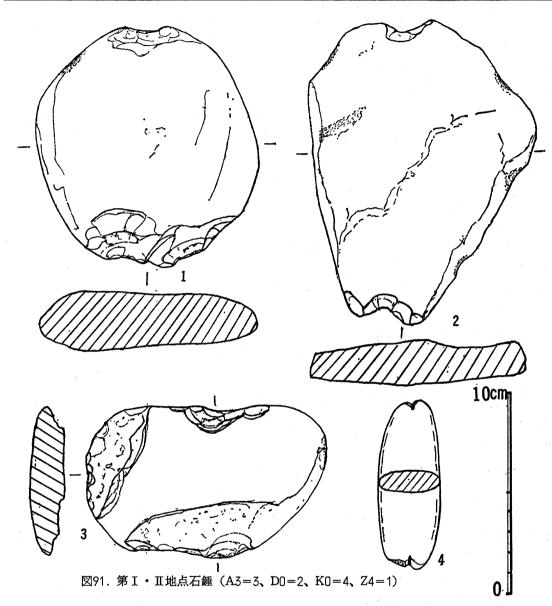
とれ等、4点の石器は、瀬戸内の島嶼の縄文晩期における交易を示す一つの資料を提供するものであろう。

(5・6)は共に第I地点のF・2区と3区の共に8層で出土した。やゝうすい青灰色に、細かい、黒と、白黄色の斑晶を持つ石材で、当地方でよく石斧に使用される流紋岩系の石材である。2点共、小断片であるが、外面はよく磨研されて、ほゞ軌を一にする円又は楕円形を呈する柱状品になると思われ、共に全く同質石材であり、出土区も相接し同一層位であることから、同一個体であろう。磨製石斧になる可能性が最も強いが、これだけの断片では固定できない。第I地点で、8層出土であることから、まず縄文後期に属するものである。

図90の(7・8)は、共に 砥石として 利用されている。(7)は 第 I 地点 F・2 区 6 層出土であり、淡褐色、きめのち密な、水成岩系の石材と思われる。図の断面で太線で示した部分、つまり石片の三面にわたって磨り跡が見られるが、あまり長くない刃部でせいぜい 2 cm 位までのものを砥いだような痕跡であり、すりへりはかなり激しい。なお、出土地点の他の遺物や状況からみて、この小形の砥石は、縄文時代後期に伴うものと考えられる。

(8) はサヌカイト製である。これは、第II地点のZ・3区の1層出土である。サヌカイトという硬質の石でありながら図で断面を太線で示した部分が激しくすり、磨かれた状況を呈している。平面部分は片面だけが磨研されているが、この面は現存部分のみでも中央では3mくらいの中凹みを呈した、極めて滑らかな面となっている。この石片がこの面に続く縁辺の一部をこれまた半円状に丸く平滑に作られているから磨製石器には用いられ難いサヌカイトながら、何か磨いてそれ自体を製品とする目的のようにも見られるが、平面上のこの平滑な面上には、かなり大きな半円を持つ、ほご同一の弧線を示す多数の細線状のさつ痕が認められ、砥石としてや、弧をえがいて、何等かのかなり硬いものを研いだものであることは間違いない。

また、この砥石では、先に記したように縁辺の一部を打ち欠いて、ほよU字状にし、その部分を何かの磨研に用いたものとみられる状況で平面と同様、激しく磨研されてU字状に滑らかになっている。しかし、この部分のU字状の形を生かして、溝状部分を磨くために出来た磨研ではない。残存部



だけの状況ではあるが、このU字形 磨研部は 巾、 $4.5\,cm$ ばかりで両端がやゝ上がっており、 つまりは、その間だけが、 $3\,cm$ 強で浅いくぼみとなった磨り跡を示している。この状況は、この縁辺で長く溝状のものをするのであれば、決して起らない痕跡でむしろ、わずかに凹んだすり痕の凹んだ形に意味ある用いられ方をした砥石と思われる。サヌカイトという硬質な材質をこれ程磨研する、砥ぐべき相手が何であったかは明らかでない。砥ぎ面の縁辺は、砥石使用後に打ち割れている。出土地点が、第II地点で、しかもII0 とII1 を II2 を II3 を II3 を II4 を II5 を II5 を II6 を II7 を II7 を II8 を II

ないが、断面の風化が、わずか10数年前のサヌカイトの剥離面より、はるかに風化しており、同一砥石上の一部にも、新しい剥離面があり、これとは明らかに外見を異にするので、この砥石使用後の縁辺の大きな打ち割りは、むしろサヌカイトを使用するための欠き取りのように思われる。そこでこのサヌカイトの砥石が出土状況から、何時の時代のものであるか明らかでないとしても、少くともサヌカイトが砥石以外にも使用される時期といえば、縄文・弥生期に限られて来るし、この遺跡では極めて弥生土器の出土が少い点と、出土地の Z・3区1層を構成した土層からは、かなり縄文片も採集されている点から見て、縄文期の砥石である可能性が強い。

図91の4点は、石錘であるが、調査地域全体を通じ石錘は、わずかにこれだけであった。(1)が 第II地点出土の外、他の3点は、第II地点である。

(1)は、きめの荒い砂岩質を思わす平たい自然の円礫の両端を打ち欠いている。たいし一方の打ち欠部がやゝはなれて2ヶ所にわたるような打ち欠きを示している。また、打ち欠きが一ケ所の側もやゝ構の直線に近い縁辺部に、多少磨れたあとが見られるようでもある。

これ等の痕跡を認めるとすると、錘をくいる糸は、或いはX字状にかけられたことも考えられる。 これは、 $Z \cdot 4$ 区の 3 層出土であり、縄文晩期に伴なうものである。重さ約560 g 。

- (2)は、 $D \cdot 0 \boxtimes 6$ 層出土で、流紋岩質の扁平な自然礫の長辺両端を欠いている。この石錘も明瞭な打ち欠き部の他にもやムすれたあとが認められ、くムる際には2 ケ所以上のところがくムられた可能性もある。重さ460 g 。
- (3)は、 $A \cdot 3 \boxtimes 7 \sim 8$ 層出土。流紋岩系のもので、これは扁平な自然の円礫の短辺両側の打ち欠きが、明瞭であるが、長辺側の一方にも打ち欠きがあり、この石錘は3 ケ所でしばられた可能性もある。重さは約240 9 。
- なお $(2 \cdot 3)$ は共に縄文後期後半に伴なうものである。いずれにしても、 $(1 \sim 3)$ の 3 ケは大形の石錘と言える。
- (4)は、 $K \cdot 0 \boxtimes 6 \sim 8$ 層出土で、青灰色の片岩系の長楕円形扁平な円礫の長辺端にすり切りによる切れこみを作っている。特に切れ込みの底部分は細い線状を呈する。重さは50 g で、小形品であり、(2 · 3) と同様縄文後期後半に伴うものである。
 - 3) 石器原石(図版第二十八の(1))

石器のほか、石器原石としてサヌカイトのかなり大きい原石が3点ばかり発見されている。すべて 第Ⅱ地点からではあるが、【そのうち、Y・2区とZ・3区発見のものは、共に、盛土中のものであ り、むしろ、第Ⅰ地点の縄文後期に伴うものであろうと思われる。

- Y・2区1層出土のものは、23cm四方厚さ4.5cm ばかりの板状のサヌカイト原石である。一辺が真新しい断面を見せることから、この原石は盛土として移動中に一部破損したもので、今少し大きかったものと思われる。板状を呈する平面には、人工による大きな剥離痕が残されている。
- $Z \cdot 3 \boxtimes 1$ 層出土のものは、長さ約20cm、巾16cm、厚さ5cmの蒲鉾を半截した様な形を呈する。外面はすべて自然面である。
- Y・2区砂層出土のものは、明らかに縄文晩期に伴う原石である(図版第二十八の(1)右上)。 長さ42cm、巾の最も広い部で31cmばかり、厚さも $4\sim6cm$ の、不正形な板状の楕円体である。自然面

も多いが、縁辺には広い大形の剥離面とか、長さ5cmばかりの剥片剥離痕が認められるものである。 このほか先にも記した図90の(8)のサヌカイト砥石も、後で石器原材として使用されたものと思 われるものであった。

4) 小 結

第I・II 地点を通じ、縄文後期後葉と晩期に伴う石器には、石鏃以外の定形な石器は大変少く、一方では剥片石器がかなりの量存在した。またこの剥片石器の中にも、ほど大・小の差違のあることが知られた。この遺跡で見られたつまみを持つ石匙形スクレーパー減少の傾向は、当地方近辺で、比較検討し得る程の同時期の資料報告が無いため、一般的な状況とは言い難いまでも、岡山県に西接する広島県東部の福山市洗谷貝塚(註3)の後期前葉から中葉にかけての遺跡では、石匙形スクレーパーが、この遺跡と同様、きわめて少い。これに対して、むしろ当遺跡には近い、岡山県の里木貝塚の中期の時期のほど全体を通じ、石匙形品は、剥片のスクレーパーと、ほど半々くらいの比率を示していた。石匙形品が後期から晩期にかけて減少するのは、当遺跡だけの傾向ではないと言えよう。また剥片利用のスクレーパーも、すでに、里木貝塚の中期にも多く見られていたのであり、後、晩期の特性とは言い難いまでも、後・晩期に石匙形品が減少するのに対し、むしろ多くなる傾向は否定出来ない。石器石材に関しては、通常通りそのほとんどがサヌカイトであったが、この外に、僅かながら産地

石器石材に関しては、通常通りそのほとんどがサヌカイトであったが、この外に、僅かながら産地 を異にする黒曜石二種と従来使用のあまり知られない地元の石材が使用されていた。

また、この遺跡が海岸に面する地点でありながら、定形的な石錘が大変少い点は注目に値するであるう。また僅かな例ながら存在した石錘が大形であったこと、ただ1点ではあるが後期に切り目石錘が存在したことも共に注目したい。

五、土製品(図版第二十七の(2)、図92)

図35の(91)に示した第I地点出土の土版らしい1個体を除くと、当遺跡の土製品として注目されるのは、すべてが第II地点出土の図92に示した縄文土器片を利用した円板品である。

- (1) は、褐色、直径は ≤ 3 cm、厚さ 0.5 cm 弱の円板形。表裏の磨滅が激しく、縁の部分もかなり丸く磨滅していて、本来の土器面整形は判明しないが、 $X \cdot 6$ 区 3 層出土であり、土質からみても晩期土器片を利用したものと思われる。
- (2) は、表面褐色、裏面黒褐色。 $W \cdot 6 7$ 区だが 1 層出土であり、 1 層の土層は、すべて撹乱されたものであるため、本来、この層出土のものは時代が判定し難いが、これは、土器片自体、表面が磨研された縄文晩期に通有の薄い器面を持っており、まず晩期とみてよい。約長径3.5cm、短径3.2 cm、厚さ $0.3\sim0.4$ cm、中にや Δ 凹んだ彎曲を持つ。縁辺は、器面に直交した形で、整形されているが、 Δ 4 ケ所に、わずかに凹みとか欠けた部分が見られる。これが整形途上に出来たものか、後の使用によって出来たものか明らかでない。 たゞこの個体の裏面の縁の 1 つの小欠部分に細い繊維状のものによるすり痕的なものも見られるが、後のきずとの区別は難しい。
- (3) は $X \cdot 4$ 区3層出土、表面には顕著な土器整形時のけずりによるさっ痕を持つ褐色の土器片を使用。長径4.3cm、短径4.1cmを計るわずかな楕円形、厚さ0.6cm で、縁は器面にほど直交して、すりにより丁寧に整形されたと思われる。円形の縁辺であるが縁にはわずかながら小さい打ち欠きの部分が存在している。
 - (4)は、X・5区3層の 晩期土器溜りの中から 出土、 表裏共無文で、 なでにより整形された褐

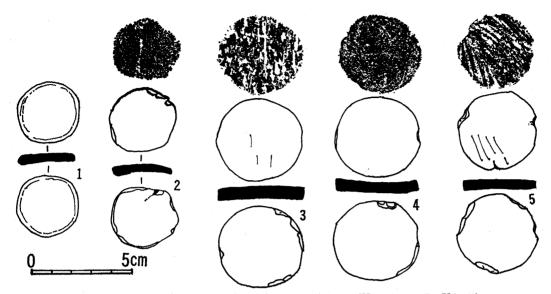


図92. 第地II点の円板状土製品(X4=3、X5=4、W6-7=2・5、X6=1)

色の土器片を使用。 約長径 4.4cm、短径4.1cm、厚さ 0.5cm。 (3) とほぶ同大で 縁の作りも等しいが、本来の土器片の彎曲のため、表面側が多少そり返っている。また縁部の長径両端と他にも 2 ケ所位い、小さいえぐりを思わす欠け部分が注目される。

(5)、W・6-7区の3層出土、表は顕著な二枚貝による条痕、裏は、丁寧になでられた、や々茶色を帯びた褐色の土器片を利用。約長径4.1cm、短径3.8cm、厚さ0.5cmのやム不正形な円板形、縁は器面に直交して、すり磨いている部分が多いが、ほぶ相対して4ヶ所位に、打ち欠き痕とみられる小欠部分があるのは他の場合と同様である。また、この円板の欠け部分の凹部内に細い繊維状のものによるすれ痕があるようにも見られるが、それと確定は出来ない。

この遺跡で、これ等の円板が、第Ⅰ地点では1点も採集されず、第Ⅱ地点で5点発見されていることから、土器片の整形からでは晩期か否か不明のものも、まず、Ⅱ地点の示した縄文晩期に伴うものとみてよいだろう。しかし、これ等の土製品が、何に用いられたものであるかは、形態と出土状況からでは固定出来なかった。たゞ、磨滅の激しいもの以外は、あたかも細い紐状のもので二ケ所以上をしばるのであれば、合埋的な小欠が縁に見られたことは、或いは用途につながるものかも知れない。

ただこの種のものを糸でしばると云えば、魚撈用の「おもり」ではないかと考えられ勝であるが、 **女ならば、**もっとしばりよい形にすれば良く、このものには「円板形」が必要条件であったと思われる。

同種の円板品について、西日本の報告で2~3の類例を見ると、奈良県橿原遺跡(註4)では、やはり縄文晩期と思われる土器片を円板状に加工したもの約80個を採集したとされる。たゞこれ等は、本来中央に穿孔を持つものと考えられ、中に孔の無いものも存在するが、これについては、用途が別であろうとの考えが述べられている。有孔円板についても、紡錘車とか玩具とかの考えを示されているが推定にとどまり、1例、人骨の頭部附近出土例が示されている。

滋賀県滋賀里遺跡で湖西線建設に伴う調査での報告例(註5)でも、34個の報例があり、大きさは 広江例と近いものだが、そのほとんどは、橿原遺跡同様、円板状の中央に穿孔をほどこすか、或は、 それを意図していると考えられているが、穿孔の無いものも5例報ぜられている。これでは紡錘車と して報告されているが問題は多いとある。

これで見て来た円板類が、ほぶ縄文晩期のものと考えられるのに対し、広島県洗谷遺跡(註3)では後期後半に伴って1例のみ同類品の報告が見られ、これには穿孔はない。

広江・浜出土の円板には穿孔が無いことで滋賀里や橿原例と同一に扱い得ないものであるかどうか、或は、穿孔あるものも含めて、同一の意味を持つものであるのかは今後の問題である。広江・浜例が、通例の紡錘車としての中央穿孔が行なわれてないことから、むしろ穿孔あるものもすぐ紡錘車と考えてよいものかどうか問題であろう。

六、弥生時代の遺物(図版第二十八の(2)・(3)、図93~95)

1) 弥生前期の土器(図版第二十八の(2)、図93)

本遺跡の弥生前期の土器片は、出土した地点がある程度限られ、主に第Ⅱ地点の北寄りで出土し、他に、西南部などから少量出土している。およむね第3層の暗褐色砂中に含まれていた。これは、縄文晩期の土器片が多く出土したC群及びD群とほゞ重なっている。

イ) 壷形土器 (1~13)

口縁部片2点と、肩部文様帯の破片10点程が出土しているが、個体数は少ないと思われる。

張りの強い胴部から急にすぼまって、強く外反する短い口縁部をもつ。肩部の文様としては、細い横描き沈線を、頸部と肩部に 1 本づつめぐらしたもの (1)、重弧文 (4・5)、重弧文がくずれてゆるやかな弧を描くもの (6)、木葉文のもの (3・7~13) の 4 種類がある。 いずれも細い へ 方描き沈線で、(1) の頸部沈線は、 くびれ部に施されたためか、上と下でや 及状をなしている。内外共によく研磨されているが、木葉文の土器片には器面の荒れたものが多い。

口) 甕形土器 (14~16)

3点あり、胴張りの少ない器胴から、ゆるく外反させて、口縁部を作る。口唇部に刻み目を加えている。外面は研磨されている。 (15) は器面が荒れている。

ハ) 底部 (17~20)

4点あり、いずれも研磨されて、器面は滑らか。(18~20)は壷形土器の底部と考えられる。

以上の弥生前期の土器は、量的には僅かであるが、壷形、甕形の2種の土器がある。壷形土器の文様には4種類が見られ、文様、器形等から前期のや1古い段階と考えられる。(17・18)の底部を除いて、他の土器片は、前述したようにいずれも、縄文晩期の土器片が最も集中的に検出されたC・D群中で、晩期土器と混じって出土した。しかし、従来の縄文晩期と弥生前期土器の編年観や、この地方の遺跡での出土状況から見ると、本遺跡の状況でもって、両者が共伴すると短絡的に考える必要はないであろう。

2) 弥生中・後期の土器 (図94)

第Ⅱ地点の西半部、主に南寄りのY・7~8、Z・7~9の3層暗褐色砂中で、縄文晩期の土器に混じって、少量の弥生中・後期の土器が出土している。

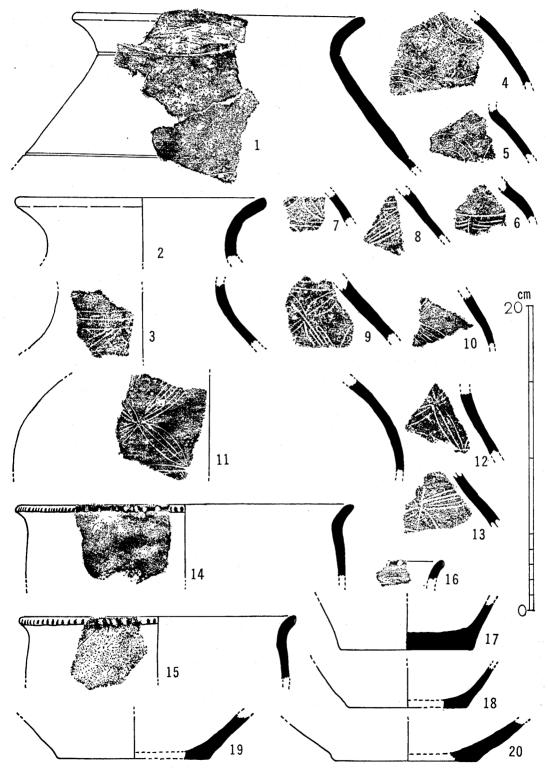


図93. 弥生前期の土器 (Y2=17・18、X4=15、W5=2・4・5・16、W6-7=1・6・14・19・20、X6=8・11、Y6=3・9・12、Y7=13、Z7=10、Z8=7)

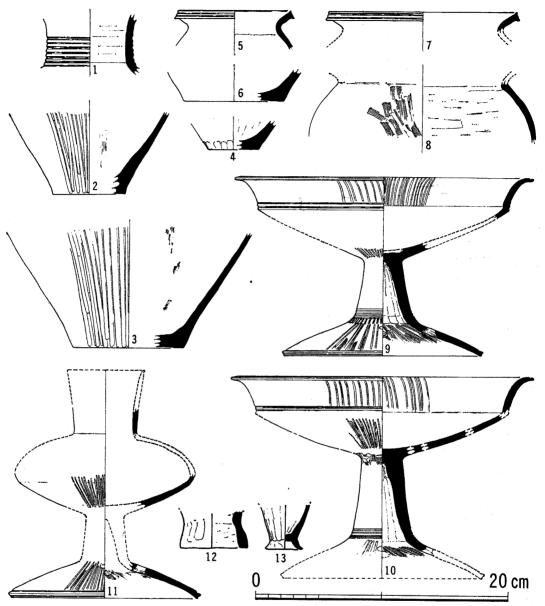
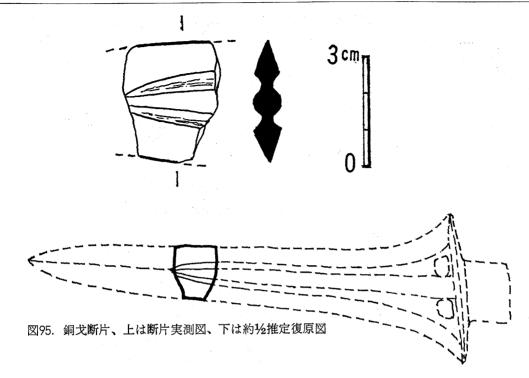


図94. 弥生中・後期の土器 (X7=12、Y7=5・7~11・13、Y8=4・6、Z8=2・3、Z9=1)

- (1) は $Z \cdot 9$ 出土。数条の細めの凹線をめぐらした、壷形土器の頸部。磨滅している。(2~4) は、壷形もしくは甕形土器の底部。(2 · 3) は $Z \cdot 8$ 出土。外面をヘラ磨きし、内面にはかすかに 刷毛目を残している。(4) は $Y \cdot 8$ 出土。内面にヘラ削りが見られ、外面下端部はヘラで形を整えている。いずれも灰黄色ないし、茶褐色を呈する。以上の4点は、中期後葉の土器と考えられる。
- $(5 \cdot 7 \cdot 8)$ は $Y \cdot 7$ 出土。甕形土器の口縁部及び肩部である。 $(5 \cdot 7)$ は強く外反する口縁部に丁寧に横ナデを加え、端面に細い凹線をめぐらしている。(5) の肩部内面には押圧痕が見られる。(8) は、内湾する肩部をなし、外面は刷毛調整、内面をヘラ削りしている。やゝきめ細かく、粘質の強い 胎土である。(6) は $Y \cdot 8$ 出土。 壷形土器の 底部と考えられ、 内面へ ラ削りが見られ



る。以上の4点は、いずれも黄褐色ないし赤褐色を呈している。(4)は中期末的な要素の残る甕形 土器で、中期末ないし、上東・鬼川市Ⅰ式併行、他の3点は上東・鬼川市ⅠないしⅡ式併行と考えら れる。

- (9・10) はY・7出土の高坏形土器。器面は滑らかで、褐色を呈する。2個体分を出土している。長い脚柱部から浅い坏部を形成し、鋭く外反する口縁部をもつ。口縁下端外面には、2本の細い沈線の上を横ナデして凹線風にしている。脚裾部も横ナデを加えて、裾部末端を端面にそれぞれ凹線風の細線を施している。器外面は主に丁寧にヘラ磨きされ、脚柱部上端や裾部にわずかに刷毛目を残している。口縁部は内外共、ヘラ磨き痕が暗文風に残っている。脚裾内面は刷毛調整が施されている。裾部透し穴は4孔ある。(9)の脚柱部下端は、径2㎜の竹管文を3列に刺突している。
- (11) は $Y \cdot 7$ 出土の台付壷形土器。少量の小片による推定復原であるが、胴部片及び口縁部片に器形的な特徴を僅かにとゞめている。器外面をヘラ磨きした、器面の平滑な褐色の土器である。脚裾部は、高坏形土器のそれと、似ている。($9 \sim 11$)の3点は、上東・鬼川市 Π 式併行のものと考えられる。
- (12) はX・7出土、(13) はY・7出土で製塩土器の脚部と考えられる個体で、脚部外面に押圧 痕をとゞめている。(13) の胴下半部は、縦方向にヘラ削りされている。(12) の底は円板をつめた ものと考えられる。(12) は脚径も大きく、その成形等からやム古い様相のものとも考えられるが、 上東遺跡などの事例から考えて、上東・鬼川市 I ないし II 式期、(13) は同 II 式のものと理解してお いて良いであろう。この 2 点は製塩土器の項とも関連するものである。

以上のように本遺跡の彌生中・後期の土器は第Ⅱ地点西南部において主に検出されている。極めて

少量の資料であるが、海浜部における集団(おそらくは小さな集団であったと思われるが)の営みの 痕跡をうかゞうことができる。とりわけ、埋土中ではあるが、本遺跡から銅戈が出土したこと、関係 して、本遺跡の性格を考えさせる資料である点を注目しておきたい。

3) 銅戈 (図版第二十八の(3)、図95)

図95の青銅器断片は、残存長約2.4cm、刃巾(断面図示部分)で3.2cm、背の厚さ0.75cmである。背の両側の樋は広く断面は半円形で深い。そのため背の断面は、表裏で円形を示すような形をとり、研ぎによる稜線はみられない。刃部断面は三角形で鋭い。この断片は切先に近い小部分で樋が背に向って両側から、かなり急な角度でせばまって来ているが、樋の先端が、完全に両側から合するものか、或いは背の両端で終わっているものか確言の出来ない況状で、先端が欠損している。青緑色の錆がかなり広がっているが、全体としては漆黒色の光沢を持った外見である。

この資料が切先に近い小断片であることから、細形の、剣、矛、戈、それぞれの可能性も考えられるが、上記したような形態を他の類品と比較することで、まず細形銅戈の刃部と考えられるものであった。しかし、何分にも小断片であり、本来の復原形態がどのようになるものか確定は出来ない。一応推定の復原図を参考に併記したが、確実にこの形になると言うものではない。

また、この種の銅質を示す、鋭利な刃部を持つ銅戈は、従来までに、岡山県下はもちろん、九州以外の瀬戸内沿岸以東では発見例の無いものであり、瀬戸内沿岸から大阪湾沿岸にかけて、かなり出土例を見る銅戈とは同時には論ぜられないものであろう。

この銅戈片の出土地が、II 地点の、Z・4区だが、1層であり、すでに幾度も繰り返す通り、II 地点の1層は、少くとも、I 地点あるいは、その近くの校舎の建った部分の遺跡土層が移積されたものであるため、他遺物の伴出関係、まして出土状況は全く不明のものである。しかし、広江・浜遺跡に伴う遺物である点は問題ない。また、この断片の折れ口を見ると、両面とも、本来の刃部表裏の錆の状況と全く同じであり、10数年前の工事により欠損した状況とは考えられないものである。 現在では、この遺物について、遺跡上での所見は何一つ与えることは出来ないが、調査し得た広江・浜遺跡での弥生時代遺物の出土状況は、前期から後期にわたるとはいえ、きわめて僅かで、遺構はもちろん、一定量の包含地さえ発見されていない。この銅戈片もこうした海岸遺跡の状況の中で、既に断片として存在していたことを考えねばならないのではなかろうか。

たゞ、広江・浜遺跡を含む児島では、すでに種松山で扁平紐4区袈裟襷文銅鐸1、由加山では連続 渦文を持つ平形銅剣を含む、銅剣5、飽浦では、細形で鋭利な刃を付ける銅剣などの出土が知られて おり、瀬戸内海のほゞ中央部に位置した一つの島で、多くの青銅器出土を見ている処であることか ら、この中で今回出土の銅戈片も共に考えねばならないものであろう。

- 註1. 「世界陶磁全集 I」 小学館 図版159 1979年
- 註2. 渡辺誠「桑飼下遺跡発掘調査報告書」平安博物館 1975年
- 註3. 小都隆「洗谷貝塚」福山市教育委員会 1976年
- 註4. 末永雅雄他「橿原」奈良県教育委員会 1958年
- 註5. 田辺昭三 加藤修也「湖西線関係遺跡調査報告書」滋賀県教育委員会 1973年

V 章 古墳時代と、それ以後の遺物

広江・浜遺跡出土の大半を占める、古墳時代後期とそれ以後の遺物については、順次時代別に記述するのが本来であるが、古墳時代後期の遺物が圧倒的に多いため、土器については、古墳時代から平安期までの土器と、中世以降の土器を区分するだけで、製塩土器とか須恵器とか土師器のような土器の種別分類のみで記載を行い、その中で判明する限り、時代も示して行く方法をとった。

また、 土器以外の 遺物に関しては、 古墳時代から中世まで通じ、 種類別の記述を行っており、随時、 互の関係を見て行く方法で記している。

一、製塩土器(図版第二十九~三十一、図96~111)

中部瀬戸内沿岸において、こ、50年来師楽式土器と称されて来た一群の土器が、製塩用の土器であることが明らかになってからも、すでに20余年が経過している。しかし、この師楽式土器と同じ土質・作りを持ちながら、必ずしも、製塩土器として使用されたかどうか明確でない土器が、師楽式土器と称されて来た土器の中には存在している。この点、混乱を避けて、製塩土器として全く差支えのないものと、それ以外のものを区別するため、当地方では、製塩土器として古典的な名称でもある「師楽式」の名を項目名としては使用しなかった。しかし、こ、1で「製塩土器」項目中に示す土器のほとんどすべては、中部瀬戸内地域で、師楽式土器と称した土器のうちで古墳時代後期に属するもの、そのものであり、この報文の他の文中で師楽式土器と呼ぶものはこ、にあげる土器を指している。一応その特質を簡単にまとめて列挙すると次の通りである。

- 土質は煮沸用土師器に比較しても、なお砂粒が多く、外見も粗雑である。
- 整形痕には、しばしば叩き目があり、特に口縁部のみに叩き目が残存するものが多い。また内 外面には指圧痕とか、ひゞわれが顕著である。
- 器面には二次的な火を受けたと思われる痕跡が明らかで、特に胴部以下は細片化しており、残 存するものは口縁部が大半である。
- どの土器も、叩き目痕などの違いはあっても、ほゞその大きさと器形は同じであり、同種のものが大量に存在する。

以上のような特性を備えた当遺跡出土の大量の土器を、叩き目痕などの状況により、一応 $I \sim V$ 類までに分類した。以下それに従って記述する。

A) I類土器 (図版第二十九の(1)、図96~98)

図96~98に示した土器で、これらは大体において無文で、内外に指圧痕とかひゞ状のき裂が多い一群である。口径が15~20㎝位のものが多く、全体に大ぶりで、厚さも最も厚い口縁部付近では 0.8㎝前後である。口縁が内傾するか、ほゞ直立するものが大半で、口縁と肩部との境があまり見られないのが、この類の特性ともいえる。しかし、口縁部から肩部までの器壁が厚く、むしろ内面に、口縁と肩部の境が見られるものである。器形全体の判るものはないが、口径とほゞ同じ位の高さを持った丸底土器と思われる。

この I 類に入れたもの Δ 中でも、図97に示した(17~19)などは口縁と肩部の境に、沈線風の線をめぐらしたり、かすかながら叩き板様のもので押えたと思われるものもある。特に図98の中には、む

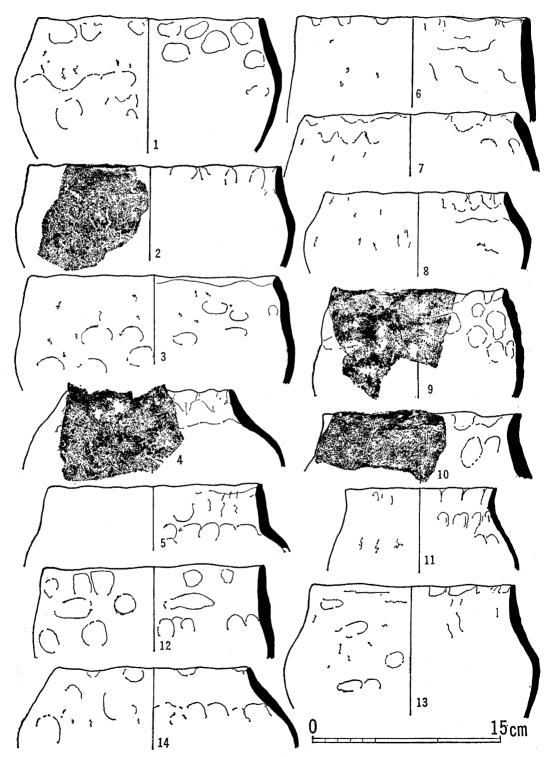


図96. 製塩土器 I 類(1) (X2=14、X6=12、X7=13、X8=1~11)

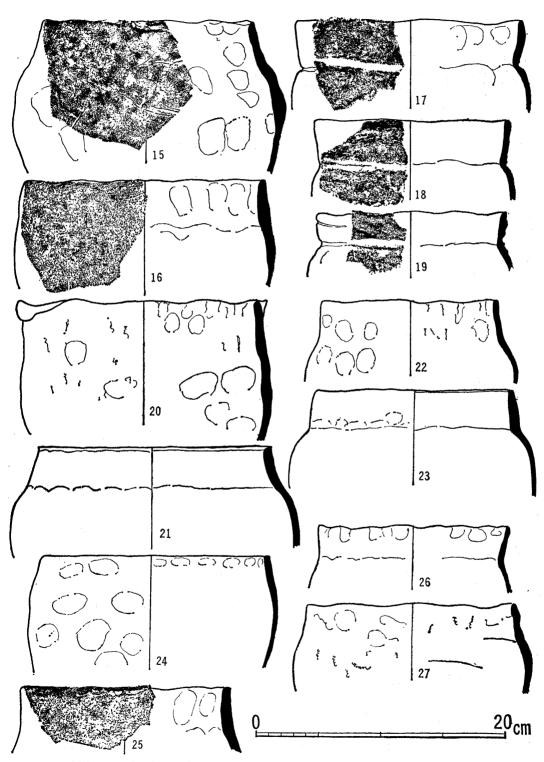


図97. 製塩土器 I 類 (2) (W5=24、X5=15~18、X6=26·27、Y7=19、Z7=20~23)

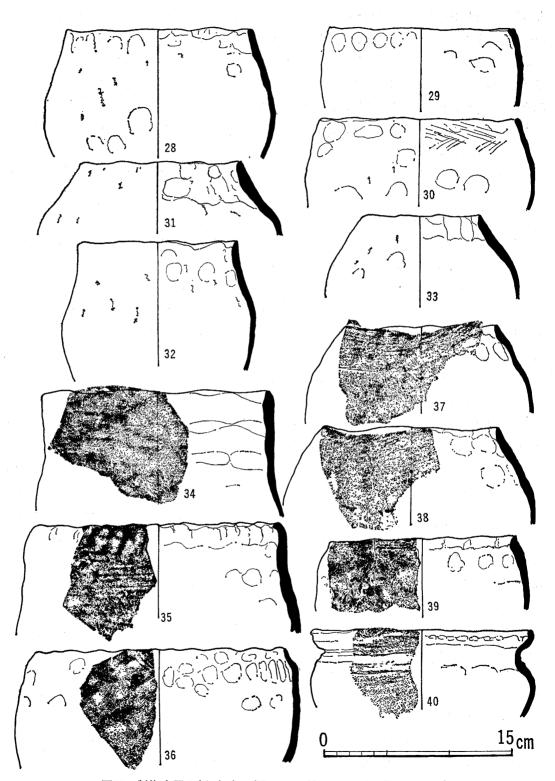


図98. 製塩土器 I 類 (3) (X5=34、X8=37~40、Z9=28~33)

しる平行叩き目痕を思わすようなもの、特に(34~40)も含めているが、これらも叩き目が大変浅く 不明瞭であること」、大部分は器形が肩を持たぬ大形品であることなどから I 類に入れた。

しかし、口縁部を叩き板で、叩きしめるというやり方などでは、口縁部に叩き目を残す他のものと 基本的には異なるものではない。なお図98の(40)のように、特に口縁部と肩部で逆S字のような屈 曲を持つものを含めたが、作りの上から見て、特に意図したものと思われないため、こゝに含めた。

また表面とか全体の作りが、やゝ丁寧なもの図97の(21・23)などや、内面が指圧痕のみでなく、 荒い刷毛目状工具で整形されているもの図98の(30)などもある。

出土地点は、主としてII地点の各区にわたるが、特にIX・8区の3層周辺に多かったのが注目される。

B) Ⅱ類土器 (図版第二十九の(2)・三十の(1)、図99~104)

図99~104にわたるもので、 師楽式製塩土器としては最も普遍的な口縁部にのみ平行の叩き目が付く土器であり、当遺跡でも最も多い叩き目痕でもある。

この類のものには、平行叩き目が、大変粗いものから密なものまで種々存在し、器形にも大小ある。図99の中のもので、一応、平行叩き目としてII類に入れたが、実際には、I類土器の中の、薄く平行叩き目が観察された図98の(34~40)等との区別は、出来ないといった方がよいものもある。特に図99の(1)や(11・12)などは、口縁部が内傾する点まで同じである。強いて言えば全体として、I類より多少指圧痕が多く、叩き目がやム目立っている程度の違いはある。全体的に口縁部径は15~20㎝で、器高もほゞ同じ。

また、この図中の(1)は製塩土器としては大変珍しい胴部保存のきわめて良い資料で、ほぶ底部まで残存していた。これで見ると、やはり器高は口縁部径とほぶ等しく、丸底であったことがうかぶえる。万の単位にのぼる多くの同種土器片の中で器形が直接にうかぶえるものは、この一例のみであった。また、実体の不明な肩以下の胴部の内面は、表面の粗雑な作りに比べるとむしろ丁寧になでて平滑にされていることが注目された。なお、(10)の破片には、口縁端近くに焼成前と思われる径0.8cm ばかりの1孔を有していた。小片のため、1孔であるのか複数であるのかは明らかでない。この土器の作りは、他の製塩土器と全く同じでありながら、他の土器に無い「孔」を有することが何の意味か明らかでない。「蛸壷」ということも考えられるが、孔周辺に綱のすれあとも認められない。

図100・101は平行叩き目痕の最も密なグループで、口径13~20cm位と各種ある。すべてが、肩部でかるく「く」字に屈曲する点が I 類土器と異なっている。

図102・103も、図98・99と同じであるが、叩き目がや 1 粗である。 (42) などのように叩き目工具で口縁端上部をおさえたものなどもある。また (59) は、内面を同様の工具でなでて整形しており、他の遺跡でも、時にこのような内面整形法を使用したものもあるが、当遺跡では、むしろ指圧痕か、その上をなでたようなものが殆んどである。

図104は最も粗い平行叩き目痕である。器形も大形のものが多く、器厚も1.0cm前後に及ぶ。また、 この粗い 平行叩き目の土器は 公害センターの 施設予定地 (第IV地点) で、 出土例が多かったといえる。

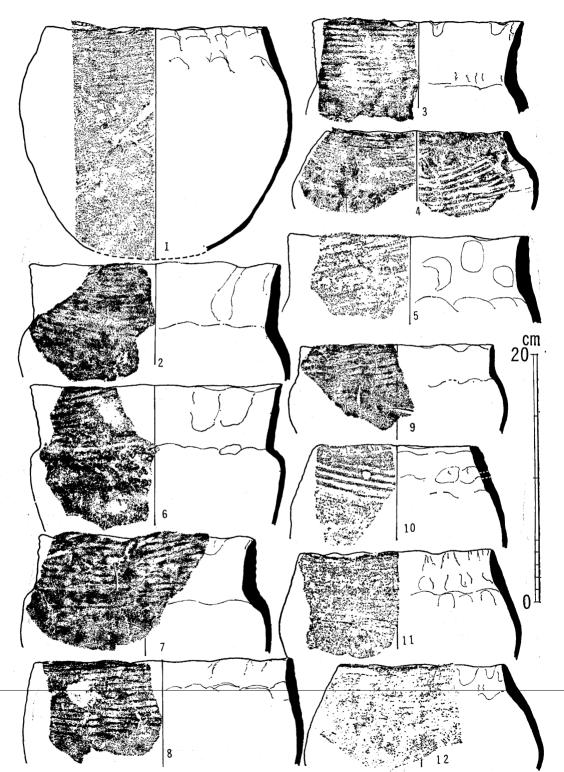


図99. 製塩土器Ⅱ類(1)(W5=9~12、X5=1~3、Y6=6、Y7=4·5、X8=7、Y8=8)

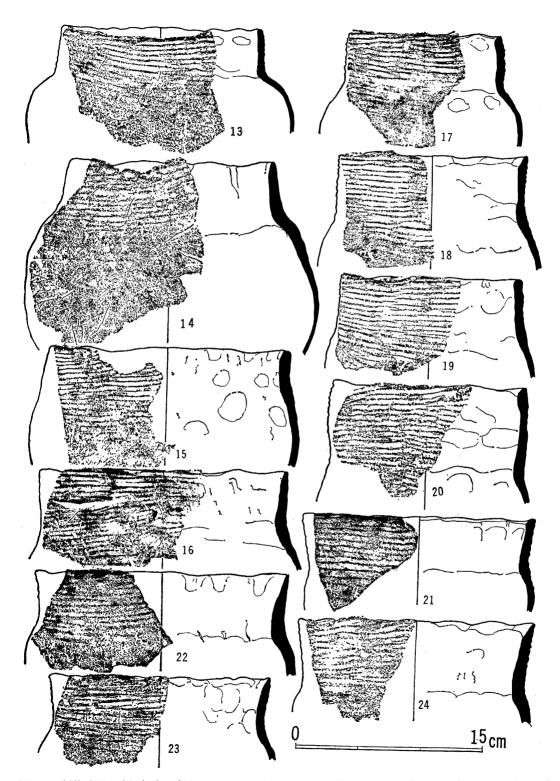


図100. 製塩土器II類(2)(W5=18~20、X5=21~24、Y7=13·14、Z7=15、X8=16、Y8=17)

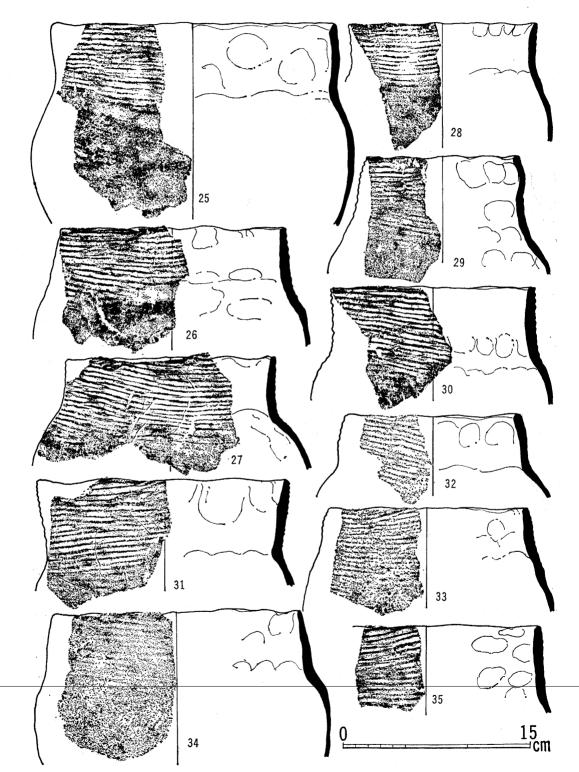


図101. 製塩土器 II類 (3) (Y7=31~35、第IV地点=25~30)

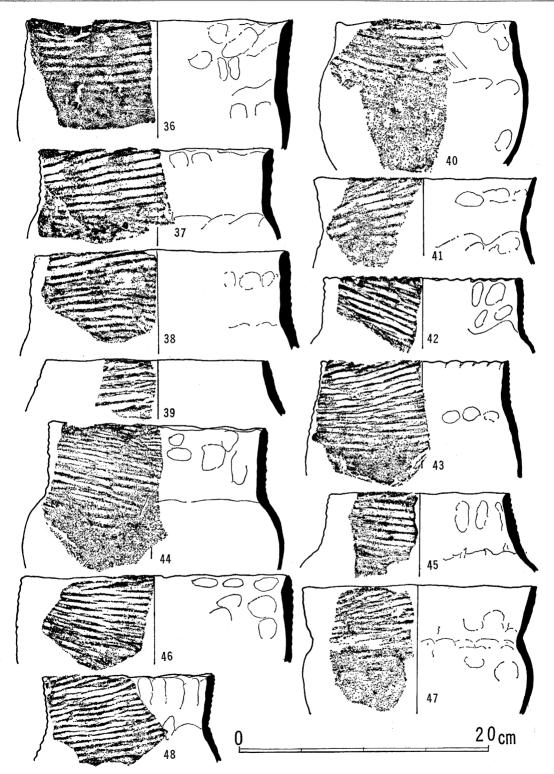


図102. 製塩土器Ⅱ類(4)(X4=36、W5=42・43、X6=47、X7=40・41、 Y7=45・46、Z7=39、X8=37、Z9=38)

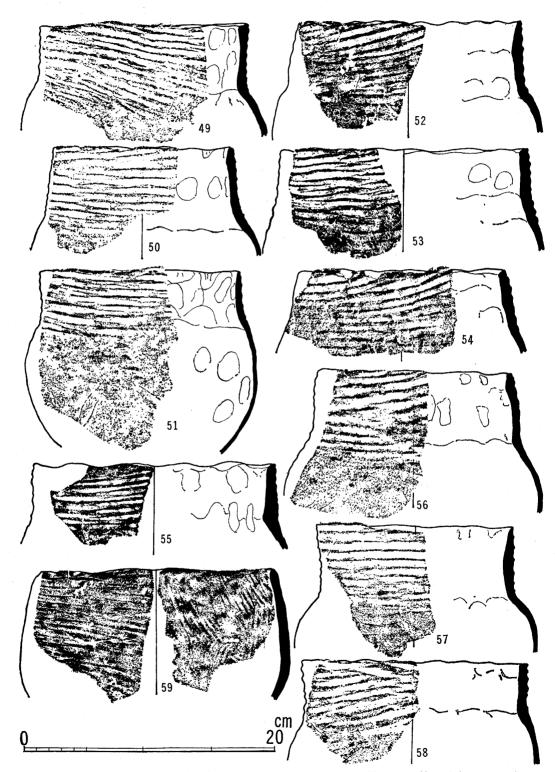


図103. 製塩土器Ⅱ類(5)(W5=55・57・59、W6=56、Y7=58、第IV地点=49~54)

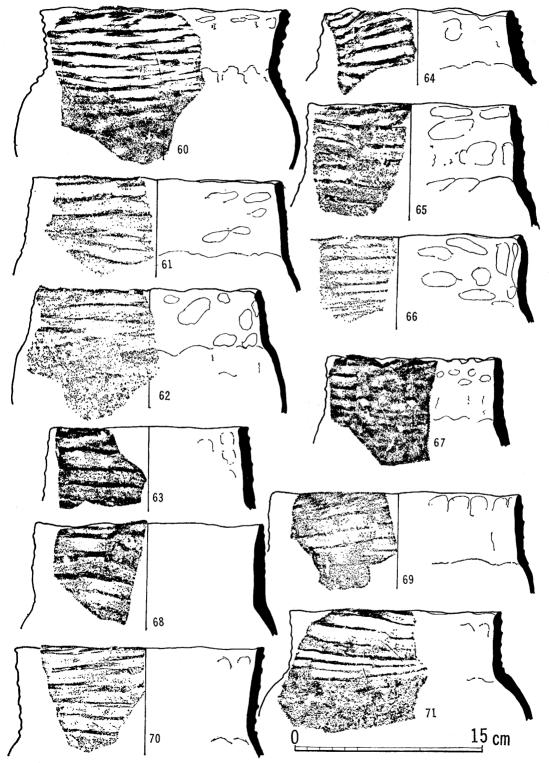


図104. 製塩土器II類(6)(X5=67、Y6=69、Y7=64~66、X8=70・71、Z9=68、 第IV地点=60~63)

C) Ⅲ類土器 (図版第三十の(2)、図105・106)

これは口縁周辺にのみ格子目文叩きを持つグループである。格子の大・小・形には種類が多く、似 た叩き目を示すものも、同一の叩き工具によるかどうかの判定は困難である。

この格子目文を持つ土器群は、口径13~18cm、器高もほゞ同じと推定され、口縁部と胴部の間はわずかにく字に屈曲する点など、平行叩きと同傾向であるが、全体的に見た場合、口縁部周辺の最も厚い部分でも厚さが0.5cm前後で、平行叩きの多くのものが0.8cm前後の厚さであったのに比べて大変薄く感じられる。また、全体の平均的な大きさが、平行叩きのものより小さいことも特徴であろう。

図 105 は全体に 格子目の荒い タイプである。 この中に、方形・縦長・横長・斜格子文と 変化があり、同一工具によるかと思われるものも存在するが確定は出来ない。叩き目の一単位巾は少なくとも $4 \sim 5 \, cm$ のものと思われる。 この点、平行叩き目文でもほゞ同じように思われた。

図 106 は格子目が小さいグループである。としても、叩き目の工具は幾種にもわたっていると思われるが、中には同一工具によることを思わすものも時にある。

(24・25) のような方形の小格子は、時に須恵器の器壁に見られるものでもあるが、須恵器整形工具をそのま、使用したというには、かなりの検討が必要であろう。むしろ、格子の不均一さから見て、須恵器制作工具の転用とは言い難いように思われるが、こうした格子叩き目自体が、須恵器作りの格子叩き目と全く無縁な状況で使用を始めたというのではない。

格子目文の出土も各区にわたるが、特にW・5、X・5、Y・6区周辺に多いのが実状であった。

D) IV類土器 (図版第三十一の(1)、図107~110)

この類は叩き目によって実際には、なお数種に分類すべきものであるが、互いに似た部分があって 分類が困難な文様も含むため、すべてを同一類に入れた。そのため、無文とか、平行とか、格子とか のように一語で、文様特徴を示す用語が無いが、強いていえば、山形・複合グループとでもいえるも のであろうか。また、こゝで扱う叩き目文を持つ土器は全体からみると大変少ないが、文様の変化を 図示するため、良好な破片は出来るだけ拓本化した。このため、最も多い平行叩き目文などと比較す ると、割合として採録したものが多過ぎるきらいはある。

図 107 は、主として明瞭な山形グループである。この中でも(1~15・19)までは「矢羽根形」ともいえる文様で、山形の中央に線を持つ。この遺跡の製塩土器全量から見れば、きわめて少ない文様で、CAに示したものが、この種土器片の中の良好なものムすべてと言ってよい。口径は15cm前後だが、器壁の薄い作りで口縁部がやム内傾気味なものが多い。W・5区、X・5区に多いのは格子目文のあり方と一致する。

(16~18・20~22) は「連続山形」ともいえる叩き目文様で類品は少ない。口径が13~14cm位で小さいが、器壁は厚いものもある。全体に口縁が直立か内傾気味である。

図 108(23~26・29)あたりは、小さい山形と矢羽根形とが組み合されたような文様であり、この 図 108 図中の他の土器も、矢羽根状文様の変形や斜と横の平行を組み合せた叩き目文である。個々に より文様はそれぞれ変化しているが、全体としては薄手で、口径が13~15㎝位の小形のものが多い。 W・5 区、 $X \cdot 5$ 区、 $Y \cdot 6$ 区という部分に多い。

図 109 も平行斜線文の組み合せが多いが、それぞれに異なった叩き目を示す。(61)は、円形浮文 状の叩き目である。本遺跡ではこの種、文様は、きわめて少なく、目に付いたものは2~3点に過ぎ

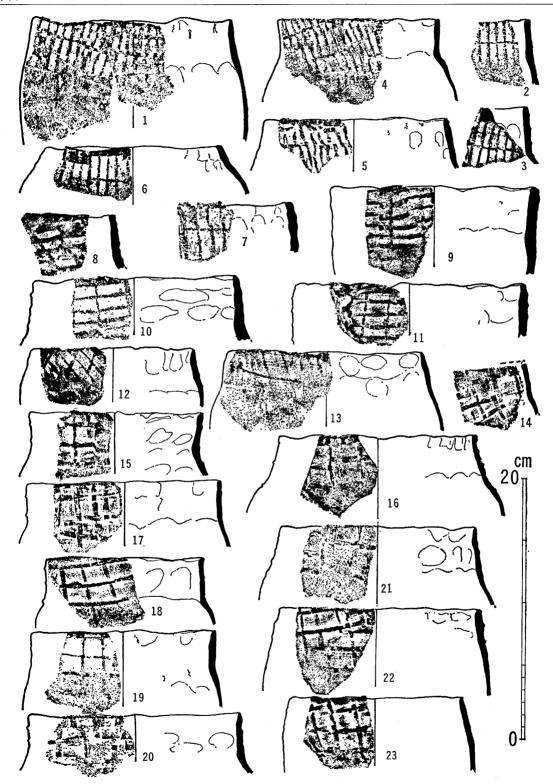


図105. 製塩土器皿類(1)(X4=9、W5=4・6・14・18、X5=1~3・7・11・21、W6-7=5、Y6=8・13・15~17・19・22、Y7=10、X8=23、第IV地点=12・20)

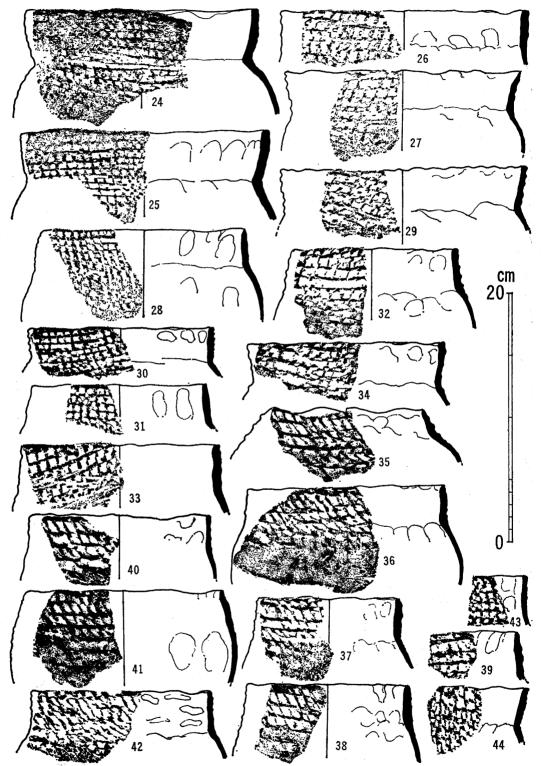


図106. 製塩土器Ⅲ類(2)(X4=40、W5=24~27·42~44、X5=33·35~39、 Y5=32·34、X6=28~30、Y6=31)

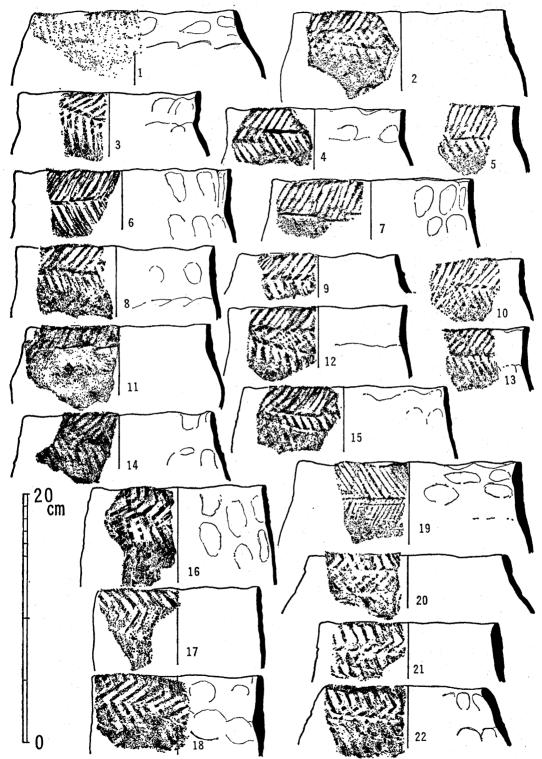


図107. 製塩土器IV類(1)(W5=1~7、X5=9~12·18、W6—7=8·20~22、 X6=13、Y6=14~16、Y7=17、Y8=19)

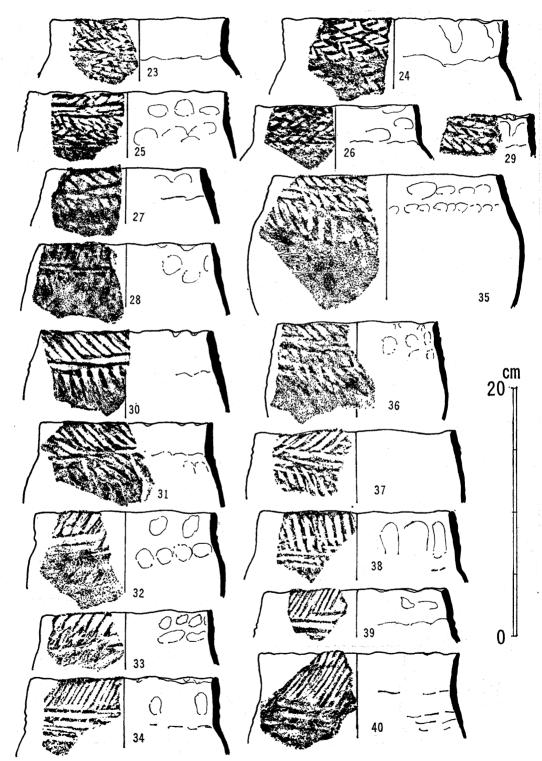


図108. 製塩土器IV類(2)(X4=25、W5=35~40、X5=23·29~31、X6=24、Y6=26~28·32~34)



図109. 製塩土器IV類(3)(W5=41~43·60·61、X5=50·51·62、Y5=44·45、W6-7=59、X6=46~48·58、Y6=53~55、Y7=56·57)

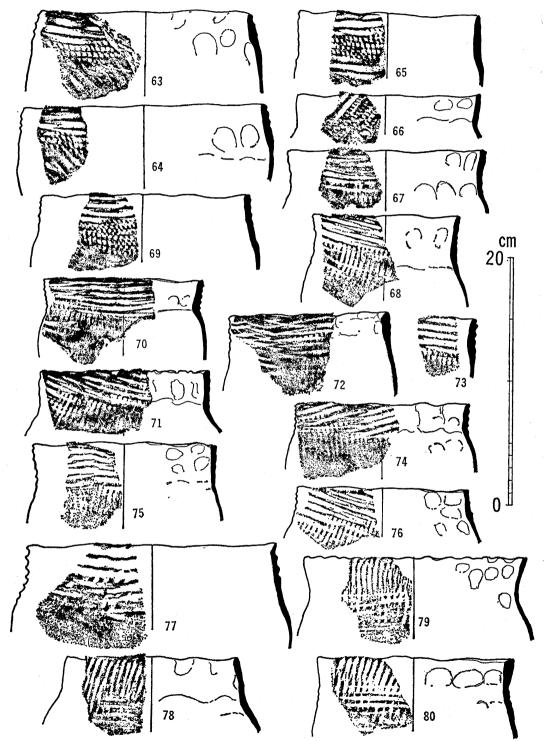


図110. 製塩土器IV類(4)(X3=72、W5=69・70・77~79、X5=63~65・67・68、 Y5=76、X6=69、Y6=66・74・75・80)

ぬものであったが、 他遺跡の師楽式土器中では、 しばしば見かける 叩き目文の 類例である。 (62) は、他の製塩土器に比べると外面の作りがや 5 丁寧である。

全体として見ると、大きさには大小あるが、やゝ小形で、薄手のものが多いといえるだろう。

図 110 では、(63~66)・(69)は、平行叩き目と格子叩き目の複合である。その他は、縦横の平行叩き目を重ねることで、部分的に格子状を呈する部分がある。いずれにしても、これらの土器は、 薄手で、肩部を作る器形のものが多い。

E) V類土器 (図版第三十一の(2)、図111)

きわめて薄手で無文の土器である。わずか $0.1\sim0.2$ cm位にすぎない薄い器壁には多数の指圧痕が残る。($1\sim23$)までは、口径 $10\sim12$ cmで、口縁部はやい内傾して、高さは10cm前後の丸底と考えられる。 この一群の土器の中で($1\sim20$)までは $Y\cdot 8$ 区 2 層の西北部で、この土器ばかりが細片となり、まさに塊状といえる状況で一括出土している。

(22・23) は $Y \cdot 7$ 区 2 層出土であり、(21) は第 \mathbf{m} 地点出土であることから、 $Y \cdot 8$ 区の一括以外にも、同種の土器は存在してはいるが、他の形態の製塩土器片が、遺跡地全体に濃淡の差はありながらも広がっているのに対し、この種の土器の $Y \cdot 8$ 区での出土状況は特殊なあり方とも思われる。しかし、一般的な製塩遺跡において、製塩用の土器の細片が一括塊となって出土する例は多く、この V 類土器のあり方は製塩遺跡としては、むしろ通常の出土状況ともいえるだろう。

(24~28) も特に、 $Y \cdot 8$ 区で一括出土の土器と区別出来るものではないが (24 · 25) は (26~28) までと共に、 $Z \cdot 7$ 区の 2 層下部出土である。 (1~20) までの大量出土の一括土器片は、細片まで残らず検討を加えたが、口縁部以外は、すべて胴部を思わす、薄い細片ばかりであった。少なくとも、 (29~33) までのような尖底を思わす形はおろか、厚くなって底部を思わすような破片は全く見られなかったのである。この事実から、 $Y \cdot 8$ 区の一括土器は、胴部との区別のない丸底土器と考えたのである。

しかし(24~28)の、この種無文土器は、(1~20)と全く同じ作りを見せながら(26~28)のような口径6~8 cm位の小形土器を含み、(29)のような尖底の破片が存在した。 $Z \cdot 7$ 区出土のものは、 $Y \cdot 8$ 区のような大量出土ではないが、きわめて似た形態でありながら、尖底のグループの存在を示しているといえる。

また(29~33)は、同種土器の尖底部分であり、これらはすべてX・4区2層下部出土である。との地点では、口縁部は採集出来なかったが、おそらく、(24~28)に見たようなものであろう。

以上V類として示した薄手無文の土器の中には、やく大形で丸底のグループと、小形品を含む尖底のグループのあることが知られ、特にY・8区の一括出土品中には(1・2)のように、指圧痕が平行に見られるものとか、(4)のように口縁周辺に不整形な凸帯をめぐらしたり、(3・6)のように浅く平行叩き目らしい痕跡が見られたりするように、他のI—IV類までの土器と同様に、特に口縁部の整形補強を叩きによって行うことに近い方法をとっているように見られる。このことから、この種の土器が、I—IV類土器と、大変異なった作りを示し、両者の間に時間的に差があるかのように見られ勝ちであり、特に尖底のこの種薄手土器に対しては、従来、奈良時代、或いはその直前頃の年代が与えられている場合もある。しかし、Y・8区西北一括資料中には、6世紀終末期を思わす須恵器

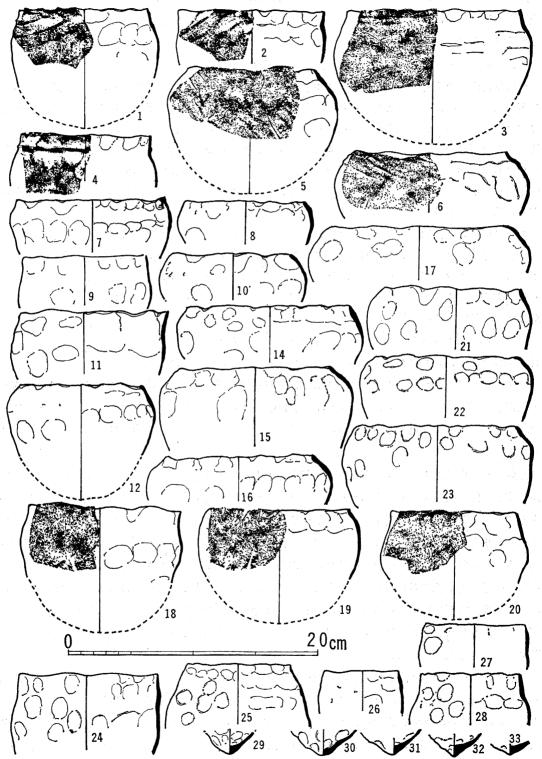


図111. 製塩土器 V類 (Y8一括=1~20、第Ⅲ地点=21、Y7=22·23、Z7=24~28、X4=29~33)

坏身片をわずかに伴い、その状況が、正確な伴出関係と認定できず、他の区でも一応は、別類の製塩 土器と層位の上では区分出来ない現状からみて、この遺跡における、このV類製塩土器の年代につい ては慎重でなければなるまい。

二、類製塩土器(図版第三十二の(1)、図112・113の(1~8))

製塩遺跡出土の土器の中には、明瞭に製塩に使用されたと思われる土器群以外に製塩土器と同じ土を用いたり、或いは同じ手法で作られながら、製塩土器として一般的に考えられる幾つかの条件を満さないものがあり、確実に製塩に使用されたかどうか不明のものが存在している。これらを、今まで述べてきた製塩土器の中に含めてしまうには少々問題はあるが、少なくとも、製塩と無関係とは思われないものを抽出して「類製塩土器」として扱うことにした。他の製塩土器に比較すると性格的には一律に規定出来ない不明確な分類であるが、これらは、厖大な製塩土器に比較すると、きわめて僅かなものであり、とりあえず一括した。

図112 に示した土器のうち(1~4)は土質が、師楽式製塩土器と全く同じでありながら、形は大きく、口径が2倍以上のものもある。作りも指圧痕などが明瞭で、一般的な師楽式土器と同様であるが、口縁端を平滑に作り、やム丁寧に仕上げられている。また、師楽式土器が、胴部以下大変薄い作りで、火を受けて、ほとんどが細片化してしまっているのに対し、こムに示したものは、胴部が口縁部とほど同じ厚さに作られている。

- (5・6)は大きさだけでいえば、製塩土器の平均的大きさと等しいが、全体に丁寧な作りで、口 縁端の作り、胴部の厚さなどから見ても (1~4)と同種のものと思われる。
- (7・8)は(1~6)までに比較すると作りがかなり粗雑であり、小断片では師楽式製塩土器との区別が困難である。しかし、大きさは一般製塩土器より大きく、器形も、むしろ(1~6)に近い。これらをあえて製塩土器の中に入れるとすると I 類から V 類の分類の中には入らないといえるだろう。

土質とか、作り方を別とすると、数多い製塩土器とは、かなり異なった器形を持つこれら、を後に 説明する「師楽的土師器」に含めなかったのは、これらの土器も火にかけられた可能性が見られたからである。土師器の処で説明するが、一般生活に必要な鍋釜に当る把手付土器が、同時に多数存在しており、また単なる容器ならば、甕形・壷形が存在することでもあり、わざわざ深鉢的器形を持つ事実から、この種の土器を、一般的生活用具と即断することを避けたのである。むしろ、製塩の過程の中で、何等かの用途を考えたいものである。もし、出土状況などから、他の製塩土器と伴出しないものなら、多少時期を異にした時点の製塩土器とも理解出来るであろうが、これらは数も少なく、すべてが、一般的な製塩土器と混在する状況であったため、他の製塩土器との先後関係などでの違いで解釈することは無理であった。

(9) は小形ながら外面や口縁上端の作りが丁寧である。 (10) も、一般製塩土器とは、や、異なった器形を持つことで抽出した。 (11) は、大きさや口縁部作りは全く他の一般的な製塩土器と等しく、口縁部に平行叩き目をめぐらしているが、胴部器壁が、下方までも厚い点は (1) ~ (8) に類似する。 (12) ・ (13) は、口縁近くに、焼成前から孔を作っている。同様な例は、後述する把手付土師器にも見られた。このような有孔土器には、蛸壷もあるが、蛸壷の一般的なものから見ると孔が

小さいと言える。土質、作りは、もちろん師楽式土器と同様であり、土師器としての用途も不明であるため、やはり製塩遺跡に 関係あるものではないかと 推定して こ い あげたものではあるが、 或いは、後に記す師楽的土師器に入れるべきものかも知れない。

図 113 の (1~8) までは、土質、作りなど、全く師楽式土器と同じであり、口径 9~7~cmからせいぜい10~cm位まで、高さも6~7~cmという小形の浅いコップ状の土器である。外面には(8)以外は、すべて平行叩き目を持ち、内側は指による整形痕の明瞭な跡が見られることなどから、これらの土器は、従来、何の疑問もなく、一般的に師楽式土器と呼ばれて来た土器であった。

また、こゝにあげた土器が、すべて一般的な師楽式製塩土器と共伴していることが、出土状況から知られる限り、いかに、土質、作りが師楽式土器的であっても、一般的な製塩土器が多数存在する中で、わざわざこの小形土器が、同じ用途に使用されたとは思われないのである。近時、岡山県北の高原地帯である阿哲郡哲西町西江遺跡から、これら小形土器に大変似た一群の土器が出土した(註1)。こゝでは一般的な大きさの製塩土器も発見されており、これらは共に、おそらく塩を入れて運ばれたものであろうと思われる。この小形土器は、製塩の過程にぜひ必要な土器とすると、どのような過程に用いられたかゞ明らかでなく、むしろ塩の運搬、或いは保存の段階で必要なものではなかったかと思われるのである。いずれにしても、何等かの形で製塩に関わりを持つ土器でありながら、一般的な土器製塩用の土器とは、やゝ違った性格を持つ一群と思われ、こゝでは類製塩土器と呼ぶものゝ中にまとめたものである。

三、その他の製塩土器 (図版第三十一の(3)、図115の (35~38))

図 115 の (35~38) に示した 4 点は同じ図中に示した、小台脚と似た形を示すものであり、この図中のものすべてが師楽式土器と全く同じ土質と作りを持つことから、特に抽出出来るものかどうか疑点も持たれるが、二次的な火を受けていると見られる上に、他の台脚より、より粗雑に作られ、特に(35~38) の 4 点は、従来古墳時代では前半に属すると考えられている、台脚付製塩土器の台脚形を示しているのである。むしろ、これらは、師楽式土器と同じ土質、作りを示す一般的な土師器と見るより、丸底の製塩土器群よりや 4 古い製塩土器と見るべきであろう。また (38) のや 4 台脚部が長くなったものは、西部瀬戸内などに見られる製塩土器のタイプに似ている。これは古墳時代後期のものと考えられている (註2)。

また、弥生時代の図94の(12・13)に示した小台脚は、こゝに示す台脚と似た形ではあるが、脚端部に面を持つとか、全体に台脚と胴部の作りが、弥生時代製塩土器の特性を示しており、この台脚は弥生時代後半期の製塩土器と見るべきであろう。

以上、きわめて少ない資料ながら、この遺跡には、弥生時代から、古墳時代前半期にかけても製塩に関する土器が存在しており、この地でその当時、製塩を行ったかどうかまでは調査範囲だけでは明らかに出来なかったが、後期古墳期より以前にも製塩址があったとしても不思議はないところである。また、これも僅かな例ながら、瀬戸内西部の台脚が長くなる式の製塩土器と思われるものを出土したことも注目される。

四、師楽的土師器 (図版第三十二の(2)・三十三、図122の (9~35)・図123~126)

『類製塩土器として、図 113の(8)までを取り上げ、同じ図中の(9)から後を、この別項で取り

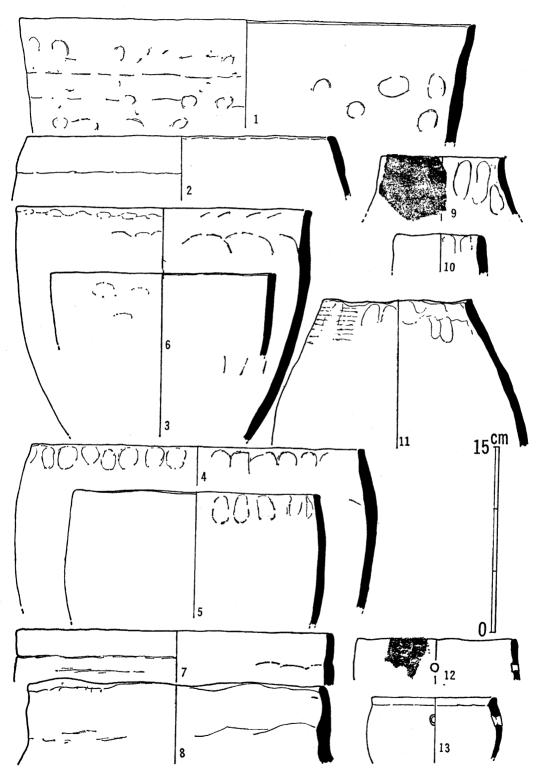


図112. 類製塩土器(1)(W5=5~9、W6-7=13、Y6=2、Y7=3·10·11、Y8=1·4·12)

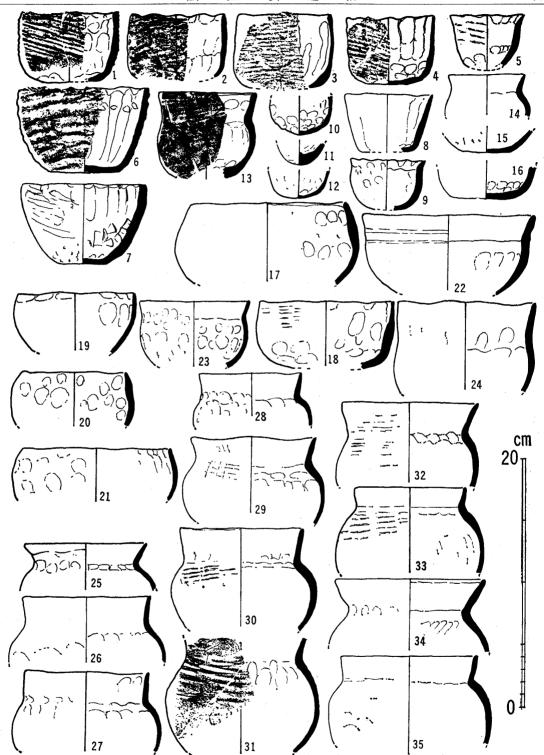


図113. 類製塩土器 (2) 〔1~8〕, 師楽的土師器 (1) 〔9~35〕, X4=14・28、W5=6・18・32・33、X5=23・30、Y5=5、W6—7=4、X6=1・12・17・25・31・35、Y6=15・24・27、X7=20、Z7=3・11、X8=2・7・16・19・21・26、Y8=22、Z9=8・34、第Ⅲ地点=9・29、第Ⅳ地点=10・13)

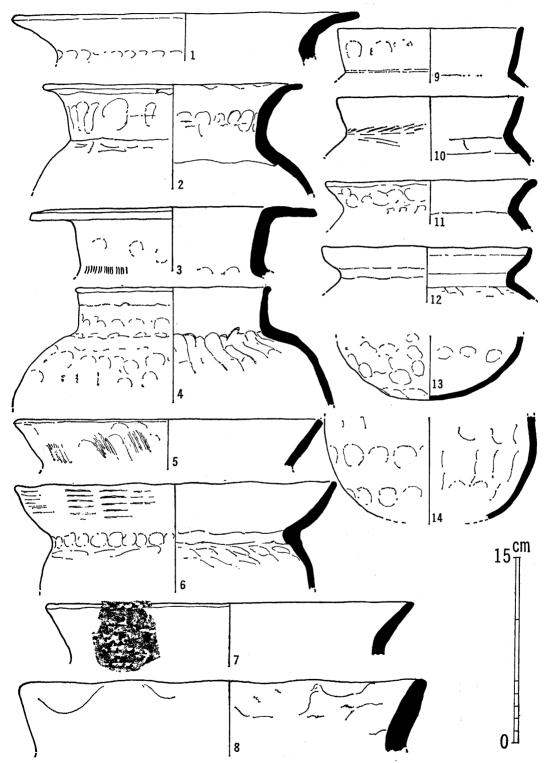


図114. 師楽的土師器 (2) (W5=1・3・5、X5=8・10、Y5=12、X6=4・6・9・11・13・14、Z8=2、第IV地点=7)

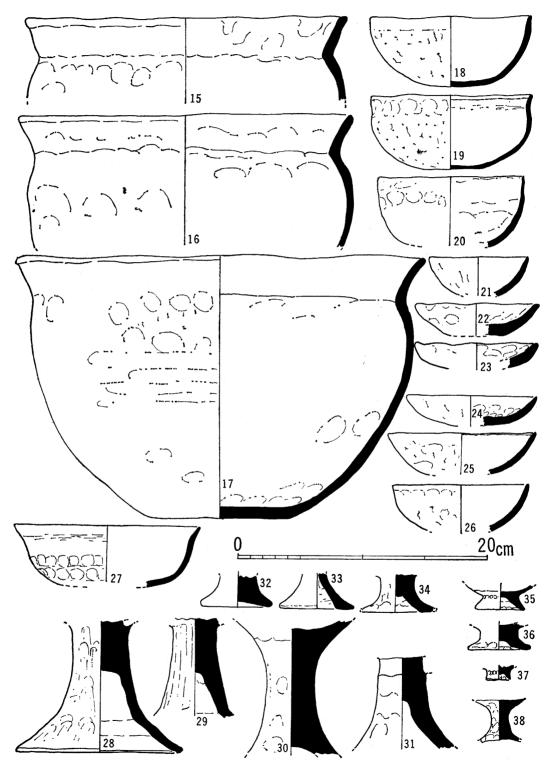


図115. 師楽的土師器(3)〔15~34〕, その他の製塩土器〔35~38〕, (W5=20・21・33、 X5=19・22・25・37、Z5=32、X6=18・23・24・30、Y6=35・36、Y7=27、 Z7=29・38、X8=31・34、Y8=28、第IV地点=15・16・26、E建物南=17)

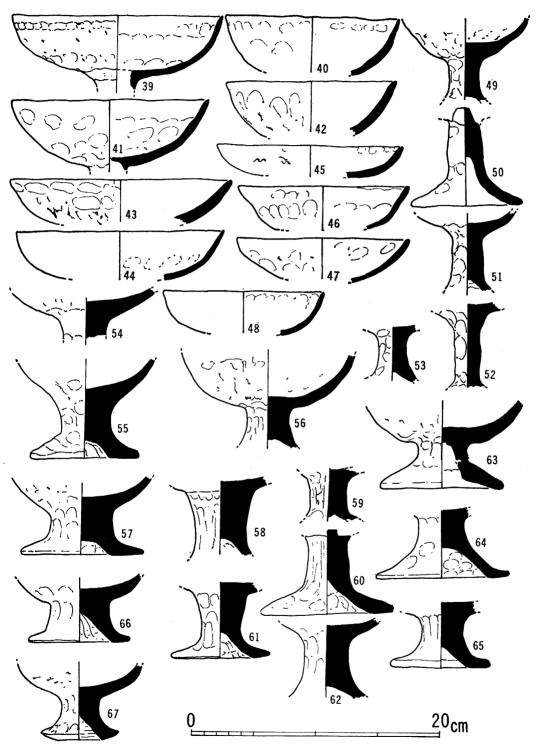


図116. 師楽的土師器 (4) (X4=47、Z4=52、W5=51・56・57・63・64・66・67、X5=60、W6-7=48・62、X6=44・45・55・61、Y6=54、X7=53・65、Y7=40・49・50、X8=58、Y8=41、第皿地点=42・43、第Ⅳ地点=39・46・59)

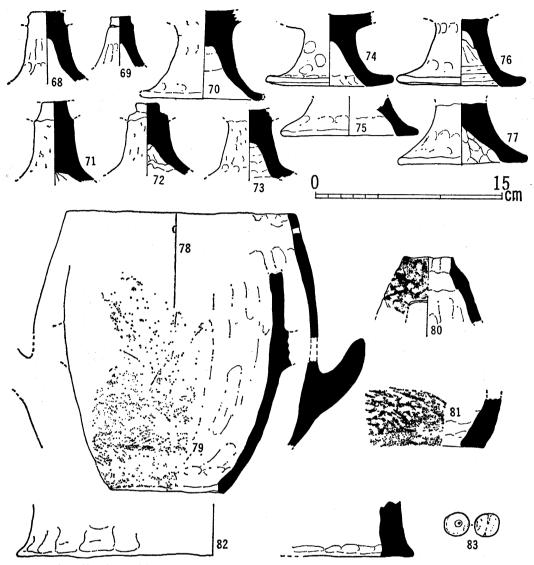


図117. 師楽的土師器 (5) (L=78・79、W5=72・73・75・80・83、W6—7=76、X6=77・81、X7=69・71・74、Y7=70、Z7=82、X8=68)

上げるとなると、両者の間に、いか程の差異があるのか、疑問視される面も多いであろう。

図113の(9)以下も、(8)以前のものも全く同じ土質で作られ、指圧痕も激しく、また、叩き目さえ共通するものがある。しかし、この両者を分かったのは、(8)までに見られた器形のものは、既に記して来た通り、何等かの形で製塩にかいわる(たとえそれが塩の容器であっても)ために製作された土器群と考えられたのである。ところが、(9)以下の器形は、一般的な生活に関わって作られた、同時代の土師器の中に現われる器種の変化のうちにすべて含まれるものである。これらの土器が、土質・作りが、全く、師楽式土器そのものであるため、従来は、この種の土器は、しばしば、師楽式土器と呼ばれて来たが、これらの土器が、製塩土器の示す特性、即ち、同形態のものが大量に存在するとか、二次的な火を、すべてにわたって受けているとか、の特性を示さないのである。

むしろ、作り、土質とそ、師楽式土器と同一でありながら、一般生活に用いられる土師器類の出土状況と同じ状況で存在するのである。こうした実態から見て、たとえ作りが同じでも、この種の土器を製塩土器と同一視することは、土器製塩の理解を混乱さすことになるのである。

一方、同一遺跡内では、同時的に、普通の土師器も存在しているし、もちろん須恵器も多数存在している。用途としては一般生活に用いる土師器、須恵器と全く同じでありながら、作りが師楽式製塩土器と同じであるということで、この種土器を土師器と区別する理由はないのだが、製塩遺跡であり、師楽式製塩土器を身近で生産し、使用している集団であるからこそ、同時に生活に使用する土師器類も、同一の胎土や技法で製作しているのである。この特殊性を示すために、「師楽的土師器」という分類を土師器より別にもうけたものである。これは同時に、この種の土器を、製塩土器と同一視することへの注意とするためでもある。

同一図中に、「類製塩土器」と「師楽的土師器」を示したのも、両者が、破片であれば区別がつけ難い程、似たものであることを示すものである。そのため、(9)以下に示したものム中にも「類製塩土器」に含まれるものがあるかも知れない。たゞ、(9)以下の多くは、土師器の中に見られる、手ずくねの小形坩とか、椀形品とか、坩とか、と同種のものと思われるものであった。これらの土器の出土状況は製塩土器と各地点で混在するが、この状況は須恵器も同じである。

図 114 の全ても、図 113 の (9) 以下と同様で、師楽的作りの甕であり壷である。図 114 の (6) などは、口縁周辺に平行叩き目を持ち、 (7) は 小半月形の 凹み文様を示す叩き目が 付せられている。 特に (3・5・10) などの様に 一般土師器の整形に用いられるような 刷毛目が 見られるものもある。

図 115 も前図に続いて、 師楽的 土師器で、 甕形 (15) とか、 或いは鉢形 (16・17) や、 浅い椀形 (18~20・27) や坏形 (21~24) また高坏の坏部の可能性もある (25・26) など、さまざまな器形を示している。

(28~34)までは、それぞれ異なった作りや形状を示しながらも、一般的な高坏とか、台付の鉢とか甕の台脚と見られるものである。器壁には指圧痕や、きれつも多く、形も不整形で、時には、再度火を受けたかと思わすような赤色を呈するものすらあり、これらの土器を一般の土師器と考えるより、製塩土器と考える方が、はるかに理解しやすい外見ではあるが、やはり、全体量の問題があり、同時に明確な同一規格の製塩土器群が大量に存在する限り、これらを製塩土器と即断は出来ないのである。

(35~38) の台脚については、すでに、製塩土器として説明した。

図116 (39~67) も、上記するものと同類であるが、全て高坏形になるものと思われる。これらの中には、(49・51・52) などのように或いは図115の(38)で示した、長い台脚の付く、瀬戸内西部の製塩土器ではないかと思われるものも存在するが、現状では、他の高坏と区別は出来ない。

図 117 の (68~77) も 台付土器か、高坏の脚部である。 (78~82) も 全く師楽土による師楽式土器 的な作りであるが、 (79) は底がすべて抜け、把手付の「こしき」である。外面に製塩土器に見られる矢羽根状の叩き目を持つのが注目される。 (78) も口縁部に小孔を持つが (79) と同様のこしきと見てよであろう。 (81・82) は厚く大形で、共に、くどの基部と思われるが、 (81) には外面にこれ も師楽式製塩土器に見られる格子叩き目を有している。

- (80) は師楽土による手ずくねで、不細工な粗雑な作りではあるが、よく見ると、くどのミニチュアである。外面には、格子叩き目が見られる。こうしたミニチュアはむしろ、祭祀址とか墳墓に付随するものが多いが、製塩遺跡周辺では、時に、祭祀に使用される手ずくねの小坩とか、小さい土製のスプーン状のものなど出土する例もあり、こゝでも図113の($9\sim12$)などに見たような小坩形品とセットで考えねばならぬものであろう。
- (83) は、師楽的土師器と同様な土で作られた径2cmばかりの土玉である。表面はほゞ球状に作られているが、あまり丁寧な作りでない。 孔も斜めになり、 両側からあけられた様子だが、 一方の側は、きわめて細い孔で、現状では貫通し得ない状況で、特に孔を通す努力がされてないものである。 こうした土玉も、 (80) のくどミニチュアなどと共に、祭祀用と思われる。

以上、土質、作りは師楽式製塩土器と同じでありながら、一般的な土師器に共通する各種類のものが製塩遺跡にはかなりな数存在することを図示したものである。

五、土師器

1) 古墳時代の土師器(図版第三十四、図118~120)

先に記した、「師楽的土師器」が、土質・外見ともに、師楽式製塩土器ときわめて似ており、小片では両者の区別がつき難いものが多いのに対して、こゝに記載する土師器類は一般的な古墳や生活址から発見される土師器と同一で、師楽的土師器とは明瞭に区別出来るものばかりである。土質は、たとえ砂粒をかなり含むものがあっても、全体にきめが細かく、外面の作りは丁寧である。坩形品には指圧痕を見るものはあっても、土質が全く師楽的なものと違っているし、他の器種には一般的になで整形とか刷毛目整形が多い。これらの遺跡における出土状況は、師楽的土師器と同様、製塩土器と共に全地域に広く包含されているものであった。

図 118 に示したものは、壷・甕・坩・椀などである。器種の変化は、師楽的土師器と同様で、これに示す土師器と師楽的土師器が、それぞれに特に、何等かの器種に偏して使用されていたというような傾向は 見られない。(12)のように 口縁部に径 5 mmばかりの 孔を持つ無頸の 壷形品は類製塩土器(図 112 の(12・13))に見られたものなどにも似ており、一面では類製塩土器の中にもこうした一般土師器と器形の上では共通する面も見られるといえる。(22)の手ずくねの小坏は、土質がきめの細かいもので、師楽的なものとは異なっている。

図119のものも、そのほとんどが、高坏の坏部と脚部と思われ、水漁土を使用した赤褐色のものが多い。図120は、こしき(58・59)、くど(69)のほか、把手部分(60~68)を例示した。このような把手は、他にも相当数存在し、こしきか、鍋の用途となる把手付甕がかなりな数、存在していたことを示している。

(57) は褐色で、細かい砂粒はかなり含むが、薄く丁寧な作りをした深鉢形であり、口縁下に、ヘラで、斜平行に記号的な線書きが見られる。 (70・71) は鉢形になると思われるが、或いは (70) は高坏に、 (71) は台脚が付く形になるかも知れない。 (71) の外面整形は、刷毛目である。

以上のすべてが多くの製塩土器とか、須恵器と混在し、それぞれの器種の中に多少の時間差が認められるとしても、特に分類出来る状況でもなく、すべてが、6世紀後半を中心とする前後のものであろうと思われる。

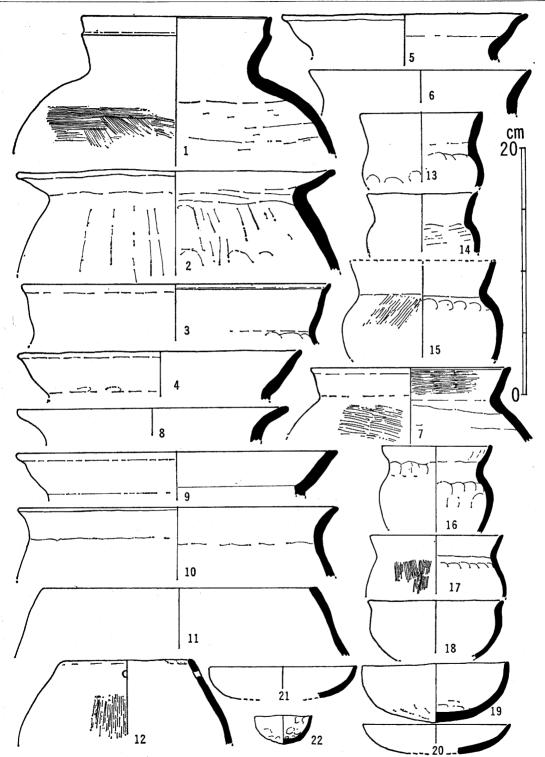


図118. 古墳時代の土師器(1)(E9=7、W5=3・4、X5=17、Y5=20、X6=2・6、 Y6=1・5・11~13・18・21、X7=15、Y7=14・16、X8=8・9、Y8=10、Z9=19、 E建物南=22)

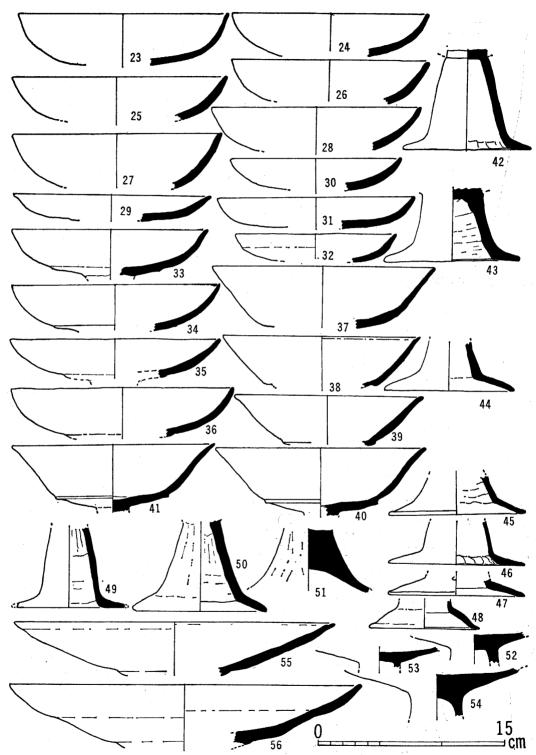


図119. 古墳時代の土師器 (2) (K0=55、Y1=45、Z3=43、W5=27・28・34・35・42・46・52、X5=23・24・37・48・53・54、X6=30・36・49・50、Y6=25・26・29・33・51、X7=31・32、Y7=38、Z7=56、X8=39・40・44・47、Y8=41)

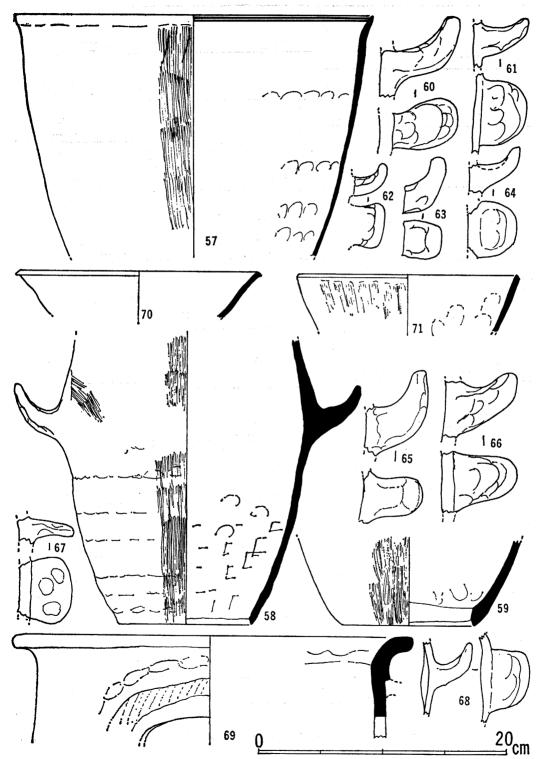
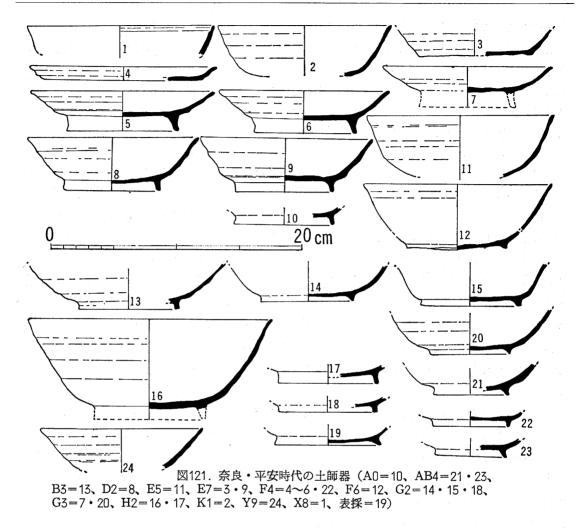


図120. 古墳時代の土師器(3)(F0=59、K1=58、Y1=66、X6=57、Y6=67、Z6=63・64、 X7=68、Z7=65、Y8=60~62、Z9=70、第IV地点=71)



2) 奈良・平安時代の土師器 (図版第三十九の (1~4)、図121)

図 121 に示した、坏又は椀形品は、すべて土師質であるが、古墳時代土師器に比較すると、出土量は大変少い。 このうち図 121 の(13~23)は、黒色土器の一種、内面のみ黒い、いわゆる内黒の土器である。

(1~12)のうち、(1)以外はすべて第 I 地点出土である。(1)は X・8 区 3 層出土、褐色を呈し、土質はきめが細い。口縁内側に凹線状の部分がめぐり、内外面ともなでる整形で、外面に丹塗らしい痕跡が見られる小片である。8世紀のものであろうか。同じ区で出土した 須恵器(図 130の(31~33)など)と関連する土師器であろう。

(2~12)はほとんどが第 I 地点の 3 層出土であり、中に 4~5 層出土のものが僅かにある。第 I 地点の 3 層は、区によって多少の差違はあるが、大体に古墳後期後半の製塩土器や須恵器類と、古代後半から中世の遺物が混在している。 こ 1 に図示した土師器は、黄褐色~褐色を呈し、特に外面に、ろくろ目を思わす凹凸が顕著であるが、底には糸切りあとはなく、へ ラ切りあとも明瞭でない。 たゞ高台の付く底部近くにへ ラ削りあとの見られるもの (5・6) などはある。底の内外面には、むしろ

指圧痕の見られるものがある。高台はすべて貼り付けで、高低の変化がかなりある。

また (13) 以下の内黒の土器についても、個々検討すると色調や硬さについても、かなりな違いが見られる。外面が褐色を呈するもの (13) などもあれば、灰黄色を呈する (16) などもあるが、全体として、黄褐色が多く、胎土は軟質である。それぞれ内面は、かなりみかがれた感じは受けるが磨滅も多く、全体的には媒けた黒色を呈すだけの外見である。しかし、 (20) などは外面が淡い褐色を呈し、きめの細かい胎土で丁寧に作られ、硬質な感じを与えるもので、内面の黒色部も横に細かく磨かれたような痕を示し、かなり光沢も見られる。

こうした内黒土器のすべてに、貼り付け高台が付き、高台の形も、かなり高く、断面形が長方形を示すものから、低い三角形断面形のものまで、さまざまである。また坏部には、ろくろ痕を思わすような凹凸がめぐっている。しかし底部には、ヘラ切り、糸切の痕跡は見られず、むしろ、なで痕や、指圧痕が、わずかに見られる。こうした状況は上記した(2~12)の土師器と軌を一にするものであろう。この僅かな資料でもって当地方の内黒土器(黒色土器)の作りに関して、むやみと言及することは、むしろ間違いを犯すおそれのあること、思う、従来まで周辺では、多少の出土例を耳にしながらも、ほとんど報告を見ていない器種であるため、当地方の土師器へ「ろくろ」使用が採用される時期とか、その意味するものと共に、こうした内黒土器の採用も考えねばならない問題であろう。

これらの内黒の土師器も、(24)が第Ⅱ地点出土である外は、すべて第Ⅰ地点出土で、前述した一般的な古代の土師器と同様、3層出土が主体であり、内黒土師器も一般的な土師器も混在する状況であった。

以上の土師器類は、他の遺物に比較すると、出土数も少なく、同層中には、既に記した通り、奈良から平安期全体にかけての須恵器とか、緑釉、灰釉陶が僅かながら包含されており、層位、地点によって区分出来る状況ではない。

こゝに記述した土師器は、(1)が奈良時代を思わす以外は、昨今、各地の調査で出土する古代土師器が、地方差の大きい作りや形態を示していることから、当遺跡の周辺地域で、この頃の明確な時代を示し得る資料が明らかにされていない現状で、僅かばかりの本遺跡の資料で、細かく時代を考えることは無謀であろう。たゞ、岡山県内での国府とか寺院址の近来の調査を通じ、全体的な様相としては当地方で、ろくろ痕を思わすような土師器類が、少なくとも平安時代中頃以降には存在すると思われ、これら土師器も、ほゞその頃以降を示すとして矛盾はないであろう。

また、内黒の土器も、かなりな時期巾を示すと思われるが、例えば(16)のや1大形のものが、隣接する広島県福山市ザブ遺跡(註3)で、11世紀頃と推定された土器群の中に含まれたものと、きわめて似た形態と作りを示すことから、これらは平安末期を示すものであろうか。また内黒の土器の中には、外面もや1媒けたような褐色を呈するものはあっても、内面同様外面も黒色を呈するものは一点も見られなかった。他地域で瓦器と称されている種の土器類も、中世遺物をも相当量出土したこの遺跡では全く発見されていないのである。こ1で示した内黒の土器自体、全体として平安期のうちに存在したと考えてよいものと思われる。

当遺跡では、奈良・平安期の資料が大変少ない状況であったが、少くともその中で、一定量の内黒 土器を見たことは、従来、当地方で報告例の少くない器種ではあったが、今後の発見例は増加するも のと思われる。しかしその使用された期間と言うものは、あまり長期にわたるものでは無かったと**予** 測される。

六、須恵器(図版第三十五~三十七、図122~130)

この遺跡では、製塩土器を多量に出土した地域で、須恵器の出土量もまた多かったことが注目される。これに図示した須恵器に、同形態のものがいかに多数存在しても、全体から見れば、その量は一部に過ぎない。この事は図示された製塩土器の場合と同様であり、全量の少ない奈良・平安期の遺物との扱い方とは異っている。なお、奈良・平安期と思われる須恵器類は少量のため、特に古墳時代と分けて記すことなく、須恵器として、これに一括記載している。

図 $122 \sim 125$ は、すべて蓋坏である。その多くが、製塩土器層の、厚く広く拡がっていた第II 地点出土のものである。図 122 のものは、大小差があるが、平均的には、坏の身で口径13cm 前後。身・蓋とも口縁端内面に一段、細い凹部をめぐらすくせを持っており、身の口縁立ち上がりは一定の長さを持って、かなり立ち上がっている。

出土地点は、個々について違いは見られるが、図示した30個体中、10個体が第Ⅱ地点の各区の3層 出土であること」、それも特にX・8区、Y・8区などであることが注目される。

図 123・124 の一群の蓋坏は、図 122 の一群と明確に 区別出来るものではなく、変化は暫進的であるが、全体としては、口縁端の内面に見られた線が、不明瞭であったり、無くなるものが多い。大きさについては、身の口径は約13cm前後で、図 122 と大した違いは見られない。これらの土質には、きめ細かいものと、やり砂粒の多いものなどの違いがあり、この傾向は 須恵器全体に 見られるものだが、胎土とか、僅かな作りの特徴などで分類出来る程の状況ではない。これらの図中に示した蓋・坏は外面のへラ削り部分が多く、身では、受け部の直下、蓋では、屈曲部の付近にまで達することも多い。坏内面底部に、時に同心円叩き目を残すもの(図123の(15))などもかなり存在する。

なお、これら坏形品の中での身の部分で底部の無いものに関しては、或いは高坏の身となるものを含むかも知れない。また、須恵器坏全量から見て、この図123・124に示したタイプが圧倒的に多く、ことに示したものは第I・第II地点を問わず、製塩土器と全く混在して、相当量出土した。特に製塩土器包含層は圧倒的に第II地点の方が濃密で、広い範囲にわたったよめ、図示した須恵器も第II地点が主体になった。

図 125 の一群は、全体としては、坏身のかえりが短かくなり、内傾したものである。口径の広いものは、身で12㎝前後であるが、口径9㎝前後の小形となる一群もある。全体に、外面のヘラ削りは底面近くだけとなり、小口径のものは、ヘラで切り放したまいのものも多くなる。

こゝに図示した坏群の多くは図 123・124 に示したものと同様に 第Ⅱ地点出土のものが多いが、全量から見ると、図 123・124 に図示したものはその一部分であるのに対し、この図のものは、存在すれば出来るだけ図示することを意図したもので、量的には少ないといえる。

これら図 125 の出土地点は図 123・124 のものが、 製塩土器の存在する 全域に広がっているのに対し、多少特徴的な存在の仕方を示している。特に口径の最も小形のものは、第 I 地点に集中している ことである。 (23~29) までは すべて 第 I 地点である。 また、 第 I 地点 でも、 I でも、 I でも、 I でも、 I でも、 I のあたりにも、 I の時期の包含層が僅かながら認められたのである。

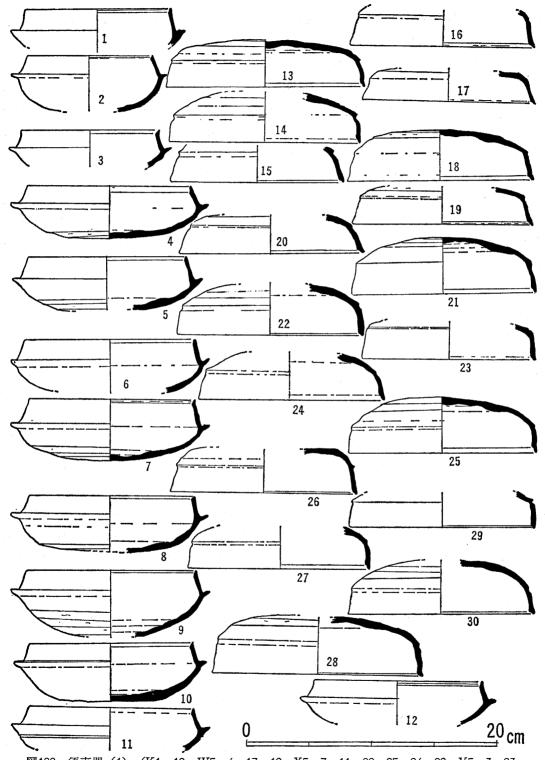


図122. 須恵器 (1) (K1=12、W5=6・17・19、X5=7・11・22・25・26・28、Y5=3・23、Z5=2、W6-7=1・5・20、X6=8、Y7=24、X8=4・14・16・18・27、Y8=15・21、Z8=29・30、Z9=9・10、第IV地点=13)

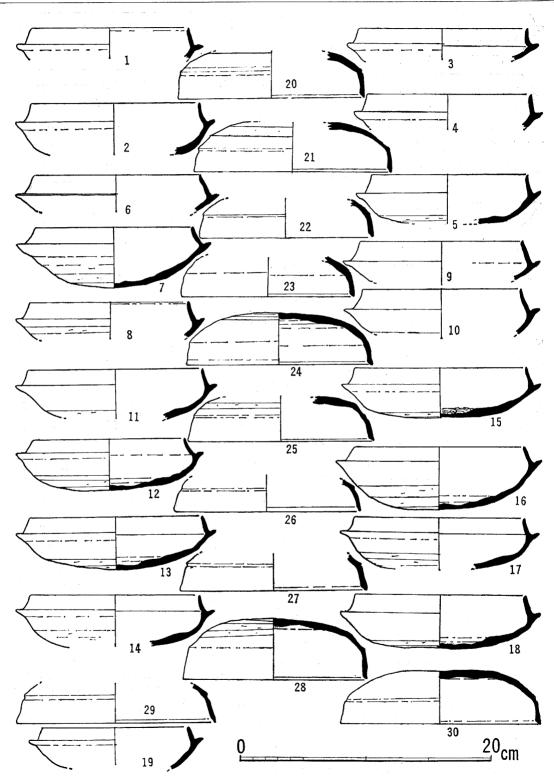


図123. 須恵器 (2) (X4=1~3·20·21、W5=7~10·23、Z7=28、X8=5·6·22、 Y8=4·18·19·29·30、Z8=27、Z9=24、第IV地点=11~17·25·26)

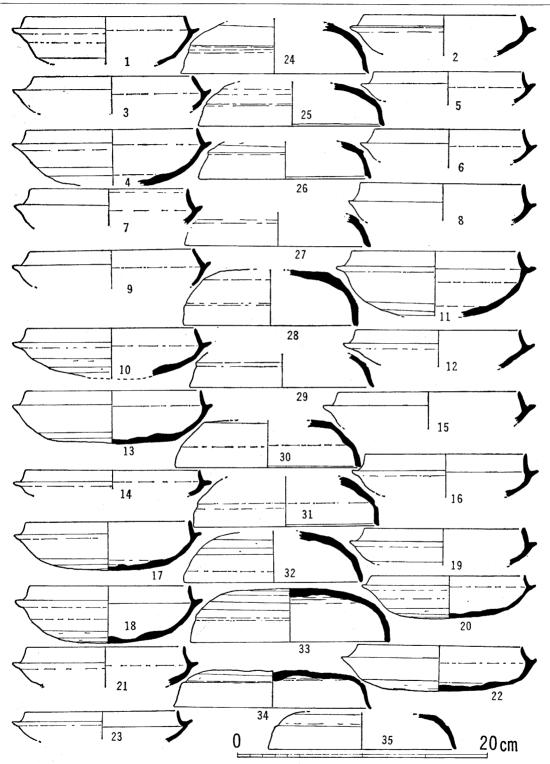


図124. 須恵器 (3) W5=33、X5=4・6~9・11・26~28、Y5=3・5・25、W6—7=35、X6=34、Y6=16・21~23・30・31、Z6=14、Y7=17~20・32、Z7=13、X8=15・24、Y8=1・2・12・29、第Ⅳ地点=10)

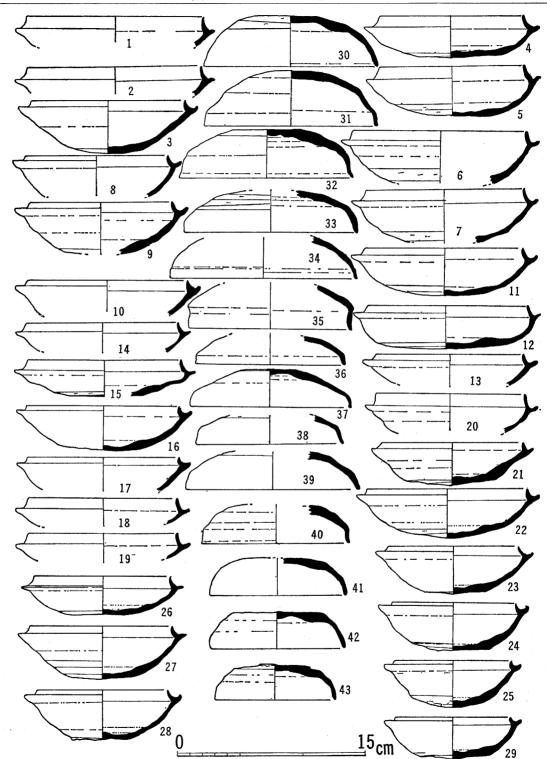


図125. 須恵器 (4) (A1=29、C2=22~25、L=26・27、W5=8~11・33・40、X5=21・32、X6=15・36~38、Y6=16~19・39、X7=12・13・34、Y7=14、Z7=31・42・43、X8=3・35、Y8=20、Z8=1・2、Z9=41、第Ⅳ地点=4~7・30、B建物=28)

図 126 は高坏、又は台付土器を集めたものである。高坏の脚部と思われるものには丈が低く、台脚柱はかなり太く、脚端に立ち上がりを持ち、長方形や円形のすかし孔があるものから、脚柱が長く、二段すかしを持つもの、脚柱上端は細いが、すぐに裾広がりになる低い台脚で、すかし孔の無いものなどとさまざまである。

脚部に続く坏部は少ないが、これも脚部と同様にかなり変化があり、坏部に段を有するもの、単に 椀形状になるものなど見られる。口縁端にかえりのある坏部も概報に図示(註4)したので再録して ないが、第 I 地点 A・1 区 4 層より出土している。また、破片であると坏との区別が困難で、坏の中 に入っている可能性がある。

これら図示した高坏類も(22)が、第I地点付近で、調査前校舎建設時に採集されたものであるのと、(37)の完全品が、第I地点A・1区出土、(17)がE・3区3層出土である以外は、G×第I地点の各区に存在している。

図 127・128 は壷、甕類である。 これらにも、大・小の差が多く、口縁の作りにも変化がかなりある。しかし、口縁部とか、頸部に、櫛目による波文とか、沈線などによる文様は見られない。たゞ図 128 の (34) の壷の頸部に記号状のヘラ書き線が見られるように、他にも、簡略なヘラ書き線を持つ小断片が若干存在した。

大形のものは口径約25cmぐらい、小形のもので10cmくらいのものも見られ、無頚壷もある。

以上の須恵器類を通じ、特に最も多い蓋坏の形態などから見ると、これらの中で最も古いものは、 たとえば大阪府の陶邑窯址群を参考にすれば、I期の中で最も新しいタイプのものとされるものが僅 か存在するかも 知れないが、II期とされる中で最も 古いタイプに属すると 思われるもの いようであ る。この傾向は高坏でも同様であろう。

全体的に最も多いもの」主体は、陶邑でII期とされたタイプ全体にわたっており、特に、II期でも 3~5期と思われるものが多い。それはまた、各地の群集墳出土の数多い須恵器の時期でもあり、一般的に 6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられている時期でもあろう。図 125 に示した 坏類のうち、特に小形坏類は、これらの中では最も新しく、II期の中では最終末で7世紀前半と考えられているタイプのものである。高坏にしてもこうした全体的な傾向の中にあり、壷・甕類にしても同様であるが、時期的にやム下るものも同一図中に含まれている可能性はある。

続いて図 129 に記載したものの中にも図 128 までのものと同時期のと思われるものは多く、一緒に検討を加えなければならないのではあるが、器種が多様で、しかも出土例の少ないものであるため、各期のものを時代を無視して集めたものである。また小断片の個々遺物について、時代を正確に与えることは大変困難であるが、一応、目安的なつもりで記すものであり、細かい年代観は実際には与えられるような資料ではない。

(1) の坩形品断片は肩に稜を持ち、奈良時代以降のものであろうか。(2)の提瓶は頚部にヘラ書き記号を持ち、把手は、や\退化を示しながらも環状を示す。(3)は、はそうの口縁部と思われ、(4) は同じくはそう胴部であろうと考えられるが、胴の孔の部分は欠損している。これら $(2\sim4)$ のものは、陶邑 Π 期とされたもの Δ 中にすべて含まれるものであり、(1)とはその点異なってい

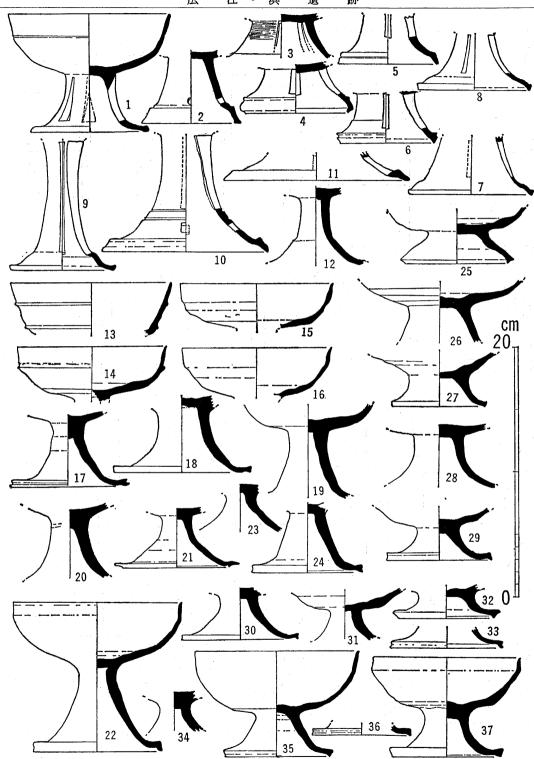


図126. 須恵器(5)(A1=37、E3=17、Y2=21、Z3=9・19・24、X4=10・11・23、W5=8・14・15・27・28・31、X5=1・2・16、Z5=3・4、X6=35、Y6=18・33、X7=6・13・32、Y7=5・7・12、X8=26・34、Y8=20、Z8=36、第Ⅲ地点=29・30、第Ⅳ地点=25、B建物=22)

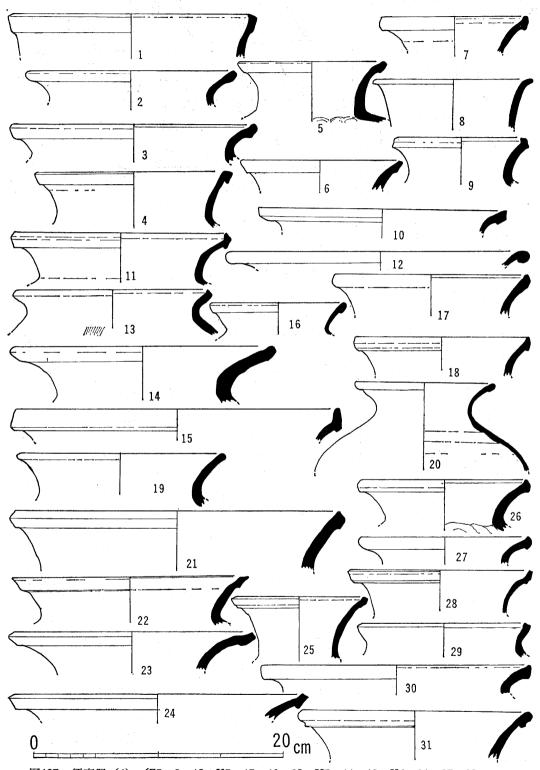


図127. 須恵器 (6) (Z3=9・10、X5=13~18・20、Y5=11・12、X6=21・27・28、Y6=22~25・29・30、Z6=31、Y7=19・26、X8=4~8、Y8=1~3)

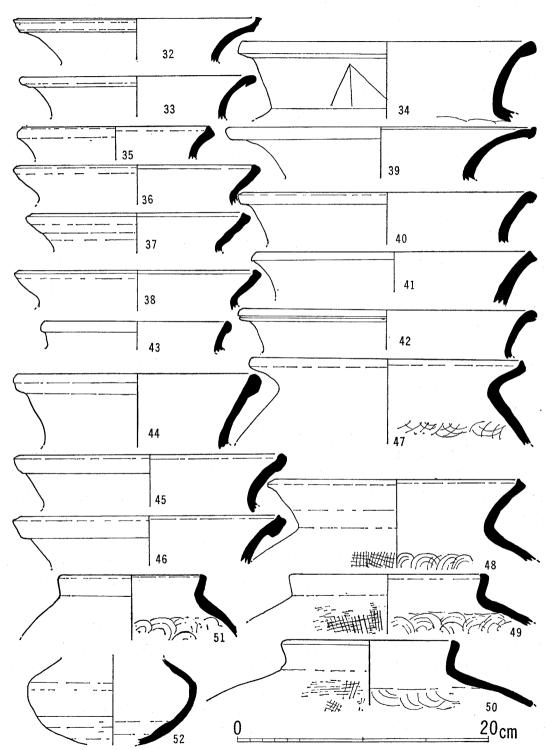


図128. 須恵器 (7) (Y3=40、X4=41、Z4=51、W5=33・34・36~38・45、X5=52、X7=42、Z7=43、Z9=32・35・39・47・49、第皿地点=44・50、B建物=46・48)

る。(7)は蓋のつまみであるが、この形も(2~4)などと共に、陶邑のII期とされるものょうちにある。(5・6)とか(8~11)までの蓋類も、実は小断片であり、大きさとか、蓋・身の区別はあまり正確とはいえないものもある。これらの中には、或いは宝珠形のつまみの付く、7世紀代のものも含まれているかも知れない。

(13・15) はおそらく平瓶の口部と思われる。(14) は平瓶把手部であろうが、奈良か平安期に下るものであろう。(18) の環状把手は提瓶の環と思われ、6世紀代のものであろう。しかし、(16)は(17) の壷形品に把手が付くものと同様のものと見られるが、(16)の方は、肩部に稜を持つ器形となるらしい。(19) 耳付瓶形品であろう。これらは小断片ながら、おそらく、奈良期や平安期を示すものであろう。

(20~22) は、やゝ大形の長頸壷や壷などになる器形の底と思われ、やゝ外方へ広がったしっかり した大形の高台が付いており、これらは7世紀後半から8世紀でも初めの頃までのものであろう。

(23~26) は、こしきと考えられるものである。(23)は残存部の形状からだけでは底部すべてが無いか、孔を作る形のものか不明である。(24)と(26)は、底部に大形の長楕円形を思わす孔が少なくとも6か8個切り抜かれているように思われ、(25)は小部分だが、或いは十字形の底を有するものかも知れない。陶邑などではこの種の須恵器こしきは、I期に伴うものなども発見されているが、この遺跡では(23・25・26)の3点が第I地点の3層出土で、6世紀も後半のものか、或いは奈良時代から中世のものを主体にした処であり、(24)が出土した第Ⅱ地点のY・8区2層も特別に薄い製塩土器(図 111)が一括発見されたところであり、複雑な様相を示している地点である。こうしたことから、これら須恵質「こしき」の所属する時代は、他の遺跡での類例に従う以外、こムでは明らかに出来ない。

(27) は、6世紀後半から7世紀にかけて見られる底部の分厚い鉢形品の部分であろうか。

(28・29) は共に高坏形品であるが、(28) は長い筒状の脚柱であり、灰白色のやム砂粒の多い土質で、多少粗雑な作りを示し、脚柱内面は粘土のしぼり目が明瞭である。(29) はきめ細かい上質の土質で、細かく面とりされた細い柱状部の上に、暗緑色の自然釉が流れている。奈良時代から平安初期頃のものであろう。

図 130 にまとめたものは、先の図 125 に続く時期の蓋坏類が主体をなしている。特に(1~30)に関しては、蓋にはかえりを持たず、宝珠か、平らなつまみを付けており、坏部もかえりは無く、平底となって高台を付けるものである。 7世紀から8世紀にかけて一般的に見られた 坏類と言えるだろう。

(31・32) は、大形の高台付盤形品で、(31) は薄い作りの口縁端部は外方へ、僅かに引き出されているが、(32) は、しっかりした高台の上に、底との稜を持って、口縁が直線的に上方に開いている。(33) も(32) に近い形態のものと思われる。これらも、奈良時代から、平安時代で初期のものであろう。

(34~36) の 3点の皿形品は、灰青色で、かなりきめ細かい土質で、薄く作られており、すべて回転糸切底である。 3点とも第 1 地点出土で、平安期の緑釉や 灰釉などと共に 考えられる遺物であろう。

(37) は胴部が、やゝ内彎する器形のものゝ底部で、ヘラ切り放しのまゝである。皿に比べると、

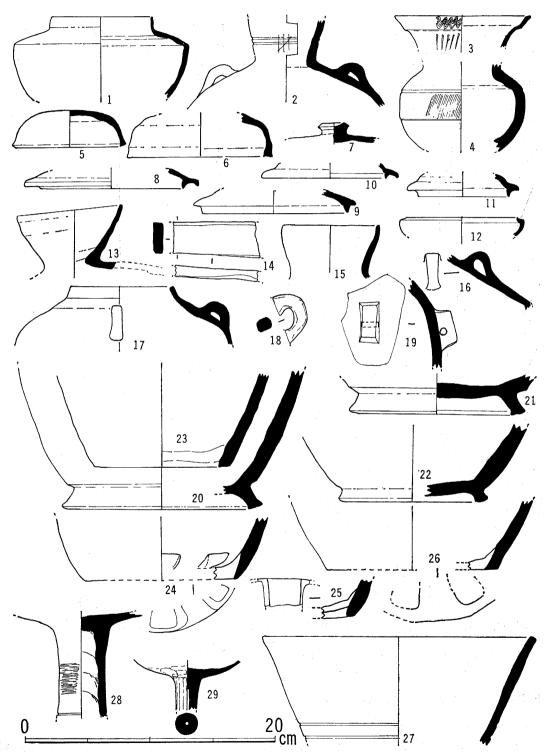


図129. 須恵器 (8) (AB4=1、D2=29、E3=12、F0=25·26、G0=23、K1=27、Z3=20·22、 X4=4·10、Y4=28、W5=2·6·7·9、W6—7=13、Y6=8、Y7=3·15、X8=18、 Y8=5·17·24、Z8=11·19、Z9=14·16)

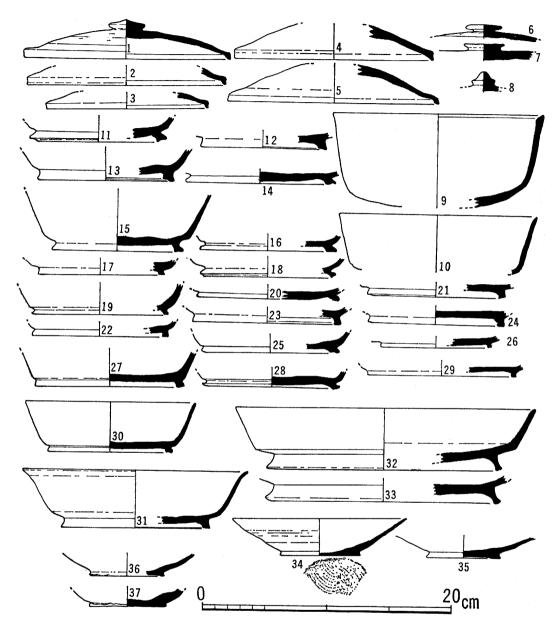


図130. 須恵器 (9) (D3=36、E3=8・37、E7=14、F7=9、G3=34、K1=35、Y2=3、 X3=13・27、Y3=28、Z3=7・10、X4=30、X5=5、Y6=11・12・26、X7=21、Y7=1、 X8=6・20・31~33、Y8=2・16・17・19・22、Z8=25、Z9=23、第Ⅲ地点=4・24、 第Ⅳ地点=18、表採=15・29)

土質は荒いが、皿類と同時期のものと思われる。

七、緑釉・灰釉陶器(図版第三十八の(1)、図131)

この遺跡で発見された緑釉と灰釉片は、全遺跡の中で、とゝに図示したものだけである。これらの 遺物はすべて第 \mathbf{I} 地点に属するものであった。

図 131 の (1~4) は緑釉陶片である。 (1) は、第 I 地点のD・7 区 2 層と 3 層から同一個体が

出土した。D・7区2層は「億」の字を彫った土錘(図 139)を含む、一括の土錘や内黒土器の出土 した地点でもある。小片であるが、復原すれば口径15cm弱の皿形品で、削り出し高台の中をくり取っ た、いわゆる蛇の目高台が付く。胎土はきめの細かい黄白色の軟質なもので、明るい緑色の釉が高台 部分までもかくっているが、現状では表面剥脱をおこしやすい状況である。

(2) は同じく I 地点のD・2区3層出土で、この層では平安期と思われる須恵器皿(図 130の (36)) や内黒土器等も出土しているが、古墳時代後期の製塩土器・須恵器の出土もかなりある。

胎土は、緻密で、灰白色を呈し、硬質である。釉は、黄緑色で、薄く全面にかり、部分的に黄色の発色が斑文状に見られるが、意図的に、釉をかけ分けたものとは思われない。二度焼の緑釉と見てよい。

(3) は第 Π 地点Z・6 \boxtimes 1層出土である。 \mathbb{C} 1に図示したものはすべて第 Π 地点に属すると記したのは、第 Π 地点の1層は、繰返し述べて来た通り、むしろ Π 地点に属する土層であると考えられるからである。 \mathbb{C} 2の緑釉小片も、まず、第 \mathbb{C} 3 地点に近い位置から運ばれたものであろう。小断片だが小壷か、或いは小形の椀、皿状品の高台部であろうと思われる。

胎土は白色だが、断面で見ると内部は黒灰色の瓦質を呈し、その上に、やゝ濃い緑色の釉がかゝる。かなり濃いといっても濃緑の暗色系でなく、むしろ明色系の緑である。現存底面全面にかゝっているが、内面の状況は高台だけであるため不明である。

(4)は、(1)と似た器形だが、やゝ深く椀状になるものであろう。高台はやはり削り出して、高台底部は剥脱部分が多く明瞭ではないが、蛇の目高台と思われる。黄白色で軟らかく、きめ細かい胎土の上に、淡い黄緑色の釉が高台部を含め全体にかゝる。胎土の感じは(1)に似ているが、釉は、(1)の緑色の鮮やかなのに比較すると、これはむしろ淡い黄色に近い感じである。

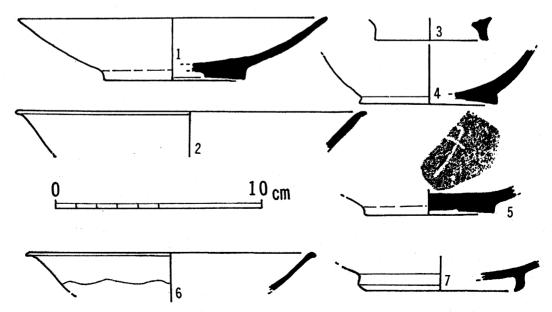
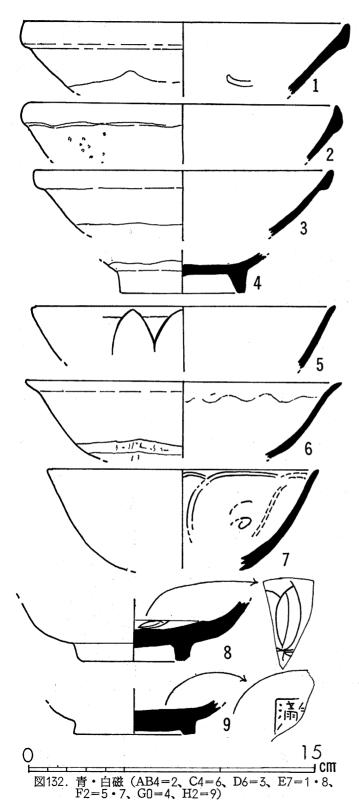


図131. 緑釉・灰釉陶器 (B1=4、B2=5、D2=2、D3=7、D7=1、K1=6、Z6=3)



この土器片で注目されることは、 内面底部に線彫りで文字の部分と思 われるものが見られることである が、元来の文字が何であったかは判 明しない。いずれにしても、この種 土器で、文字らしいものが見られた 唯一の例である。もしこの土器に緑 釉がかけられていたとすると、文字 はその下に彫られていたことにな る。

(6・7)は灰釉陶である。共に第 I 地点出土である。(6)は薄い器壁の浅い皿状品であろうが、小片のため詳細は不明。胎土は、灰白色だが、白色に近く、むしろきめが荒いともいえる細砂を含む土質である。薄く、灰緑色の灰釉がかいるが、釉は小斑状のむらになり、外面は、口縁端より 2 cmばかりのところまでかけられている。

(7)は(6)よりはるかに胎土はきめ細かく硬質で灰白色ながら、灰色が強い。釉は(6)同様、薄く、灰緑色の灰釉で、内面は散った様な状況で、特に底の部分にはほとんど釉は見られない。 この内面は器面が大変平滑である。外面は高台外面に薄く、部分的に釉が見られるだけである。

高台は貼り付けであるが、全体に薄く作られ、底面に当る部分は斜めに削られ、平滑に仕上げられている。硬質の焼きと相まって薄く、シャープな作りを示すものである。

緑・灰釉共で、僅かて \ に図示したゞけの小断片資料しか存在しなかったが、他の同地点出土の土師器、須恵器と共に、一定の時期を示すものであろう。たゞ、あまりに小断片で、個々検討し、その時期をきめ得るものでなく、(1)の緑釉が、一般的に9世紀以降に出現した形態と見られるものであり、全体として平安期のうちにあるものという点で一致しているといえる。

八、中世の土器・陶器・磁器 (図版第三十八の(2)・三十九の(2)・四十の(1)、図132~134)

1) 青・白磁 (図版第三十八の(2)、図132)

全体の出土量はあまり多くはないが、特に第I地点の中世を主体に出土する層位では、青・白磁の小片がしばしば包含されていた。ここに図示するものは、すべて第I地点出土品であり、第I地点で出土例がほとんど無いのは中世のよい包含層が第I地点に存在しないためである。

(1) は、口縁部を外に肥厚さした推定径17cmばかりの鉢形品。E・7区の2層出土片と、K・1区3層出土片が接合したものである。両者の出土地は、共に山寄りで、互は20m以上離れている。中世の遺構的なものは発見出来なかったが、一帯には、本来中世の同時期的な遺構が広がっていたものと思われる。

きめてまかい良質の固い焼き上がりの白い胎土に、やゝうぐいす色をおびた灰白色の釉が内面は全面、外部は上半のみかゝり、残存部の内部に、巾①.5㎝ ばかりの浅いヘラ状のものによる凹線が見られるが、これが本来の文様の部分であるか、偶然の所産か明らかでない。たゞ、他の同種のものゝ例から、偶然の可能性が強い。

- (2) は、(1) と同様、口縁部を肥厚した、大きさもほゞ同大な鉢形品であるが、口縁肥厚部が、やい丸味を持つ。釉の色は、(1) よりなお白色に近い、白灰色、外面の釉に小気泡が見られる。 $A-B\cdot 4 \boxtimes 3$ 層出土であるが、この口縁部と同一個体ではないかと思われる鉢胴部の小片が、 $H\cdot 2 \boxtimes 2$ 層から出土している。これも、もし同一個体ならば20m近く離れている。
- (3) は (1・2) と同様な鉢形品だが小片である。形態、釉、共に (2) に近い。D・6区3層出土。
- (4) 白色でわずかに砂粒を含む硬質の胎土で作られた底部。高台の径約6.5cm、高さ1.2cm ばかり。内面は全体、外面は高台の少の上まで灰白色の釉がかよる。高台内部は「の」字方向に、ヘラで削られ、切り取り部分にわずかに段がつく、土質や、形態から(1)などのような鉢形品の底であろう。(1)に大変類似しているが、同一個体ではない。出土地は、G・O区3層であるが、この個体と大変似た鉢・胴部小片がC・3~4区2層から出土している。
- (5) は、外面に、にぶい線で、蓮弁を彫り出し、上に、黄色のやゝ強いうぐいす色の釉をかけた 鉢形品の小片である。釉は、ほとんど厚みのないものである。直径の推定は約16cmだが小片のため、

正確な数値とはいえない。F・2区2層出土。

- (6) は、や、黄色を帯び、小砂粒を含む胎土の上に、黄灰色とも云える釉が内面と外面上半にかけられた鉢形品。口縁部が、薄くなりわずかに外にそる。推定口径16.5cm、内面の口縁部周辺のみ、や、厚く釉がか、るが他は薄い。細かい貫入が見られ、小気泡もある。D・3区3層出土とC・4区2層の口縁断片が接合し、同一個体に違いない小片が、E・2区2層で出土している。これ等は10mばかりの範囲に散っていたことになる。またこの個体ときわめて似た小片が、A・1区3層からも出土している。
- (7)は、灰白色の硬質なきめこまかい胎土の上に、青灰色の釉が、残存部分の内外面全体にからっている。推定口径約14cmの碗形品である。内面にはヘラ片切彫にした二本線を基調として、区画を作り、その中へ同じヘラ彫りで、雲文風の曲線文様が描かれている。内外とも細かい貫入が入り、釉は、0.3mmくらいの厚味を持つ部分もある。
- $\mathbf{F} \cdot \mathbf{1} \mathbf{G} \mathbf{2}$ 層と、 $\mathbf{F} \cdot \mathbf{2} \mathbf{G} \mathbf{3}$ 層出土のものが接合し、他に同一個体と思われるものが、 $\mathbf{G} \cdot \mathbf{0} \mathbf{G} \mathbf{2}$ 層から出土している。これ等は、かなり接近した処に同一個体があったと云えるだろう。
- (8) 灰白色の良質の胎土に、(7)と同様の青灰色の釉がかゝった碗の底部高台内面はヘラで「の」字に削られ、ヘラの合い目に段を作る。高台の推定径 $5.5\,cm$ 、内面全体と外面は、一部が高台にかゝるまで釉がかゝり、細かい貫入がみられる。釉の厚味はほとんど見られない。内面の底に細い線彫りで蓮華文を描いている。 F・7区 $2\,$ 層出土。
- (9)、灰青色のきめ細かい胎土に、暗いうぐいす色の釉がかくった碗の底部。釉は内面全体と、外面は、高台の内面以外には全体にかくっている。この底部の高台は、浅く削り出されたもので、必然的に、底の高台部分の厚みは、他の器壁の厚い部分の二倍位になっている。この土器の内面の底部には、「満」と見られる、スタンプによる陰彫の文字がある。この文字の横にも、文字があり字画から見て「金」の字の可能性が強いことから太宰府跡等で出土例のある(註5)「金玉満堂」の一部ではないかと思われる。出土地は、H・2区の3層。

青白磁片では、以上の外にも、口縁部を輪花にした鉢の淡青色釉がかよった小片や、外面をめぐる、蓮弁の彫りが(5)などより、鮮明な鉢形品の小片などがある。

小 結

我国の中世遺跡の多くから発見されている中国の宋・元時代産の青・白磁については、すでに多くの研究が見られており(註 6)、広江・浜遺跡発見のものも、こうした日本出土品と比較すると、当時としてはきわめて一般的な、青・白磁ということが知られる。

図132(1~4)に示した白磁鉢類は、太宰府址などで、12世紀を中心として存在するもの(註7)に類似するし、(5)の連弁をめぐらすタイプの碗も、鎌倉時代の13世紀を通じて各地に多数見られるとされるものである。(7)の画花文碗も、同様に、13世紀頃とされる太宰府の資料の中に同類のものが存在している。(8・9)においてもまず同様な傾向で、特に時代の異るものではないと考えられる(註7)。

広江・浜のこうした青・白磁を出土した地点の状況をみると、その多くが、古墳時代後期の製塩土

器、須恵器を包含する層の直上にあり、同層位中には、平安末・中世の土師・陶器片の外、古墳時代後期の遺物もかなり混入しているが、その後の遺物はほとんど混入していない。 (1) などは、灰釉が同層中に存在し、 (2) は内黒の土師器なども同層中に見られた。 (3) は、D・6区3層出土だが、この上層に当たる、D・6区1層からは南北朝期と推定される備前焼の擂鉢(図133)を出土していた。 (6) も灰釉片が、同層位から出土しているし、 (7) は内黒土師器片が共に出土している。 (9) も、や 4 大形の内黒土師椀(図121) を同層中に出土している。

以上の遺跡の状況から、同層位中の他の遺物と、同時代を示すと言うのではないが、少くとも、これ等青・白磁を出土した層位は、古墳時代遺物が混入することはあっても、室町以降の遺物を大量に伴う状況は無く、むしろ、平安末期頃以降のものと混在し、下っても南北朝頃までと考える方が合理的な遺物が多かったと言える。この状況は大筋において他遺跡での青白磁の示す年代と矛盾するものではないだろう。

- 2) 陶質土器 (図版第三十九の(2)、図 133)
- (1~5)は備前焼である。(1)は第I地点H・1区2層出土で、甕口縁の小破片である。灰青色という色調は須恵器と同様であるが、かなり焼きしめを思わす肌で、口縁端部は外方に丸く引き出されたように作られ、口縁の立ち上がりも、かなり強く、粘土紐の凹凸を見せる表面上には、大変細かい刷毛目状の横なであとを残しており、この状況は、初期備前焼大甕の特徴をよく示している。初期とはいえ、備前焼では、 Π 期末期か、或いは Π 期初めに入るもの(註8)であろう。
 - (2) は褐色で、焼きしめの進んだ玉縁を作る大甕の口縁部小破片。
- (3・4)は共に、ほゞ直立する口縁の端部を小さく外に折りまげて玉縁を作る壷の口縁で、これらも小破片である。(3)は褐色を呈するが、(4)は灰黒色である。
- (5) は、内面は茶褐色で、窯内での灰降による白色の小斑が広がっているが、外面は、光沢の無い明るい茶色を示す 擂鉢片。全体として 細かい13本ばかりの櫛目状条線が、 間隔を持って、 放射状に、内面に引かれている。口縁端は斜めに切られたような形状で、上下への拡長は大変少ない。 内面の大半には、使用による磨滅が、かなり顕著である。 なお、 D・7区1層では別個体の備前焼擂鉢片も発見されており、 これは色が灰青色ではあるが、焼きしめは進んでおり、 (5) と同時期と思われる擂鉢である。 やはり内面には、使用による、かなりな磨滅が見られる。

以上の備前焼は、(1)と(5)が第 I 地点出土で、(1)は、H・1区2層、(5)は、D・6区とD・7区の共に1層出土のものが接合した。I 地点においてもこれらは上層部にあったことが知られ、共に中世の土師器椀とか三脚付の鍋などがかなりの量発見されている。

(2~4) は第II地点出土だが、(2) はZ・3I区の1層出土であり、(3・4) は共にIW・6~7I区の2層上部で、これらは、むしろ第I1地点に関する遺物であろう。(3) など表面に磨滅があり、2層上部出土だが、1層と区別出来ない遺物で、1層の続きと見た方がよい。

(6~12) は須恵器系の土器である。(6) は砂粒のやム多い灰青色で、硬質である。注ぎ口を持つ口径24cmばかりの鉢形品だが、小片のため、大きさはあまり正確でない。口縁端は上方へ立ち上がりを作っている。外面には横に走るろくろ目状痕の上に、 荒いへう目による 縦の擦痕が 見られる。

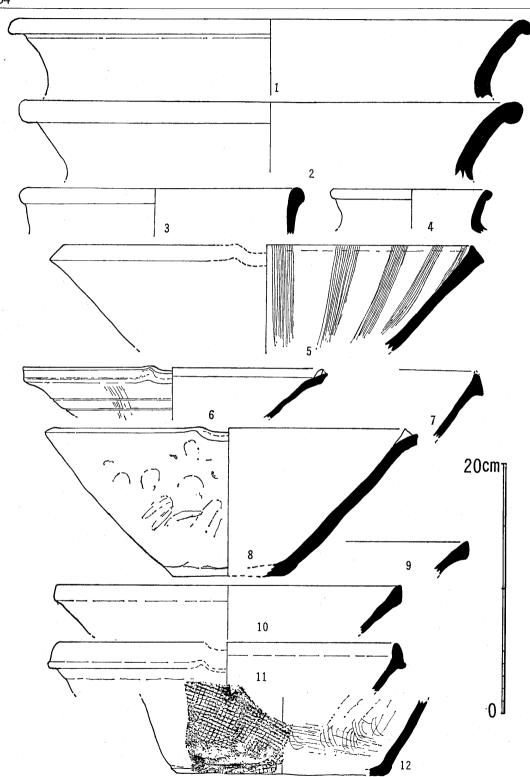


図133. 陶質土器 (D1=8、D7=5・7・12、H1=1、H2=11、X2=6、Y3=10、Z3=2・9、W6-7=3・4、5 は D 6 からも出土)

(7・8)は灰青色で焼きがやゝ甘く、断面など、灰白色で瓦質である。口径30cm弱と思われる鉢形品であるが、(7)は口縁端を上下にやゝ肥厚しているが、(8)は器胴に対し斜めになったゞけの口縁である。(8)の外面には、器面にき裂が入っていたり、指圧痕を残すが、内面はかなり丁寧に整形されている。たゞ内面の底周辺は、表面がすでに剥脱して、内面の灰白色部分が露呈しており、これは、質が瓦質でやゝ軟柔なため、使用による剥脱と考えられる。(9・10)も大体同様だが、口縁端がやゝ肥厚し、外面の口縁端が黒くなり、重ね焼きによる、いわゆる縁黒の状況を示している。

(11) は硬質の青灰色で、口縁端が上方にかなり立ち上がり、下方外方にも拡張が見られる。

(12) は、かなりきめ細かい胎土で青灰色を呈し、須恵器に近い硬質な、壷か甕の底部。外面は格子目叩きが全面にあり、底部周辺のヘラ削りの上にまで、格子目が付けられている。内面は、円心円叩き目を刷毛状工具やなでによって消している。

こうした、須恵質系の土器は、瓦質で軟質なものと、硬質で全く須恵器を思わす両者が存在するが、全体として当地方で亀山焼とするものに属する。出土地は第 Π 地点のもの(6・9・10)はすべて1層で、これらは本来、 Π 地点に属するものと思われ、他は Π 地点で、これらも、 Π か2層出土であり、この点(Π 0)までの備前焼と全く同じで、両者は共存している。

また、備前焼は、こゝに図示したもの以外は小片がごく僅か存在するだけであるが、(6~12)の 土器片は、他にも同様のものが、かなり存在している。

3) 土師質土器 (図版第四十の(1)、図134)

こ 133 の陶質土器と同様、そのほとんどが第 1 地点出土で、数点の第 1 地点出土品もすべて 1 層であり、第 1 地点に属するとみてよい。また第 1 地点出土品も $1 \sim 2$ 層が主体であり、図 121 の土師器とは同じ第 1 地点出土でもや 1 層位を異にしているといえるだろう。

(13~21)の土鍋類は、全体に茶褐色で外面は媒けている。(13)のように、脚の剥脱痕の明瞭なものもあるが、すべてに三脚が付くとは限らない。多くは、口縁が外方へく字に屈曲する鍋形品であるが、(21)だけは、口縁が直立し、つば釜状の凸帯をめぐらしている。全体に砂粒の多い土質であるが、つば釜状のものだけは、やムきめが細かく硬質である。

(22) は、ボール状でやゝ硬質明色の茶褐色、外面には指圧痕が多い。しかし、内面は丁寧に作られ、刷毛目が横にめぐっている。器形から見ると、椀とか鉢を思わすものだが、外面に、激しく媒が付着し、底に近付くほど火にかゝって剥脱した状況を示していることから、これが火にかけて使用された容器であったことには間違いない。

(23) は褐色で小形の坏、 これだけが他の 坏に比較して、 厚く、 色・土質とも異なった外見を示す。

(24~26)は、茶褐色で、器壁は薄い。(24·26)などは、高台がかなり高く、やゝ外に張り出し 気味で、しっかり作られている。(27)も明るい茶褐色で底はヘラ切りである。

(28~30) は黄白色で、きめの細かい土質のものが多い。薄く作られ、内面など丁寧に整形されている。焼の甘い割にはかなり硬質な感じを与える焼きである。

(31~35) も黄白色で、(28) などと似た土質・焼きであるが、指圧痕が激しく、特に底部は中凹 みに指圧された形をなしている。

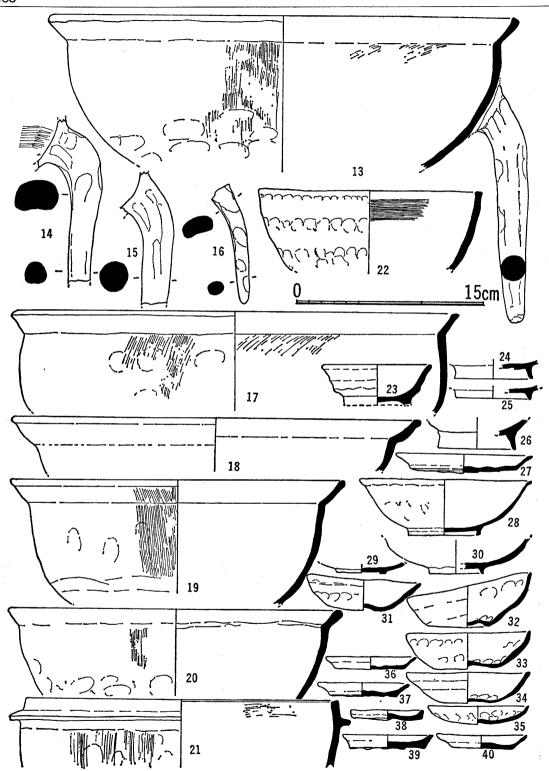


図134. 土師質土器(AB4=30、C1=15・16、D1=28、D7=13・17・31~34・38、E0=37、E3=24、E4=18、E7=23、F0=40、F2=39、G1=35、G2=19、G3=25、H2=14・29、H3=20、I 4=21・27、K0=22、Y3=36、Y6=26、14はG0からも出土)

(36~40)は、いわゆる灯明皿といわれる小皿で、黄褐色、底はすべてヘラ切りである。

これらの土師器は、かなりの量出土しており、中世遺物の主体をなしているが、この時期の遺跡が、第 I 地点周辺の上部でしか存在が確認できない状況であり、古墳時代遺物に比較すると全量は大変少ない。また、同地域発見の中国陶磁片や、備前焼・その他の陶片などから考えて、これら土師質の土器類だけが、特に中世でも新しくなるものとは考えられず、土師器の個々について、鎌倉期か、或いは室町期へ下るものかとなると判断はきわめて困難だが、少なくとも、これら土師器類の中に、当地方では、室町期へ下るもと考えねばらない要素はまず無いものと思われるのである。

九、鉄器(図版第四十の(2)、図135)

- (9) 以外の鉄器はすべて第Ⅱ地点出土で古墳時代製塩土器、須恵器が大量に出土した有機砂層中の各地点から出土した。常識的には海岸という鉄器保存に悪条件の中で残存したものであり、これ等の外にも、鉄錆らしいものが散っている場合も見られたので、遺跡中には鉄器類がある程度の量存在していたことが知られるのである。
- (2・3)はほぶ完全な鉄鏃であり、共に長頸の有茎鏃である。 (1)は中央茎部がやゝ横に位置し、全体が、多少左右対称を欠くようにも見えるが、まず鉄鏃であることには問題はあるまい。しかし中央部の突出部は周辺と同じ厚さであり、必ずしも、茎部とも言えず、逆刺と見えるものと共に、すかしであるかも知れない。 こうした残存状況であるため、この鏃が、 無茎か或いは短い平根の鏃か、 (2・3)と同類のものか、即断は出来ない。たぶこの鏃は出土地点が、 X・5区2層で、多数の古墳時代後期製塩土器中で発見されており、この期のものであることは間違いない点から見ると、むしろ、 (3)に似たかえりのやゝ大きいタイプが考えられるであろう。

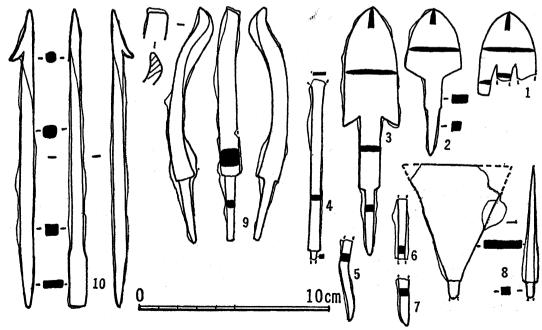


図135. 鉄器(A1=9、Y3=6、W5=2、X5=1、W6-7=4、Y6=8、Y7=3·7、Z7=5、Z8=10)

- (4)は、長頸の有茎の鏃の頸部である。(5~7)も釘であるか鏃の茎部であるか判定はつき難いが、残存物に鏃が多いことから鏃の可能性が強い。
- (8)は逆三角形、上辺部が薄くなって刃部となっている。下端に示した茎状の短い突出部分は、本来、この長さであるのか、欠損したものか明らかでないが、先端の状況から見て欠損した可能性の方が強い。Y・6区2層で、多数の製塩土器片や焼土塊などと共に発見されていることから、当時の鉄器であることには違いはないが、何であるかを出土状況から推定するのは困難である。刃部が推定6cm、厚さも基部では 0.5cm に近いかなりな大きさと厚みを持った形から、何か刃器としての用途のものかも知れないが、この程度の大きさであれば、当時逆三角形の鉄鏃も存在しており、特にこの鉄器の茎部を思わす部分が欠損しているのであれば、なお鉄鏃的と言えるかも知れない。しかし、確定はひかえたい。
- (9) この鉄器だけが、第 I 地点出土で、A・1区 7 層出土である。この地点では、6・7 層共に縄文土器小片を含有するが、なお製塩土器をかなり出土している。しかし、より新しい時代のものを包含しないことから、この鉄器も、まず、古墳時代後期のものと見て差支えないだろう。

1 cm方形に近い長さ17cmばかりの鉄棒状を呈する中央部分は、大きくそり返って、よじれまで見られるが、この形が本来のものか、後のひずみか判断出来ない。これの先端は、やゝ平たくなり耳かき状に屈曲し、最先端はやゝ薄くなり、尖り気味になっている。他端には、茎状の部分があり、恐く柄が付いたものであろう。錆も多く本来の形態も不明なことから、この鉄器も、すぐに用途を決定しがたいが、「のみ」状のものがよじれたものか、耳かき状になった形態が本来のものであれば、或いは「やりがんな」的なものであったかも知れない。たゞ、「やりがんな」とすると、本来、先端部両側に刃が付くのが原則であるが、これには両側の刃は認められない。

(10) は、長さ15.7cmの鉄銛である。一端は鋭く尖り、逆刺を持つ。棒状部は、太い部分で、一辺 0.6 cmばかりの方形断面だが、先端に近ずくほど、多少細くなって丸くなる。刺突部近くで一回よじられているようにも見えるが明確では無い。他端は、棒部を次第に平にし、先端は、刃部のように作られている。 まず銛とみてよい形態である。 柄がどのような形で付けられたものかは 明らかでない

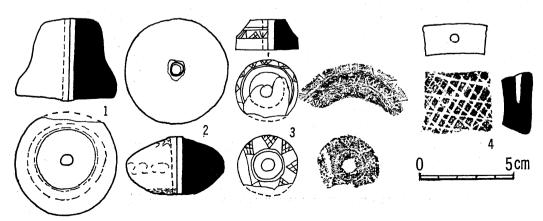


図136. 紡錘車・不明滑石製品(K1=4、X3=3、W5=1、X8=2)

が、一端が薄く作られていることから柄にさしこむような形で着柄されたものであろうか。 Z・8区 2 層出土であり古墳時代後期の銛である。

従来、古墳出土の鉄器類は数も多く、種類にも富んでいて、古墳時代鉄器を考える場合基準となるのは、古墳出土鉄器であった。と云うのも生活址出土鉄器はあまり知られていないためである。この遺跡が、海岸の砂中にありながらこれだけの鉄器が残存していたことは、それだけでも注目すべきことであろう。特に後期古墳期になると中期頃まで多くみられた工具、農具類が後期では数を少くし、ますます鉄鏃とか刀、剣、馬具と云うような、武具類が多くなるのに対し、一般の生活址ではどのような鉄器類がふえて来るかはあまり明かでない。このような状況の中で、製塩遺跡中に見られた鉄器は、鉄鏃が多くやはり当時の傾向を示すものと云えるであろう。

十、紡錘車(図版第四十一の(1)、図136)

図 136 の (1) はW・5 区の 3 層出土で、図で下面の直径約5.5cm、上面の径約3.3cm、高さ4.4cm、中央に径0.6cm の孔が通る土製品で茶褐色、外面半分は、黒斑様の黒褐色を呈する。孔を小径の方から大径の方へ通したため、大径の孔の周辺にもり上がりが見られる。外面はなで、整形されており、上面、下面周辺は平滑であるが、上下面の中央部に当る凹みを作っている部分には多少指圧痕も残る。

以上のような形状から見て、少し高さが高いが、まず実用の紡錘車と思われる。重さは一部を欠するが現状で約110 g、本来は115 g程度であったろう。またこの紡錘車出土位層は3層であるが、この区では3層から多数の師楽式土器や須恵器・土師器を出土しており、これ等は全体として他の区の2層の様相と全く同じであった。たゞこうした古墳時代後期の遺物と共に僅かながら、弥生前期の土器と一定量の縄文晩期土器片の出土を見ている。しかし、(1)の紡錘車形土製品は、その形や土質から見ても、また遺跡の状況からも、まず古墳時代後期に属すると見て間違いなかろう。

(2) は、 $X \cdot 8$ 区の2層上部から出土した、直径 5.4cm、厚さ3cmで、や 1 薄い赤褐色を呈する土製品。中央に、径 0.6cm の孔が通る。表面はかなり滑かに作られているが、部分的に指圧痕も見られ、孔が一方から開けられたため、他方の端にや 1 もり上がりが見られる。重さは約90g である。

このような土製品は、必ずしも紡錘車であるとだけは云えず、錘りである可能性もあるが、この土製品出土層位の主体は、(1)と同様、古墳時代後期にあり、僅かに奈良時代のものを混じていることから、まず(1)と同時代のものと見てよいだろう。とするとこの時期には、別記するように土錘は、他の形のものが存在しており、特に、このような扁円体を作る必然性が見られない限り、直径が、(1)とほぶ同じであり中央の孔の大きさも、全く同じであることなどから(1)とほぶ同時代の紡錘車とみてよいものと思う。

(3)は、(1)・(2)が土製品であるのに対し、白灰色の滑石製である。下面直径 3.3cm、上面径 1.8cm、高さ 1.6cm、中央に 0.6cm の孔が通る。下面と斜面部に、重圏や、斜格子になった鋸歯文を細く線彫している。 重さは一部欠失した現状で 25 g 、本来は 30 g 程度と思われる。 出土地点が、 $X \cdot 3$ 区 1 層で、繰り返し述べる通り、 1 層は、攪乱土層で、時代は決定し難いが、主体は、古墳後

期であり、しかも、この石製品の形状は、後期古墳などからしばしば発見される滑石製紡錘車と全く同じであり、これを古墳時代後期の紡錘車とするのは、(2)を同期の紡錘車とするより明確であろう。また、土製品、石製品で、それぞれ、大きさ、形を異にしながら中央の孔の径が全く同じである点は注目したい。

十一、不明滑石製品(図版第四十一の(2)、図136)

図136の(4)はK・1区3層出土の滑石製品である。図の上辺5.4cm、下辺3.8cm、左・右が3.5cm のや1台形をした方形で、厚さは約1.5cm。一面に斜格子状の上に荒い平行線を施した刻線文を施し、この面を外面とすれば、僅かに湾曲した立方体である。たず内面側になる程や1小さくなり、内面では、上3.2cm、下約3.5cm、左右約2.9cmでや1内湾はしているが平滑である。厚さに当る部分の四面には凹凸やかすかな溝状の部分も見られるが、何かの部分が欠損してこのような形になったとは思われない程度の面の整形があると思われる。例え、本来何かの部分であったとしても、最終的には、この方形体を意識したと思われる。また、図で上面に当る部分のほず中央に直径0.3cm ばかりで、奥になる程細くなりながら1.7cm 位の深さに達する孔が穿たれている。

以上の形状から見ただけでは、何に使用されたものか全く不明である。また、出土地点がK・1区の3層であり、この層には、古墳後期のものと中世のものが、相半して包含され、個々遺物について、層位による時代判定も困難な状態である。しかし、滑石製のこうした形のものが、従来、古墳時代後期から、発見された例を、知らない事と、滑石製鍋などのような、滑石製品が中世になり、当地方でも、次第に発見例を増していることなどから、この製品はむしろ中世に属するものよように思われる。また、福岡県太宰府の一角に当る遺跡(註9)などからは滑石製で、方形とか円形で大きさは本例を前後する製品が、かなり発見されている。たゞ、本例と異るのは、太宰府出土例のものには、背面に鈕状部分が作られ、こよに貫通した、紐通し用とされる孔が開けられている点である。これ等の中には、表面に菊花文などが浮き彫りされているものもあり、中世の、火舎・土鍋・釜のスタンプ文原形ではないかとも考えられている。表面に何の文様を持たぬものも、土器などの製作工具に関係のある可能性が考えられている。

広江・浜の1例が、何であるか全く不明ながら、滑石産地に近い九州の以上のような例品が用途、 時代を考える上に最も参考になるものであろう。 たゞ当地方では、本例によるような刻文が付けられ た土製品は、まだ発見されていない。

十二、砥石(図版第四十一の(3)、図137)

砥石は、縄文時代に伴うものについてはすでに記したが、こゝに示す2点は、まず、古墳時代或い はそれ以後のものと見られるものである。

- (1) は赤褐色で、やムきめの荒い砂岩、長さ7.5cm、巾・広い処で3.5cm。広い側の一面はよく使用されて、1/2面以上に砥ぎべり跡が明瞭である。砥ぎ面の両長側面にも砥ぎ面が見られるが、表面ほどではない。これは、X・8区2層の上部出土であり、この層には、古墳時代から古代にわたる資料が混在しており、この砥石も、その間の資料といえるが、この地点の主体は古墳時代後期のものであり、砥石もそれに伴うと考える方が合理的である。
- (2)は、黄白色で一部に茶褐色の縞を持つきめの細かい石、小さい気泡状の孔を持つが、水成岩と思われる。長さ、現存長約7cm、巾3.5cm だが長さの方は欠損していると思われる。長辺側の四面

全部が砥ぎ面に使用されて平滑になり、特に広い面二面では、砥ぎべりにより、顕著な凹面を作っている。側面には、細かい溝状の痕や、巾 0.8cm ばかりの砥ぎべり痕があり、広い面が、全面一様に砥ぎへっているのを多少異なった 砥ぎ痕といえるだろう。 この 砥石は、W・6 — 7 区 2 層 出土で、古墳時代後期の遺物中にあり、同時期のものと考えられる。

先の縄文時代と考えた砥石が、かなり小さな単位の砥ぎ痕に思われたのに対し、この2点は、砥石自体は小さいが、広い砥ぎ面では、全面を使って砥いだと思われた。また、側面では、刃の種類の異なったものを砥いだとも思われる。

十三、土錘・飯蛸壺など(図版第四十一の(4)・四十二の(1・2)、図138・139) 図 138 に示した土製品のうち(1~10)

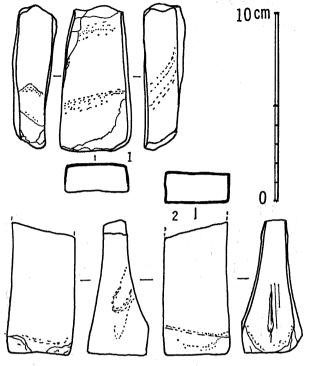


図137. 砥石(W6-7=2、X8=1)

までは、大・小の差はありながらもみな管状をした土錘である。(11~15)は棒状品の両端に孔を持つ形の土錘である。(20~25)は、これも大・小の違いはあるが、楕円体の中程に溝をめぐらした土錘であり、これ等の形のおもりは現代でもなおなじみのある網などに用いられる錘りの形といえるだろう。

こ」に図示した土錘は全出土量のでく一部であり、大・小形態の差異が判る程度だけ各種を選んだものであり、この外にもそれぞれの形の中で、太・細・丸・長などの変化は随分と多いものがある。 土質は、やゝ砂粒を含む一般的な土師器の土と同じであり、黄白色から褐色まで濃淡さまざまな色を呈する。

これ等三種の形態の異なる土錘は、古墳時代以降現代までも各時期に存在するように思われているが、今回、広江・浜遺跡では、土錘と伴出した他の土器との関係から、使用された時期に違いのある ことを見ることが出来たのである。

ここに図示した土錘は、形の変化だけを意識して遺跡全体から選び出したにもかかわらず、出土地 点層位を見ると、一つの特徴がうかゞえるだろう。

管状タイプの場合、図示するものは、(1)の超大形品のみが、第 I 地点出土で、E・ 3 区 3 層出土。この地点は古墳時代後期のものと、平安期と思われるものとを出土しており、どちらかに伴うものであろう。これ以外のものはすべて、第 II 地点出土であり、しかも製塩土器群を出土した層位から発見されているのである。これ等、管状土錘は、まず古墳時代後期のものと見てよいだろう。棒状タイプのものも、これまた、第 II 地点で、後期古墳期に伴うものばかりである。

楕円体溝タイプのものは、すべて第I地点出土であり、その出土層位は、全く中世のものばかりか、或いは、平安期から中世のものに、古墳後期のものを混ずる層であって、後期古墳期だけと云うのは皆無であった。

以上の傾向が、多くの中から選び出した少数の類例で、たまたま現われた結果でなく、全遺物に当たる段階で、個々の出土地を検討した時、出土地が確定出来る土錘のほとんどで、この傾向が認められたのである。このように広江・浜遺跡では、古墳時代後期の土錘としては、管状と棒状のものが用いられており、楕円体溝状のものは、まず共伴しない状況を示していた。これに対して、古代末或いは中世の層位では、多少管状のものを伴う場合はあるがまず楕円体溝形のものが主体であると云えるのであった。また管状の土錘も、明らかに古代末から中世に伴うものは、図 138 の(1)に示したような大形品が目立っていた。古墳時代と区別し難い様な小形管状土錘も存在するが、むしろ、より新し

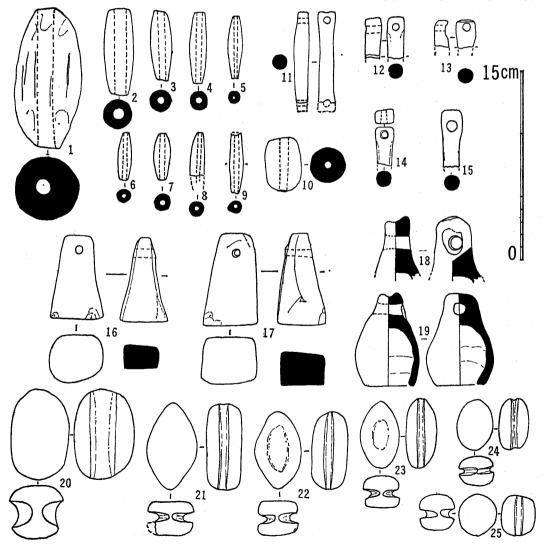


図138. 土錘・飯蛸壷(A0=21、B6=25、E1=19、E3=1、F3=22・24、F4=23、K0=20、W5=11、X5=2・6、Y5=4・14、Z5=3、X6=16、Y6=17・18、X7=15、Y7=12、Z7=10・13、X8=5・7・8、Y8=9)

い近世の土錘と形態の上でも区別が難しく、また層位的にも表土層近くで出土したものが多いため、 古代末・中世の小形管状土錘を抽出することは困難であった。

こうした時代による土錘形態の違いが、地域を異にした処で、どれだけ普遍性を持つのか、同じ瀬戸内海沿岸においてさえ、まだ明らかではないが、少くとも、同一地点の海岸で使用された網の錘と思われるこれ等の土錘が、時代の違いによって形態が変っていることは、時代の推移により、漁法とか、網の形などが異ることを意味するものかどうか、今後も注目したい点である。しかし、それぞれの形態には大・小あり、紐の通し方、或いはくゝり方の違いはあっても、同様な錘りである点では同じであり、錘の違いが漁撈方法上の違いを意味するものかどうかを見るためには、まだ各方面からの検討を要するだろう。こゝでは広江・浜遺跡と云う一遺跡の上だけでは、時代によって、土錘の形に違いが見られた点を指摘するのに止めたい。

また、中世と思われる層位のよく残る第 I 地点からの、楕円体溝形の土錘発見例は、II 地点の、製塩土器片と混在する二種の土錘に比較するとかなり多く出土している。これは中世の一般的な遺物包含層と、製塩土器包含層の性格の違いに由来すると思われることで、その多少で当時の漁法の異いを云うのは早計と思われる。むしろ、古墳期の製塩遺跡においても、土錘がかなり出土したことは、海岸である点から漁撈もさかんであったことを示す事に外なるまい。

第 I 地点のD・7 区 2 層からは、楕円体溝形の土錘が、欠損のあるものを含むが、一括68個出土している。大きさは長さ6 cm前後のものから、3 cm位までの間であり、かつて一括して放置されたものと思われる。これ等が、一つ網に使用されていたものか否かは別としても、参考のため計測し得る物の大略の重量を下記する。また図 138 に示したものの (21~25) と ほゞ同形同大のものである。なお、一括土錘と共に、平安後半期と思われる内黒碗の断片が出土しているし、D・7 区 2 層では、古墳時代後期の資料若干のほか、緑釉片(図 131)も出土している。むしろこの層中から、中世の資料はほとんど見られないことから、これ等土錘は古代末期の可能性が強い。

重	量	20(9)	25	30	35	40	45	50	55	60
個	数	11	7	26		4	2	7		8

表2 第1地点D・7区一括出土の土錘重量

またこの一括資料中で、注目されるのは、図 139 に示した 1 点に、細い線彫りで「億」らしい文字の見られることである。焼成前に書かれたものであるが、他には類品はなく、何を意味するものか不明と云わざるを得ない。古墳時代頃の飯蛸壷などには、時に同一記号らしいものが付けられる場合もあるが、この土錘は一括資料中にも類例が無い。所有関係を示したものかも知れないが、むしろ「億」といえば、現今では数値の単位であるが、平安時代末か、鎌倉初期の頃、明確な数値を意味し

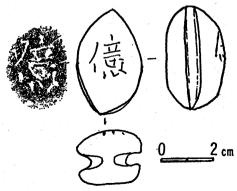


図139. D・7区刻字ある土錘

たものかどうかはむしろ疑問である。仏典にこそ現れる事はあっても、現実の社会で、実数としての 観念が存在したかどうかは不明で、たゞ、無限の多さを意味したものかも知れない。たゞ一文字だけ では、何と解釈するか困難ではあるが、「億」という、常時にはあまり用いられない文字に、何か、 呪言のような意味を持たせて、豊漁のまじないにでもしたのではないかとも思われる。

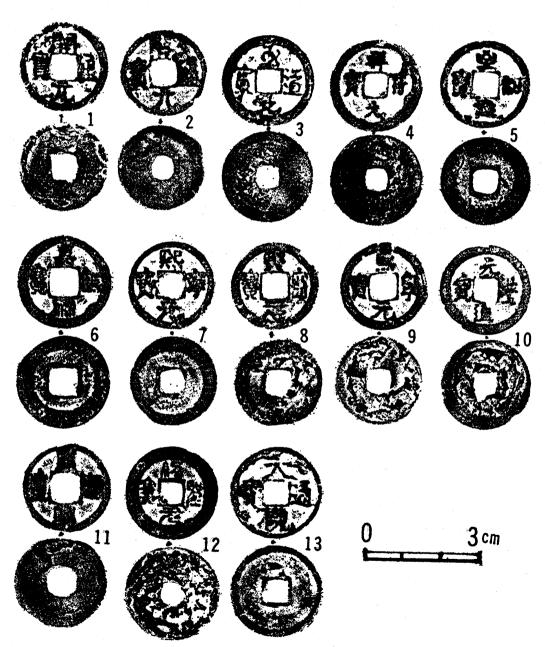


図140. 第 I 地点H·1区出土銅銭(1·2 開元通宝、3 至道元宝、4 祥符元宝、5 至和元宝、6 嘉祐通宝、7~9 熙寧元宝、10 元豊通宝、11 皇宗通宝?(元祐通宝)、12 紹聖元宝、13 大観通宝

(16・17) は、X・6区とY・6区のそれぞれ2層出土で、後期古墳期に伴うものであるが、従来、この時期の製塩遺跡のみならず他の遺跡からも類品の出土を見ないものである。両者共高さ7cm 前後、下端の巾4cm強で上部は扁平な方柱で孔を有し、下部は次第に広くなり、断面正方形に近くなる鐘形の土製品である。孔のあたりの形や大きさは、一見飯蛸壷に似ているが方柱状に作られ中空部は全く無い。2点とも表面の作りはかなり丁寧であり、孔の周辺にも、或いは他の外面にも、特に使用による何等かの痕跡は明らかではない。云うならば、用途不明の土製品である。しかし、両者とも、同様の孔を持つこと」、かなりな重さを持つことから、これを錘りとして何物かを垂下するものではないかと云う推定を思わすものである。特に漁撈に関わるものだと云う必要はないと思うが、漁撈用具であると云う可能性も強い。いずれにしても類品の出土を待ちたい。

なお、こゝで図示した土錘や土錘らしい土製品の重量を参考に記述するが、中には部分を欠損する ものもあるので、概略の数値である。その他図示していないが、同種のもので参考にすべき土錘の重 量を付記する。

(管状) (1) …約270 g、(2) …45 g、(3・4) …20 g 前後、(5・8・9) …10 g 前後、(6・7) …5 g 前後、(10) …40 g 中世の管状大形土錘は 3 点ばかり約140 g を示した。

(棒状) (11) ···約20 **9**

棒状品のやゝ大形のものは30分前後と思われる。

(鐘状) (16) …98 g、 (17) …128 g

(溝状) (20) \cdots 135 g 、 (21) \cdots 70 g 、 (22) \cdots 60 g 、 (23) \cdots 40 g 、 (24) \cdots 30 g 、

(25) ···25 *9*

(18・19) は、古墳時代後期の製塩土器に伴ったものであり、すでに飯蛸壷として、同類の多く知られるもので、製塩遺跡ではしばしば伴出している。土錘同様、漁撈関係を示す遺物である。

十四、銅銭(図版第四十三(3)、図140)

H・1区の2層上部の有機土層中から出土した銅銭13枚は、一連となって密着していたが、ほゞ全て字句は解読することが出来、2枚の開元通宝をのぞくと、他はすべて北宋銭であった。

図 140 の (1・2) の開元通宝は、唐初に初源を持つ銭であるが、長く鋳造される銭であり、何時の時点のものであるか明らかではない。

両者共、裏面は、錆のため明瞭でないが、文様・文字の鋳出は認められないと思われる。(2)は 「開」の右側に湯まわりの悪い部分が見られる。

- (3) は北宋の太宗・至道年間(995年)の行書体の銭である。(4)は真宗の祥符年間(1008年)。 (5) は仁宗の至和年間(1054年)の銭で、篆書体である。(6)は同じく嘉祐年間(1056年)。
- (7)~(9)の3枚は神宗の熙寧年間(1068年)のもので、(8)は篆書体である。(10)は同じく神宗の元豊年間(1078年)の銭、(11)は磨耗が激しく、正確なことは不明である。元祐通宝の篆書体に似る面もあり、もし、これならば哲宗の元祐年間(1086年)となるが、むしろ、通宝を左右に書いているようにも見られ、字形などは仁宗の時の宝元元年(1038年)に鋳せられた皇宋通宝と考えられる点が強い。いずれにしても北宋銭とみて差支えあるまい。(12)は、哲宗の紹聖年間(1094年)、

(13) は徽宗の大観年間(1107年)の銭である。

この銭が出土した地点では中国産白磁の小片や、備前焼では、II 期末に属すると考える、やゝ古い大甕片(図 133 の(1))などを伴い、古代末から中世の資料が主体であった。銭が僅か13枚と云う小量ではあるが、すべて北宋銭であり、より降る銭を伴出しないことは、一応、この遺物を含んだ区の層位の年代を推測するよりどころとなると思われる。

- 註・1. 正岡睦夫ら「西江遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告200、岡山県教育委員会、1977年
 - 2. 小野忠凞・本村豪章「波雁ガ浜遺跡」宇部の遺跡、1968年
 - 3. 河瀬正利ら「ザブ遺跡」山陽新幹線遺跡調査報告、1973年
 - 4. 間壁忠彦・間壁葭子「倉敷市広江・浜遺跡調査概報」倉敷考古館研究集報第2号、1966年の図9の(5)
 - 5. 前川威洋ら「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(4)」福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告・第8 集、1978年など、太宰府関係報告書
 - 6. 亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」考古学雑誌58巻4号、1973年、のほか註5など
 - 7. 註5と同じ
 - 8. 問壁忠彦・問壁葭子「備前焼研究ノート」(1)、(2)、(3)、 倉敷考古館研究集報 第 1 号 (1966年)、第 2 号 (1966年)、5 号 (1968年)
 - 9. 註5と同じ

VI 章 製塩土器についての一、二の問題

一、当遺跡の製塩土器の編年

広江・浜の製塩土器群は、伴出する須恵器類などから見て、少くとも6世紀代のほゞ全般にわたり7世紀代の前半にかけての頃に位置する点には全く問題はないであろう。しかし師楽式土器として衆知されて来た当地方の製塩土器は、その中で台脚を持ち、器壁外面全体に叩目を有する器形のものが、古墳時代前半までのものであるのに対し、丸底で口縁部にのみ叩目痕を有する大量に存在する土器群は、後期古墳期に属すると言う大変大づかみな編年が行われているだけである。たゞ、喜兵衛島の古墳出土例などを基準として、古墳時代後半の丸底器形のものも、やゝ小形で口縁部から胴部にうつる処で肩を作る器形のものを古く、口縁部の広がりがそのまま器胴に移る、やゝ大形の深いボール状のものが新しく位置付けられており(註1)、また、極めて器壁の薄い無文で、時として尖底となるものは古墳時代終末か奈良時代に下り得るものではないかと考えて来た。また、前半期古墳期の小台脚付土器が、丸底土器への移行期には、小形の薄い丸底のコップ状の土器を考えて来たのであった。こうした編年の基本についての常識形成には、当地在住の我々もその責任を負っているのである。

しかし、従来は、全面的な師楽遺跡地の発掘による出土遺物を母体にして考えた当地方の編年観ではなかったので、今回、極めて編年の困難な状況を呈した製塩遺跡ではあったが、整理の過程で、従来あまり明確にされていなかった古墳時代後期の時点で多少とも具体化した点を明らかにしておきたい。

遺物の個別説明で既に述べたように、この遺跡で最も古い須恵器の示した時期は、大阪泉北の陶邑を基準とすれば、そのIIの1くらいに当る時期であり、6世紀前半にあたるであろう。この時期のものは、発掘地区、特に第II地点のほゞ全域に存在はしてはいたが、特に気付いたのは、製塩土器I類と呼んだ、無文で厚手の口縁がや>内傾した大形丸底土器が特に多かった地点で、この古式の須恵器が多かった点である。特に $X \cdot 8$ 区3層とした部分でこの傾向は、かなり顕著であった。この地点では浅い平行叩きを持つものもかなり存在していたが、この平行叩きのもの 1 器形もI類製塩土器に大変似たものであった。このI類土器と、須恵器の古いタイプのものの共伴は、他の類の製塩土器を多く出土した $X \cdot 5$ とか $W \cdot 5$ 区の2 層下半などでも伺えたのである。

広江・浜遺跡では、1~2点存在した、古墳時代前半にのぼる可能性のある、台脚付の製塩土器らしいものを除くと、この無文でむしろ大形と言うべき I 類のタイプの製塩土器が古いものと考えられる状況であった。

これに対し、平行叩きを持つⅡ類土器は、最も数多く遺跡全面に拡がっていて、器形には、Ⅰ類のものに近いやゝ大形のものからⅢ・Ⅳに近いものまで各種存在していた。須恵器も、陶邑Ⅱの2~5ないし6にわたる6世紀代、中・後半のものが広く包含層全面に存在していたと言えるであろう。

一方、叩目の文様が格子目とか矢羽根形とか、山形とか各種のものとなると、これは、「師楽式土器」と呼ばれた当地方の製塩土器を特色付ける叩目文でもある。これを持つ土器は、全体として、やゝ小形で、口縁までも薄い作りを示すものが多く、肩部を持つ器形のものが一般的であった。しかも、遺跡全体の土器量からみれば、平行叩目文が圧倒的に多い中で、特にこの土器が、やゝ集中的に

存在したのは、W・5区、X・5区、Y・6区と言うところで、こゝは全体の土器量が多いところではあるが、全量の中での特殊叩目文の含有のされ方が、他の部分とは異っているように見られた。他の地点では、多くてもこの種の土器は製塩土器の10%足らずか5%程度であるのに対し、上記地点では、40~50%も存在する処もあった。この製塩土器Ⅲ・IV類に当る土器が須恵器のどの形態のものと伴うものかは必ずしも明らになし得ないが、この種土器を多く含んだ地点では、特に、坏のかえりの小さいものとか、低い台脚が裾を拡げた高坏などが多かったのである。実際には、こうした特別の叩目文を持つ土器の多い処でも、平行叩目文の方が多いのであり、多少新しい須恵器が多くなるから、すぐこれが矢羽根とか格子目に伴うものと、即断するのは危険であるが、整理の過程でも、以上のような感触を強くしたのである。製塩土器の中でも叩目文に多くの変化の現われるのはむしろ7世紀初頭に近いものと思われたのである。

こうした中で平行叩目は、無文厚手の時点から各種の形態の叩目文を使用するようになってもひき 続き利用されていると思われたのであるが、全体としては、古いものは大変浅い平行叩目であった り、細かいものであったりしたものが、やゝ荒い一定の大きさの平行叩目のものに変って行くように みえる。それにつれて平行叩目文の器形も肩を持つやゝ小形のものに変わり、器壁がより薄くなるよ うに思われたのである。

今一つ問題となるのは、 $Y \cdot 8$ 区で一括出土した、薄手で無文のV類の土器である。他の叩目文を持つ土器片は一応全面に 土師器須恵器と 混在しながら広がっていたのに対し、 この種のものは、 ほ とんど他の遺物を包含しない状況でしかも一ケ所で一括出土した、と言う出土状況の違いも注目された。 この土器片のなかに、極めてわずか(5000片くらいの中に僅か 3 片ばかり)含まれた須恵器は、 坏が、陶邑 1 の 4 か 5 のものであったことから、 この須恵器が示す時代か、それ以後と言うことになる。 ところで、 この一括土器の中には含まれなかったが、 この周辺地点では、第1 地点としては珍しく、高台付の陶邑では1 期以降に下ると思われる須恵器坏などが、かなり発見された点である。

従来より、この種製塩土器は、我々が調査した岡山県では東端に近い日生諸島内の鹿久居島千軒遺跡でも、7世紀代から8世紀初めの須恵器に伴い(註2)、岡山県西端に近い笠岡市高島の王泊遺跡でも、報告者が層位関係はあまり確かでないとしながらも最上層に、この種の土器が7世紀代の須恵器と共伴する旨、報ぜられている(註3)。

今回、広江・浜遺跡では、明瞭な共伴関係とか、層位関係で、他の製塩土器との先後を明らかにすることは出来なかったが、出土地の状況から、この種、V類と呼んだ土器群は、まずこの遺跡でも7世紀から8世紀初め頃の須恵器に伴うものと考えるのが最も合理的に思われたのである。

また、この種以外の製塩土器は、土器廃棄後も、その地域一帯が続いて繰返し作業場とか生活址になった状況があったため、土器片の攪散とか生活用土器片の混入も見られたのであろう。ところが、薄手無文の場合、この広江・浜の発掘地点付近では、この時期の製塩期間が短く、また、廃棄後に、その近辺で、同種土器の使用とか、生活が広範にわたっては見られなかったことが、土器片が一括で発掘された1つの原因であるかも知れない。いずれにしても、広江・浜遺跡では、土器製塩の最後を示す土器であろう。

また、同種土器でありながら、地点を別にして、僅かではあったが尖底となる器形のものが見られ

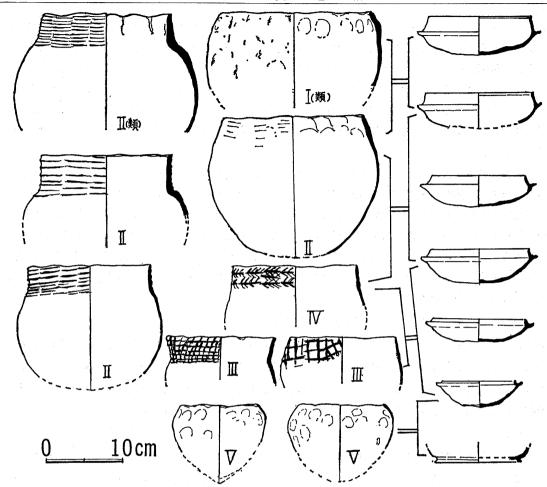


図141. 広江・浜遺跡における製塩土器と須恵器の編年模式図

た。丸底と尖底の違いの間に、大して時間差があるとは思えないが、Y・8区の一括土器中に全く尖底を見なかったことで両者が、この遺跡では、同時的なもので無いことだけは確かであろう。

広江・浜遺跡の、広く製塩土器が多量に見られたかつての砂浜の真中である 第Ⅱ地点では、ほど遺跡は、7世紀末か8世紀初のうちで終わり、その時の奈良―平安から中世にかけての遺物は、山寄りの第Ⅰ地点を中心とした地点に集中したとみられる。そうして、この時期になると土器製塩に使用されたと思われる土器は皆無となり、またこれに代わったと思われる用具も特に抽出は出来ない状況であった。この時点では、従来のような多量の土器を使用しての製塩は、すでに備讃瀬戸周辺では行われなくなっていた、と言う従来の製塩遺跡の常識と、全く同じ結果と言えるであろう。

しかし、以上の師楽式製塩土器の変化の傾向は、あくまで、広江・浜遺跡での状況であり、同種の 製塩土器使用が認められる備讃瀬戸一帯の遺跡で、この傾向が普遍的であると言うことではなく、む しろ従来師楽式土器の、特に6世紀代の編年は具体化されてないと言うのが真実であろう。ここで見 た編年が普遍性を持つか否かはむしろ今後の検討に残された問題である。

二、師楽的土師器と土師器の問題

* 古くより、 瀬戸内海岸の 製塩遺跡の中には 製塩土器と同じ土質、 作り方によって作られた、壷、

坩、甕、椀、高坏、等々の形をした土器群が知られており、これ等は、製塩土器である一定の形を持つ多量の土器と区別されることなく「師楽式土器」として報ぜられて来た(註 4)。しかし、土器による製塩が明瞭になって来ると、こうした一般的土師器と同じ器形を示す土器は製塩土器とは異質なものであることが明らかになって来たのである。しかし、これ等の中には、破片となれば製塩土器との区別が大変難かしい作りを示すものさえあり、現今でも、こうした土師器が実際には師楽式土器と呼ばれることが多く、この点、製塩土器として備讃瀬戸地域に分布する師楽式土器の概念を混乱さすことがある。

この点を考慮するなら、本来、製塩土器と言うことが不明な時から、特殊な作りと存在の仕方を示したことで、「師楽式土器」と呼ばれて来た一群の土器は、最初から、製塩土器だけを抽出した呼び方でないとも言えるので、備讃瀬戸地域では、製塩土器=師楽式土器と言う考え方は混乱の元であるかも知れず、むしろこの地域で製塩土器には、師楽式土器と言う呼び方を用いない方が無難ではないかとさえ思われる。実際に、土器製塩に関して長期にわたり研究を続けられた近藤氏の著述では○○式とした場合必ず製塩土器の呼び名を加えてあり、近著「塩業大系」には「師楽式」に限らず○○式土器名は一さい見られない。

しかし、「師楽式土器」の呼び方はすでに学史的とも言える。50年にわたる歴史を持った呼び方であり、各地の製塩土器が、それぞれの地域で、その地域の特性を示す、「〇〇式」製塩土器の呼び名を持つ以上、土器製塩研究の発祥とも言える「師楽式土器」と言う呼び方を抹殺して新しい呼び方をする方が、むしろ理解の混乱をおこすことになるであろう。そこで、師楽式土器の中の幾つかの要素を取り出し、常にそれを区別して用いることで、今後の拡大解釈や、混乱を出来るだけさけるべきであろう。

師楽式土器の分布する地方で、彌生時代の製塩土器が発見された場合、それをすぐには師楽式土器 として拡大して呼ばないことはもちろんであるが、古くは、師楽式土器の中に含められていた、土質 が師楽式と同じ土師器は、区別し、別の考慮を払わねばならないものであろう。製塩土器自体に対し ては、その形態変化に研究が重ねられて来てはいるが、同時に存在する、一見、製塩土器に大変似た こうした土師器類に対しては、古くは「師楽式土器」として、一括して考えられ、昨今土器製塩に関 する研究が進む中では、考慮されぬまゝになっているといえる。

これ等に対して、広江・浜遺跡の場合は、師楽的土師器として別個に取り上げたのであるが、この 呼び名の是非は別としても、今後共製塩土器とは別の意味を持って、製塩遺跡内のこうした土師器に 関しては注目して行きたいと思う。

ところで、こうした特別な土師器の持つ問題は、これらが土質からみても、作りから見ても、師楽式製塩土器を製作した人々の手によって作られたとみて間違いない点である。当時の日常生活に用いた土師器は、その使用者の身近かで一般的には作られるものと思われて来たが、この点、師楽的土師器は、よい事例を示しているとも言える。だが、一方では、須恵器と言う、製作者が明らかに別に存在する土器類が、同一遺跡内で多量に使用されているのと同様に、海岸遺跡以外で普通に見られる土師器類と全く同じ土師器も相当量出土しているのである。

師楽的土師器が、普通の土師器と同じ用途と思われる限り、もし、他の普通の土質の土師器が、製

塩土器を作る集団の手でも作られているのであれば、当然、普通の土師器の用途のものには、師楽的 土質とは違った胎土でみな製作すればよいであろう。ところが、広江・浜遺跡などでは、師楽的土質 のものと、普通土師器の土質のものが、相半ばして出土していた。この事実は、製塩集団の廻りでは 製塩土器の製作と、それと同じ土質や作りで日常の必要容器類は作りながらも、同じ機能を持った土 器である一般的な土質の土師器類は製作してなかったことを示しているのではなかろうか。普通の土 質(これには水漉土もあれば砂粒を含むものも種々あるが、師楽的な作りとは一見して違っている) の土師器は、須恵器などと同様に他からもたらされたものと考えられるのである。

こうした土器に見られる交流は、当時の専業的生産を示す社会的状況がすでに出現していたことを 示していると 言えよう。 塩生産の専業化と、須恵器の場合、 土師器の場合、また、 鉄生産などの場 合、その他各種の生産に対しても、その専業の形態はそれぞれ異った形で当時の社会の中で位置づけ られていたものと思う。当時の牛産と分配の関係は、屯倉の設置とか部民制の問題などとして概念的 にはとらえられていても、具体的な形としては、まだ充分には実証は行われていないといえる。群集 墳盛行期と言う時代を背景とした中央の支配と地方の個々の生産者の組織の問題を具体化するために は、異った集団の間の生産品の交流がどのような形で行われていたものであるか、個々、交流したと 思われる「物」の具体的な動きをより明らかにする以外ない。すでに須恵器などについては、多くの 方法でアプローチがとゝろみられつゝあるが、広江・浜遺跡で師楽的土師器と、一般的な土師器を区 分したように、他遺跡でも、土師器に地元産とそれ以外の物の区別が可能かどうか検討する必要があ るだろう。こうした検討の後、始めて、師楽遺跡内での、師楽的十師器と普通の土師器の違いを正し く理解することが出来るものと思う。製塩遺跡より遠く離れた地で、従来までもすでに製塩土器の出 土報告例が、しばしば聞かれているし、また、「師楽式土器」の名を用いてその遺跡内の異質な土器 が呼ばれていた場合もあった(註5)。もちろん、こうした 異質な 土器も「塩」に全く関わりがない というわけではないが、これ等特別の土師器についても、単に、特別な生産品である「塩」と言うこ とだけに注目するのでなく、須恵器の移動の仕方などと共に土師器の移動の仕方がどのようなもので あるかを知る一端ともなるであろうと考えている。

- 註 1. 近藤義郎「日本塩業大系資料編考古」日本塩業研究会、1978年
 - 2. 岡山県日生町教育委員会「鹿久居島の歴史」1965年
 - 3. 坪井凊足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告書」同調査委員会、1956年
 - 4. 同註3
 - 5. 例えば、田辺昭三「船橋」平安学園、1959年

む す び

これまで、遺跡・遺物の順で記してきた広江・浜遺跡は、瀬戸内海の海浜砂洲上に立地する遺跡であった。

この遺跡は、現在判明している範囲では、縄文後期からの遺物が発見されていて、縄文晩期にもひきつがれたものであった。中部瀬戸内の本州ぞいの浅海を形成した地域に、縄文貝塚が多いことはよく知られている。しかし、本遺跡では貝塚を作っていなかった。

倉敷市に流れ出している高粱川の河口で、現在最も南に出た地点の縄文貝塚は、倉敷市福田貝塚である。この貝塚では、縄文後期の始めから、かなり泥海性貝類の堆積が知られ、縄文後期には旧児島の西岸にあたる地域であるこの福田貝塚の沖合までかなり浅海化が進んでいたことを示すのであった。これに対し、福田貝塚から旧児島の西岸をせいぜい4kmばかり南に下った地点にある広江・浜遺跡では、福田貝塚と同じ時期に貝塚を形成していないのである。

これを説明するために、福田貝塚などに居住した縄文人の季節的な移住地が、広江・浜遺跡であり、広江・浜に居住したのは、貝類を採取しなかった季節であったという考えもなくはないかも知れない。しかし、広江・浜遺跡の遺物包含層の状況から考えると、季節的移住地だとする根拠も明確でなく、むしろ4㎞程度沖合に出たこの地点には、多量の貝類を採取できる浅海が広がっていなかったと見る方が妥当だと思われる。それは、高梁川の運ぶ沖積土砂による浅海化が、縄文後・晩期には、まだ、児島の西岸では北端部の付近まで達していたにすぎなかったと推定させる根拠となるであろう。貝類の採取に不便であっても漁獲や背後の児島の山における狩猟に対しては、福田貝塚などと全く同様な条件を持ったことは、その地形から推定できるのである。

彌生時代になっても、広江・浜遺跡は、小規模ながら生活の痕跡が認められた。そのうち弥生前期は、砂洲の縁辺、おそらくは遺跡の南方で、現在第三福田小学校の運動場となった地点あたりには、 海浜砂洲の後背湿地が存在したと思われるから、小規模な水田耕作の可能な土地が存在したであろう。この種の小規模な後背湿地を持つ地点に立地した当地方の弥生前期の遺跡は意外に多いのである。

彌生中・後期の小量の遺物は、この地が、瀬戸内海の交通の要地に所存することゝ関係して理解される面があるのではないかと考えられる。西から本州南岸沿いの舟運をとれば、水島灘の東岸をさえぎるのが児島の地であり、その海浜集落は、漁村的な性格を持つとしても海上交通とのかゝわりをかなり持っていたと考えられる。そのことは、遺跡の北東3 版あまりの種松山真菰谷貝塚などの高地性集落遺跡や、その近辺出土の銅鐸などとの関係も考慮する必要があるだろう。当遺跡における細形銅戈の断片出土の事実も、そうした問題とつながりを持っていると推定できるであろう。

古墳時代に入っても、その前半期には、この広江・浜ではおそらく彌生時代と同様な生活が僅かながら続けられていたに過ぎなかったゞろう。ところが6世紀に入る頃から、この地では、土器製塩が始まり6世紀後半期から7世紀前半にかけては、かなり大規模な遺構を残す状況を呈していたのである。この傾向は、児島西海岸に位置した広江・浜遺跡を含め、備讃瀬戸とも云うべき中部瀬戸内海一

帯の海浜で見られるものであり、後期古墳期の塩生産のあり方を示す、一つの中心的な地域として注目されるところである。

土器製塩遺跡は、奈良時代を迎える頃、終えんを示しているが、広江・浜ではひき続いて奈良時代、平安時代にも人々の生活が続いたことを示す遺物が発見されている。たゞ、こうした遺跡が古墳時代以来、奈良・平安時代に入っても、塩生産地として平城宮木簡や続日本紀や延喜式などで知られる「児島」の地にあって、古墳時代とは生産方法こそ異なりながらも、ひき続き塩生産地であったのか、それとも、一般的な海浜集落であったのかは遺跡では確定できない状況であった。いずれにしても、大規模な集落とは云えないであろうが、平安期の緑釉とか灰釉片を出土していることなど、海浜の小集落としては注目される事態である。

中世に属する遺物の出土量も海浜では山裾寄りの地で、かなり集中的に発見された。これは中世期に入っても平安期以来続いて集落の存在していたことを示している。特に目立つ遺構も見られない一般的な状況を示してはいたが、中国産の青・白磁も発見されており、瀬戸内の航路に面したこの地は、いつの時代も内海を通じ、各地との交通に便利な処だったと云える。現今では、中世遺跡における、中国産陶磁器の出土は一般的なことゝして知られて来てはいるが、遺跡の立地点とも関わって、平安期に緑釉・灰釉が見られたのと同様、一考を要する遺跡と云えるであろう。また、中世とは云っても、その遺物の内容から見て、主体は鎌倉時代のうちにあり、むしろ室町期以降の遺物がほとんど認められない点などは、中世港湾関係遺跡として近くに知られる広島県福山市草戸千軒遺跡などが、鎌倉末から室町期を中心としていることゝ比較して、今後注目される点であろう。

以上が縄文時代から、鎌倉時代にまでもわたった広江・浜遺跡の概要である。

金 浜 古 墳

一、位置と調査経過(図版第四十三、広江・浜遺跡の図2のS)

金浜古墳は 倉敷市児島塩生 (しょうなす) の金浜に あった。 塩生の海岸は、 現在では埋め立てられ、水島コンビナートに面しているが、元来、水島灘に西面した南北に長い海岸であった。その北端に、古墳時代製塩遺跡である金浜遺跡 (広江・浜遺跡の図2のC) がある。金浜遺跡の北東に東から延びた標高約40mの舌状台地があって、その先端部に金浜古墳 (図2のS) が所在した。

1977年春、この台地が、土取りされることになったことを知って、その場所に遺跡が所在することは知られていなかったが、舌状台地の地形が、遺跡所在地としての可能性を示すものであったので、倉敷市教育委員会文化課は倉敷考古館に協力を求め、遺跡の存否を確認した。その結果、金浜古墳の位置で、花崗岩の一辺20㎝~30㎝程度の角石が存在し、その下層に、炭・灰を含む層の存在を知ったので、金浜遺跡に関連する古墳が存在するものと考え、土取り業者と遺跡保存に関する交渉を市文化課が行なったのである。(その際発見された花崗岩や、炭・灰層は、石室の北側の盛土の状況を察知したものであった)

しかし、土取りは、1977年秋に入ると実行され始め、11月には、いよいよ古墳が削り取られるところまで達し、止むなく、期日におわれながら、小野一臣、間壁忠彦、間壁葭子、藤田憲司、磯山豪二、武田俊宏が、11月16日から25日まで、記録作成にあたったのである。その直後に古墳は土取りのため消滅した。

金浜古墳が存在したのは、ようやくにして一基の古墳を築造できる程度の細い尾根を持って、東から西へむいて延びた台地の先端であり、その西側直下を倉敷一児島線の県道が南北に走っており、金 浜遺跡を西南下方に見下す位置であった。古墳調査の結果から見ると横穴式石室は、金浜遺跡の方向 に開口したものであった。

発掘は、時間的制約もあり、古墳と思われる位置に、十文字のトレンチを入れ、尾根上では土取り 範囲に縦断トレンチを入れた。また、斜面部分では、地表と、ブルドーザーが走った跡の土層観察も 行って、遺跡の広がりを観察した。その結果、横穴式石室の天井部を失った一基と、その古墳築造時 に既に削ったと思われる縄文早期押形文期の遺物を少量包含した部分を検出したのであった。

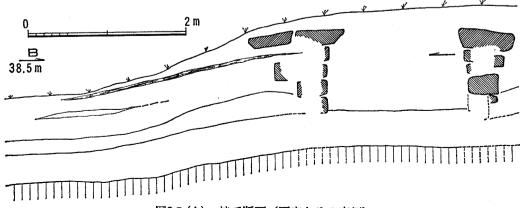
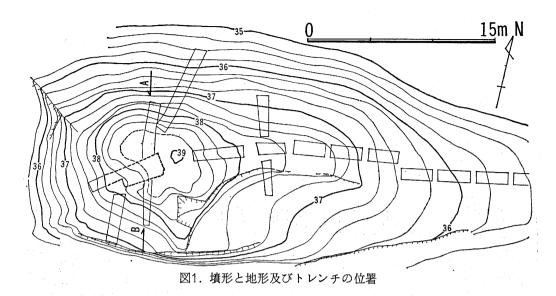


図2の(A). 墳丘断面(石室とその南側)



二、外形(図版第四十三、図1)

前面が、20年も前には海であった、海岸にせまる標高39mの小尾根の頂部先端にあるこの古墳は、雑木や草の生えた段階では、全く外形は尾根と変りもないのであったが、伐採してしまうと、僅かに円丘状が認められた。しかし、これも尾根部の自然の盛り上りと見られなくはない状況で、強いて外見的に墳丘をいえば、径10m弱、高さ 1m余で変形した円墳ということになるだろう。

測量図だけで見れば、あたかも東の尾根部に小前方部か造り出し部を持つ形態に見えるが、この東側の高みは、本来の尾根の形状と見られる。また、石室北側に、3m以上にわたって表土下に列石状に石が点在した。これは葺石のように見えるが、本来の墳丘上よりも低い位置にみられ、それらの石は不定形なものであり、石室の天井石と、側石の上半がすべて失われている状況から見て、天井石、側石等を取り去る際、こゝに散乱したと見た方がよいものに思われた。

三、墳丘の状況 (図版第四十三、図1・2)

墳丘と尾根の形に沿って、ほゞ南北と東西に入れた数本のトレンチ断面(図2)の観察から、墳丘は、尾根に直行する南北方向では、地山の上50cmばかりの、地山とほとんど変りない花崗岩ばい乱土の

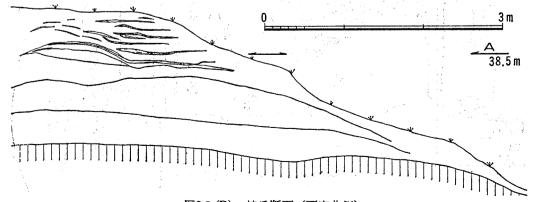


図2の(B). 墳丘断面(石室北側)

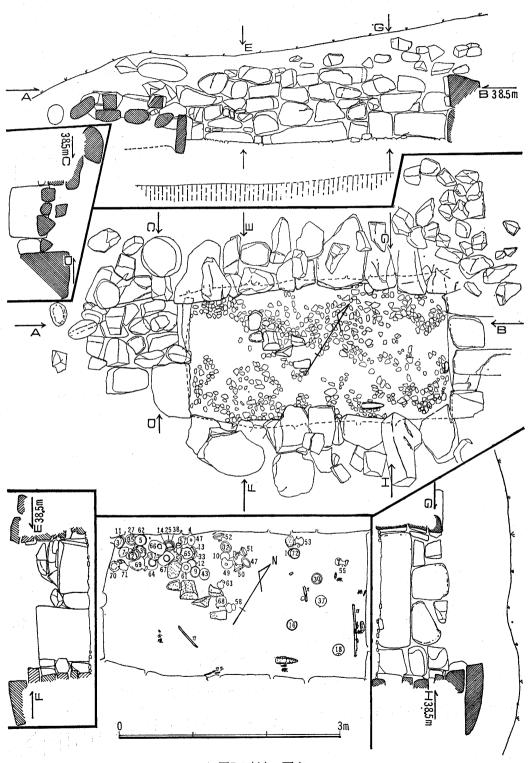


図3の(A). 石室

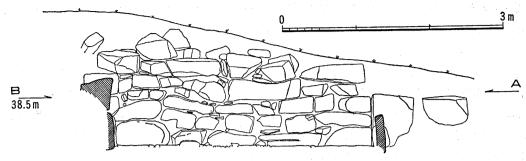


図3の(B). 石室図

上から始まっている。かつて、この面で、一応の整地が行なわれたものであろう。石室基底部もこの上にある。この上に盛られた土は、下部と同様な花崗岩ばい乱土であるが、多少有機分を含むため、やゝ褐色を呈している。こうした土層が数枚重なり、その間には褐色とか、黄褐色の違いが見られる。こうした土層の上には、同様な土質ながら、内部に、薄いバンド状に炭・灰を多く含む黒灰色の土層が、互層を成しながら積まれている。

以上のような土層は石室の壁石背面のへりまで認められることから、石室を構築しながら、封土が 盛られたものと思われる。たゞ、石室の上半に当る部分は、盛土共に失われているので、最終的な外 形の築造は判らない。

南北トレンチが以上の状況を示したのに対し、尾根に平行した東西トレンチでは、地山の上に、花崗岩ばい乱土があり、そこから上の盛土も、同質の土層か、多少有機分を含みながらも、あまり変化のない状況で重なっており、特に黒色のバンド状土層は見られなかった。むしろ、他の自然的な地形部分のトレンチと区別つき難いような断面を示していた。このため特に変化が見られないため図示しなかったが、一定の盛土がされていたことは違いないと思われる。たゞ、石室東側は、特に尾根の最高部であったと思われることから、地山切り込みの線は不明だったが、本来の地形が利用され、盛土が少なかって、現在では流失してしまっている可能性もあった。

また、美道部側はかなり斜面がきつくなり、上部の土砂が最も少なかった処であり、良好な状況で 盛土は残存しなかったが、石室の側面に見られた黒色バンドが、美道部横付近でも見られたので、同 様な状況で盛土がなされていたものであろう。しかし、美道先端に当る処では、墓道的なもの等、全 く確認出来なかった。

四、石室(図版第四十四~四十六、図3)

上半部が完全に失われていた石室は、片袖の玄室に短かい羨道を持つ横穴式石室である。玄室は、 基底部で、長さ3.55m、奥壁巾2.0m、中央部巾1.95m、入口部分石室巾1.65mと、僅かに入口部分が狹まった長方形である。

羨道部より見て、右側が袖部となり、この巾が0.7mであるから、羨道より玄室への入口は、0.95mである。 玄室高さは残存部分の最高が底面より1.5mであり、石室全体としては高さ1mばかり残り、南壁側の方がやゝ良く残存していた。

羨道長は、現存部分が1.4m、巾は0.9m前後である。

天井石が全て失われていたこの石室は、南壁の積石の上端が1~2個僅かに地上に露出していたゞ

けであったが、壁石全体の上面は10~20cm程度の土砂に埋もれたゞけであった。しかし、石室内は多量の土砂で埋没し、外見では尾根平坦部とあまり異なる状況ではなかった。

石室の構築は、すでに記したように、地山面より 0.5m ばかり高い位置を基底面にしているが、これは、かつての尾根先端部の自然的な地表近い処に当るのではないかと思われる。こゝの地点が、全体に花崗岩ばい乱土で、現今、良質な土砂採集地となっていることでも判るように、地山もまたその上部の花崗岩ばい乱土もきわめて似た硬さと状況を示すものであるから、地山上の土砂も、特に古墳構築のための盛土でなく、本来の地形を整地したゞけのものと考えられ、地山上まで削り出して石室基部が据えられたのと変らない状況であったと思われる。

石室は、基部に、や、横長の石を据えるほかは、石室に0.3×0.5m前後の面を見せるむしろ小形の 花崗岩系の自然石を積んでいる。良く残る部分では6段くらい見られる。奥壁部分の積み方も同様であるが、たゞ、基部に1個、長さ1.5m、 高さ0.45mの大形の石を横に据えている。 また入口の袖に 当る部分も、0.7×0.7mばかりの大形の石を基部に1個置いている。こゝは上部が失われており、これ以上の積み方は不明である。これらの小形ともいうべき石を幾段も積んで作られた壁面は持ち送りが見られ、天井部が残存しておれば、かなりな持ち送りであつたことであろう。 床面には、 かつては全面にバラスが 敷かれていたものと思われる。 特に奥壁に 近い隅部分とか、 羨道からの入口部に 集中して 遺物が発見された処の下などでは 良く残っていた。 また床面直上に 小形の石が点在したのは、遺物面より下にあるものもあり、これは落石ではなく、本来は棺台のようなものであったかも知れないが、後の攪乱もあるため、原位置のまゝかどうかは確定出来ない。

奏道には閉鎖装置が残されていた。玄室と奏道の境には、長さ0.7m、巾が0.5m、厚さ0.15mの平石が、下端を玄室面より0.2mも埋め込んだ状況で、障石のように横長にして立てられていた。この石で塞ぎ切れない部分は、巾0.2mばかりの長楕円形な石で塞がれていた。また、奏道部は、玄室床面より0.3~0.5mも高く、花崗岩ばい乱土がつまり、かつての奏道の底部がどこであったかあまり判然としない状況で、同質の土砂が続いていた。この土の上面は、壁に積んだ石より、やゝ小形の石で覆われていた。しかし、こゝより上部の構造が失われているため、姜道の高さがどれ程であったかは全く判らない。また、姜道先端部も失われていて、正確な長さは不明であるが、むしろ姜道長の方は、現存に近いのではなかろうか。

これより先、墓道とか、その他の施設については調査を行なった限りでは確認出来なかった。

五、遺物出土状況 (図版第四十五、図3)

石室内での 遺物出土状況は、 まず残存壁面から見ると 50cm強下った処で、 中世土器片の出土を見た。中に 1 点完形の椀が発見されたが、他の土鍋・擂鉢等は破片であった。大形の土錘も伴出した。 これ等は量として決して多いものではなく、一ときの生活用具といえるものであろう。周辺には灰層を思わすような土層もあり、鍋にはすゝも付着していた。また「ニシ」の貝殻も出土しており、この状況は中世のごみ捨て場というより、生活跡を思わすものであった。これ等がこの古墳内に持ち込まれた時には、既に古墳は開口され、土砂が、床面上50cm計りは流入していたことが、出土状況から考えられる。その段階で、天井石がすでに失われていたか否かは、全く判らないが、常識的に考えて、たとえ短時間でも、また必要時だけの利用であっても、中世の人達が、これ等の生活用具を用いて、こゝでその用具を廃棄する状況になるまで生活したのであれば、当然天井石があったと考える方が合

理的であろう。天井が無い壁面だけなら、特に、この石室を利用する必要もないと思う。

中世遺物出土面以上には、他の時期の遺物が無いことから、中世以後の利用は無かったものと思われる。また、中世遺物の存在する面も含め、大部分の石室内には、より深くまで攪乱されたあとが見られることから、中世遺物面より下の盗掘のすべてが、中世以前にあるというものでは無い。たゞ少なくとも、中世遺物の示す時代以前に、この古墳が開口していたことだけは事実である。天井石とか、側石の上半は、中世以後に手軽に利用出来る石材として掘り取られていったものであろう。周辺にはかつて古墳を構築していたと思われる大形の石材は、ほとんど見られなかったのである。

中世遺物の存在面より下部も明らかに、後に撹乱が加えられたと思われる状況を示した石室内であったが、残存した古墳に属する遺物は、ほとんどが床面直上に存在していたので、盗掘により遺物が失われたことはあっても、残存していた遺物が全く本来の位置を失っていたと考える必要はない。たゞ奥壁近くに、奥壁に平行して出土した大刀は、切先部が破損して60cmばかり西で発見された。こうした長大で破損しやすいものは、部分的に散乱した可能性は多い。この大形の刀の付近では数本の鉄鏃が出土したが、これなども元来は、かなりな数の鏃がまとめて置かれていた可能性がある。このほか鉄器としては、南壁のほゞ中央部に接して刀子が出土し、後に記すように、石室南西部の土器類が全く無い処で、一本短かい刀が出土した。

多くの須恵器は、羨道閉鎖部の、しかも北壁ぞいで、巾50cm、長さ1m強ばかりの処で集中的に発見された。土器だけで75点ばかりの遺物中、その%は 2×0 出土である。坏が数点も重なり、壷の上に壷が重なるという状況も見られた。これと対象的に、土器のあった部分の南側の $1.2 \times 1.2m$ 以上ある平面には、全く土器が無く、一個の金環と、長さ30cm余の刀が一本出土したゞけである。

この遺物空白部分と、土器密集部分の状況は、盗掘者が意識的に石室内の一部分だけをきれいに方形に掘って、その中の遺物だけを持ち去った、とでもいうのでない限り、本来の埋葬時からほゞこの状況だったと見なければなるまい。特に土器類の端が、一列の状況になっているのは、こゝに一定の仕切りにもなるものがあったことを思わす。また、無遺物の部分の床面にも、かなり良好にバラス敷が残存していたことから、この部分のみの盗掘は考えられない。となると、この空間部分には棺があり、棺と壁の間に土器類が積み込まれたものと思われる。こうした土器類は、最後の埋葬時の供献物もあるだろうが、追葬時に棺を入れるために整理された土器類も多いと思われる。

石室全体を見た時、入口部分以外の処に土器が少ないのも、大規模な盗掘とか、攪乱による損耗と 見るより、追葬時に整理されたものも多かったと見られるのである。たゞ奥壁近くは、床面まで相等 の攪乱が見られるので、失われた遺物もかなり存在したものと思う。

また、玄室入口の南半部分で、人骨の歯らしいものが粉末状況で一本のみ出土した。

なお、羨道部では全く遺物の出土は見られなかったが、石室外では石室部分から見れば20mも東の 尾根上で、明らかに墳丘外でもある処の地表下30cmばかりの処で、単独に完形の須恵器高坏が1点の み出土したのである。しかし、周辺には関連の遺構は何も見られなかった。この古墳に入っていても 全く不思議で無い時期の遺物であり、後に古墳が盗掘された際、中の一点が隅々こゝに放置されたの か、或いは、古墳の築造・使用の途次に置かれたものかを判ずる手段は無かった。

古墳の墳丘に入れたトレンチ内でも、上部で多少の須恵器片は出土したが、これはむしろ、後の攪

乱で、石室内から流出したものと考えられ、築造時の土器を供えた祭祀的な遺構を示すものではない と考えられる。

その他は、主として石室内を埋めていた埋土とか、石室外のトレンチ内などから石鏃・サヌカイト 片などが出土し、また、石室とか羨道の床面下とか、石室南側トレンチの地山に近い部分からは、小 断片ながら、押形文土器の出土を見たのである。

六、副葬遺物(図版第四十七~五十二、図4~13)

古墳埋葬に関わる遺物は、須恵器、土師器、鉄器各種、金環、ガラス小玉である。

須恵器の大部分は土師器と共に、玄室の西北部隅に、追葬の際にでもまとめられたかと思わす状態で検出され、そのほかの玄室床面からは、わずかに検出されたにすぎない点は、すでに記した通りである。須恵器は計77個体、土師器は3個体を数える。ほとんど全て、完形または、完形に近い状態であり、個体分離、復元不能の土器片はわずかであった。このほか、剥離片、小片を含め60片を越える鉄器類と、金環、ガラス小玉各1点があった。

A) 須恵器(図版第四十七~五十一、図4~9)

石室内から出土した 須恵器77個体を器種別にみると、坏蓋25点、 同身27点、 高坏の蓋3点、 身4点、はそう4点、 壷類8点と同蓋1点、 横瓶2点、 提瓶3点である。

イ) 蓋坏(図版第五十の(2~5)・五十一の(1・2・4)、図4・5)

蓋坏は、蓋身共、合計52点、うち51点を図示した。出土状態から、蓋身のセットがほぶ確かなものは5点(21~25)であるが、その他にも口径、土質、色調等から同一セットと推定し得るものがある。

蓋身共、わずかな差異ながら大中小に分けることができ、蓋では口径が13.5~14.0cmのもの(10~13・25A)、14.5cm前後のもの(14~20・23A)、15cm前後以上のもの(1~9・21A・22A・24A)とがあり、 坏身は 12cm前後 のもの(23B・31~33・36)、12.5cm 前後の もの(25B・29・30・34・35・44)、13~14cmのもの(21B・22B・24B・26・28・37~43・45・46)がある。

坏蓋は、立ち上がり部へ移る部分に、鈍い稜線をとどめるものと、立ち上がりが短かく、ほとんど 稜が認められないものと、ほゞ同数あり、口縁端内側に段をもつものが多い。

坏身の立ち上がり部上端はとがりぎみに丸く作られ、内側に段を有するものは、1点だけ(38)である。蓋、身共、外面にロクロ痕とヘラ削りが見られ、内面はナデられているが、内面中央部分に、同心円叩きの痕を残しているものがある(2・3・21・23B・24・35・37・39・45)

胎土は、緻密なものと粗いもの(1・3・4・7・9・12・15・17・20・24・34・36・37・39・40 など)とがあり、この中には、や 1 大きい砂礫をかなり含むもの(4・7・17・20・24)がある。また、(7・9・14・16・19~25・28・36・41~43・45・46)では、胎土中に黒色の小粒子を含んでいる。 色調は暗灰色ないし、 暗青灰色のものが多く、 灰色ないし灰白色のものは 少なく、 (9・12・16・28・34・37)など12点。

焼成は比較的良好なものが多く、灰被りがみられるものもある。焼成時にかゝった灰の痕跡が蓋の外面に見られる場合と、身の外面に見られる場合とがほゞ同数ある。

ロ) 高坏 (図版第四十九、図6の (47~52))

長脚2段透しの高坏4点と、蓋3点が出土している。

出土状態から、蓋身のセットが、ほゞ明らかなものが1対(47A・B)ある。

蓋は中凹みのつまみをもち、口縁立ち上がりに移行するところに鈍い稜を痕跡的に残し口縁端内側に小さな段をもつ。(48)は口縁端外面に、ハケ目状工具で、羽状文をつけ、(49)は、内面に叩き目の痕跡あるいは、これを消すように、ヘラで調整した痕が残っている。(47A・49)は胎土中に大粒の砂礫を含み、(47A)はあらい胎土、(48)は粘質な感じを与える。うすい暗灰色ないし、暗灰青色を呈す。

高坏身は、脚裾部の形態が2種あり、(50・51)は脚裾部が急にふくらんで、その屈曲部に断面三角形の細い突帯状の段をもつ。上下2個1対、3単位の透しのうち下段には三角形の透しが穿たれ、脚柱部外面に、ハケ目状工具による細い平行線がつけられる。(50・51)の坏部内底には同心円叩きの痕が残っている。

(47・52) は、長方形の 2 段の透しが 3 単位穿たれ、脚柱部外面に細い平行線は見られない。 いずれも灰青色ないし、暗灰色を呈し (47 B と 52)、 (50・51) はそれぞれ、色調、焼成が似ている。 (47) は焼成時の灰のかゝりが著しい。

ハ) はそう (図版第五十の(1)、図6の (53~56))

口縁部は内彎気味に強く外に広がり、その下端に断面三角形の 突帯を配しているもの (53・54) と、頚部から外反して立ち上がる口縁部が、急に屈曲して、さらに外開きになって口縁端に至るもの (56) とがある。

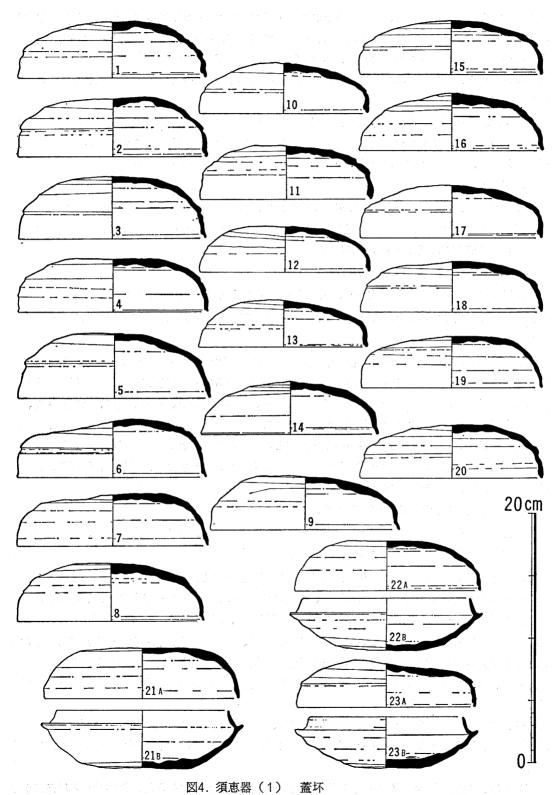
- (53) は口縁部下に巾 1.8cm の櫛描波状文がめぐらされ、胴部の 2 本の沈線文の間に右下がりの櫛状工具による刺突文列が加えられている。胴下半外面にはあらいハケ目状工具による平行線が全面に及んでいる。胎土はあらく暗灰色を呈する。 (54) は、口縁部外面と、その下端に、櫛描波状文、胴部には左下がりの櫛状工具による刺突文が加えられている。下段の波状文と胴部の刺突文は、巾 2.1 cm前後の工具である。頚部には一条のヘラ描沈線とハケ目状工具による細い平行線がめぐらされている。緻密な胎土で焼成時の灰被りが著しい。 (55) は胴下半のヘラ削り痕が著しく、暗灰色、あらい胎土。 (56) は、比較的緻密な胎土で、灰被りがみられる。
 - ニ) 壷・坩(図版第四十七の(2)・四十八、図7の(57~65))

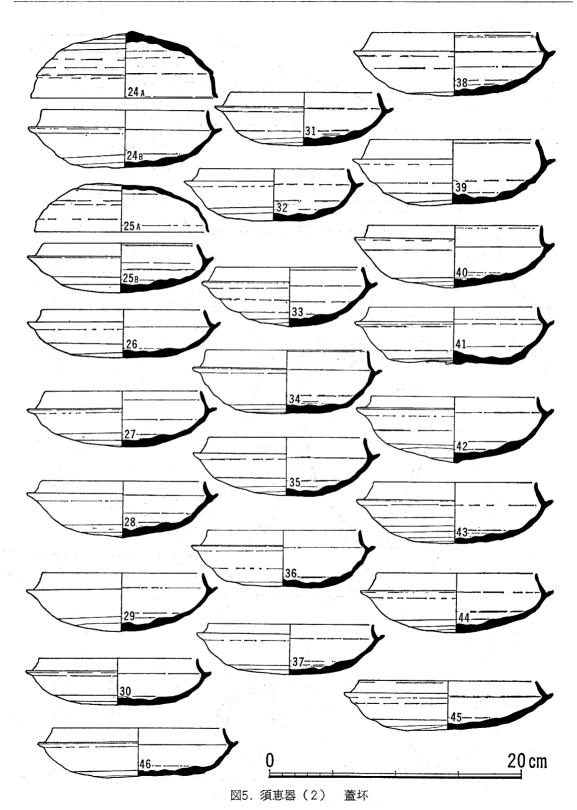
強く外反して高く立ちあがる口縁部をもつ壷($57\sim59\cdot65$)と、立ちあがりが短く、ほぼ直立に近い口縁部をもつ、いわゆる坩($61\sim64$)とがある。

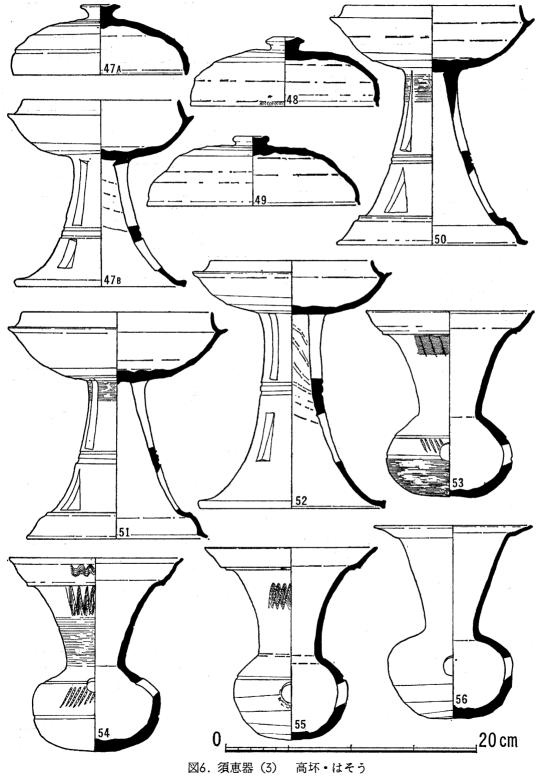
壷は口縁端をナデて肥厚させたり、その外面下に断面三角形の突帯を加えたもの(56)があり、胴下半部はヘラ削りが施されている。(58)は、胴最大径付近に、(59)はヘラ削りの後、ほゞ全面にハケ目状工具による細い平行沈線がめぐっている。(65)は、頚部に円形のヘラ描線がみられ、胴部、肩部にわずかに平行叩き目を残す。胴中位から肩部には、叩き目の上に、ハケ目状工具による平行線がかすかに見られる。いずれも、比較的均質な胎土で、焼成時の灰被りが著しいものがある(57・59)。(57)は、胎土中に径 2m前後の砂粒がかなりみられ、(57・59)には 黒色の小粒子が 含まれている。

坩は、口縁端を丸く納めたまゝのもの(61・63)、その内側にかすかに凹線を加えたもの(64)、口端をナデて、端面を外方に拡張させたもの(62)がある。(61~63)は、胴下半にヘラ削りが加えられている。

(64) は、内面胴下半に同心円叩き目・外面下半に平行叩き目がみられ、胴中位から肩部にかけ







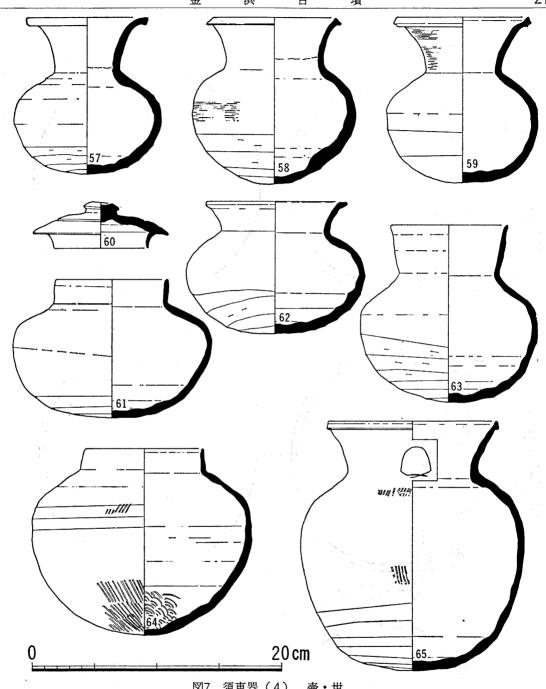


図7. 須恵器(4) 壷・坩

て、平行叩きのあと、ヘラ削りを行いその上をハケ目状工具で平行線をめぐらしている。肩部にもわ ずかに平行叩き目が残っている部分がある。いずれも暗灰色ないし灰青色を呈し、均質な胎土で、焼 成も良好である。

ホ) 横瓶 (図版第四十七の(1)、図8の (66・67))

小さくすぼまった頚部から急に外反して、丸く肥厚させた口縁端部を形成している。

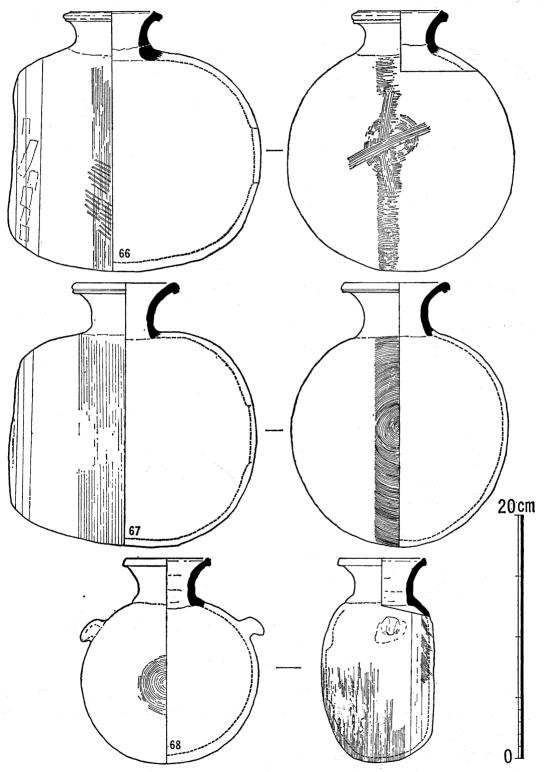


図8. 須恵器(5) 横瓶・提瓶

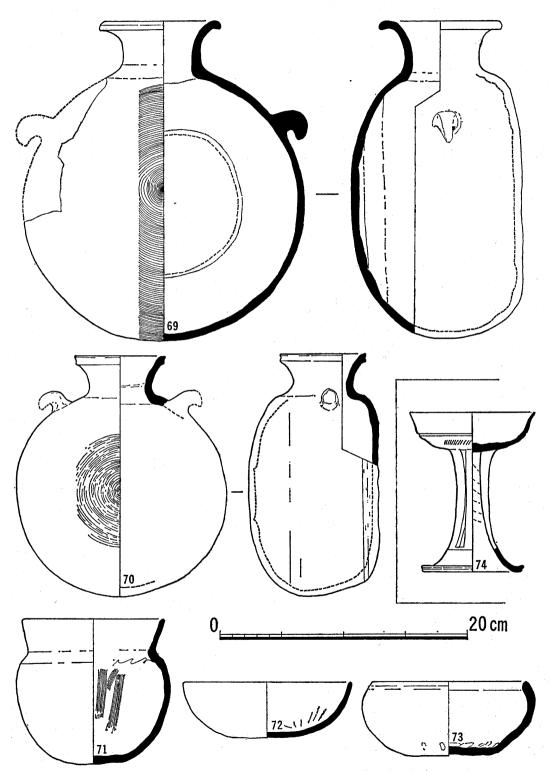


図9. 須恵器 (6) 提瓶、墳丘外出土高坏 (74)、 土師器 (71~73)

- (66) は、暗灰色、かなり大きな砂礫を含み焼成は良好である。体部は扁平な側にヘラ削り痕が見られる。そのほかの面には平行叩きの後、細い平行線が加えられ、胴部のふくらんだ側に、同じハケ目状工具で、十字の線描が施されている。(67)も(66)と同じ胎土、色調を呈し、丸く肥厚させた口縁外面に細いヘラ描沈線が加えられる。成形、調整も(66)と同巧である。
 - へ) 提瓶 (図版第四十七の (3~5)、図8と9の (68~70))
 - 3個体あり、大きさ、器面調整などにそれぞれ、少しずつ違いがある。
- (68) は暗灰色、均質な胎土で口縁部を丸味もたせて少し肥厚させている。体部には、ハケ目状工具による平行線がめぐる。(69) も暗灰色、均質な胎土で、体部の扁平な側をヘラ削りした後、粗いハケ目状工具による平行線がめぐる。(70) は、灰白色を呈し、焼きがやゝあまい。体部の扁平な側は、ヘラ削りのあとに加えられた、指圧痕が顕著に残っている。
 - B) 土師器 (図版第五十二の (1・2)、図9の (71~73))
 - 壷1点、椀2点の計3点あり、いずれも完形で、石室西北隅の一括土器群の中に入っていた。
- (71) は褐色を呈し、砂粒をかなり含む。やゝ外反する口縁部内外面は横ナデされ、胴部外面は押圧痕が顕著。内面は縦方向のハケ目。(72)は暗褐色、底部は一部黒ずんでいる。細砂粒を含むあらい胎土で、焼成は良い。内面はハケ目状工具で横向きに軽くナデられ、ところどころに調整末端の工具の圧痕が残っている。(73)は、淡褐色、細砂を含む。口縁部が内傾し、ボール状を呈している。内面は押圧痕を残しているが、平滑に仕上げられる。

以上が、玄室内出土の土器であるが、石室から東へ20m程寄った尾根筋のトレンチ中から、無蓋の長脚一段透しの須恵器高坏 (74) が出土している。口縁立ち上がり部下端に1本の沈線を施し、その下にハケ目状工具による左下がりの刺突文列が加えられている。灰青色を呈し、焼成も良い。この高坏は石室の出土品ではないが、記述の都合上、こゝに記した。

以上本古墳出土の土器のうち、須恵器を例にとれば、少なくとも二以度上の埋葬が行なわれている ことを念頭に置いても、型式的にきわめて、近似したものばかりである。この須恵器の示す時期は大 阪府陶邑第II型式2~3段階のものに対応すると思われ、ほど6世紀中葉の段階と考られる。

C) 鉄器 (図版第五十二の (3・4)、図10~12)

鉄器は、総数で50点を越える量が出土しているが、原位置のまゝ出土したと考えられるものはあまりなく、わずかに2~3の刀、鏃が、一次埋葬、追埋葬の場所を推測させる地点で出土しているだけである。残りのほとんどは、石室床面付近の攪乱部から出土した。鉄器の種類は、刀、刀子、鏃などの武器類と漁具の「やす」などであった。

イ) 直刀(図版第五十二の(3)、図10)

3口出土している。(1)の大部分は奥壁近くの床面から、柄を南にして、南北に置かれた状態で出土し、奥壁に近い埋葬に伴うものと考えられる。現存長95.7cm、切先と柄部を欠失している。柄近くの刀身部に米粒大の銹粒が多くあるが、単なる銹ぶくれかどうか明らかでない。その銹の内部は空洞になっており、虫の幼虫か卵、或いは米粒様のものが銹着ついたものかも知れない。(2)は追埋葬が行なわれたと思われる、玄室中央南壁寄りの床面近くで出土した。全長33.1cm、遺存状態は良く、関は刃と棟の両側から刳り込んでいる。柄に2孔目釘穴が見られる。(3)は刀身の一部と柄部

を欠き、現存長25.5cm、刃部巾3cmを計る。(4)は柄部のみの断片。木質がよく付着し、目釘穴が柄先端から4.5cmのところにあり、目釘が残存している。(3)の柄部かどうかは判らない。

ロ)鉄鏃(図版第五十二の(4)、図11)

ほとんどのものが床面から遊離して出土している。数量的には本墳出土鉄 器類のうちで最も多く、図示しなかった茎や、鏃身だけのものもかなりあ る。形態は種々あり、いずれも銹化が著しく、全形を完存するものはない。 茎ないし、箆の部位では、全て断面四角形を呈す。

(5~8)は逆刺りをもつ腸抉式の鏃である。鏃身の細長いものと、巾広のものがあり、箆被ぎをもたず直接茎がつくタイプである。(5)は現存長10.9cm、玄室奥寄りで出土している。刃部中央に明瞭な稜は認められない。(11・18・19)は、大刀(図11の(1))と重なる様にして、玄室奥部で出土した。(13~15)は関部が直角に張り、茎に接する部分がわずかにふくらんで、箆被ぎをなしている。(13・15)は茎に巻糸の痕跡が付着している。(16~20)は、柳葉形の鏃になると思われ、関部がゆるやかに広がる。これらのうちには、矢柄材の銹着が著しいものが見られる(17・18)。(10・22~25)は、鑿頭式の鏃で、身の厚みが、厚いものと薄いものと2種があり、(10)は、透し穴をもっている。表面は銹化して剥落が著しく、厚さは正確でない。(21)は、箆破ぎの部位が長く、尖根式の鏃になるものであろう。茎に接する部分がわずかにふくらんでいる。

ハ) 刀子 (図版第五十二の(3)、図11)

図示したものは5片であるが、いずれも銹化がはげしく、完存するものはない。 (27・28) は玄室中程、南壁の脇で出土した。同一個体の可能性があるが、直接には接着しない。 (29) は木質がかなり付着している。 (30) は刀子の柄と思われる。木質が付着しており、その遺存状態からみて、木の皮のようなものを柄に巻き付けていたものと考えられる。 (31) の刀子の柄は、 (28・28) の近くで出土したが、同一個体となるかどうか不明。木質が柄の長軸と平行するように銹着いており、目釘穴が見られる。

ニ) 漁具とその他の鉄器 (図版第五十二の(4)、図12)

(32) は「やす」と思われ、3本がかたまって銹着いている。(32A) はその右端の1本を図示したもので、全長11.6cm。断面四角形を呈し、先端部を尖らせ、その下方の両側に「かえり」状の小突起を作っている。全体に捩りを加えていると思われる。全体の作りは、岡山市沢田金蔵山古墳や総社市奥坂随庵古墳出土例にも類品がある。3本を東ねて用いる「やす」か、1本ずつ独立したものかは基部の残りが良くないので確認できない。

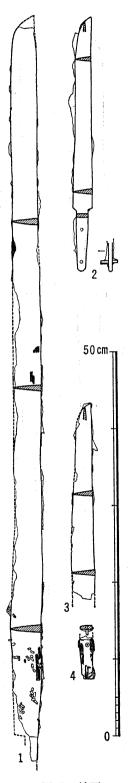
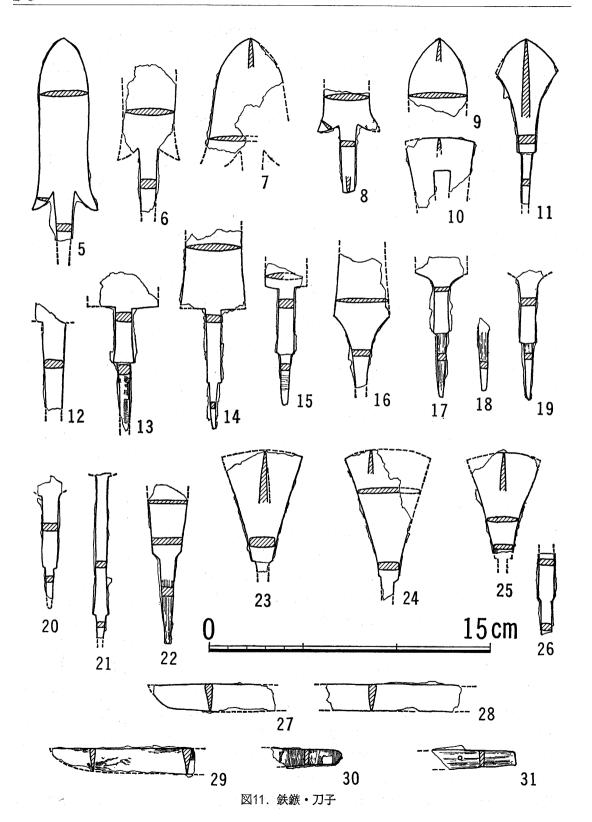


図10. 鉄刀



- (33) は 断面 四角形の 棒状の 製品で、現存長7.6cm、先端の2.8cm程は、 捩りが加えられ、先を細く作るが、先端部を欠損しており、「やす」か錐であろう。
- (34) は 断面 四角形の 棒状の 製品で、 現存長 5.9cm。 先端部を細く尖らせ、 他端は欠損している。 錐であろうか。
- (35) は、全長 4.4cm。断面は円形 を呈し、頭部を折り曲げて、環を作っている。下端は細く尖っており、この部分に木質が付着しているから、木質に打ち込まれたものであろうが、用途不明。

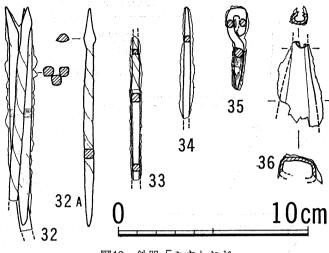


図12. 鉄器「やす」など

- (36) は、一端が急に細くなった筒状品断片。銹化が著しく、両端共欠損している。内側の断面は 長方形を呈し、木質が付着している。銛か「のみ」あるいは錐のような利器の袋状基部の断片であろ うか。
 - ロ) ガラス小玉及び金環 (図版第五十二の(4)、図13)

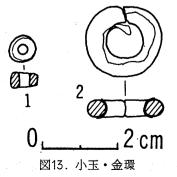
ガラス小玉、金環は共に1点ずつ出土している。原位置をといめたものとは言い難いが、玄室の入口に近い床面近くで検出された。ガラス玉は濃いブルーを呈し、最大径7.4mm、高さ4.6mm、穴の径は2.5mm。断面はやムひずんだ円形をなしている。

金環は、外径20.2mm、内径9.5mm。断面径5mm前後の銅に鍍金したもので、銅は銹化が著しく、かなりの部分の鍍金は剥落し図中の内径近くの線画き部以内にのみ鍍金が残る。

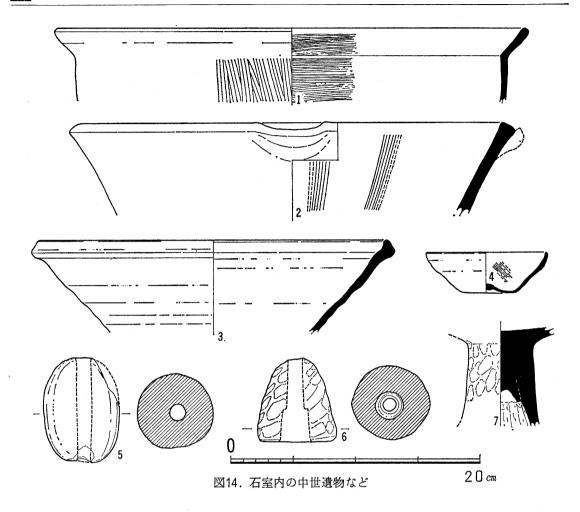
七、中世及び縄文時代遺物

古墳に直接関係した遺物は上記した通りであるが、そのほかに石室中で、床面より高い位置で中世の遺物が出土し、古墳墳丘中から、縄文時代遺物の検出をみたので、それぞれ次に記す。

- A) 中世などの遺物(図14)
- (1) は黄白色。土鍋の小片で、外面に縦方向の荒いハケ目、内面に横方向の細いハケ目が見られ



- る。(2)は、赤褐色、生焼けのような焼成で、もろい土質をし、 風化が著しいが、内面に、櫛描きの条線があり、擂り鉢になってい る。(3)は浅鉢で灰色、胎土は荒く、外面に輪積みの痕をよく残 している。
- (4) はほゞ完形品で、薄づくりの土師質の椀である。 黄褐色を呈し、一部赤く発色している。凹み底をなし、内面にかすかに左上がりの刷毛目を残す。 内面は丁寧にナデられ、外面は、押圧痕を残している。



- (5・6)は土錘。(5)は推定約320g、1cm大の小石を含む。(6)は推定約220g、紐通しの穴の途中に受けを作っていて、結び目を止めるためかと思われる。外面には押圧痕が残っている。
- (7)は、黄褐色を呈し、砂粒を多く含む荒い胎土の高坏脚柱部である。外面に押圧痕を残し、脚柱部は中空になっていない。この土器は、他の遺物と同一時期のものかどうか判断できないが、とりあえずこ」に記した。
- (1)から(6)のうち、(4)の椀は、底部をくぼませた作りが、広島県草戸千軒町遺跡のSE 1055出土の椀C(註1)、或いは、京都市常盤井殿町SK210、同SK224の小椀Ie(註2)に近似している。前者ではその時期を14世紀と考えられているようであり、後者では、14世紀中葉に位置付けられている。本遺跡出土の土鍋・鉢などの 器種の年代観も、上記の年代対比と 矛盾するものではない。また、中世土錘が、広江・浜出土例と同様、大形であると云える。

B) 縄文早期の遺物(図15)

石室下及び墳丘盛土下から出土したものである。

(1・2)は羨道付近で出土した。(1)は楕円押型文の黄褐色の土器片。(2)の尖底は器表の

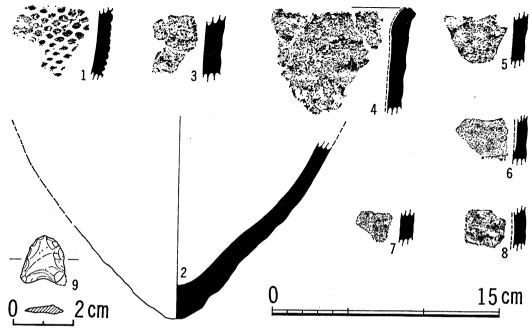


図15. 墳丘出土の縄文早期遺物

風化が進んでいるが、押型文は見られず、器表に凹凸がみられる土器。内面は比較的平滑で、炭化物の付着がかなり見られる。

- (3・4) は 石室南側の トレンチ出土。 黄褐色を 呈する無文の 土器で、 器表に 凹凸が 著しい。 (4) は口縁部片。 (5~8) も墳丘中で検出した無文の土器片で、風化が著しい。や ム 赤みを帯び
- (4)は口縁部庁。(5~8)も項丘中で検出した無文の土器庁で、風化が著しい。や1赤みを帯びた黄褐色を呈する。これらの土器片は全て押型文期の土器である。
- (9)の石鏃は、石室内埋土中にあり、サヌカイト製で一部欠損、風化が著しい。このほか、墳丘中からサヌカイト剥片も若干出土した。

八、むすび

本古墳は地表からの観察で、後期横穴式石室を持つ古墳とは全く考えられない、尾根先端の自然地 形を思わすものであったが、地表下 1 m 余の処に、石室下半部と羨道及びその 閉鎖装置を残してい た。金浜古墳の名も、金浜に存在することで、今回の調査により名付けられたものであるが、命名と 同時に土取りにより消失した古墳でもある。

一部残存した遺物から見て、少なくとも6世紀中葉には築造されたと思われ、石室は全体に小形の石を積み、片袖で小さい羨道を持つタイプであった。

この古墳が存在する処は、かつての吉備の児島の西岸で、築造された時期には、古墳の足下は海であり、この海岸には金浜遺跡として古くより知られた製塩遺跡がある。同じ児島の一角にある広江・浜の製塩遺跡も、南と東の背後の山には、すでに失われた古墳も含め数基の横穴式石室墳が存在し、谷をへだてた北の山腹にも数基の後期群集墳が知られている。これ等は、製塩集団とその墳墓のあり方を示すものとして、中部瀬戸内海沿岸では一般的な現象でもある。金浜古墳が、金浜の製塩遺跡と無関係ではないのは当然であり、古墳の示す時期も、当地方で古墳時代後期の土器製塩が隆盛に向っ

た時と一致しているといえる。 金浜の製塩遺跡の 実態は、 充分に明らかに なっているとはいえないが、 この推定にあやまりはないであろう。 この種の後期古墳ではしばしば製塩土器や師楽的土師器を 副葬するが、本古墳で見られないのは、石室内の攪乱で消失したと見てよかろう。

また、撹乱盗掘されて一部残存した 遺物ではあったが、中に「やす」を含んでいた。それに加えて、鉄器袋状部断片が鉄銛のそれであるとすると、これもあわせて注目される遺物であろう。鉄銛、鉄やす、鉄釣針などを副葬した古墳で従来報告されているものは少ない。そのうちでも前半期の古墳で、各種の生産に用いる鉄器をあわせ副葬したとみられる古墳例をのぞいて、古墳後期の時期に限ってみると、次のような事例が管見にのぼるにすぎない。

北九州市小倉北区貝島古墳群(銛・釣針)、(註3)

福岡県行橋市竹並古墳群(釣針)、(註4)

香川県香川郡直島町喜兵衛島古墳群(釣針)、(註5)

岡山市飽浦稲荷山古墳(釣針)、(註6)

兵庫県三原郡西淡町沖の島古墳群(釣針)、(註7)

愛知県知多郡南知多町日間賀島・北地古墳群(釣針)、(註8)

これらの古墳は、全て海に直面し海とのからわりが深かったと考えられるものばかりであり、金浜 古墳の立地との類似が知られるのである。このことは、金浜古墳を生みだした集団が単に製塩に従事 したというだけでなく、海との関係が強かったことをしのばせるのである。

また、この古墳の床面よりかなり上った所で、中世の遺物が発見され、中世には、既に古墳が開口し、床面上にはかなり土が入っていたことが知られた。そうした中世遺物のあり方は、古墳内がその時期に利用されたことを物語るものであった。そのような事例は、当地方の横穴式石室では比較的多く見られるものであり、当地方では、このような構築物を中世に再利用した意味を考えさせるものでもある。

一方、この古墳築造が縄文早期の遺跡上に行なわれたものであったことが、墳丘中に含まれた押型 文土器片などの遺物から知られた。墳丘トレンチとその周辺の状況から、縄文遺跡は小範囲のもので 古墳築造時に削平されてしまう程度のものであったと思われる。こうした小舌状台地上が、押型文期 の小遺跡である事例も、この地域ではかなり多いものである。以上が現在全く消失した金浜古墳の概 要である。

- 註 1. 松下正司、志道和直「草戸千軒町遺跡1976」同調査研究所 1977年
 - 2. 鈴木重治、松藤和人、管原康夫「常盤井殿町遺跡掘発調概査報」同志社大学 1978年
 - 3. 山中英彦「貝島古墳群」北九州市教育委員会 1978年
 - 4. 赤崎敏男 長嶺正秀「竹並遺跡」同調査会 1977年
 - 5. 喜兵衛島調査団「謎の師楽式」歴史評論 1956年
 - 6. 間壁忠彦・鎌木義昌「東児島所在の古墳」吉備考古88・89号 1954年
 - 7. 西谷真治「古墳の変貌」兵庫県史第一巻、六章三節、兵庫県 1974年
 - 8. 杉崎章ら「日間賀島の古墳」南知多町教育委員会 1977年

